
妖々夢・西行記伝

ジェフティー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

妖々夢・西行記伝

【Nコード】

N4705X

【作者名】

ジェフティー

【あらすじ】

現在 e - エブリスタに非公開ですが連載中のものを書きます、移動が完了次第 e - エブリスタに連載しているものは削除します、

基本は妖々夢の話ですが少しやり過ぎの点がありますがご了承ください、

所々の随所にどっかで見ること有るな？って台詞が沢山出で来るかも知れませんが素人のやることなので温かい目で見てもらおうと有り難いです、

始まり（前書き）

かなり暴走が随所にあります、行き過ぎた解釈もありますそういった物が駄目と言う人はクリアノバックボタンを押してください、大丈夫という方だけどうぞ、

貴方、貴女、貴男

すべて、（あなた）と読みます、

貴方特定の対象を設けない言い方、

貴女女性に対しての呼称、

貴男男性に対しての呼称、

貴方と書いても男性表記出来るので貴男と使われる事は少ない、

書きはしましたが貴男は使用していません、

書いただけで何の意味もありません、

始まり

本編はここからです、

.....

刀を携える女と男、

「何をしている!」

「?」 「さあー早く!」

(止めて、止めて!)

「?」 「愛している!」

「?」 「君は、生きる!」

ノイズに邪魔され途切れ途切れに聞こえる男の声、

女は男を切る、

血に沈む男を胸に抱き泣き声を上げる、

それはいつも繰り返し見る夢

霞む視界に見える二人の人間、必ず女が男を殺し終わる夢、

自分はその男を知っている、だが何も解らないその二人が誰かも、

知っているはずなのに、

自分の影が動かせる何度も何度も止めようとしたしかし夢、何度も繰り返させる絶望にも近い

心が締め付けられる、名前も顔も解らないのに、

いつも私は………

「………様、幽々子様」

呼びかける声に引きずられる様に私は目を覚ました、

幽々子「妖夢、ありがとう平気よ」

妖夢「大丈夫ですか？うなされていました、またあの夢ですか？」

魂魄 妖夢半人半霊

白玉楼の庭師、

西行寺 幽々子、亡霊

(さいぎょうじ・ゆゆこ) に仕える

亡霊、死んだ時何か強い未練、記憶、意思を抱えたまま死んだ者、
遺体はこの世にあり幽体の肉体は体温を持つ遺体と幽体が混在し幽
体でありながら物理的な実体を持つ矛盾の存在、遺体を供養される
と存在が消えてしまう、

また亡霊で在る限り転生する事は出来ない、

妖夢「幽々子様、涙が」

幽々子「フフツ、亡霊のこの私が涙？滑稽だな」

妖夢「そんな、私は心配ですこの所毎日じゃないですか？」

幽々子「大丈夫よ、妖夢」

(あの夢は私の過去？解らない、ただ何かを伝え様としている)

幽々子「ところで妖夢、ご飯はできてる？」

妖夢「ハイ！」

幽々子「妖夢まだ？お腹すいた」

妖夢「待ってください、もう少しですから」

(あれだけ食べたのにいつも思う、どこに入るんだろう？(・・・))

唾空間？)

料理を作る妖夢の横の空間に罅ひびがはいる、

罅が大きくなり空間が割れる、そこから手がのび出来た料理をつまんでいく、

妖夢が気付いた時には手遅れだった、

バツと後を振り返るも幽々子は大人しく料理を待っている、

となると一つしかない、

妖夢はハアーと溜息を吐く、

妖夢「紫様何処です？いらしているでしょ」

空間が大きく割れて人が出て来た、

紫「アラ！ヤツパリばれてた？さすが妖夢ね」

妖夢「さすがじゃありません、料理どつするんですか？」

八雲 紫やくも・ゆかりスキマ妖怪、事象の境界を操る事が出来る、

紫「良いじゃない、減るもんじゃないし」

妖夢「おもいつきり減っています！ていうか無くなりました」幽々子「何やってんの妖夢、お腹減って死にそうだよ」

紫「何言ってるの！もう死んでるじゃない」

紫が幽々子にツッコミを入れる、

幽々子「アラ、紫来てたの？」

ボケた返事を返す、

幽々子「ていうかご飯は？」

妖夢と紫がアツて顔をする、

紫「ゴメン、食べちゃった！」

幽々子「・・・仕方ないか」

紫「?!妖夢どうしたの?様子が」

妖夢「最近、ある夢にうなされていまして」

妖夢は紫に夢の内容を語る、

紫「そう、そんな夢を、」

妖夢

(紫様は何かを知っている?でもそれが何かとは聞けない怖いんだ)

紫との会話に目を離していると幽々子が庭で何か拾い食いしている、

止めようとしたが、紫がすでにそこにいて、

紫「お前は、鳩かーーーーー」

ボクサー張りのポティーブローを打ち放つ、

綺麗な放物線を描き飛んでいく幽々子様、

それを私はただ見ていた、

幽々子を座らせてガミガミと紫が怒鳴る、

紫「あんたはちょっとやそつとじゃなんて事ないんだから、少しぐらい我慢しなさい仮にも白玉楼の当主でしょ！」

ながながと紫が説教する幽々子はどうかという寝ていた、

紫「寝なー！」

幽々子の頭をスパンと叩く、

幽々子「なによー」

紫「寝るな聞けや」

妖夢は庭の手入れをしていた、

幽々子「他は綺麗なのにねー、何でかしら？この大桜は」

紫「そりゃあんた………・いや何でもない帰るわ」

言葉を詰まらせてバツがわるくソソクサと帰っていった、

妖夢

(やはり紫様は何かを？知っている)

白玉楼にそびえ立つ古より鎮座する大桜、

妖楼・西行妖
さいぎやうあやかし

幽々子も妖夢も咲き誇る姿を見たことは無かった、

遙か昔、正確な時期は解らない、

幻想郷一と謳われた歌人がいた、

西行法師

後に歌聖とまで讃えられる時の帝に認められ名と地位を賜る、

一介の僧がそこまでの地位を得るなど異例だった、

だが誰も不思議とは思わなかった、

彼は歌を愛した、それと同時に自然をこよなく愛したあの桜を、

何の変哲の無い桜だった彼が彼の心を掴んだ、

晩年彼は桜の下で一人歌いながら眠るように死んだ、舞い散る桜の華に抱かれて、

人々は彼の桜へ思いを汲み桜の下に埋葬する、

翌年桜は今までに無い程見事に咲き誇る、彼の歌の如く美しく荘厳に見る人を全て魅了する、

だが少しづつ悪い噂が流れ始めた、美しく咲き誇る桜

心を奪われ引き寄せられるように桜の下に人々は集まった、

行き倒れ病や飢えと理由は様々にあるが、

何故か？幾人もの人々が桜の下で死んだ、

次第に西行法師の呪いだなど様々な噂が流れる、

気味悪がり近付こうする人は居なくなつた、それでもなお人は吸い寄せられた桜の放つ死の香りに誘われて、

桜の下で人が死ぬたびにより美しく花を咲かせる、

やがて噂ではなく本当に桜は魔の力を帯びる、

人は桜を恐れ離れていくそして誰も居なくなった 桜を除き、

そして誰かがとは言わずいつからか人々はその桜をこう呼んだ、

妖楼・『西行妖』と

しかし？いつからだろう桜が花を咲かせなくなったのは、……………

……………

またあれか？

幽々子（あれ？いつもと夢が違う）

霞む視界、相変わらず名前や顔は解らない、

大きい桜の前いつも夢に出る二人が和やかに笑い声を上げる、

幽々子（あの桜は？西行妖が咲いている？）

男「俺はこの桜が好きだ人々に忌み嫌われる物でもこんなに綺麗に咲き誇るんだからな」

優しく笑う

男「俺も死んだらこの桜の下で眠りたいな」

女「じゃあ私も！なんてね？」

また笑い声上がる

幽々子（西行妖、あの桜に夢の手がかりがある）

………・…・夢は霞む視界に阻まれ遠ざかっていく、

幽々子（待つて！）

逃げていく幻影を必死に追い掛けるのだが、

幽々子「行くな…？！」

目を覚ました私は気が付くと手を天井へと伸ばしていた、

この手はいったい何を掴みかけたのか？ 追い掛けたかったのか？

桜なのか？ あの二人なのか？ 自分でも解らない、

なんて曖昧なんだ私は、

庭に出て桜を見上げる、

幽々子「夢に見た貴方の姿とても綺麗だった、貴方は私に何を伝えたいの？」

妖夢「幽々子様、起きてくだ…・あれ？」

普段なら寝てる時間だが姿が見えない、

庭に目をやると西行妖の下に幽々子が居た、

妖夢「オハヨウ御座います、幽々子様がこんな時間に起きてるなんてどうしたんですか？」……………「珍しい」

幽々子「オハヨウ妖夢、てか失礼でしょう？それ」

妖夢「聞こえてました、でも何でこんなに早く？」

幽々子「ちょっと、この子にね！」

妖夢「西行妖にですか？」

幽々子「そう！」

幽々子「この子、西行妖に何か秘密がある」

妖夢「秘密ですか？」

(幽々子様の夢の手がかりが?)

幽々子「私達が知り得ない記憶をこの子は知っている！」

幽々子は、西行妖に手を掛けた、

ドクン

その瞬間、莫大な妖気が溢れだした、

桁外れな力に妖夢は身が竦^{すく}み動け無い、

幽々子でさえその力に畏怖し後ずさる、

視覚情報に映る程の妖気の爆発的肥大に大気が震える、

その時、幽々子に激しい頭痛が襲う、

幽々子「頭が割れる、止めて私の中に入ってくるな！」

幽々子の突然の異変に妖夢が駆け寄る、

妖夢「幽々子様！大丈夫ですか？」

異変に気付いた紫が駆け付けた、

紫「何が起きてるの？」

妖夢「紫様、西行妖が突然！」

紫「まさか西行妖が？ここは私が抑えるから、貴女は幽々子を」

妖夢「解りました、お気お付けて」

(まさか？西行妖に何が、紫様貴女は何を知っているの)

紫「西行妖、少し手荒いけど黙ってもらおうよ！」

紫を中心に空間が歪んでゆく、

幽々子の頭痛は酷くなるばかりであった、

妖夢「幽々子様」

幽々子の意識が途切れる、

.....

.....

二人の女性が対峙している

????「何故です？貴女なら、王である貴女なら？」

王「赦せゆるとは言わない」

????「謝罪なんか要らない、この人が死ぬ必要がどこにある？」

幽々子（誰だ？また違う夢、王とは誰何でこんな？）∴∴∴（何？）

視界にノイズが掛かる

∴∴∴∴∴∴∴∴∴

そして景色が変わる、

一面銀が広がる純白の世界の中、

深紅の道が続く、

女は血に染まる体を脚を引きずりながら歩く、

己が身の魂を削りながら

????「赦して、私は貴方に出会ってはいけなかったんだ」

女が死霊を纏い歩く桜の華が吹雪の如く吹き荒れる中を、

???? 「せめて貴方の思いを」

たどり着いた先には、

いつかの夢とは次元が違うと言えるほど咲き誇る桜、

妖楼・西行妖

死者の魂を糧に華を咲かせる忌み楼、

女は男の亡骸が眠る桜の下に辿り着く、

???? 「思い出をありがとう、私を愛してくれた人」

自らも力尽き沈む女、

「???」生きるか？御免なさい、貴方との約束守れそうにないみたい」

幽々子（貴女は誰なの？私は一体何なの？教えてよ）

だが夢、問い掛けに答える事はない、

息も絶え絶えに女は剣を引き抜き西行妖へ掲げ己が胸に突き立てる、

「???」心から貴方を愛してました！」

自らの剣で女は終止符を打った、

急激に世界が遠ざかっていく、

過去記憶の夢が幽々子の心に触れる、

幽々子「あれは・・・私？」

.....

.....

(あれは、誰でも無い私の過去だ)

.....様、.....ん？

.....様、幽々子様！

いつかの朝に見た光景だな？

紫「幽々子、大丈夫？」

幽々子「紫、何故貴女が？」

(夢じゃ無いな、戻ってきたのか？)

紫「何故って？貴女ね、まあーそれなら大丈夫か」

幽々子「アッ！」

跳び起きると幽々子は西行妖へ走った、

紫「駄目！」

紫が飛び付き幽々子を止める、

幽々子「放して、行かして！」

妖夢「く・・・！……………紫様お許し下さい」

紫を突き飛ばす、

紫「妖夢！」

西行妖へ駆け寄る幽々子、

幽々子「西行妖、教えてよ！私は誰なの？あの方は誰なんだ？」

西行妖にもたれ掛かり顔を埋め大粒の涙を流した、

今までひた隠しにしてきた感情が決壊し溢れ出た彼女の心からの声であった、

幽々子は子供の様に泣き崩れ動けずに居た、

そんな主の姿に耐えられなくなった妖夢が駆ける、

妖夢「私は消えませんがそば傍に居ます」

紫「私も居るから我々は人とは違う時間の流れを悠久の時間を生きる人間の様に簡単には消えない」

幽々子「後少しだけこうさせてほしい、後もう少しだけ」

その場に幽々子を残し立ち去る二人、

暫くして幽々子が戻ってきた、

幽々子「妖夢、今から調べ物するよ」

妖夢「何を調べるおつもりですか？」

幽々子「白玉楼、西行妖、そして私自信も」

幽々子「西行法師から始まる桜の由縁を調べれば何にか解ると思っ」

白玉楼資料室

いつ頃から納られたか不明の古い本が並ぶ、

妖夢「なかなか見付かりませんね」

幽々子「どんなに小さい事でも伝承でも何でもいい」

二人は探した日の大半を資料室に充てた

そして見付けた西行妖に世界を分かつ力があることを、

終に核心の詩文を見付ける、

富士見の娘、

西行妖満開の時 幽明境を分かつ、

その魂 白玉楼中で安らむ様、

封印しこれを持って結界とする、

願うなら 二度と苦しみを味わうことのない様、

永久に転生すること忘れ、

.....

幽々子「やはり西行妖は華を咲かせない事で何かの封印してきたんだ魂を礎に」

幽々子「あの人に会えるかもしれない」

ここから西行妖を満開にさせるために行動を起こす、

春を集め封印を外部から強制的に開き華を咲かせようとしたのだっ
た、

夢

本編はここからです、

.....

刀を携える女と男、

「何をしている!」

「?」 「さあー早く!」

(止めて、止めて!)

「?」 「愛している!」

「?」 「君は、生きる!」

ノイズに邪魔され途切れ途切れに聞こえる男の声、

女は男を切る、

血に沈む男を胸に抱き泣き声を上げる、

それはいつも繰り返し見る夢

霞む視界に見える二人の人間、必ず女が男を殺し終わる夢、

自分はその男を知っている、だが何も解らないその二人が誰かも、

知っているはずなのに、

自分の影が動かせる何度も何度も止めようとしたしかし夢、何度も
繰り返させる絶望にも近い

心が締め付けられる、名前も顔も解らないのに、

いつも私は………

「………様、幽々子様」

呼びかける声に引きずられる様に私は目を覚ました、

幽々子「妖夢、ありがとう平気よ」

妖夢「大丈夫ですか？うなされていました、またあの夢ですか？」

魂魄 妖夢半人半霊「おんたま」

白玉楼の庭師、

西行寺 幽々子、亡霊

(さいぎょうじ・ゆゆこ)に仕える

亡霊、死んだ時何か強い未練、記憶、意思を抱えたまま死んだ者、
遺体はこの世にあり幽体の肉体は体温を持つ遺体と幽体が混在し幽

体でありながら物理的な実体を持つ矛盾の存在、遺体を供養されると存在が消えてしまう、

また亡霊で在る限り転生する事は出来ない、

妖夢「幽々子様、涙が」

幽々子「フフツ、亡霊のこの私が涙？滑稽だな」

妖夢「そんな、私は心配ですこの所毎日じゃないですか？」

幽々子「大丈夫よ、妖夢」

(あの夢は私の過去？解らない、ただ何かを伝え様としている)

幽々子「ところで妖夢、ご飯はできてる？」

妖夢「ハイ！」

幽々子「妖夢まだ？お腹すいた」

妖夢「待ってください、もう少しですから」

（あれだけ食べたのにいつも思う、どこに入るんだろう？）（・・・）
（啞空間？）

料理を作る妖夢の横の空間に罅ひびがはいる、

罅が大きくなり空間が割れる、そこから手がのび出来た料理をつまんでいく、

妖夢が気付いた時には手遅れだった、

バツと後を振り返るも幽々子は大人しく料理を待っている、

となると一つしかない、

妖夢はハァーと溜息を吐く、

妖夢「紫様何処です？いらしているでしょ」

空間が大きく割れて人が出て来た、

紫「アラ！ヤツパリばれてた？さすが妖夢ね」

妖夢「さすがじゃありません、料理どうするんですか？」

八雲 やくも・ゆかり 紫スキマ妖怪、事象の境界を操る事が出来る、

紫「良いじゃない、減るもんじゃないし」

妖夢「おもいつきり減っています！ていうか無くなりました」

幽々子「何やってんの妖夢、お腹減って死にそうだよ」

紫「何言ってるの！もう死んでるじゃない」

紫が幽々子にツッコミを入れる、

幽々子「アラ、紫来てたの？」

ボケた返事を返す、

幽々子「ていうかご飯は？」

妖夢と紫がアツて顔をする、

紫「ゴメン、食べちゃった！」

幽々子「・・・仕方ないか」

紫「?!妖夢どうしたの?様子が」

妖夢「最近、ある夢にうなされていまして」

妖夢は紫に夢の内容を語る、

紫「そう、そんな夢を・・・」

妖夢

(紫様は何かを知っている？でもそれが何かとは聞けない怖いんだ)

紫との会話に目を離していると幽々子が庭で何か拾い食いしている、

止めようとしたが、紫がすでにそこについて、

紫「お前は、鳩かーーーーー」

ボクサー張りのポティーブローを打ち放つ、

綺麗な放物線を描き飛んでいく幽々子様、

それを私はただ見ていた、

幽々子を座らせてガミガミと紫が怒鳴る、

紫「あんたはちょっとやさっとじゃなんて事ないんだから、少しぐ

らい我慢しなさい仮にも白玉楼の当主でしょー！

ながながと紫が説教する幽々子はどうかとうと寝ていた、

紫「寝なー！」

幽々子の頭をスパンと叩く、

幽々子「なによー」

紫「寝るな聞けや」

妖夢は庭の手入れをしていた、

幽々子「他は綺麗なのにねー、何でかしら？この大桜は」

紫「そりゃあんた………いや何でもない帰るわ」

言葉を詰まらせてバツがわるくソクサと帰っていった、

妖夢

(やはり紫様は何かを？知っている)

白玉楼にそびえ立つ古より鎮座する大桜、

妖楼・西行妖

さいぎょうあやかし

幽々子も妖夢も咲き誇る姿を見たことは無かった、

遙か昔、正確な時期は解らない、

幻想郷一と謳われた歌人がいた、

西行法師

後に歌聖とまで讃えられる時の帝に認められ名と地位を賜る、

一介の僧がそこまでの地位を得るなど異例だった、

だが誰も不思議とは思わなかった、

彼は歌を愛した、それと同時に自然をこよなく愛したあの大桜を、

何の変哲の無い桜だった但他的心を掴んだ、

晩年彼は桜の下で一人歌いながら眠るように死んだ、舞い散る桜の華に抱かれて、

人々は彼の桜へ思いを汲み桜の下に埋葬する、

翌年桜は今までに無い程見事に咲き誇り、彼の歌の如く美しく荘厳に見る人を全て魅了する、

だが少しづつ悪い噂が流れ始めた、

美しく咲き誇る桜

心を奪われ引き寄せられるように桜の下に人々は集まった、

行き倒れ病や飢えと理由は様々にあるが、

何故か？幾人もの人々が桜の下で死んだ、

次第に西行法師の呪いだなど様々な噂が流れる、

気味悪がり近付こうする人は居なくなつた、それでもなお人は吸い寄せられた桜の放つ死の香りに誘われて、

桜の下で人が死ぬたびにより美しく花を咲かせる、

やがて噂ではなく本当に桜は魔の力を帯びる、

人は桜を恐れ離れていくそして誰も居なくなつた、ただ一人桜を除き、

そして誰かがとは言わずいつからか人々はその桜をこう呼んだ、

妖楼・『西行妖』と

しかし？いつからだろう桜が花を咲かせなくなったのは、

.....

またあれか？

幽々子（あれ？いつもと夢が違う）

霞む視界、相変わらず名前や顔は解らない、

大きい桜の前いつも夢に出る二人が和やかに笑い声を上げる、

幽々子（あの桜は？西行妖が咲いている？）

男「俺はこの桜が好きだ人々に忌み嫌われる物でもこんなに綺麗に咲き誇るんだからな」

優しく笑う

男「俺も死んだらこの桜の下で眠りたいな」

女「じゃあ私も！なんてね？」

また笑い声上がる

幽々子（西行妖、あの桜に夢の手がかりがある）

.....

夢は霞む視界に阻まれ遠ざかっていく、

幽々子（待って！）

逃げていく幻影を必死に追い掛けるのだが、

幽々子「行くな・・・?!」

目を覚ました私は気が付くと手を天井へと伸ばしていた、

この手はいつたい何を掴みたかったのか？ 追い掛けたかったのか？

桜なのか？ あの二人なのか？ 自分でも解らない、

なんて曖昧なんだ私は、

庭に出て桜を見上げる、

幽々子「夢に見た貴方の姿とても綺麗だった、貴方は私に何を伝えたいの？」

妖夢「幽々子様、起きてくだ……あれ？」

普段なら寝てる時間だが姿が見えない、

庭に目をやると西行妖の下に幽々子が居た、

妖夢「オハヨウ御座います、幽々子様がこんな時間に起きてるなんてどうしたんですか？」……「珍しい」

幽々子「オハヨウ妖夢、てか失礼でしょう？それ」

妖夢「聞こえてました、でも何でこんなに早く？」

幽々子「ちょっと、この子にね！」

妖夢「西行妖にですか？」

幽々子「そう！」

幽々子「この子、西行妖に何か秘密がある」

妖夢「秘密ですか？」

(幽々子様の夢の手がかりが?)

幽々子「私達が知り得ない記憶をこの子は知っている！」

幽々子は、西行妖に手を掛けた、

ドクン

その瞬間、莫大な妖気が溢れだした、

桁外れな力に妖夢は身が竦み動け無い、

幽々子でさえその力に畏怖し後ずさる、

視覚情報に映る程の妖気の爆発的肥大に大気が震える、

その時、幽々子に激しい頭痛が襲う、

幽々子「頭が割れる、止めて私の中に入ってくるな！」

幽々子の突然の異変に妖夢が駆け寄る、

妖夢「幽々子様！大丈夫ですか？」

異変に気付いた紫が駆け付けた、

紫「何が起きてるの？」

妖夢「紫様、西行妖が突然！」

紫「まさか西行妖か？ここは私が抑えるから、貴女は幽々子を」

妖夢「解りました、お気お付けて」

(まさか？西行妖に何が、紫様貴女は何を知っているの！)

紫「西行妖、少し手荒いけど黙ってもらおうよ！」

紫を中心に空間が歪んでゆく、

幽々子の頭痛は酷くなるばかりであった、

妖夢「幽々子様」

幽々子の意識が途切れる、

.....

.....

二人の女性が対峙している

????「何故です？貴女なら、王である貴女なら？」

王「赦せゆるとは言わない」

????「謝罪なんか要らない、この人が死ぬ必要がどこにある？」

幽々子（誰だ？また違う夢、王とは誰何でこんな？）∴∴∴（何？）

視界にノイズが掛かる

.....

そして景色が変わる、

一面銀が広がる純白の世界の中、

深紅の道が続く、

女は血に染まる体を脚を引きずりながら歩く、

己が身の魂を削りながら

????「赦して、私は貴方に出会ってはいけなかったんだ」

女が死霊を纏い歩く桜の華が吹雪の如く吹き荒れる中を、

??? 「せめて貴方の思いを」

たどり着いた先には、

いつかの夢とは次元が違うと言えるほど咲き誇る桜、

妖楼・西行妖

死者の魂を糧に華を咲かせる忌み楼、

女は男の亡骸が眠る桜の下に辿り着く、

??? 「思い出をありがとう、私を愛してくれた人」

自らも力尽き沈む女、

??? 「生きるか？御免なさい、貴方との約束守れそうにないみた

い
」

幽々子（貴女は誰なの？私は一体何なの？教えてよ）

だが夢、問い掛けに答える事はない、

息も絶え絶えに女は剣を引き抜き西行妖へ掲げ己が胸に突き立てる、

????「心から貴方を愛してました！」

自らの剣で女は終止符を打った、

急激に世界が遠ざかっていく、

過去記憶の夢が幽々子の心に触れる、

幽々子「あれは・・・私？」

.....

.....

(あれは、誰でも無い私の過去だ)

.....様、.....ん？

.....様、幽々子様！

いつかの朝に見た光景だな？

紫「幽々子、大丈夫？」

幽々子「紫、何故貴女が？」

(夢じゃ無いな、戻ってきたのか？)

紫「何故って？貴女ね、まあーそれなら大丈夫か」

幽々子「アッ！」

跳び起きると幽々子は西行妖へ走った、

紫「駄目！」

紫が飛び付き幽々子を止める、

幽々子「放して、行かして！」

妖夢「く・・・！……………紫様お許し下さい」

紫を突き飛ばす、

紫「妖夢！」

西行妖へ駆け寄る幽々子、

幽々子「西行妖、教えてよ！私は誰なの？あの人は誰なんだ？」

西行妖にもたれ掛かり顔を埋め大粒の涙を流した、

今までひた隠しにしてきた感情が決壊し溢れ出た彼女の心からの声であった、

幽々子は子供の様に泣き崩れ動けずに居た、

そんな主の姿に耐えられなくなった妖夢が駆ける、

妖夢「私は消えませんが傍そばに居ます」

紫「私も居るから我々は人とは違う時間の流れを悠久の時間を生きる人間の様に簡単には消えない」

幽々子「後少しだけこうさせてほしい、後もう少しだけ」

その場に幽々子を残り立ち去る二人、

暫くして幽々子が戻ってきた、

幽々子「妖夢、今から調べ物するよ」

妖夢「何を調べるおつもりですか？」

幽々子「白玉楼、西行妖、そして私自信も」

幽々子「西行法師から始まる桜の由縁を調べれば何にか解ると思う」

白玉楼資料室

いつ頃から納られたか不明の古い本が並ぶ、

妖夢「なかなか見付かりませんね」

幽々子「どんなに小さい事でも伝承でも何でもいい」

二人は日の大半を資料室に充てた

そして見付けた西行妖に世界を分かつ力があることを、

終に核心の詩文を見付ける、

富士見の娘、

西行妖満開の時 幽明境を分かつ、

その魂 白玉楼中で安らむ様、

封印しこれを持って結界とする、

願うなら 二度と苦しみを味わうことのない様、

永久に転生すること忘れ、

.....

幽々子「やはり西行妖は華を咲かせない事で何かの封印してきたんだ？誰かの魂を礎にして」

幽々子「あの人に会えるかもしれない？」

ここから西行妖を満開にさせるために行動を起こす、

春を集め封印を外部から強制的に開き華を咲かせようとしたのだっ
た、

異変

幻想郷辺地、

博麗神社、

ガタガタと風が吹き付ける度に壁が揺れる、

霊夢「何で屋内なのに外とあんまし変わんないのよ？」

文句を垂れる、

博麗 はくれい・れいむ 霊夢博麗神社の巫女、異変の解決家・万年貧乏

霊夢「こつ吹雪がひどいと参拝客も来やしないじゃない！ただでさえ御賽銭が少ないのに」

この年の冬は異常であったなけなしの資金で買い溜めた暖房用の薪木も底を突こうとしており、

時期、期間、積雪量どれを取っても異常という以外とりようがなかった、

暦の上では5月を示しており春が訪れるはずの時期で冬がこれ程まで長引くのは不自然である、

霊夢「何かがおかしい？今動かないと大変な事になるかもしれない」

勘で飛び出した霊夢だった、

その一方

霧雨亭

魔理沙「吹雪、止まらねーなもう5月になるのにな」

霧雨 魔理沙まじま普通の魔法使い、めっぱう手癖が悪い、盗っ人、でも努力家

魔理沙「霊夢どうしてるかな？参拝客少ないもんな！死んだか？なんてな」

魔法具の力で霧雨亭は外的環境の影響を受けなかったため生活に支障はない、

魔理沙「退屈だ、この吹雪じゃ遊びに来る奴も居ないだろうな」

する事もなくただ外を眺めていた魔理沙、

吹雪の中に違う物を見付け飛び出した、

魔理沙「桜の花びら？この吹雪の中に、何だか面白くなりそうだ」

もう既に十分に異常事態だがトラブルの予感を感じ出発の支度をす
る、

幻想郷辺地のさらに僻地、

吸血鬼、悪魔の住まう館、紅魔館

紅茶を口に運ぶ咲夜、

十六夜 咲夜いよはるい・さくや紅魔館にて仕えるメイド長、館唯一の人間、

咲夜「苦い、茶葉間違えたかな？それにしても止まないわねこの吹雪」

吹雪に対しポツリとやっかみを立てる、

咲夜「こつも吹雪が続くと館の蓄えも尽きてしまつ何とかしないと」

紅魔館の主であるレミリア・スカーレットに燃料及び貯蓄の補充に館から出ることには許しを得るために申し出た、

快く許しを貰い支度を済ませ出発する咲夜だった、

吹雪が吹き荒れる中を進む霊夢、

????「やっぱり来たか？」

声のする方へ向く、

霊夢「魔理沙、貴女もなの？」

二人にとって互いの行動は大方予想がついた物だった、

魔理沙「外に出ると改めて感じるな凄い妖気だぜ」

霊夢「これ程の力が突然現れるなんておかし過ぎる？」

建物の中では感じる事の出来なかった物が突如として現れた莫大な力に不安を募らせる二人だった、

魔理沙「何が起きているんだ？」

魔理沙「まったく！たまん無いぜキリがない」

異常な妖気に当てられた妖怪達が半ば暴走に近い状態にあり目につく物を手当たり次第に攻撃を仕掛ける者まで現れその対応に手を焼いていた、

霊夢「確かにこれじゃあ前に進め無い」

魔理沙「空に行くのは止めよう面倒だが下から行くしかないぜ」

周りの目に触れぬよう下から行くことにした二人

霊夢「行きますか？」

妖気を発する方向はハッキリしているその向こうへ、

氷精

霊夢「まったく誰がこんな事起こしてるんだか？とっちめてやるんだから」

魔理沙「気張るのも程々にしとけよ」

霊夢「大丈夫よ！」

会話をしながら進む二人

魔理沙「霊夢何だかおかしくないか？」

霊夢「何言ってるんのおかしなことだらけじゃない？」

気に留めない、

魔理沙

(違和感が拭えない何だこの感じは)

違和感に気付いた時に魔理沙はハッとする、

霊夢「魔理沙?どうしたのよ」

重い口を開く、

魔理沙「有り得ないんだよ!今ここに立っている事が」

霊夢「え?」

事態を掴めない霊夢、

魔理沙「此処は湖の上だ例え吹雪に荒れるこの気温でもこの湖が凍りきるなんて有り得ないんだよ」

事態にやっと気付いた、

魔理沙「無駄な戦闘を避けようと下から来たが逆に敵陣に突っ込んだかもしれない？」

霊夢「出会わずにやり過ごしたいわね」

物音を立てずに進む二人だがそれは居た、

氷上の上を歩き続ける、

ある時、周りの温度が急激に下がった、

二人も異質な大気に気付いた、

下がり続ける気温の極点地にふらりと現れた少女を目にした、

氷上に一人遊ぶ姿に危険な存在ではないと感じた、

????「あんた達誰だ？」

魔理沙「チイ、気付かれたか」

????「あたいはチルノ、ずっとここにいるの」

霊夢「チルノ、あんた何いってんの？私達が解らないの」

チルノ「あれ？何処かで会ったっけ」

魔理沙「お前がこの湖を凍らせたのか？」

チルノ「そうだよ、氷精のあたいが凍らせたんだよ」

二人はそれを聞き驚愕した、

妖精とは自然の現れ、環境の力の体言、

そのために元来から非常に高い能力を秘める、

だがそれも長い時間をかけ発現する力であり、一妖精に扱える力を逸脱している、

霊夢「この溢れている妖気に当てられて力が暴走している少し記憶も飛んでるみたいね」

チルノ「あたいと遊んでよ？一人でつまんなかったんだ」

魔理沙「悪いけど遊んでる暇はないんだ、またな」

霊夢「ちよつと魔理沙、そんなふうに言ったら」

チルノ「やだ、やだ、二人はあたいと遊ぶんだ！」

チルノの感情に反応し温度がさらに下がり、氷の粒が生まれ襲い掛かる、

霊夢「もう！だから言ったのに」

魔理沙「こっとなったら仕方ない、やるしかないこれだから子供は」

チルノ「遊んでくれないなら、もう知らない」

飛び掛かる氷を避ける二人、

霊夢「この力凄い？当たったらひとたまりもない」

チルノ「あたいは最強なんだ誰にも負けない」

地面から氷柱びょうじがのび突き上げる、

魔理沙「死ぬぞこれ」

霊夢「手加減なんか出来ないな、ハア」

気弾を撃ち放つ、

冷気に気弾が防がれた

チルノ「そんな物、効かないよ」

妖精の力の片鱗を見た、やはり凄まじいものがある、

魔理沙「どうする？ 霊夢」

霊夢「かわいそうだけど黙らせるしかない」

符を手にする、

魔理沙「ナメるなよ！」

魔弾を撃つ、

魔弾は冷気を破りチルノに着弾した、

吹き飛ぶチルノだが倒すには力が足りない、

体勢を立て直し、

チルノ「やったな！やったな！消えろー」

自身の周りを氷が包み冷気が極点に達し無差別に周囲を凍らせながら魔理沙に突撃する、

霊夢「魔理沙避けて！これで終わらせる」

声に反応し距離をとる魔理沙、

霊符を地に張り巡らせていた霊夢の術が発動する、

陣の中央にチルノを誘い力を解放した、

術が直撃し地に落ちたチルノに駆け寄る二人、

魔理沙「やり過ぎじゃないか？」

霊夢「手加減なんて出来なかったわよ」

チルノが目を覚ました、

チルノ「負けちゃったよそんな」

泣きじゃくる、

霊夢「危なかったわ？ 一歩間違えば倒れているのは私達だった」

チルノ「本当に？霊夢」

魔理沙「本当だまたやるうぜ」

チルノ「約束だよ、絶対だよ」

魔理沙「ああ、約束だ」

霊夢「元に戻って良かったわ行くよ魔理沙、じゃあチルノまたね」

チルノを下し先に進む二人であった、

二人がチルノと戦っている時その一方、

咲夜「まったく酷い吹雪」

愚痴を言いながら歩く、

咲夜「元凶を止めなければ意味が無いな動いてみますか？」

一人別ルートから進む咲夜、

咲夜「暴れるのも久しぶりかな」

妖気を頼りに進むのだが、

異常な妖気が溢れている今人間が一人で行動するには余りにも危険だ気に当てられた妖怪達が襲いかかって来るからである、

妖怪「人間一人か？丁度いい腹が減ってたんだ」

咲夜「三下が消えなさい」

ナイフを構える咲夜、

妖怪「人間風情が」

咲夜「人を余り舐めるなよ化け物風情が」

襲いかかる妖怪にナイフの洗礼が舞う、

妖怪「馬鹿な？人間なんぞに」

妖怪の四肢を潰し頭を踏み付け、

咲夜「ケンカを売る相手を間違えましたね」

咲夜は去り際にナイフを真上に投げる、

ナイフは狙い済ました様に妖怪の頭に落ち、

さも当然と立ち去った、

妖気をたどりに道を行く進むほど空気が重たく感じる、

霊夢「そういえば魔理沙は何で出て来たの？」

霊夢は疑問を何気なく聞いた、

魔理沙「ん雪の中に桜が舞ってたんだ、で何と無くかな」

霊夢「桜ってこの雪よ見間違えたんじゃないの？」

呆れる霊夢だが、その目の前を桜が通った、

霊夢「嘘？本当だったんだ」

魔理沙「だろ！私もびっくりして飛び出したんだから」

思わず舞う花びらを掴もうとする霊夢だが花は触れる事が出来ず擦り抜けた、

霊夢「な？馬鹿な！」

魔理沙「嫌な予感がする急ごう」

不安が募る二人、

妖気をたどりに道を行く進むほど空気が重たく感じる、

霊夢「そついえば魔理沙は何で出て来たの？」

霊夢は疑問を何気なく聞いた、

魔理沙「ん雪の中に桜が舞ってたんだ、で何と無くかな」

霊夢「桜ってこの雪よ見間違えたんじゃないの？」

呆れる霊夢だが、その目の前を桜が通った、

霊夢「嘘？本当だったんだ」

魔理沙「だろ！私もびっくりして飛び出したんだから」

思わず舞う花びらを掴もうとする霊夢だが花は触れる事が出来ず擦り抜けた、

霊夢「な？馬鹿な！」

魔理沙「嫌な予感がする急いじ」

不安が募る、

氷妖

進む道中必要以上の戦闘を避けようとしても妖怪達に高い霊力、魔力を持つ二人が見付からず行動するのは難しい、

魔理沙「やはり戦闘は避けられないか！」

霊夢「ブツクサ言ってるだけで」

群がる妖怪に気弾を撃つ一団一団は大したことないが数が多く苦戦する、

撃ち落とすきれず妖怪が霊夢に襲い群がる、

魔理沙「霊夢ー！」

霊夢「舐めるなー！」

薙刀で妖怪を薙ぎ払う、

魔理沙「どこから出したそんなもん？」

魔理沙がツツコム、

霊夢「マジカルゲートさ、簡単に言つと空間移動装置かな？」

魔理沙「そんな便利なものあつたのかよ私にも使えるの？」

霊夢「巫女之力だから魔理沙には無理かな」

魔理沙「つまんないの!」

霊夢「これ使うと疲れるのよ、余り使いたくない物よ」

魔理沙「そんなもんかね」

霊夢「そんなもんよ、さぁー行こう」

改めて先を急いだ、

道中のゴタゴタに時間を取られ空が暗くなってきた、

霊夢「夜になる動かない方がいいね」

魔理沙「そうだな休もうか？でも寒いな」

霊夢「結界を張るわ外気を遮断出来るよオマケに妖怪にも気付かれない！」

魔理沙「安心は出来るか？」

空の光は落ち辺りは暗闇に包まれた、

霊夢

(この吹雪の中に舞っていた桜、いったい何が?)

異変について思考する、

霊夢「まったく幸せそうに寝ちゃって」

ぼやきながら霊夢も眠りに付いた、

一人颯爽と雪の道を行く咲夜、

咲夜「出て来なさい?居るのは知っている!」

物影からぞろぞろと妖怪が姿を現す、

ボス妖怪「人間に気付かれるとはな?なかなかやるね女」

咲夜「この殺気に気付けないほどバカじゃない！」

妖怪「命知らずめ人間一人、諦めるんだな」

妖怪のリーダー格が指示を下す、手下の妖怪が襲いかかる、

咲夜「来なさい！」

妖怪の凶刃が振り下ろされる、

だが微動だにしなかった咲夜がその場から消えた、

妖怪「馬鹿な！どこに？消えただと」

次の瞬間、手下の妖怪達に無数のナイフが突き刺さる、

手下の妖怪達はその場に倒れる、

妖怪「何が？奴は一体」

狼狽する妖怪の前に咲夜が現れる、

咲夜「さようなら」

咲夜は妖怪の眉間にナイフを投げる、

妖怪は何も理解出来ないまま絶命した、

そして時間は再び流れる、

見上げた先に舞う一片の桜の花びらが一枚、

咲夜「桜？いったい何処から？嫌な感じね」

その場で夜を過ごした、まだ薄暗いものの夜は去って行った、

霊夢「朝か？魔理沙起きて行くよ！」

魔理沙「早すぎだろ！後5分」

霊夢「5分じゃねえ！起きろ」

まだ寝ぼけ眼の魔理沙を引きずって活動を再開する、

太陽が昇り明るくなりやつと魔理沙も目を覚ました、

魔理沙「普通はこれくらいで動くよな」

ボソツと呟くと、

霊夢「余り一箇所に留まるのも良くないのよ」

呟やきに反論する、

魔理沙「へいへい、わかりました」

互いに愚痴を言い合いながらも共に行く二人、

突如、和やかな空気が張り詰める、

霊夢「待って！ダメ」

魔理沙を止める、

魔理沙「何だよ急に」

霊夢「何かが居る？」

巫女としての力が異変を感じ取った、

気配を感じた場所へと足を運ぶ、

霊夢「ひどい」

そこに居たのは妖怪だった、ほぼ全身が凍りつき、

妖怪「誰か？助けてくれ」

助けを求めるが手の施しようが無く凍った部位を意図的に破壊した形跡が見られる、しかし凍らせられているために致命傷にも係わらず簡単に死ぬことが出来ず苦しみもがいている、

絶対的な悪意、残虐さを物語る、

魔理沙は霊夢に意思を示す、

魔理沙「ゴメンな許してくれ」

彼は覚悟し最後の言葉を口にする、

妖怪「頼む」

凍りつき傷付いたその肉体に魔理沙は魔弾を撃つ、

最後に苦しみを与えずに一撃のもとに妖怪の肉体は砕けた、

霊夢「ありがとう、魔理沙がやらなければ私がしていたわ」

空を見上げる、

霊夢「どうか迷わずに」

魔理沙「こんなひどい事を誰が、まさかチルノか？」

想像にはしたくないが最悪の予測がよぎる、

霊夢「あの子じゃない、少なくともチルノに邪気は無いしそんな事
する子ではないよ」

否定する、

憤りを押し殺し、かの為に祈りを込めて、

二人は先の妖怪の事を考えていた、

霊夢「あの人、優しい顔をしてた」

その命を蹂躪する力を持つ何者が居る、

魔理沙「許さない」

激しい怒りを表す、

霊夢「私もここまで頭にきたのは始めてだよ」

白い森に行く、世界が姿を変えた、

命を足蹴にする絶望の世界、氷に閉ざされた姿、

氷の彫像が並ぶ、恐怖に歪む顔のまま固められた人や妖怪達、

霊夢と魔理沙に涙が溢れる、

霊夢「酷すぎる、何で？どうして？」

魔理沙「怖かったよな？辛いよな？」

我が子を守る様に母が子を抱いたまま氷に閉ざされた姿を見て泣き崩れる、

魔理沙「霊夢！楽にしてあげよう」

霊夢「うん！」

凍らされた人々を砕いてゆく、砕くたびに心が軋む、だがこのままでは彼らが悲しすぎる、

霊夢「ごめんね、これしか出来ない」

頬を伝う涙が白い雪に跡を残した、

二人は決意を胸に森に行く、

暫くして森が開ける、

その中央に渦巻く圧倒的な悪意、

蒼白の衣裳を着た一人が鎮座する、

????「待っていたよ？」

霊夢「誰だ？」

????「自己紹介が遅れたね、私はレティ・ホワイトロック、妖怪

です」

魔理沙「お前がやったのか？」

レティ「満足してくれましたかな、私の芸術は？」

悪びれる事も無く言い放つ、

魔理沙「貴様！」

怒りに震える、

レティ「困るんですよ君達がこの冬を止めようとしている事は知っている、私は冬にしか活動が出来ないんだ春には眠りにつかなければならない今この状況は最高なんだ邪魔しないでくれます」

霊夢「それと彼らに何の関係がある？」

レティ「力が溢れる、試したくなるのは不思議なことですか？」

魔理沙「そんな事の為に彼らを」

レティ「私には関係ない、人間や妖怪の一人や二人どうとゆうこと
はないでしょう?」

邪気に満ちた絶対的な悪意、

レティ「長い時を生きる私には冬という時間は短すぎる大半を眠り
につかなければならない私にもやりたい事もあるさ」

霊夢「だからといって、何故殺す必要がある?」

レティ「少々私も浮かれてね言い得て妙だが今は私にとってこの世
の春なの邪魔はさせん」

霊夢「この異変を何とかしようとは私は博麗の巫女として動いた、だ
けど今は何も関係ない!」

大きく息を吸い込み、

霊夢「私は貴様が気に入らないそれだけだ！」

己が感情の全てを述べた、

レティ「ならばどうするんだ？私を否定するならそれもいいだろう、
来るがいい人間！意思を力を示して見せろ」

魔理沙「言われ無くとも貴様だけは」

霊夢「彼らの無念と悲しみを思い知れ」

霊夢はゲートを開き雑刀を手に取る、

魔理沙は魔力を集中させる、

レティ「殺気に満ちた風これが闘い」

レティの顔がにやける、

霊夢「何処までも貴様は！」

雑刀を霊力に集める、

霊夢「墜ちろ」

レティ「フン！その程度私とて」

冷気は氷気となり氷は刃を創る、

刃と刃がぶつかり合う、

レティ「いいね躊躇いの無い良い踏み込みだ」

魔理沙「フザケルな」

力を込めた魔弾を砲のように撃ち放つ、

レティ「チィ？しまった」

レティは砲に包まれ吹き飛ば、

魔理沙「やったか」

かなりの力を込めた魔砲に息を切らす、

レティ「素晴らしい、驚いたよ」

衣服の一部を破けたレティが立つ、

レティ「殺意の込められた一撃だ解ってるね」

霊夢「一緒にするな！貴様とは違う」

激しく切り合い金属音が響く、

レティ「次は私の番だな」

氷の槍を創り、

レティ「行け」

槍が二人へ飛ぶ、

氷の槍を撃ち落とす、

二人は接近戦を止め遠距離戦に移る、

互いに砲を撃ち合う、

魔理沙「そこだ」

敢えて魔弾を避けれるよう撃つ魔理沙はレティの回避地点を読み夕イミングを合わせ、

フェイントに隠された魔弾がレティを捕らえる、

レティ「何？」

回避は間に合わない妖力を集め防御する、

間髪を入れず霊夢が逆から仕掛けた、

霊夢「もらった」

レティ「いつの間に？」

一閃が光る、

レティ「流石にやりますね油断したまさかここまでとは？」

ギリギリ半身躲し致命傷を避けるも肩口から血を流すレティ、

霊夢「浅い？やられた」

打ち込みの際すれ違い様に魔弾を撃たれ霊夢も傷を負った、

レティ「最高です最高よ！やはり闘いはこうでなければな」

霊夢に駆け寄る魔理沙、

魔理沙「狂っているよお前」

立ち上がりゆっくりと歩くレティ、

レティ「狂つてなどいないさ私は自らの意思で力を行使する誰の意思でもない自らの意思で」

霊夢「認める訳にはいけない絶対に」

レティ「余興はおしまいだ、行くぞ」

レティ「傷の回復も満足に出来ない脆弱な肉体、人間なんか」

雰囲気が変わる、

魔理沙「何だ急に？」

レティ「遊びはおしまいだよ」

暗く深い悪意が広がる、

魔理沙「遊びだとこんな奴に」

レティ「純粹に楽しもう闘いを」

靈夢「負けない負ける訳には」

靈夢の薙刀がレティを切る、だが妖力の壁が防ぐ、

靈夢「何？だけど」

薙刀が壁を押し切る、

レティ「ほう」

靈夢「魔理沙、使って」

ゲートを開き霊刀を魔理沙に投げ魔理沙は刀を掴む、

魔理沙「解ったよ霊夢」

レティ「そうだ！二人まとめて掛かって来い」

氷の剣を両手に掴む、

魔理沙「刀は初めてなんだが…な！」

レティ「初めてにしてわ筋がいいね」

四本の刃がぶつかり合う、

レティ「刃はいい相手を選ばない人間、非人間、化け物、妖怪それがどんな存在でも」

魔理沙「素人でもってか？」

魔理沙は渾身の力を込めて刀を振り下ろす、

魔理沙の剣がレティの氷の剣を砕く、

その衝撃に後方に下がる、

レティ「私の剣が折られるなんて？ならこれならどうだ」

レティは手を地に置くと氷の柱が生き意思を持つように伸びる、

レティ「サアー！避けてみなさい！」

魔理沙が避けきれず氷が襲う、

魔理沙「うわ」

霊夢「魔理沙ー！」

一瞬の気を取られた隙を突かれる、

レティ「よそ見は良くないよ?」

懐に潜り込まれ魔弾を至近距離で撃たれる、

霊夢「しまっ、」

魔弾が直撃する、

地に伏せる霊夢、

魔理沙「れ、霊夢」

必死に霊夢へ手を伸ばす、

レティ「大人しくしていなさい」

差し延べるその手に氷の刀を突き刺す、

自らに起きた事態を理解出来ない、

魔理沙「アア、あーーーーー！」

悲鳴が響き渡り、

痛みに軋む体で駆け寄ろうと体を起こす、

レティ「君も黙ってたな」

魔弾を再び撃ち込みこまれる、

霊夢「キャッ！」

.....、「ゴフッ」

吐血する、内臓に痛手を負ったようだ、

レティ「簡単には死んでくれるな？こんなに愉しいのは久しぶりだよ立て早く剣を取れ幕は上がったばかりです」

霊夢「目が霞む此処までなの？」

霊夢の心に諦めが過ぎる、

だが、その時あの親子を思い出した、

霊夢「そつだ、負ける訳にはいかないんだ」

最後まで我が子を護ろうとした母の姿を、

死に逝く状況においてなお子が脅えぬよう優しい顔をしていた、

霊夢「貴女は何の為に闘う？」

レティ「意味などないよ闘いたいからだ」

霊夢「森の人々は何のために、あれが闘いか？ただの殺戮じゃないか」

レティ「人間など履いて捨てる程いるじゃない？命はいつか朽ちるものそれが早まっただけのこと」

霊夢「命は世界を支える大事な物なの、失われるのは酷い事なんだ」！

レティ「世界を支えるか？なら貴女もその一つしてやる」

霊夢「意味の無い命なんかない！生きる事は願いなのになんであの親子を？」

レティ「嗚呼、あの最後の二人？なかなか愉しめましたよ凍りなが

らも必死にガキをあやしていたわ最高でしたよだからねゆっくりと凍らせてやったの、生きてままね」

霊夢「命の意味を、解れよ！」

レティ「死にかけが何が出来る」

氷の柱が霊夢へ伸びる、

??? (貴女の心が私の心を動かしました)

氷は霊夢へ届かず消える、

レティ「何？」

優しく暖かい力が霊夢を包む、

レティ「霊力ではない？これは神力！馬鹿な神が力を貸したのか？」

辺りに暖かい力が満ち霊夢と魔理沙の傷が癒える、

魔理沙「暖かい？これは」

魔理沙を止める氷の刀が消え痛みが無くなる、

魔理沙「暖かい？これは」

魔理沙を止める氷の刀が消え痛みが無くなる、

霊夢「貴方は誰なの？」

???（我は天照、貴女の意味が私を動かしました、我は共に参り
ましょう）

天照あまてらす

太陽神、八百万神の長やおよび

レティは脅え、氷を造り霊夢へ放つ、

だが全ての氷は霊夢へ届かない、

陽炎が霊夢を包みゆらりと立ち上がる、

霊夢の手に力が集まる、

力は具現化し剣を生む、

天照（霊剣、布都御霊、神の剣貴女に預けます）

布都御霊の剣ふつのみたまのつるぎ

古くから神話に出る神の剣

霊夢「行きます」

歩む霊夢に氷の刃は蒸発してゆく、

もうレティの力は何も届かない、

レティ「来るな！来るな！」

恐れ逃げだしたレティ、

霊夢「そうだよね？死ぬのは怖いよね？逃げ出したくなるよな貴女が奪った命の意味をそして恐怖を胸に刻み私の前から消えろ！」

霊夢の剣はレティの胸を貫く、

レティの肉体は塵となり消えた、

霊夢「レティ・ホワイトロックあの世で罪を償え、彼らに地獄で詫びろ」

妖怪、レティ・ホワイトロックを撃破した、

陽炎が消え霊夢は倒れる魔理沙が滑り込み支え、

魔理沙「やったな！霊夢」

魔理沙が笑う、

霊夢「疲れた、ちょっと眠らして？」

魔理沙「お疲れ、ゆっくり眠れ」

目を閉じ眠り着いたのだった、

魔理沙「私にも聞こえた、まさか神様がね」

霊夢の寝顔を眺める魔理沙であった、

孤独な人形使い（前書き）

勝手にキャラを出します

孤独な人形使い

魔理沙「なんか空気が違うな暖かい？ここ一帯にだけ春が戻ったのか？」

神の力はレティと闘っていた一帯にのみ春を取り戻した、

霊夢「ん？」

魔理沙「起きたか？霊夢」

霊夢が目覚める、

魔理沙「スゲーな！神様味方にするなんて負なしじゃん」

魔理沙を見つめる霊夢、ほんの少しの沈黙が流れる、

霊夢「どんな力にも必ず代償がある！神の力の代償」

魔理沙「それは？」

霊夢「私の命！人に神の力は過ぎたる物よ人の体では力に耐え切れず体を擦り減らしていくわ使い続ければ多分私は人の躰かたちを保てれないと思う」

魔理沙「でも！じゃあ！今お前は大丈夫なのか？」

霊夢「今は…ね」

少し遠くを見る、

霊夢「でも、必要な時が来たら迷わず使うよ」

魔理沙「そんな」

（霊夢が死ぬ？嫌だ！そんな力を使わせたくない）

手に入れた力の代償、その重さを噛み締めた、

神の力の余波が飛ぶ、

咲夜

（なんて大きい力、向こうで何が？）

霊夢とレティの鬪いの激しさが伝わる、

力の発つせられた方向へ向こうとした時に視線を感じ、

咲夜「誰です？」

木々の間から黒衣を纏う妖怪が姿をだす、

妖怪「始めまして？お初にお目に掛かります、私はベルと申します
咲夜様」

咲夜「何故私の名を？」

ベル「紅魔館に住まうただ一人の人間のお話しはよく聞いております」

咲夜「それで私に何か？」

ベル「かの吸血鬼、レミリア・スカーレットが認めた人間の力このベルに見せて下さい」

ベルは黒衣を翻しひるがえ叫ぶ、

ベル「行くぞ！」

咲夜「いいでしょう、受けて立ちます」

咲夜はナイフを構えベルは一对のサーベルの一本を抜く、

ベル「貴女がナイフを用いる事知っている！我が剣技お見せしよう」

刃がぶつかり合い火花が散る、

巧みにナイフを扱う咲夜が押しはじめる、

ベル「くう！」

ベルのサーベルが弾ける、

ベル「近接戦では分が悪いか？だがしかし砲撃戦こそが私の領土だ」

咲夜「こちらとて」

ベルにナイフが直撃した？

しかし幻影に消え、

ベル「ハハハ！私は此処だ」

幻に身を隠し空間を飛び越えたかのように移り砲撃を放つ、

咲夜はそれを紙一重に避ける、

咲夜「そこだ！」

幻影を見切る、

ベル「な！」

ナイフはベルの頬を切る、

ベル「ハアーツハハハ！」

ベルは高笑いを上げる、

ベル「素晴らしい！最高です！まさか見切るとは、貴女は私の予想を超える」

咲夜

（一体何だこの異様な余裕は？）

ベル「準備は整った、さあー貴女はこれをどうしますか？」

咲夜「これは」

ベル「私が意図も無くただ闇雲に動いていたと思えますか！」

咲夜は周りを見渡す、

蜘蛛の糸の様にドーム状に張り巡らされた砲台の檻、

ベル「私の幻影は質量を持つ、その質量同士を結合させ作り上げた結界よこれが私の戦技『全包围結界』」

咲夜「結界？」

ベル「三次元に張り巡らされたこの結界に逃げ場はない全方向砲撃の雨に沈め」

言葉通り逃げ場の無い、前後左右上下あらゆる全ての方向から迫りくる砲撃、

ベル「最早なにをしても無駄、レミリア様には私から伝えましょう
貴女の最後を」

砲が撃たれる、

爆煙に包まれベルの顔がゆるむ、

が結界の全ての砲台が同時に破壊された、

そしてベルの前に立つ咲夜、

ベル「馬鹿な回避は不可能だ」

（あの全方位撃ちを避け全ての結界を同時に破壊するなど、時間を止めないでも限り？）……………（そうか！）

ベル「貴女の力、時間の停止ですね」

咲夜「私の能力に気付かれるとは、その通りです」

咲夜はベルにナイフを向ける、

ベル「フフ、ククク」

ベルが笑う、

咲夜「なにを笑っている？」

ベル「余りにも滑稽ですからね！その力時の停止しかし貴女の時間は動き続ける貴女はその力を使う度に命を削る時間のずれとはそういうことだ」

咲夜「解っている」

停止した時間に動くという事は自分の時間が周りより進む事、

一時間の時間を停止した場合、自分だけが周りより一時間分の時を早く過ごす事になる、

ベル「貴女は人間だ、一分一秒を惜しむ人がその力を持つとは解っていますか貴女が仕えるレミリア様は吸血鬼ですよ？」

咲夜「それが何ぞす！」

ベル「本当は自分でも解っているはずですよ貴女とレミリア様は同じ時を刻むことは出来ない貴女の死に時間という枷に彼女達も改めて気付くでしょう？姉妹も司書も門番も皆違う時を刻む、遣された彼女らに悲しみしか生まない」

人間である咲夜には時間は限られている、

ベル「どんなに望もうと願おうと百年も生きられない、自らの主に
悲しみを与えるつもりか？悪いことは言わない館を出ていくんだ」

咲夜「私はただお嬢様を守りたいだけだ！私に生きる意味と使命を
与えてくれた、レミリア様の傍にこの命最後まで尽きるまでこの思いは
誰にも神にも譲らないそれが私の誇りだ」

ベル「人の貴女がレミリア様を守る？……………笑いぐさだな！」

ベル「決意は揺らぎませんか、やはり貴女は私の思った通りの人だ」

咲夜「なら話しは終わりよ」

ナイフを突き付ける、

ベル「いえ咲夜様、私にトドメは必要ありません妖怪としても私は長く生き過ぎた数刻もすれば私は消えるでしょう」

咲夜「そんな体で何故？」

ベル「かつて私は人に仕えていた、しかし私が守りたかった人は皆私を残し死んでしまった大事な物を失う事に私は恐れたまた失うくらいならと私は」

ベルが自らの過去を語る、

ベル「最後に貴女に逢いたかった人である貴女に、私は己が道を貫け無かった自分の弱さに負け人と交わる事に逃げた」

数刻とはいわずベルの体は崩れていく、

ベル「一辺の迷い無く己が道を貫く、簡単なようで最も難しい事です貴女の覚悟いつまで保てますか？」

咲夜「無論、死ぬまで」

ベル「ならば私は上で見届けよう貴女の生き様を」

ベルの体は塵となり空へ散って行った、

咲夜「ベル、貴女の剣一本貰っていくよ？」

ベルのサーベルを地に刺し黒衣をかける、

その墓前に誓いを立てるのだった、

白い野に行く、

魔理沙「霊夢どうしたんだ？考え込んで」

霊夢「私は正しい事したんだよね？」

魔理沙「レテイの事か？お前は正しいよ、奴が間違いなんだ」

霊夢「でも私は自分で言った命の意味、レテイもまた一つの命なんだ」

魔理沙「生きていれば必ず選択しなければならぬ時が来る、どちらを選んでも間違いの時はあるさだけどお前が選んだんだ」

霊夢「なんだか悟ってるじゃない」

魔理沙「やっと笑った、それで霊夢だ！」

霊夢「うん！行こう異変を止めるために」

森が深くなる、

霊夢「凄い木、何年生きてるだろ？」

大木を見上げぼうけている、

魔理沙「ほら、行くよ」

霊夢の手を引く、

霊夢「あれは何だろう？」

何かに気付く、

魔理沙「どこに行くんだ？」

手を払い、なにか見つけた地点へ走る、

魔理沙「子供かよ」

霊夢「人形？こんな所に何で」

人形に背を向け魔理沙を呼ぶ、

霊夢「魔理沙ー！こっち来て」

魔理沙「どうしたんだ霊夢……！？」

ひとりでに人形が浮き上がり霊夢に手を伸ばしている、

魔理沙「伏せろ！」

声に驚き思わずしゃがみ込む、

魔理沙は人形に魔弾を放つ、

魔弾は霊夢の頭上を通り人形を撃ち落とす、

霊夢「何すんのよ!」

突然の出来事に怒る、

魔理沙「悪い、悪い後ろに人形が、これは!」

霊夢「何?何?いつたい何なのよ?」

一人だけで納得する魔理沙に困惑する霊夢、

魔理沙が人形を確認する、

霊夢「どうしたのよ?」

魔理沙「間違いない、この人形は人形使いの物だ」

霊夢「だから？」

何が問題かを聞く、

魔理沙「人形使いは根暗が多い人形だけが友達って奴がな、そのくせプライドが高くてなその人形を壊しちゃった」

霊夢「・・・ヤバイじゃん！」

パキッ、

木の枝を踏み折る音がする、

????「ああ、私の人形が」

魔理沙「来たか」

霊夢「貴女は？」

???「私はアリス・マーガトロイド」

アリスは壊れた人形を抱き上げる、

アリス「お前達か？よくも私の家族を許さない」

霊夢「言った通りね！」

耳打ちに語りかける、

魔理沙「恐らく戦闘は避けられないな、私にやらして同じ魔法使いとして負けたくない」

霊夢「無理はしないでね」

アリスと対峙する魔理沙、

人形使い、アリス　マーガトロイド
七色の人形使い、元人間、

魔理沙「お前の人形を壊したのは私だ、悪いとは思っているけど許せないなら相手になる」

アリス「覚悟しろ！」

周りを人形が飛び交う、

魔理沙「相手に取って不足はない」

先に動いたのはアリス、

アリス「みんな行くよ」

人形が魔理沙へ飛ぶ、

それぞれの人形が個々に魔弾を放つ、

予測の効かない方向から飛ぶ魔弾を魔理沙は見事に避ける、

アリス「あれを避けるなんて」

魔理沙

（何だ体が軽い？自分の体じゃないみたいだ、人形に撃つた時も強く撃つつもりは無かったのに神様の置き土産ってか？粹なことしてくれるじゃん、これなら行ける！）

魔理沙は木に足を就き、反動を利用して飛ぶ、

アリス「早い、だけど」

魔理沙とアリスがすれ違う、

互いに魔弾を撃つ、

魔弾がぶつかり衝撃が拡がる、

魔理沙「私も行かせてもらおう」

（魔力の流れが解る今なら）

魔理沙が手を翳す、
かざ

アリスに向け地面から魔弾が放たれる、

アリス「遠隔魔道？」

とっさに人形で防ぐ、

魔理沙「惜しい、ダメか」

霊夢

（魔理沙ったらいつの間にあんな事出来るようになったのかしら）

まるでスタントマンの様に宙に舞い砲を避ける魔理沙、

空中で魔力を集め、空に魔力の球を浮かべる、

地に下りると同時に自らも魔弾を撃ちタイミングをずらし空の魔弾を放つ、

強く叫ぶ、

魔理沙「イケエー！」

空の魔弾に対応出来ない、直撃コース、

アリスの精神に反応したかどうかは判らない、

意思せず人形が守る、

アリス「？」

人形はその身を砕き主を守った

自信も命令外の行動に驚いた、

アリス「なんで？勝手に」

壊れた人形を抱き上げ、

しかし人形は形を無くし砕けた、

アリス「行かないで、ダメよ一緒に居るんだずっと」

人形に涙を流す、

アリス「なんで邪魔をするの？私はこの子達とすごしたいだけなのに」

黒い殺気が生まれる、

アリス「よくも」

魔理沙「え？」……「ウツ！」

人形が魔理沙の肩を切る、

魔理沙

（まったく見えなかった）

アリス「私の友達を」

アリスはでたらめに魔弾を何も考えずに辺りにばらまく、

魔理沙「無茶苦茶だ？完全に頭に來てる、こーなったら」

魔理沙はアリスに問い掛けた、

魔理沙「何故お前は一人を求めた？」

予期せぬ反応にアリスが止まる、

魔理沙「はじめから一人じゃ無かったはずだ」

否定し首を振る、

アリス「私は一人で生きてきたずっと」

強く動揺し、

魔理沙

(心を表しはじめたか？あと少しだ)

アリス「世界は私を否定する、だったら私は一人でいい」

アリス

(あんな思いはもう御免だ)

.....
.....

男「うわっ！アリスが来たぜ！また人形と喋ってる気持ち悪いー帰るぜ」

女「いつも人形と仲良くしてるアリスだもん、人形と遊んでれば」

幼いアリスは人見知りが強く他人と接する事が苦手で、

友達是人形だけだった、しかしそれゆえに周りから疎まれいつも一人だった、

幼い頃から強い魔の素養があった、

それが彼女を人から遠ざけ自らの力が人を傷つける事に怯え、一人で人形に囲まれた生活をおくった、

それでも良かった人形さえ居れば、

しかしいつも一人で居ることに、周りの皆はアリスを仲間の輪に引き入れた、

人形以外の友達を手に入れ幸せだった・・・だが！

彼女のことを良く思っていない者達が人形を隠した、

必死に探すがかし見つけることが出来ない、

人形は隠されてなどおらず隠したと嘘を言い彼らが持ち必死に探す姿を見て愉しみ、

そんな彼女に見せしめと彼らは人形をあえてアリスの目の前で壊す、

これみよがしに壊れた人形を彼女に投げ帰した、

人形の為に涙を流す姿を見て彼らは下卑た笑いを上げる、

感情が決壊し、

その時の記憶はない、死人こそ出なかったものが皆大怪我を負った人に魔の力を使ってしまう、

その一件以来、誰もがアリスを避けるようになった。初めに友達に引き入れた者も彼女を恐れ近付こうとはしなくなり逃げていく、

再び彼女は一人になった、

噂は噂を呼び関わろうとする人は消えていき、

次第に彼女を人と扱わなく無っていき、

そして決定着ける出来事が起きる、

一度仲間を手に入れたアリスに心の乾きを癒す術は無かった、

人との交流を求めた、

前に最も仲良くしてくれた子に喋りかける、

この子なら私をと願いを持って、

しかし願いは無情にも打ち砕かれた、

女の子「ヒッ！アリス、こっちに来るなこないで」

アリス「なんで？何でなの私たち友達だよね？」

女の子「来るなって言ってるでしょ、この化け物！！」

そう言い放つと脱兎の如く逃げていく、

、化け物 もはや誰もアリスを人と見ていない、

彼女の心に深く重い傷を残す、

アリスは人との交わりを止めた、

もう誰も傷付けたくない、傷付きたくない、他人も自分も、

魔理沙「じゃあ、お前は何から生まれたんだ？人からだろ！始めから一人の奴なんか居ない」

アリス「皆して私を否定するんだ、ぬくぬく生きてきたお前とは違う、親すら私に触れ合おうとはしなかった」

魔理沙「違う！皆人それぞれに辛い過去ぐらいあるさでもそれじゃ駄目なんだ」

アリス「私は一人あぶれ者だ人なんて居なくなればいい、この子達さえ居れば」

アリス

(世界は私を遠ざける、だったら一人でいい)

魔理沙「何が？何がお前をそうさせた」

アリス「黙れ！黙れ！何が解る世界は私を遠ざけた、こんな世界ならいらぬ！全部消えて無くなればいいんだ」

アリスの言葉に魔理沙がキレる、

魔理沙「お前に何があつたかは知らない世界が遠ざける？フザケルな！」

アリス「アンタなんかに！」

魔理沙「もつと外に目を向けるよ世界がだと？自分の殻に閉じこもつて目を背けてるだけの弱虫に世界が微笑むかよ！」

霊夢

(何？魔理沙が凄くカッコイイ)

アリス「アンタに何が解るのよ、存在すら否定された私の気持ちがない！」

魔理沙「自分だけが悲劇のヒロイン振りしやがって良いことも悪いことも全部ひっくるめて人生だろうが、悪いことだけ見て逃げたお前に世界を否定する資格はない」

魔理沙の言葉にアリスが錯乱し、

過去の記憶が苦しめ、

隙について魔理沙が霊夢に何かを投げる、

霊夢「イタツ！何よ一体！これは？………．．．ハァー！何言ってるんよ」

魔理沙は小石にメモを包んで投げ、

魔理沙「自分の殻も破れない奴に私は負けない、お前は過去にいじけながら一生人形と宜しくやつてるよ」

アリス「黙れー！ー！」

感情のまま魔理沙に砲を撃つ、

アリスの放つ魔弾を魔理沙は避けようとしな

魔理沙「ちよっ？何してんの」

懐に手を伸ばし短剣を手に掴みアリスは魔理沙へ走る、

魔理沙「霊夢！頼んだぜ」

魔理沙「過去に捕われるな、過去を断ち切れアリス！」

魔理沙は魔具を手に術を放つ、

魔理沙「喰らええー！恋符・『マスタースパーク』」

二人を包むように六形の魔法陣が地に現れる、

陣から光の柱が空へ伸びて光に飲み込まれ消えていく、

少しして光の柱が消え去、

アリスは気を失い倒れ、かろうじて魔理沙は意識があった、

霊夢が駆け寄る、

霊夢「自分ごと巻き込むなんてアンタいったい何考えてんのよ？」

説教に魔理沙が苦笑する、

魔理沙「ハハッ、これしか浮かばなかったからさ」

霊夢「もう、大事にはならなかったけどヒヤヒヤしたわよ」

魔理沙「アリス大丈夫かな？」

霊夢「大丈夫よ、きっと魔理沙の言葉はちゃんと届いてる」

霊夢は少し笑う、

アリスの意識が覚める、

アリス「ハッ、あいつは」

霊夢「やめなさい、傷に障るわ」

懐の短剣を探す、

魔理沙「動くな！」

アリスに霊刀を突き付ける、

霊夢「あ！その刀ないと思ったら？どさくさに紛れて何処に隠してたのよ、返さない高いんだからその刀」

魔理沙「巫女なんだからさ高いはないだろう？いいじゃんちょっと借りるだけだぜ、ちゃんと返すからさ」

霊夢「そう言っただけ私ん家からいろいろと物が消えてくんだけど」

溜め息を吐いて、

アリス「私の負けね？好きにしていいわ」

魔理沙「随分と勝手な事を言っただな」

アリス「私に何が出来ると?」

霊夢「いいからじっとしてなさい」

霊夢がなだめ、

アリス「ハッ、人形?」

二人との会話に次第にアリスに記憶が甦る、

アリスは見ていた人形が光の中に飲み込ま消えていく様を、

アリス「私の人形が?私の友達が?」

涙を流し嗚咽を上げる、

霊夢「ほら、泣かないで他の子は皆無事だから」

霊夢がアリスの人形を置くと、

アリス「え？なんで、あの時」

霊夢「私にね魔理沙がこんな物よこしたのよ」

霊夢がアリスにメモを見せる、

『霊夢、私の合図でアリスの人形に結界をかけてくれ』

霊夢「最初はなんて馬鹿な事って思ったけど」

アリス「なんで私の人形を私は敵なのに？」

魔理沙「アリス、お前にとって大事な友達をこれ以上傷付けるのは嫌だからな？」

アリス「私はあんなに酷いことしたのに」

魔理沙「良いつて事さ、お前はこれからなんだぜ胸張って生きろよ
私が言うのもなんだけどさアリスって凄く美人だしとってもカワイ
イぜ！だからさ」

アリス

(私をちゃんと人として正面から見すえてくれた)

魔理沙「じゃあなアリス、昨日じゃなくて明日をな」

アリス「待つて」

呼び止める、

魔理沙「ん？」

アリス「名前を覚えてもらっていいかしら？」

魔理沙「私は魔理沙、霧雨・魔理沙」

前に行く二人の背中を見つめりアリス、

アリス「霧雨・魔理沙」

内から沸き上がる温かい気持ちに包まれたアリスに新しい感情が目
覚めようとしていた、

魔理沙の歩く速度が少しずつ遅れはじめ、

魔理沙「やっぱり少し無茶し過ぎたかな？」

今まで黙ってきた霊夢がたまらず声を漏らす、

霊夢「やっぱりじゃないわよ！休むわよ？ほら傷見せて」

傷の手当てをしながら聞く、

霊夢「どうしてアリスにああ言ったの？」

魔理沙「人形使いはさ過去に辛い体験をしてきてる奴が多いんだ人の形を模して人に近く人ではない物、人形は決して自分を裏切らないだから得られない繋がりを人形に求めるんだ」

霊夢「可哀相な気がしてきたな？」

魔理沙「だから敢えて過去を思い出させて勝機を見付けるんだがアリスには立ち直って欲しかったからな、でもあいつなら大丈夫だろう」

霊夢「ま！話しはこれくらいにして休もう」

魔理沙「でも今回は少し危なかったけどな」

霊夢「もう止めてよ、心臓止まるから」

二人の笑い声が響いた、

マヨヒガの黒猫（前書き）

マヨヒガ（まよいが・迷い家）

東北・関東地方に伝わる、伝承、民話、怪談に属し、

人がいた形跡が見られるが村人が一人も居ない村や家などの事、
（家畜の世話、出来立ての食事など今の際まで人が居たような状態
だが村人が一人も居ない村）

村人の失踪には神隠し、天狗、妖怪、座敷童子などの言い伝えに伝
承され、

有名な物では現在の岩手県・遠野町（遠野市）に伝わる物（遠野物
語）が一般的である、

ちなみに遠野市では河童伝説も有名で河童の捕獲に一千万円の懸賞
金を賭けています、（これマジです！）

またマヨヒガの話は地域によって伝えが幸福、不幸話に分かれる、

マヨヒガの黒猫

魔理沙の傷の手当ても終わり体力の回復も済み活動を再開する、

森を抜けた二人は幻を見たように固まる、

雪に混じる桜、

遙か上空から降り注がれる淡い朱の花、

相対するはずのない存在が等しく同じ空に舞う、

霊夢「綺麗、正に幻想ね」

魔理沙「そつだな！ずっと見ていたい気に駆られるな」

感嘆の声が出る、

手を上に翳^{かざ}し桜を透かし空を見る、

霊夢「空が見えない？これだけ開けているのに」

一言では形容出来ない、雲などではない何か空を閉ざしている、

魔理沙「重い嫌な空だこんなにも綺麗なのにな」

少しの沈黙が流れた後、霊夢が口を開く、

霊夢「今は進もう」

雪は次第に止み桜だけが舞う空になる、

魔理沙「銀の世界に舞う桜か・ん？なあ霊夢あれって」

霊夢の肩を叩き方向を示す、

霊夢「あれは村？行ってみよう」

村の入口に差し掛かるが人の気配がしない、

魔理沙「何なんだ？此処は人っ子一人居ないのに何でこんな物が」

二人が見た村は村人が一人も居ない、だが生活感に溢れつい先程まで人が住んでいたかのような、

霊夢「まるでマヨヒガの村ね！」

魔理沙「マヨヒガ？何だそれ」

霊夢がマヨヒガの事を魔理沙に説明する、

(章冒頭文にて掲載)

霊夢「この異変で本当に妖怪や天狗にでも神隠しに逢った村かも」

魔理沙「それが当たってるなら最悪だな」

霊夢「もしかしたらまだ人が居るかもしれない？もっと探してみよう」

もう一度村の中を探した、

村の搜索を終え落ち合う、

霊夢「どっ？」

魔理沙「ダメだよっぱり誰もいない」

、カラシ

物陰から音がした、

霊夢「何？」

音の方向に行く、

何も居ない、

霊夢「たしかに聞こえのには？」

水瓶の裏からひよこひよここと一匹の猫が歩いて来る、

魔理沙「猫？さっきは見なかったけど」

霊夢「魔理沙、上！」

おひただ
夥しい猫が路地、屋根上、取り囲む様に並び全員の目が二人に集ま
る、

霊夢「なんて数これだけ揃うとちょっと怖いわね」

猫達の視線が二人から逸れ一点を見つめる、

その視線の先に二人も目を向ける、

モーゼの十戒の如く猫が道を開け、その向こうから一人が歩いて来る、

「???」ありがとう、皆もついいよ!」

この言葉を聞き猫達は散っていく、

「???」やあ、やあ、足止めて悪いね私の名は橙ちえんがない猫又ですまたは妖獣かな?なにせ久しぶりの客人なので」

ニツコリと笑う、

魔理沙「客人？」

橙「ええ！いやー退屈だったんすよ一人でやって来る人を脅かしたりして暇つぶしやってただけどねぱったり来ないもんだから遊んでくださいよ、楽しくさー」

霊夢「こんなんぱっかり？」

魔理沙「諦める霊夢、やるよ」

橙「退屈しないで済みそうです我が手に宿れ、いざけ赤鬼、青鬼」

橙の両手に青と赤の炎が灯る、

魔理沙「この威圧感？単なる妖獣って訳じゃないみたいだな」

橙が動く、

橙「唸れ、赤鬼！」

赤い炎が地を這い迫る、

霊夢「霊子結界」

霊夢が炎を止め、

橙の攻撃と同時に空に飛んだ魔理沙が降りてくる、

魔理沙「そのまま止めといてくれ」

橙「いなけ、青鬼！」

青色の炎で刀を防ぐ、

刀が弾かれる、

橙「いやーとてもお強い退屈だなんてとんでもない、お二人方にも楽しんでいただかないと」

全身をバネの様に弾ませ跳躍する、家並みの壁を足掛かりに目にも留まらぬ速さで動く、

魔理沙「ハヤツ！流石に猫だな」

橙「後ろ！いただき」

魔理沙「うお、危ね！」

間一髪で橙の攻撃を避けた魔理沙、空を切った橙の手が地を砕く、

橙「惜しい後もうちょい、じゃあもう少し早くしますか？」

霊夢「見えない」

魔理沙「こっ速いと狙いが付けられない」

橙「そんなに速く動いてるつもりは無いんだけどね？」

ギリギリまで引き付け橙の攻撃を避ける、

魔理沙「そこ！」

空振りした隙を突き魔理沙の刀が橙を切る、

魔理沙「取った…！？」

しかし魔理沙が切った物は残像だった、

橙「ハズレ！正解はこっち」

とっさに半身体をずらし直撃を避ける、

魔理沙「がつ！」

橙の攻撃に飛ばされる、その衝撃に壁を突き破り瓦礫に埋もれる、

魔理沙「うっ」

霊夢「半端じゃないわね」

（あの速さでは遠距離では当てられない近接では攪乱されてしまう
どうする？）

橙「言いませんでした？そんなに速く動いていませんよ」

橙は正面から霊夢に仕掛ける、速さに追いつけない辛うじて防げる

事が出来たが、

霊夢「く」

バランスを崩して倒れる、

橙「終わりだよ！」

橙の手が霊夢の頭に振り下ろされる、

橙「？」

だか橙は後ろへ跳ぶ、

橙が後ろへ跳んだ瞬間、地に数本のナイフが刺さる、

橙「誰だ？」

(周りには猫達の目がある私が気付かないなんて?)

????「全く、何をなさってるんですか？」

霊夢「あんたは？紅魔館の我が儘娘わがままんとこの咲夜」

咲夜「これはまた御丁寧な説明を、それはさておき先回お嬢様を止めていただきまして有り難うございました取りあえずは礼を申しておきます」

霊夢「何で咲夜が此処について、聞くのは野暮か？」

霊夢「有り難う助かったわ、奴は強い」

橙「っと？自己紹介が遅れました私は橙といます咲夜さん、貴女も私と遊んでくださいよ」

橙と霊夢とのびている魔理沙を見て一言、

咲夜「毎度貴女も面倒事が好きなようで」

霊夢「別に好きでやってないわよ」

橙「話しは終わりましたか？では始めましょうか」

咲夜「取りあえず黙らせましょう」

霊夢「その意見には賛成だ」

咲夜「猫なら冬なんだから丸くなってなさいよ」

橙「猫だからって勝手なイメージ付けけないですよ」

霊夢「猫がよく言う」

橙「イラッと来たね」

霊夢が咲夜のサーベルに気付く、

霊夢「あれ、咲夜そんな剣持ってたの？」

咲夜「これは大事な友人の形見ですとても大事な」

霊夢「そう、深くは聞かないわ」

橙「無視しないでよ人をさ」

霊夢「人って、あんだ猫でしょうが」

橙「まあーそうとも言っ、お話しはこれくらいにして行きますよ」

、ガシャーン

魔理沙「ほっぽにするな！」

のびていた魔理沙が瓦礫から出て来た、

橙「あれ起きました？じゃあ始めましょう」

咲夜「三対一では、ちょっと気が引けますが？」

橙「構わないよ何人でもね」

咲夜を加えて改めて戦闘が始まる、

橙「とは言ったが流石に三人は骨が折れるな」

(特にあのお姉さんは出で立ちが違うな)

霊夢「魔理沙、大丈夫なの？」

魔理沙「何とかかな？骨をやってない」

咲夜「そこまでですお二人共、来ますよ」

先程と同じ様に橙は体を丸める、

霊夢「来なさい」

魔理沙「来い」

壁を足掛かりに高速移動する、

咲夜「ただ速いだけで止められると思うな」

咲夜のサーベルが橙を捕らえる、

橙は慌てて剣を両手で防いだ、

橙「人が私の速さに反応出来るなんて？」

咲夜「悪いけど普通じゃ無いんで」

橙「人間にも手練れは居るか」

咲夜の剣閃を受け流す、身を翻しひるがえ橙は後方に下がる、

橙「出し惜しみは良くないな？本気で行くよ」

橙が土煙に姿が消える、

霊夢「消え？」

咲夜「危ない！」

咲夜が霊夢を突き倒す、咲夜のおかげで橙の攻撃は霊夢に届かなかった、

橙「この速さに目が追いつくなんて本当に人間か？」

咲夜の能力の高さに感嘆の声を上げる、

魔理沙「言ったでしょうが、ほっぽにするなって」

僅かに動きの止まった橙に魔理沙が魔弾を撃つ、

橙は魔弾を避け、撃った反動に後ろにのけ反る魔理沙にせまる、

橙「今度は避けさせない」

魔理沙が笑う、

魔理沙「避けるつもりは無い」

地面に刺さるナイフを足で器用に持ち上げ橙へ蹴り飛ばす向かい来るナイフに一瞬だが橙の足が止まる、

魔理沙「そっくり返してやる今度は避けさせないぜ！」

魔理沙は魔力を手に集め橙にその拳をぶつける、

橙「ギャッ！」

今度は橙が壁を突き破り瓦礫に埋もれる、

魔理沙「立ちなさい」

橙「ハハ、油断しましたよこんな奇策は二度目はないよ」

瓦礫を押しつけてくる橙、

魔理沙「上等！」

霊夢「続くよ！ここで畳み掛ける」

橙「マズイさすがに今は」

瞬身に身を隠す、

咲夜「逃がしません」

橙の速さに反応出来る咲夜が行く手を阻む、

橙「どけえ、小娘が！」

咲夜「？」

橙の手が咲夜を貫く、

橙「まず一人」

霊夢「咲夜！」

咲夜「幻影ですよ？貴女が貫いたのは」

声とともに迫りくる刃、

真横に立つ咲夜の剣を上には跳び逃げる、

魔理沙「空で身動きは取れないよね」

橙「舐めるな！弾ける赤鬼」

赤い炎を爆散させ魔理沙を弾く、

橙「貫いた確かな感触があった、質量を持つ幻影だと？」

咲夜

（ベル、貴女が私に託してくれた御印みしるしの力を使わせて貰う）

咲夜の耳に光る黒色のピアス、

ベルが散り際に遺したものの、

ベル「私の力を貴女にお貸ししましょう進むべき道を切り開くために」

ベルが塵と消え、咲夜の耳にピアスが遺されていた、

橙「私が人間に遅れを取るなど幻影がなんだ全て叩き潰せばいいことだ」

咲夜が作り出す幻を薙ぎ払う橙、

橙の動きが鈍くなる、

橙「何だ？体が重い？」

咲夜「質量を持つと言った筈です貴女は結界の中だ」

幻影の質量が橙の体に少しずつ絡み付き動きを封じ込んだ、

動けなくなった橙に近づく三人、

魔理沙「終わりだな」

咲夜「諦めてください」

橙「フン甘いな両手さえ動けば、いざけ赤鬼、青鬼」

両手の拳に灯る青と赤の炎を強く打ち合わせる、

橙は自分ごと三人を炎の爆散に巻き込む、

吹き飛ぶ先に水瓶があり魔理沙は水浸しになる、

橙は魔理沙に狙いを付けていたが何故かその動きがぎこちなくなる、

千載せんざいのチャンスにも係わらず橙は攻撃を行わなかった、

霊夢「魔理沙、貴女は何をしたの？」

魔理沙「私は何もしてないぜ」

びしょ濡れになった魔理沙を見て、

霊夢「水？もしかしたらイケるかも」

魔理沙「何する気だ霊夢？」

霊夢「私に考えがある推測が正しければ」

霊夢は指先に霊力を集め空中に印を描く、

霊夢「幸い此処に水は事欠かないわ」

霊夢を中心に雪が溶けていく、

ゝガキン

咲夜が打ち合いに負けてこちらに飛んできた、

咲夜「油断した」

肩口から血が滲にじんでいる、

霊夢「私が行く」

怒りに毛を逆立てている橙へ向かう、

霊夢「もう見切ったわ貴女に勝ち目はない」

橙「ほざくな、もういい死ね」

霊夢「水刃」

霊夢がそう唱えると水の刃が飛ぶ、

橙「な！水？」

橙は体がビクッと硬直してしまい思い通りに動けない、

魔理沙「おいおい！そんなこと出来たのか」

霊夢「巫女ですもの陰陽術ぐらい扱えるわ、雪が辺り一面にあるから水に満ちていると言っているいい」

陰陽術、自然に根差す循環の力を扱う術、

?木?

水 火

? ?

金?土

図のように五つ属性が円を描く、

霊夢の周りを水が舞う、雪を溶かしながら水を取り込む、

魔理沙「何で水なんだ猫だからってか？」

霊夢「そんな訳ないでしょう、さっき水に濡れた魔理沙に攻撃を躊躇^たっていたからピンと来たんだ水に弱いんじゃないかってね」

橙「ふざけるな」

橙が飛び掛かる霊夢は半歩下がり指先で印字を切る、

霊夢「言ったよ水に満ちていると」

飛び掛かる橙を包むように水が迫る橙は球体の水に閉じ込められた、

霊夢「終わりよ、水憐三段！」

水を纏う剣の高速の三段打ちが決まる橙は決定打を受けた、

橙「まさか私が？これ以上は危険か逃げるしかないか、しかし当初の目的は果たした」

霊夢「当初の目的？貴女いったい？こら待ちなさい」

土煙に橙は消えた、

霊夢「偶然ではない明らかに私達を狙っていた、何故？」

この異変に大きい流れを感じたのだった

霊夢「この異変、意図的に起きているのは確かね私達を知る誰かが」

魔理沙「思った以上に根が深いのかもしれないな」

橙が残した言葉の真意を探る、

咲夜「私はどうでもいいわ館のためにこの馬鹿げた異変を起こした者を叩き伏せるだけです」

霊夢「最後の言葉を聞く限りはこれからの道は罫だよそれでも行く？」

魔理沙「聞くか？」

咲夜「右に同じ」

霊夢「物好きが多くて困るわ私の周りには八割ぐらいが厄介事で出来てるからね」

魔理沙「行こっか」

一行は進む桜の道を、

狂った春（前書き）

陰陽術についての補則、

図にて属性の回りわ説明しましたが、その詳細、

木、

木は身を燃やし火を生む、

火、

木を燃やした火は土を生む、

土、

土は地の圧にて金属を生む、

金、

金属はその表面に水滴をつけ雫となり水を生む、

水、

水は大地を育み木を生む、

狂った春

少しずつ空気の質が変わりはじめる、

魔理沙「何だか暖かくなってきたよな」

空に舞う桜が量を増す、

霊夢「でも春って感じでわないわ重くて纏わり付いてくるなんて嫌な空に空気だ」

魔理沙が空を見上げながら歩く、

魔理沙「あれは？」

霊夢「ん！どうしたのよ魔理沙？」

上を眺めている魔理沙に聞く、

魔理沙「いや、向こうの空に何か飛んでたからさ」

三人が空を見上げる、

咲夜「じっとするのも何ですし行ってみましょう」

霊夢「そうね」

魔理沙が見たという何かを確かめに向かう、

霊夢「木で空が見にくいな上に出よう」

三人は森の上に出て辺りを見渡す、

遠くに白い物が木々に対し何かをしている、

霊夢「あれは何かしら、妖精？」

咲夜「あれは、リリー・ホワイト？」

霊夢「知ってるの？」

咲夜「ええ、前にお嬢様が幻想郷の春を紅魔館に一番に呼ぶと私に捕獲を命じられた事がありました」

リリー・ホワイトロック

春妖精、春の存在そのもの幻想郷に春を呼ぶための妖精、冬を眠らせ春を呼び起こす者、

魔理沙「あいつ様がおかしいぜ？苦しんでるみたいだ」

咲夜「そうでしょうね季節は春を迎えるべき時期に彼女の力を持ってしても春を呼べない、それは彼女の存在の否定になる」

魔理沙「助けてやりたいどうにかならないかな」

霊夢「もう、まったく私達はなんでこんなにもタイミングが悪いのかしら彼女はもう限界よ来るわ！」

リリー「アアーーーーー！」

けたたましい雄叫びが響く、

霊夢「悲しみに満ちたなんて悲痛な叫び」

今のリリーに理性はない春を呼び命を育む彼女は破壊の衝動に駆られている、

リリー「ウウアーーーー」

咲夜「哀れな言葉すら失いましたか？しかし立ち向かうなら」

霊夢「ダメよ！彼女を失う訳にはいかない」

魔理沙「そんなこと言ってもよどうすんだ？」

リリーの攻撃を防ぐしかない、

咲夜「霊夢、方法は無いですか？」

霊夢「リリーを世界と隔絶させる、そうすれば今の異変による干渉を受けないはず」

魔理沙「世界の干渉から隔絶させるなんて無理だ」

霊夢「できるわ今の私なら」

咲夜「何を？」

咲夜が少し戸惑う、

魔理沙「駄目だ霊夢、使っちゃいけない」

（神の力を使う気か？そんなことしたらお前が）

霊夢「その時がきたら迷わず使っと」

リリーが危機を感じ取ったか霊夢へ迫撃する、

魔理沙「させないぜ」

咲夜「大人しくなさって下さい」

二人がリリーの攻撃を防ぎ足止めする、

霊夢「二人ともそのまま少しだけ時間を稼いで欲しい」

霊夢が神力を練る、

霊夢

(体が軋む少し引き出すだけでこの反動)

リリー「ウーアーアーアー！」

自らを中心に放射状に力を爆発させる、

魔理沙「うわ」

咲夜「キャッ！」

二人を弾き飛ばしリリーが再び霊夢へ飛ぶ、

リリーの手が霊夢の首にかかる、

霊夢「二人共ありがとう」

見えない壁に弾かれびっくりしている、

リリー「?」

霊夢「来なさい? 楽にしてあげるから」

魔理沙

(その力を使えばお前は)

リリーはもう一度霊夢へ飛ぶ、

霊夢「正気に戻りなさい」

リリーに手を向ける見えない力が拘束し自由を奪う、

霊夢「夢符『封魔陣』」

霊夢はリリーの胸に手を宛あてがい放たれた光の輪が包み込む、

リリー「ぐ、あぁー」

リリーの顔が和らぐ苦しむ様子は見られない、

魔理沙「成功だ」

咲夜「とりあえずは上手くいったようですね」

しかしリリーを世界から隔絶した訳ではない本当に隔絶してしまえば元に戻ってもリリーは春を呼べない、

正確にはリリーの肉体の中に春を取り戻しさせたそうすることで少

なくとも暴走は抑えられる、

神力の反動が霊夢は右腕をギュツと握る、

その霊夢の仕草を魔理沙は見逃さなかった、

魔理沙「霊夢お願いだ神力を使わないでくれ私はお前が死ぬなんて嫌だ」

霊夢「でもやらなければ、いつか誰かがやってくれる？駄目なのよ自らが動かない限りそんな、いつかは絶対に来ない私は博麗の巫女だもの」

魔理沙「もう何も言わない、ただ私は霊夢を死なせない」

幻楼に桜舞う幽界、死の世界に居を構る死人の館白玉楼、

妖夢「幽々子様、順調に事は進んでいます時間経過から見ても春妖精が活動を停止する頃です」

幽々子「そうね誰にも邪魔させないわ春妖精が消えれば最後の要因も無くなる」

紫「そうでもないわよ？動いているわ博麗の巫女があの子は強いよ特に人のために力を使う時は現にうちの子を退けたんですから」

幽々子「そうだとしても私の行く手を阻むなら容赦しない」

紫「ならいいわ私は貴女の味方よ私の友達ですもの」

幽々子「怖い友達なこと」

紫「そう、私は怖いの」

幽々子「フフ、あてにしてるわ」

幻想、楼閣の結界（前書き）

以前に東方の一般同人誌でとてもいい話しを見つけたので、

少しもじって載せてみようと思いました、

幻想、楼閣の結界

空から降る桜の花が量を増す、

霊夢

(この空を見ると心が騒ぐ、恐怖すら覚える)

魔理沙「気づいてるか？」

咲夜「ええ！まったく」

霊夢「後顧の憂いを断ち切りますか」

静まり返る森に足音が伝わる、

咲夜「大きい」

木々を押し倒し姿を現したそれは、

魔理沙「何だよ！アレ？」

身の丈は十メートル余り胴回りも大木の如く開いた口は過過まがまがしくこの世の生き物とは思えぬ物、

怪物が歩いた場所が腐食している、

霊夢

(この感じ前にも覚えが、桜の花を触ろうとした時と同じ魂を引きずられるような？くそ！最悪の予感が当たった)

霊夢「魔理沙、私達勘違いしていた」

魔理沙「勘違い？」

会話を遮るように魔獣が襲い掛かる、

咲夜「デカブツが！」

魔獣の横に立つ咲夜が横腹を切り上げる、

魔獣「ギャー——！」

魔獣の尾が咲夜を打つ、

咲夜「かはっ！」

雪の山に咲夜が突っ込む、

魔理沙「無事か？」

咲夜「下が雪で助かりました」

魔理沙「何だよコイツは」

咲夜「私も何か聞きたいですね」

咲夜に向かい来る魔獣に気弾を撃ち込み牽制する、

霊夢「話しは後！潰すよこの化け物を」

魔理沙「異議なし！」

咲夜「ええ」

霊夢「さあーこっちよーいらっしやい」

魔獣が霊夢を一飲みにと大口を開け、

魔理沙「隙だらけだぜ」

魔理沙と咲夜が魔獣の脇に立ち魔獣の両後ろ足を切る、

魔獣「ガア　？」

足の支えを無くし地に伏せる魔獣、

霊夢「終わりよ！ハア　」

霊夢の剣が魔獣の頭部を貫く、

魔獣は身を震わせ息絶えた、

魔理沙「コイツ美味しいとこ持ってきやがったな」

咲夜「まったくですわ！」

霊夢「いいじゃない、それくらい」

咲夜「それはさておき霊夢、貴女の先程の言葉の意味を教えてくださいませんか？」

魔理沙「そうだぜ！勘違いってなんだよ？」

一息呼吸を整えて霊夢が話す、

霊夢「あくまでも私の主観だからね、さっきの化け物だけど昔に文^{ぶん}献^{けん}で読んだことが有る、あれは冥府^{めいふ}最下層に住む罪人の死肉を貪^{むさぼ}る魔獣」

魔理沙「冥府だって」

咲夜「いい話しではないですね」

霊夢「橙が居た村を覚えてる神隠しみたいに人が居なかったよね？
違うの消えたのは私達よ」

魔理沙「私にも解るように言ってくれ」

話しについて行けない、

ゆっくりと説明を始める、

霊夢「本来ならば冥界の住民に現世の門をくぐることは出来ない
それは私達も同じ」

魔理沙「それで？」

霊夢「亡者には生者を認識出来ない又同じく生者には亡者を認識出
来ない、だけど私達は魔獣を目にし魔獣も私達を見ていた扉が開き
現世に冥府が流れ込んでいる生きている私達でも冥界の門をくぐれ
ば生者としての括りが消えさるわ、同様にあちらにも同じ事が言え

世界の区切りなくなれば地獄絵図よ」

咲夜「なんてこと」

霊夢「冥府の門が完全に開けば想像もつかないわ」

魔理沙「そんな大事態だなんて」

事の重大さに知る、

霊夢「全部仮説の域をでていないけど」

仮説に穴がないか探る、しかし今の所に穴が見当たらない、

しかし立ち止まってもらえない進むしかない、

霊夢「止まって」

咲夜「次は何ですか？」

霊夢「そうじゃない！進む事に意味がないの？」

魔理沙「何言ってるんだよ？意味がないんで」

呆れて魔理沙が突っ掛かる、

霊夢「話しの腰を折らないの幻視の結界が張ってあるのよ」

咲夜「幻視ですか？」

霊夢は刀を抜く、

霊夢「幻視により私達は同じ空間をさ迷い続けるところだったわ」

その場で刀を振る、

結界が破れ空が開け、

霊夢「桜はこの上から振る行く空に」

咲夜「空が見えたこれが今の空？」

負の念がどす黒く渦巻いている、

霊夢「ここからは死人に流されては行けない魂を縛られ死人に足を引っ張られるわよ？」

紫「まさか！冥府の魔獣に正面から本当に強くなっただわね霊夢」

幽々子「どうしたの？何か思うことがあって！」

紫「なんでもないわ」

××「紫様！報告が」

紫「何？××そんなに急いで」

××「幻視の結界が破られました」

紫「本当に冥界に乗り込む気なのね」

幽々子「貴女の大事な巫女が動いているわね悪いけど私は」

紫「大丈夫言っただでしょ私は幽々子の味方よ」

幽々子「私の我が儘わがままに付き合わせてしまっ？」

幾人の思いを知ってか知らずか花を咲かせる西行妖を見上げた、

三人が空へ上がる、

高度が増すにつれ桜が実体を持ち始める、

霊夢が桜の花びらを掴む、

霊夢「冥界の桜に触れる事が出来た、いよいよ私達も亡者の仲間入りね」

魔理沙「実感ないけどな」

上から冥界の霊が生を持つ霊夢達に群がる、

死人において生者は闇の中に置かれた松明たいまつに近い此処こゝぞとばかりに群がるのだ、

魔理沙「私の体は私のもんだお前らにやるかよ」

咲夜「人気者も辛いですわね」

霊夢「構ってる暇はないわ強行突破よ！」

正面にいる霊のみ薙ぎ払い進む、

群れを抜けると霊は固まって三人へ向かう、

魔理沙「一箇所に集まってくれて助かったぜ纏めて吹き飛ばしてやる」

マスタースパークの光が霊を掻き消す、

咲夜「お見事！」

魔理沙「行くぜ」

三人が空を上り高度が雲の高さを越える、

霊夢「星がこんなにも近い」

魔理沙「冥界の空か？月に手が届きそうだ」

咲夜「感慨に耽^{ひげ}ってる暇はありませんよ」

星と月の光に照らされ浮かび上がる三人は端から見れば異様かもしれないがそれはとても美しく見えた、

霊夢「そつでもないみたいよ向こうに強い力を感じるわ私達を待ってるみたい」

咲夜が突然に下へ落ちる、

とっさに魔理沙が手を掴む、

魔理沙「バカ！なにしてる」

咲夜「風が読めない？違うわ風が無い」

咲夜は風の流れを読み気流を操り空を飛ぶため風なしに飛ぶ事は困難である、

魔理沙「ほら私の後に」

魔理沙の箒ほうにのる咲夜、

咲夜「すみません」

霊夢「風が無くなるなんて」

風の音が消え無音の空に音が聞こえる、

少しづつ音が大きくなるそれが楽器による演奏の音色と解るまでそのはかからなかった、

音を頼りに道に行く、

霊夢「綺麗な音でも悲しい音」

魔理沙「そういえば桜の花びらが舞ってない」

咲夜「言われて見ればそうですね」

その理由はすぐにわかった、

空を覆い尽くす桜の花で形作れた一面桜色の壁、

その中央に見える演奏をする三つの人影、

演奏が終わり月明かりが顔を浮かばせる、

咲夜「貴女達はプリズムリバー？」

霊夢「知り合いなの？」

咲夜「音楽家です一度お嬢様が主催した宴にお呼びしましてその一件以来ですが」

????「お久しぶりですね咲夜さん、お二人には初対面ですから自己紹介を私はルナサ・プリズムリバー、三姉妹の長女そして楽団の団長をしています左が次女メルラン、右が三女リリカです」

メルラン「メルラン・プリズムリバーです私はトランペットを扱っています」

リリカ「リリカ・プリズムリバーですキーボードを担当している」

ルナサ「そして私はバイオリンの担当を」

ひとしきりの紹介が終わる、

プリズムリバー三姉妹、
ポルターガイスト
騒霊

咲夜「ただ演奏をしに来たという訳ではないようですね」

ルナサ「お待ちして下りました巫女様」

霊夢「私達が来ること分かってたみたいね」

ルナサ「ええ！だからこそ通すわけには行かない」

魔理沙「何たってそんなこと？」

霊夢「早くしないと取り返しの付かない事になるかもしれないのよ」

ルナサ「冥界の門ですか？私達はその門を開かせるために此処にいる」

メルラン「私達の目的のために門が開かなければ」

霊夢「お願い通して」

リリカ「なら、止めて見せる」

ルナサ
メルラン「我らの音を聞け」
リリカ

魔理沙「咲夜が動けないんじゃ三対二だ分が悪いな」

咲夜「音と言いましたね？音は空気の振動ならその振動で起こる僅かな気流それだけあれば十分だ私は飛べる」

音に乗り咲夜が飛ぶ、

リリカ「私達の音に？だからなんだ私は負けられない」

霊夢「貴女達の望みは何？」

ルナサ「我らが願い解つてくれとは言わない」

魔理沙「願いつて何だよ！何故冥界の門を開く開く必要があるんだ」

メルラン「逢いたいただけなのよ次はいつか分からないこの機会を逃したら私達は」

ルナサ「レイラに！」

プリズムリバー三姉妹にはレイラという四人目の末妹がいた、

少し前、

白玉楼の当主、

西行寺 幽々子が異変を起こす前のお話し、

冥界の宴の席に幽々子は必ずプリズムリバーを呼ぶ、

妖夢がふと気付いた疑問を幽々子に聞いた、

妖夢「幽々子様、少しいいですか？」

幽々子「いいけど何？」

妖夢「プリズムリバーの事ですが」

少しだけ幽々子の顔が真面目になる、

妖夢「彼女達が演奏するの全てがコーラスを主調とする曲ですよね？カルテット（四重奏）なら分かりますがトリオ（三重奏）の彼女らが演奏するのは何故ですか？」

幽々子「それはね元々彼女達がコーラスが主のカルテットだったからよ」

妖夢「四人目は何処に霊族でなかったのですか？」

縁側えんがわに座していた幽々子が立ち上がり居間へ歩いていく、

幽々子「レイラはね、人間だったのよ」

幽々子はレイラ・プリズムリバーについて語り始めた、

幽々子「プリズムリバー家は四姉妹を囲む仲の良い家族だったわ」

妖夢「それで、何が？」

幽々子「慌てないの」

お茶を手にまた話しをする、

幽々子「プリズムリバー家は裕福ではなかったけど音楽家として高い名声を持っていたわ、だけど旅の行商から魔具を買うのそれが始まり」

.....

魔具の力は当主に富をもたらす、

講演は常に大盛況を納めた、その力に魅了され魔具に次々と手を出していくどれほど危険な物と知らず、

当主は呪具にまで手を出した当然力なき当主に呪いを抑える事が出来ようもなく、

終には終焉を迎える、

一家を引き裂いた呪いは互いの存在を認知出来なくさせ、例え傍に居ても触れる事も見る事も出来なくさせた、

もう二度と家族は顔を合わせれない、

四姉妹の中でもレイラは人だが類い稀なる力を有していた、

それゆえに呪いの発動元になった、

呪いの力はレイラを人の枠から逸脱させる、

一人生き続ける寂しさに耐え兼ね、三体の騒霊を創りだした、

ルナサ、メルラン、リリカ、

姉の名をした騒霊に失ってしまった家族への繋がりを求め、

四姉妹は音楽家として活動を始める、

しかし騒霊だからと人々は忌み嫌い認めなかった、

それでも真摯に音を奏でる彼女らの姿に否定する声は霞んでいく、

四姉妹の演奏は有名になった、

幽霊楽団と通り名までつくように、

どれほどの力を持つのがレイラは人間であり時間の枷がついて回る呪具の魔力を命に変え生き長らえようといずれ限界は来る、

レイラ自身その事に気付いている、

この頃からレイラはコーラスを歌う、

刻み付けるために三人の姉に自らの声を証を、

レイラ「ルナサ姉さんは今日は何を使うの？」

ルナサ「私は弦楽器が好きなのよね」

メルラン「バイオリンにすれば？」

ルナサ「良いかも！じゃあメルランとリリカは？」

メルラン「私はトランペットだよ今まで通りにね」

リリカ「これからはキーボードさスタイリッシュだろ！」

ルナサ「レイラはボーカルだろ花形だからな私達幽霊楽団のな」

レイラ「うん！」

(この時間も間もなく終わる私の命持って欲しい願わくば四人で出来る最後の演奏までは)

そしてその日はやって来た四姉妹での最後の演奏の日、

レイラは力の限りに歌った、

ルナサ「大成功だよレイラのおかげだ」

リリカ「一緒に演奏した私達も感動したもんな」

メルラン「これからも頼むよレイラ」

レイラ「ありがとう姉さん」

(よく持ってくれた私の命！もう心残りはない)

四姉妹の館、レイラにとって最後の夜、

レイラ「私は姉さん達がいて本当によかった」

ルナサ「何レイラ？改まって」

レイラ「ルナサ姉さんはいつも優しく、メルラン姉さんは活発で皆を引っ張ってくれる、リリカ姉さんは少しだけ強情な所が在るけれどいつも私の事を気にかけてくれる優しい人」

リリカ「何だよ？急に」

レイラの流した涙に少し戸惑う三人、

レイラ「姉さん達にはこれからも音楽を続けて欲しいそしたら姉さん達は騒霊なんかじゃない！立派な立派な音楽家なんだから」

ルナサ「続けるさ約束だ」

メルラン「止めるもんかよ」

リリカ「私達の音が幻想郷を席巻するんだからな」

レイラ「ありがとう」

その日、レイラ・プリズムリバーは死んだ、

朝レイラは変わり果てた姿に変わっていた、

魔力により延命された肉体に本来の時間が一気に降り懸かる、

リリカ「なんで？勝手に行っちゃうの私達を創りだしたのに」

ルナサ「レイラは人間だったこの日が来る事は覚悟していた」

リリカ「だからって居なくなっただんどぞ・・・！？」

ルナサの目にも涙が溢れんばかりに流れていた、

メルラン「レイラの言葉をあいつは私達に存在する意味を残してく

れた」

ルナサ「歌い続けるんだ！いつか戻って来るレイラが迷わぬよう」

メルラン「幽霊楽団は永遠にカルテットだから」

.....

妖夢「そんな！では幽々子様はレイラをむざむざ輪廻に還したので
すか？」

幽々子「レイラの魂は莫大な力を持ってしまった、その魂を留めれば世界のバランスが崩れレイラ一人のために何百人の人が死ぬ事になるよ？」

妖夢「でも」

幽々子「レイラの魂は存在の消滅こそ免れたけど輪廻の輪に還るに

は長い時間が必要、それに彼女のために輪に還らず待ち続けた者達が死する事で呪いから解放された本当の家族が」

妖夢「私には分かりません！」

幽々子「今はそれでいいわ、いつか貴女にも分かる日が来る死人の門戸を司る者の役目を」

お茶が無くなり湯を足しに行く幽々子は戻って来てまたお茶を注ぐ

幽々子「創り出された存在であるが故に不安定でね確固たる意思を持たねばいずれ消滅してしまう、レイラがいつか帰るその日まで強い目的は彼女達の生きる理由になる」

妖夢「それが幽々子様の本音ですか？」

幽々子「さあそれは？この話しはこれでオシマイ！そうだ妖夢、あつ熱かん爛ある？そうそう注ぎ口は二個ね」

妖夢「まだ有りますが、お持ちしますか？」

幽々子「よろしくね」

幽々子は妖夢から爛と猪口ちほこを受け取り猪口に酒を注ぐ、幽々子「いつかこうして飲み交わす日が来ると良いわねレイラ、貴女を待っているわ？」

夜月を背に一人酒を酌み交わす幽々子だった、

ルナサ「分かって貰おうとは思っていない」

霊夢「レイラとは誰なの？」

ルナサ「大事な、大事な妹だ私達に道を示して騒霊と忌み嫌れた私達を導いてくれた」

メルラン「妹に逢いたいと思う事がそんなに悪いのか？ただ礼を言
いたいただけなのに、冥界が開けば逢えるかもしれない」

魔理沙「そのために世界がどうなっても良いのか？」

リリカ「間違いだなんて始めから知っている、私達は歌い続けるい
つの日か戻って来るレイラが迷わぬよう、でも逢えるなら逢いたい
んだ」

ルナサ「だから通さない！通せない！負けられない！！音の海に沈
め博麗の巫女よ」

霊夢「音の海よく言った物ね、近付く事も出来ない」

????（私を呼んで）

霊夢「誰？」

??? (レイラです、私のために世界を犠牲になんて許されない、
お願い私を呼んで下さい)

咲夜「霊夢、何ぼーっとしてるんですか？死にますよ」

霊夢「二人共、私にはやることがある」

魔理沙「何をする気だよ？」

霊夢「いいから！お願い、冥界が開きかけている今なら私でも呼べる」

霊夢「私の体を貸してやる、来いレイラ」

霊夢はその身にレイラの魂を降ろす、

プリズムリバーが創る音の壁に霊夢が歩いていく、

魔理沙「バカ、死ぬぞ」

霊夢「大丈夫、信じて」

音の壁が道を開ける、

ルナサ「馬鹿な？ 私達の音を操るなんて、私達姉妹以外に存在するはずが！ まさか？」

霊夢「我が身に宿る心の声を聞きなさい」

メルラン「レイラなのか？」

霊夢

(レイラ、私の体の全てを貸してあげるわ思いのままに伝えなさい)

降霊術を行う場合は必ず肉体の権限を自らが握る必要がある。霊に権限を与えた時に霊が権限を返さなければ肉体を乗っ取られる可能性があるからだが、

この時、霊夢はレイラに全ての権限を明け渡していた、何故か？レイラを信じていたから、

霊夢の意識の表層にレイラが現れはじめた、

魔理沙が不思議の物を見たかのように目を擦る、

魔理沙「あれ霊夢だよな？」

咲夜も同じ様に感じていた、

一時その場から霊夢の姿が無くなり目に映る姿がレイラに見えた、

視覚情報を誤認させるほどの強い思い、

それは姉妹にも言えた事、

ルナサ「レイラ？本当にレイラなのか？」

レイラ（霊夢）「そうだよ巫女の体を借りて立っている」

ルナサ「逢いたかつたずっとお礼が言いたくて」

レイラ（霊夢）「もう止めよう？こんな事は」

リリカ「でも！私達は」

レイラ（霊夢）「それが世界を破壊する理由には成らない」

リリカ「逢いたくて仕方なくて気持ちを抑えられなかった」

レイラ（霊夢）「私は姉さん達の下へ還る何をしてでも還って見せる！今のままでは姉さん達はただの化け物に成り果てるだけだ！違うでしょ私達は幽霊楽団でしょ！」

この言葉に三人の感情が我に帰る、

ルナサ「化け物か？馬鹿だな私達は音楽家として失格だよな」

レイラ（霊夢）「私達には1000や10000の言葉は必要ない音を奏でるだけでいい！上手くいかなくて外れたっていいじゃない私の音を声を歌を刻み付けてほしい」

レイラ（霊夢）「私が輪廻に戻るにはもう少し時間がかかるけど待っていてほしい」

ルナサ「分かったわ私達は音を奏で続けるよレイラが戻ってくる日まで貴女が迷わぬようにずっと」

レイラ（霊夢）「うん！だから歌おつずっと姉さん達と歌いたかった」

ルナサ「嗚呼、歌おつこの空にレイラの声を響かせるんだ」

メルラン「観客は二人か？でも最高の講演にしてみせる」

リリカ「二人？馬鹿を言わないでよ観客はこの幻想郷の全てだ！」

何十年か？四姉妹が揃つての演奏、

二人の目に自然と涙が溢れて、

魔理沙「何で涙が止まらないんだろう？」

咲夜「綺麗だ優しい音」

物悲しげな哀の音は、

和に満ちた愛の音に、

レイラの歌声に行く手を阻む楼閣の結界は砕けていった、

四姉妹の演奏が終わる、

レイラは霊夢から離れ、空へ還って行った、

ルナサ「済まなかった悲しみに溺れ物事の視野を失っていました」

メルラン「ありがと目覚ましてくれて世界が壊れたら音楽も何も無くなっていたに」

リリカ「どうか宴の席には私達を呼んで下さい？」

霊夢「そうさせて貰うわ」

ルナサ「気お付けて下さい！これより先は現世を抜け本当の冥界になります御武運を」

霊霄殿、死に人の階段（前書き）

れいしょうでん
霊霄殿

古い文献、物語りに度々登場する建物、

空の遙か上に存在すると言われ、

西遊記では神の御殿と書かれているが、違う話だと冥府の門、悪
霊の館など文献によって様々に分かれる、

霊言殿、死に人の階段

楼閣の結界を抜け空を目差す、

霊夢「ちよつと待って」

魔理沙「何だよ？」

霊夢が手を伸ばすと指先から何も無いはずの場所に波紋が広がる、

霊夢「冥界の門！この門をくぐれば冥界よ引き返すなら今これが最後のチャンスよ此処から先戻って来れる保証はないわ」

魔理沙「覚悟も無しに来やしないさ私は言つたるお前を死なせないつて」

咲夜「お嬢様へのお土産話になりそうですし何よりここで帰るのはちよつと」

霊夢「後悔しても知らないよ恨みっこ無しだからね」

魔理沙「これが冥界？もっとおどろおどろしい物を想像してたけどな」

咲夜「そうですねイメージと違いますね」

霊夢「意気込み過ぎたかな？」

よく文献に描かれる地獄のような姿を想像していたが延々と階段が続いているだけだった、

天まで届くかという階段を見上げばやく、

魔理沙「これ昇んの？」

霊夢「昇るよ！嫌なら一人で居れば？」

うじうじする魔理沙を余所に昇る霊夢と咲夜、

魔理沙「置いてくた待ってくれ！」

長々と続く階段を昇りながら咲夜が眩く、

咲夜「思ったのですが階段が在るからってわざわざ歩いて昇る必要はないのでは？」

霊夢「アッ！」

魔理沙「私達飛べるじゃん！ま・まー始めから私は気付いてたけどな」

二人がしらーっと魔理沙を見る、

魔理沙「ちょっ！何だよいいから行くぞ」

霊夢「こら魔理沙、一人で行かないでよ」

霊夢「光が見えた」

魔理沙「出口か？」

仄暗い道を抜け光が広がる、

咲夜「こんなに明るいなんで」

霊夢「成る程！あれが名に聞く咎墮ち（とがおち）の階段か？」

咲夜「何です咎墮ち？」

霊夢「死んだ者が生前の罪をその足で昇りきることとで罪を落とす階

段よ、まー私達には関係ないけどね！魔理沙は気を付けないと横着してズルするんじゃないよ」

魔理沙「何で私限定なんだよ」

咲夜「そうですね貴女は気を付けないと」

魔理沙「私は悪い事なんてしじゃない」

霊夢「ダメだ」

咲夜「諦めましょう」

霊夢「ハア、私達飛んじやった」

魔理沙「え？私達はまだ死んでないぜ」

咲夜「門を抜けた時点で私達に生死の意味は在りませんよ」

地面から亡者が這い出て来る、

霊夢「こゆ事よ罪を落とさぬ者は地獄へ堕ちろってね」

魔理沙「地獄になんか堕ちるもんか！お前らこそ地獄に叩き帰してやるぜ」

咲夜が亡者の剣をいなしてその勢いそのまま反転し亡者の首を切り落とす、

咲夜「遅い！」

魔理沙「後ろだ！まだ生きてる」

首の無いまま動き出した亡者が咲夜に剣を振り下ろす、

霊夢「危ない！」

とっさに剣を受ける、

霊夢「相手は冥府の住人、物理的な死の概念はないわ」

魔理沙「なら跡形も無く掻き消してやる」

魔理沙の作り出す星の光が亡者を吹き飛ばす、

光に蒸発する亡者、

魔理沙「やったぜ！成仏しろよ」

これ以上出て来る気配はない、

霊夢「さっさと行きましようまた出て来られたらたまないわ」

魔理沙「罰与えに来た奴を追い返してやったんだし大丈夫だろ」

魔理沙「それにしても冥界に太陽が在るなんてな？四六時中真っ暗でジメジメした所と思ってたぜ？」

霊夢「そうでもないみたいよ？天候や朝や夜に明確な四季も在って住まう者が死者か生者という違い以外は地上と何も変わらないらしいわ」

魔理沙「やけに詳しいじゃないか？始めてって感じがしないぜ」

霊夢「前に教えてくれたのよ、どこでも妖怪が」

魔理沙「スキマか？確かにアレは何処だろうと行きたい放題だもんな」

しばらく冥界の森を歩いていると城門が現れる、

魔理沙「デカイな」

霊夢「咎墮ちの階段が有ったのならこれが霊霄殿か？本当に有ったんだ」

魔理沙「あ！それなら私も聞いた事あるぜ」

魔理沙が扉に手を掛ける、

霊夢も続こうと手を伸ばした時、背筋に悪寒が走り死の直感に恐怖する、

幸い咲夜はまだ扉に近付いてない霊夢は魔理沙を抱え横に跳んだ、

霊夢が跳んだ次の瞬間、

斬撃が扉を砕き森を走る、

巨木を縦に断ち裂く程の剣圧、もし霊夢が直感に従わず行動しなかつたら確実に魔理沙か霊夢のどちらかが死んでいた、

凄まじい破壊力、幾本もの木が倒れている、

余りの出来事に固まる、

魔理沙の体が震える霊夢の助けが無ければ死んでいた事実を我が身に降り掛かる恐怖に疎んでしまう、

魔理沙「震えよ止まりやがれ！」

（あいつは自分が死ぬかも知れぬ力を迷わず使っているんだぞ？それなのに私は）

魔理沙は刃物でもって左目の眼下を切る、

流れ出る血を拭わず血で顔に線を引く、

霊夢「馬鹿！何を・

霊夢の言葉を遮るように咲夜が肩に手を置く、

覚悟の現れ吹っ切れた魔理沙が立つ、

魔理沙「心配かけたなもう大丈夫だぜ」

親指を起ててみせ、

霊夢「うん行くよ」

霊霄殿へと乗り込んだ、

白い石張りの床が広がる、

奥の壁にまた一つ扉があり霊夢は刀に霊気を乗せて放つ、

空を飛ぶ斬撃が奥の扉を砕く霊夢に置いては保険の行動であった、

扉の向こうは死角になり反応がどうしても僅かに遅れてしまうその一瞬が生か死を分ける事になる、

霊夢「向こうは殺す気でいる迷いのある剣では死ぬのは私達だ！」

????「覚悟はお決まりになったようですな」

砕けた扉の向こうから歩いて来る人影が一つ、

????「我が名は魂魄 妖夢！白玉楼が庭番、主の命により貴公に御退場願いますよ」

霊夢「私は例え殺す事になったとしても躊躇いはない博麗が巫女
博麗 霊夢参います!」

互いの刀に霊気を乗せ撃ち合う、

二つの斬撃がぶつかる、

妖夢「命までは取りはしない、だが腕の一本ぐらいは覚悟してもら
おう」

霊夢「押し通る!」

霊夢「主とは誰?春を集めようしようとするの」

妖夢「答える義理はない!知りたいなら我が主に聞くのだな」

妖夢の斬撃が地を走る、

避ける霊夢に斬撃の陰に隠れた妖夢の剣が迫る、

霊夢とて馬鹿ではないこの攻撃が囷と分かっていた、

思惑通りに飛び込んで来る妖夢の剣を防ぐ、

霊夢「鞘？しまった！この為の囷か」

妖夢は打ち込みの際に刃を鞘に納めたまま打ったのだ、

霊夢は打ち込みの圧で体が浮き上がる、

妖夢「先読みのし過ぎでしたね」

妖夢はそのまま鞘から刀を抜く、

霊夢「まだだ！」

衝撃の反動を利用し妖夢の側頭部を蹴る、

妖夢「かはっ」

地の支えを無くし勢いだけの蹴りに力は無いが動きを止める事は出来る、

妖夢「戦い慣れている？ただの娘と思ったが伊達に博麗の名を持つ訳ではないようですね」

頭を蹴られた事で意識が揺らぐ、

妖夢「あんなやり方で逃げるなんて面白い」

妖夢は高々と飛び上がり剣圧を飛ばす、

避ける霊夢の後ろに回り込んだ、

霊夢が反応し構えるがそこに妖夢の姿がない自らを取り巻く魂魄の尾に掴まり更にその裏に回り込む、

妖夢「甘い！がら空きだよ」

ギリギリで刀の剣閃を回避し、

霊夢は距離を取ろうと後ろへ下がる、

妖夢は地に刺した刀の柄を足場にして跳び霊夢の胴を鞘で打ち据えた、

打撃の反動に妖夢は刺した刀を手にし着地する、

転がる霊夢は腹部を押さえながらも反撃に備えるも痛みには足がよるけ、

僅かの際、妖夢には十分、

一気に間合いを詰め妖夢は刀を霊夢へ振り下ろす、

咄嗟に刀を逆手に持ち鏢つばと峰みねにて妖夢の剣を受け止めそのまま抱える様に巻き込み剣を封じ、

剣を制しつつ沈み込む霊夢は妖夢の顎へ下から掌打を叩き込み続けざまに胸に打ち込む、

妖夢「くはっ！」

今度は妖夢が地に転がる、

霊夢「?????」

妖夢「人間である貴女がこれほどの体術を身につけているとは？」

霊夢「茶番はもういいわ何故本気を出さないの？」

霊夢は刀を拾い上げ妖夢へ投げる、

投げられた刀を受け取り鞘に納め、

霊夢「もう一度聞くわどうして本気を出さないの？」

魔理沙「あれで本気じゃないだつて？」冗談だろ」

ずっと黙っていた魔理沙が驚きの声を上げる、

霊夢「半人半霊よね貴女？なんで半霊の力を使わないこの一件に負い目を感じているの？」

妖夢が笑う、

妖夢「そんな機敏きびを感じるくらいなら始めから此処こゝに居ない私はあ
の人のために闇に伏せる覚悟はある」

霊夢「この為にどれだけの人が犠牲になったと思ってる」

妖夢「ある日を境に主が心から笑わなくなった、それでも繕った笑
顔を見せる度に私は辛くなるこれが間違いなんて分かっている確か
に私も無意識に負い目を感じてたかもしれない？巫女よ貴女に退け
ぬ理由が在るように私にも退けぬ理由が在る！あの人を笑顔を取り
戻すそれが私の全てだ三人まとめて掛かってきなさい」

霊夢「行くよ魔理沙！咲夜！」

妖夢は両手に刀を握る、

剣気をほとばしらせ、

霊夢「こつも露骨に力を見せれるか？」

魔理沙「私から行くぜ」

真つ先に動いたのは魔理沙、

妖夢「筋はいい我流ですか？しかし本物の剣には」

魔理沙「真つ向勝負じゃそうだろうな？別にそれが全てではないぜ」

魔理沙は幾本か咲夜のナイフを拝借していた、

妖夢「下手に素人が二刀流にしても効果はありませんよ」

魔理沙「それでもないぜ？素人だからって馬鹿にするなよ」

ナイフを投げるも事もなげに妖夢は避ける、

魔理沙「油断したな！慢心は敵だぜ」

魔理沙の投げたナイフに糸が括り付けてあり後ろに下がると同時に引き寄せる、

魔理沙「騙し合いなら負けないぜ！」

妖夢「なら正攻法で打ち返す」

刀を地に刺し衝撃でナイフを墜とす、

魔理沙「でもそれじゃ刀は振れないよな？隙有りだぜ！」

妖夢「しまった！なんて言うと思いました？」

魔理沙の刀を打ち払い拳打を叩く、

妖夢「私は剣士だ無手での対処法ぐらい心得ている」

魔理沙「こんなにあっさりと反されるなんて？」

妖夢「貴女の剣には心がない始めから違う手を考えている事が手に取るように伝わってくる」

魔理沙「小手先は通じないか？」

妖夢「剣に剣で応える言いたい事は剣で言いなさい！」

妖夢「剣は積み重ねた時間がそのまま表れます」

霊夢「魔理沙立てる？」

魔理沙「なんとか」

霊夢「無手の技もかなりの物ね庭番は伊達じゃないか？」

落ちているナイフを拾い埃を払う咲夜、

咲夜「しかし此処で拱こまっている訳にもいかないでしょう」

魔理沙「そうだよなこのまま退けないぜ」

三人が申し合わせた様に同時に三方向へ跳ぶ、

左右から霊夢と咲夜が切り掛かる相手の殺傷が目的でない制止させる剣、

剣に押さえ込まれた形になり身動きできない、

少し間を開けて魔理沙が後方から迫る、

妖夢は沈み込み両の剣を流し魂魄の背に乗り向かい来る魔理沙の剣から逃げ延び、

その勢いのまま壁に足を付け一人集団から抜けた魔理沙へ刃が走る、

魔理沙「そう簡単に！やらせるかってんだ！」

魔理沙は後方へ魔弾を放ち反動に自らを妖夢へ飛ばす、

空中で刀がぶつかる、

妖夢

（剣筋が鋭く成っている？この短時間で学んだというのか）

霊夢「やっぱり小細工は効かないか？もうやめよー！」

妖夢「何百、何千と繰り返すことで剣は自分に応えてくれる私が生きてきた道は剣なんだ！」

妖夢は靈気に乗せた斬撃を飛ばし斬撃と供に突撃をし掛け、

靈夢は斬撃を正面から受け止め、

魔理沙と咲夜がかばうように前に出て妖夢を抑える、

魔理沙「形振りかまわずか分かりやすくていい」

咲夜「ややこしいの止めにしましょう」

咲夜は上から魔理沙は下から妖夢へ剣を走らせる、

霊夢「勝負はここからよ」

斬撃を妖夢へ打ち返す、

パツと魔理沙と咲夜が妖夢から離れる、

打ち返された斬撃を妖夢は左へ弾く、

弾かれた斬撃が壁を突き破るそれを合図に動く、

妖夢は三人の剣を流れるように受け流す、

少し距離をとる咲夜と入れ代わり前に出る霊夢、

刀を地に突き立て高跳びの要領で霊夢を飛び越え 咲夜へ降り頭に
目掛け振り下ろす、

咲夜は受けに身構えるが妖夢の手に刀が握られていない！、

足に魂魄の尾で刀を巻き付け咲夜の首を狙う、

咲夜は回避出来ない、

魔理沙と霊夢も援護に走るが届かない、

咲夜

（時の停止も間に合わない！死ぬのか？）

絶対の死に恐怖する、

首筋に刃が触れる刹那その場に居た誰もが意図しない金属音が響く、

へたりこんだ咲夜が自分の首に手を伸ばすと何かか手に触れ、

咲夜

（何が？）

それは自らの首を覆う幻影で創られた盾、

妖夢「何かは知りませんが命拾いしましたね」

咲夜「ベルに助けられたのか？」

（しかし私は先の一撃は時間を止めて逃げた筈だ？何故出来なかった？違うな今まで何度となく使ってきたけど示された力の意味に私は直視することに正面から向き合う事に恐れたんだ！情けない覚悟なんて言ったのは上っ面だけか？）

咲夜「否！断じて否！」

（私は誓ったんだ歩み続けると彼女にベルに）

妖夢が咲夜の気に圧倒される、

咲夜が一気に距離を詰め、

剣を受ける、

妖夢

(さっきとはまるで剣の重みが違う)

妖夢「私とてこの程度で退けるか！」

霊夢、魔理沙、咲夜が三人同時に飛び掛かる、

三方から来る刃を防ぐ、

妖夢「私は白玉楼 西行寺 幽々子が庭師 魂魄 妖夢だ！」

三人を弾き返す、

妖夢

(私の剣はただ幽々子様のために)

剣は積み重ねた時間かそのまま表れる、

三人で挑むも妖夢へ一歩届かない、

何も知らぬ者が見れば妖夢は十代半ばの幼い少女にしか見えぬだろうがその実数十年の長き時を生きていおり、

物心が付きはじめた頃から剣を握っていた妖夢には一日の長がある、

妖夢「無駄です！私には届かない」

一瞬の間に刀を鞘に持ち替え打ち込み後から刀を尾に巻き付けた魂の奇襲、

その刃は霊夢の首を掠^{かす}め、

頸動脈を切りはしなかったが首から鮮血が出る、

魔理沙「無事か？」

霊夢「少しも気が抜けないわね、だけど！」

端から見たら無駄とも取れなくない行動を延々と繰り返す動き、

妖夢「もう諦めて下さい！わかるでしょう？」

咲夜「諦めるぐらいなら潔く死を選ぶわ」

魔理沙「目の前に居るのに何も出来ないなんて嫌だ」

霊夢「退けない理由があるのは私も同じよ」

妖夢

（力の差は明確なのに何故諦めないの？）

何度やられても打ち負けても立ち向かう三人に妖夢の心が揺らぐ、

その心の揺らぎは剣にすぐに表れる、

咲夜の剣が防壁の隙間を縫ってスカート裾を切った、

魔理沙「惜しい！服だけだけど当たったぜ」

咲夜「今のが防げないはずがない？」

霊夢「おかしいわね？あれだけ正確無比だった動きが極端に鈍ったわ」

この一撃は妖夢の心をさらに揺らがせる、

幽々子への忠義と自らの絶対な剣への自信その二つが己を支えていた、

双極の一角が崩れかけた事は妖夢へ重い影を落とす、

精神的に幽々子に依存し脆い面を持つ妖夢に一度失った平常心は簡単に取り戻すのは難しい、

そして魔理沙の存在が大きくなる、

魔理沙は剣の素人と言っていい太刀筋が安定せずバラバラでそれが妖夢のリズムを狂わせていく、

冷静に対処出来ない押さえ込もうとしても焦りが剣に出てしまう、

三人の剣を捌ききれない、

益々（ますます）焦りが強くなる、

霊夢の剣に弾けよけた所へ咲夜が突貫する、

しかし咲夜自信も勝ちに急ぎ出した手は避けられてしまう、

咲夜

（チィ！勝負を焦ったか？）

すでに妖夢は迎撃の体勢を取っている、

咲夜

(やらせるか！)

大振りの隙を叩こうとする妖夢に突如生まれた剣が太刀先を振るう、

それは幻影の剣、

咲夜

(ただ、またベルに助けられた？彼女は幻影の質量を自在に操っていた？この力には何か秘密がある！)

妖夢は自らの動きを止めた幻の剣に驚きの余り立ち尽くしていた、

魔理沙「何だか知らないが今だぜ！」

戦闘の最中に行動を停止させる剣士としてあるまじき失態普段の妖夢なら決して有り得ぬ事だが、

魔理沙の接近に0・？秒もつと短い時間かもしれない、

その反応の遅れに避けきれず妖夢は左手の甲辺りから肘先を切る、

決して深い傷、大事に至る傷ではないが刀を握る事は出来ないだろう、

霊夢「終わりねその手で刀は振れないでしょうまさか片手で私達と戦うつもり？それは驕りよ」

スカートの裾を破り止血にと腕に巻き付ける、

場当たりの対処のために止まらず腕から鮮血を落とす、

妖夢「終わりですって？この私が？刀を握る手が在るなら」

魔理沙「何でだ？もういいだろう」

霊夢「これ以上やるなら死ぬわよ」

妖夢「行くぞ」

（私は時折刀を持つ意味を見失う、貴方に教えられた剣の意味を今だに理解出来ない師匠まだ色々と学びたかったのになんで消えてしまったんですか？）

.....
.....

妖忌「そらどうしたもう終わりか？」

妖夢「まだです」

魂魄 こんぱく・たましひ
妖忌

先代の白玉楼の庭番、妖夢の実の祖父であり剣術の師匠、

妖忌「私から一本取ってみなさい」

妖夢「ハイ！」

一気に妖夢が仕掛ける、

妖忌「？」

木剣を打ち落とされ尻餅を就く、

妖忌「今日はもうやめだ」

稽古を突然に止めてしまう、

妖夢「どうしてですか？私はまだ出来ます」

立ち上がり理由を尋ねる、

妖忌「何も分かっていないお前の剣には力しか映っていない」

妖夢「力を西行寺に幽々子様の剣に成ることが私達の役目ではないのですか？」

妖忌「剣か？それも在るだろうが我々は剣である必要は無いんだ私達は鞘で在るべきだ」

妖夢「鞘？」

少し間を置き妖忌が尋ねる、

妖忌「お前の考える最強の剣は何だ？」

妖夢「何者にも屈しない全ての向かい来る眼敵を 打ち倒せる剣です」

妖忌「なら聞くがお前の最強の剣はもし主が何か理由や誤解により我々と剣を交える事があつたしても迷わず切り捨てるのか？恐ろしいな？」

妖夢「それは！」

ポンポンと頭を撫でながら妖忌は言う、

妖忌「今は分からなくていい我々は長き時を生きる、だが死を強請^{ねだ}るな惨めでも生に執着するんだ刀はその刀身を鞘が在るからこそ保つ事ができ鞘も刀が無ければ意味を成さない」

妖夢「?・?・?」

話の大半を理解出来ない、

妖忌「鞘を失えば剥き出しの刀はその身をいたずらに傷付ける付き
従うだけが役目ではない鞘の意味を見つけ出すんだ」

・
・
・
・
・

時間は流れ妖夢も大きくなる半人半霊には寿命があり永遠ではない、

ある日、妖忌は二人の前から姿を消す何も告げずに、

幽々子はその事に触れようとはせずいつかこの日が来ると分かっ
ていたのだろう、

だから何も言わず事実を受け止めていた、

妖夢は心に大穴が空いたような虚無感に慕うべき祖父を乗り越える

壁を目標が無くなってしまった、

妖夢は強かった何十何百という敵を一人で切り伏せる力をつけた、

どれ程の強敵を相手にし勝ったとしてもその心は満たされる事は無い、

唯一妖夢の心の隙間を埋め満たすのは幽々子の笑顔だった、

妖夢の心はより強く幽々子に依存するかつて妖忌に言われた鞘の意味を忘れ、

幽々子に仇なす者を切り散らしてきた妖夢、

妖怪や亡霊、人為らざる猛者達もその力に恐れおの慄き逃げ出す、

目の前に居る三人は人間なのに遥かに弱く儂い存在が傷だらけにな

りながらも歩みを止めようとしな、

妖夢「通さない！」

(この人達を通してはいけない死んでも此処で止めるんだ)

霊夢「いい加減に！」

霊夢の切り上げた刀は妖夢の左肩を裂いた、

魔理沙「もう終りだろ！これ以上は？」

刀を杖になんとか立ち上がる、

妖夢「行かせない！」

刀を鞘に納め霊夢が問い掛ける、

霊夢「貴女は何を一人で抱え込んでるの？これ以上事が進めば取り返しが付かないのよ！」

妖夢「悪逆の行いでも世界を敵に廻してでもあの人の幽々子様のために」

霊夢「馬鹿！そうやって一人勝手に死んで遺された人はどーすんのよ？貴女には守るべき人が居るんでしょうが！」

妖忌「付き従うだけが役目ではない鞘の意味を見つけ出すんだ」

幼い頃に妖忌から教わった師の言葉が過ぎる、

妖夢「こんな簡単な事に」

（この異変を止めるべきは私だった、そして私は死んではいけないのだ結局は何も理解していなかったのか？）

死を強請^{ねだ}るな生に執着しろ、

刀と鞘は二つで意味を成すどちら欠けても駄目なのだ、

霊夢「お願い通して」

妖夢「出来ない私は庭番だ」

霊夢「じゃあ聞くよ？あんたは どうして泣いてるんだ！」

妖夢「私はもう引き返せない是非を問わず突き進んだ道だ！」

妖夢の心に幽々子の笑顔ばかりが流れる、

妖夢

（私はこの笑顔を守りたいでもこれでいいのか？後に何が遺る？虚しさだけが広がってあの人は幽々子様は自らに全ての罪を課すだろう）

妖夢「霊夢、幽々子様を止めてください」

霊夢「通してくれるのね」

妖夢「出来ません！私にもけじめが在ります後一振りが限度でしょう見せてください私に貴女達のことを」

霊夢「分かったわ」

二人は刀を鞘に納め腰に挿し大きく脚を広げ右肩を下げる、

すなわち居合いあひの型を取る、

霊夢「合あひ図よ、頼むは」

ナイフを渡すと咲夜は静かに上に投げた、

ナイフが地に落ちる瞬間二人は同時に動く、

妖夢

（私は今日程自分が判らなくなった日は在りません幽々子様この人達に託してみてもいいでしょうか？）

思いは刀の力へ変わる一太刀に賭ける思いの強さ、

刀の一閃の激突！妖夢の刀が霊夢によって砕かれた、

咲夜「お優しい剣閃を下げようとすれば下げれた物を」

霊夢「進ませてもらおうわ」

妖夢「桜観剣が砕けた私の負けか？間違っていたのは私なんですわ」

霊夢「そんなの知らないわよ！勝った負けたで簡単に答えが出るなら苦労しない、それとも何？貴女は一から十まで自分の道を人から聞くの？剣士なら自らが握る刀の意味ぐらい探しなさいよ」

妖夢「厳しいですね！簡単に答えをくれないなんて」

魔理沙「大事な剣を砕いちゃったな？」

霊夢「妖刀はね自らでその刀身を修復させるわ、あの子から戦う力を奪ったのよ闘えないのなら私達を足止めする理由が無くなるですよ？」

咲夜「速く行きましょう？どれだけ時間が残ってるか分かりません」

霊夢「何ボケツとしてるの妖夢？一緒に行くわよ行く先を自分の目で確かめなさい」

凶兆の黒猫、幻視の九尾

妖夢を退け霊霄殿を抜ける、

魔理沙「それにしてもさっきの霊夢の台詞はクセかったぜ」

霊夢「別にそんなつもりで言った訳じゃ無いわよ！それなら魔理沙だってアリスにご大層な事を言ってたじゃない？」

魔理沙「バツ！バカ！それは」

咲夜「フフ、仲が良ろしい事で」

霊夢「そこ茶化すな！」

後ろから二人を追う妖夢、

妖夢

(戦いの後でこつちも笑えるのか?)

外は少し日が傾き掛けていた、

魔理沙「綺麗だな朝日と見るか?夕方と見るか?見方は色々と在るが最後に成らない様にしないとな」

霊夢「縁起でもないわ最後なんて」

夕暮れに赤く染まる景色はとても綺麗でそこだけを切り取れば此処が冥界と誰が信じるだろうか?

霊夢「全てを終わらせて明日もこの景色を見るのよ皆でね」

魔理沙「そつちだな帰つたら神社で花見をしようぜ」

咲夜「お嬢様達もお呼びしましょう」

二人が話す中、少し俯うつむく、

霊夢「自分で言っというて明日か？重いな」

そつと気付かれぬ様に袖をずらし右腕を見る、

霊夢の手は手首辺りから白く結晶化し罅ひび割れを起こしている、

霊夢「侵食が止まらない？私には明日は無いかもしれない？だけど詰まらない所でくたばってくれないで私の体」

魔理沙「どうした霊夢？」

霊夢「え！いや何でもないわ」

サツと袖を戻し取り繕う、

魔理沙「痛むのか？右腕」

霊夢「少しね」

魔理沙「無茶はするなよ」

木陰に進む三人を見つめる者、

「？？？」見付けたぞ！」

二本の尾を靡なびかせる黒き猫が、

行く手を阻む様に青い炎が走る、

魔理沙「これは？」

一つの影が三人の前に降りる、

「???」「見付けたぞ!」

霊夢「橙か!これも命令の内?」

橙「先はそうだったが此処からは私の単なる意地だ凶兆の黒猫である私が人に遅れを取るなど!」

「フーー」と息を荒立てる橙は身を屈め四肢を地に伸ばし低い体を取る、

霊夢「こんな時に少しは状況を見なさいよ!」

橙「知ったことか行くぞ」

しかし橙が戦いに選んだ地は遮蔽物の無い広い場所、

あの村の様に建物が建ち並ぶ立体の空間でそのスピードは強い優位性を誇るが開けたこの場所では効果は薄い、

咲夜「如何に速かろうと物の数ではない、これだけ殺気を放てば動きは手に取るように分かるわ！」

飛び掛かる橙の爪を流す、

咲夜

（確かめる絶好の機会だこの力を見極めてやる！）

咲夜

（妖夢の刀に私は死の恐怖を感じた時ベルの力が私を守った、強き想いに呼応して意思を具現化させる力なら）

攻撃を避けられ距離を取ろうと後ろへ跳ぶ橙、

追撃する咲夜も橙を追い跳ぶが機動力に勝る橙に僅かに届かない、

咲夜

(跳べ！もっと高く)

空に足場を創りそれを踏み台に跳ね上がる、

橙「馬鹿な空中からもう一度跳ぶなんて？だが簡単にはやらせん！」

その場で上半身を大きく左に振りかぶり体を半転させ飛び込んで来る咲夜に回し蹴りを放つ、

まさか咲夜もこのタイミングでの反撃は予想外だったようでもろに喰らってしまっ、

咲夜「くっ！」

出鼻をくじかれ落下する咲夜、

橙「次は私の番だ我が妖術の力を見るがいい！鬼符『鬼門金神』」

落下する咲夜を追い地に拳を打ち込むと橙を中心に無数の刃が大地から突き上げ三人を襲う、

魔理沙は咄嗟に空へ逃げたが着地に体制を崩した咲夜に回避または防御に移る事が出来ない、

眼前に迫る刃にたじろぐ咲夜の前に霊夢が飛び出す、

霊夢「境界『二重結界』」

霊夢の結界が橙の刃から咲夜を守った、

霊夢「あんたちよつと油断したんじゃない？」

咲夜「油断？私か？馬鹿な！」

両手を頭の上で合わせ左右に広げる、

咲夜の手の動きに併せて創り出されたナイフを橙に向けて撃ち放つ、

霊夢の援護が来なければ咲夜を討ったと思っていた橙はナイフを避けきれず幾本かを喰らう、

致命的に足に傷を負ってしまい、

肩に二カ所と足に一カ所に刺さるナイフを抜き捨てる、

橙「くう」

（大丈夫だ出血は派手だが傷自体は大した事ない行ける！）

橙「こんなもので私を止められると思うな！」

橙を巻く様に青白い龍が現れ、

橙「龍が鱗に切り刻まれろ、星符『飛び重ね鱗』喰らえ青龍鱗！」

渦を巻く龍鱗の波に空に逃げていた魔理沙が橙へ急降下する、

魔理沙「心意気は認めるがそろそろ此処ら辺で終わりだぜしつこいんだよ、彗星『ブレイジングスター』」

空から降り来る流星群と渦を巻く龍鱗がぶつかる初めは互角だったが魔理沙の流星が橙の龍鱗を押しはじめ、

弾幕の撃ち合いに橙が負け流星群が橙を飲み込み粉塵に包まれる、

霊夢「立たないで」

魔理沙「終わってくれ」

粉煙が薄れ視界が開ける、

橙「負けるものか私は！」

魔理沙「こいつ何かおかしいぜ？まるで何かに取り付かれてるみたいだ操れてるのか？」

全身ずたばろに成りながらも決して闘争の意思が無くならない、

少し橙の拳動がおかしくなる、

魔理沙「何だ？」

橙「殺してやる！殺してやる！貴様等全員殺してやる！」

肉体の一部が変質を起こす、

霊夢「自分の力に肉体が付いて行けてない」

橙「皆殺しにしてやる、鬼神『鳴動持国天』」

咲夜「何て力だ」

魔理沙「桁外れにでかい」

名の通りに空を天をうねらせる、

手を振り下ろすだけで地を砕く、

咲夜は幻影の盾を魔理沙は魔力の防壁を張るもその上から二人を吹き飛ばす、

霊夢「このままじゃマズイ！魔理沙まだ太陽は見える？」

魔理沙「太陽？ああギリギリだがまだ見えるぜ」

霊夢「充分だ躊躇う暇は無い！八咫やたの鏡よ」

霊夢が神力で創りだした鏡は太陽の光を吸収する夕暮れに赤く染まる空が闇夜に変わる、

咲夜「夜？」

魔理沙「急に空が暗くなった？」

橙「死ねー！」

高々と飛び上がり霊夢へ溢れ出る力の全てを砲撃に込め放つ、

凄まじい圧縮された力は人の身で受ければ跡形も残らないだろう、

霊夢「日の神の力をその身に受けなさい！、日輪『天衝』」

収束した光は一筋の輝線を描き光線となり空を走る、

鏡より放たれた光の砲は力の塊を掻き消し橙を貫いた、

光線が空に消え去るとまた夕暮れの赤い空に、

咲夜「橙は？」

三人が見上げると日が沈み夜が顔を覗かせる空に墜ちる橙が見えた、

地に墜ちるが何とかまだ息は在るようだ、

近づき様子を伺う霊夢達になおも手を伸ばし戦う意思を示す、

咲夜「操れているとは言え見るに堪えないかわいそうだけど」

咲夜は剣を振り挙げた、

まるで煙りに撒かれたようだった橙の姿が消え咲夜の剣が止まる、

霊夢「消えた？」

魔理沙「何処に行った？」

辺りを見渡す、

だが一帯を取り巻く嫌な気が晴れない、

何処からともなく声が聞こえる、

……………「激昂の狒狒^{ひび}猛るは憤怒」……

……………「肥満獅子王だれて怠惰」……

……………「蠍^{あしづ}が注ぐは愚かな嫉妬」……

……………「蛇が絡むは醜き色欲」……

……………「飽き果てぬ豚の暴食」……

……………「永久^{とわ}に望むは人の強欲」……

……………「化かして食らうは狐の狡猾」……

橙を抱き抱える人影が木々の間から現れる、

????「お初に御目にかかります私は藍^{らん}と申します橙が世話に成りましたね」

橙「藍様」

藍「ご苦労様？今は休め橙」

藍が橙の額にそっと手をかざし何かを抜き取ったように見えると、
二回り程体が小さく成り顔つきも幼く変わる、

藍「本来はこの子は戦闘向きじゃない少々無茶をさせすぎたようだ」

霊夢

(妖気を押し殺しているが分かる並の妖怪じゃない)

藍「私と一戦交えて貰おうか……ん？戦う理由ですか私は橙の主
だこれ以上の理由がありますか！」

身構える霊夢達、

藍「古来大和にて朝廷を惑わし国を食らった金毛九尾が天狐の力を
見せて差し上げよう」

霊夢「はん！あんたも橙と同じ様に丸焼きしてやるわ」

藍「はったりですね先の一撃は光を要するみたいですが？わざわざ太陽が見えるか？と聞きましたね光だけならその魔法使いに光球でも創らせればいい筈だとどの詰まりは太陽が無ければ出来ないのでしょうか？」

すでに太陽は八割方が沈み日の光は消え失せていた、

霊夢「くっ」

藍「黄昏れの時は終わる知っていますか？黄昏れの由来を古くから人は闇を恐れ日暮れに擦れ違う相手に誰は彼たそと聞いた事から始まったのです、人は闇を恐れるしかし闇は我等の時間だ橙と私は桁が違かれうぞー！」

重い威圧感に霊夢達三人の心臓の鼓動が速まる、

藍「橙とまではいきませんが狐の駿足を篤と御覧いれよう」

橙程の爆発的のスピードは無いが水の流れの如く見るものを幻惑させる、

初めに動いたの魔理沙だったが砲も剣も空を切るばかりで掠りもしない、

藍「水の動きを点や線では捉える事は出来ませんよ」

何か思い付いたのか後ろに下がる魔理沙、

魔理沙「だったら叩いて飛沫にするまで」

手を地面に当て砲を撃つ砕け散る岩石や礫つがひを飛ばす、

藍は微動だにせず右手に深紅の火が灯らせ、

頭上より降り注ぐ瓦礫を一瞬で灰にして除けた、

魔理沙に悪寒が走る何も考えず横に跳んだ、

パチン　と藍が指を鳴らすと火柱が上がった、

藍「着眼点もいい反応も悪くないが人間レベルでの話ですがね」

魔理沙「言ってくる」

藍「だが此処までたどり着いただけの事は在るな少しは愉しめそう
だもっ少し本気を出そうか」

左右から飛び出した霊夢と咲夜が藍を中心に円を描き弾幕を張る、

飛び交う弾幕の針の穴を縫うように躲していく、

藍「こんな物ですか」

咲夜が前に立つ藍に剣を振るうも、

藍「当たりませんね」

咲夜でさえ軽くあしらわれている、

霊夢

(あの咲夜が？やるしかないか)

藍「精神的にも肉体的にも遥かに勝る我等に人間が敵うものか」

魔理沙「やってみなくちゃ分からないだろう？」

距離を取るために下がる藍に影が迫る、

霊夢「ハイ！」

思いもしなかった。ただろつまさか自分を捉えられる人間が居ようとは、

面食らって藍は膝を付ける、

霊夢「あんまし人間を舐めんじやないわよ！確かに全ての面で劣るかもしれない？だから長い時を賭け築き上げてきたのよ妖怪やものけの貴女達と渡り合うために」

膝に着いた埃を掃う、

藍「当の昔に廃れたと思ってましたよ？まさか縮地しゅくちを扱える人間がまだ居たとは？」

縮地しゅくち

古流剣術の足運びの一つ 意図的に足の筋力を最大活動させ一歩目

から最高速度で移動する特殊体術、

使用した者がまるで地を縮めたかのように見えた事から縮地と名付けられた、

藍「しかし縮地とはかなり辛そうですね？まして女性である貴女には負担も相当のはず」

霊夢「でもこれで貴女と速度では五分に持ち込めたわ」

（神力で身体能力を向上させ可能にしている常に神力を解放しなければならぬ下手を打てば自滅だ）

藍「人間とはこれだから面白い！もっと愉しませてくれ」

だが藍の戦い方は少し変であった、

積極的に攻撃に移らず時間稼ぎをしているような戦い方を、

咲夜

(何を狙っている?)

魔理沙

(怪しい?)

あまり攻勢に転じない藍が劣勢に見える、

突然、藍は問い掛ける様に話す、

藍「何故貴女方は戦うの？それは本当に貴女の意味ですか？」

霊夢「今更！何が言いたい？」

咲夜「確固たる自分の意思で此処まで来た」

魔理沙「これが私の選んだ選択の結果だ」

近づいて来る藍に動けない、

藍「本当に？ただ流されてるだけではないのですか？」

咲夜の後ろに回り語りかける、

藍「抗えぬ絶対の力に自らの心を守るため易い道を選び従う事を選んだのではないのかな？」

魔理沙の前にも藍の姿がある、

藍「君に戦う明確な意思が有るのかな？自分を存在を知って欲しいんだろー人ぼっちが怖いんでしょう？」

咲夜「違う」

魔理沙「私は」

藍

（かかった、この二人は落ちた後一人）

霊夢「魔理沙！咲夜！いったいどうしたのよ？」

藍「貴女は博麗の巫女でしたね？巫女として戦う理由は理解出来ませんが彼等は貴女が身をとじて守る程の価値があるでしょうか？」

霊夢「そんな事ない」

否定する、

藍「貴女が人知れず動いた所で誰が貴女に感謝しますか？それ所か当然と受け取る者も居るでしょう貴女は戦うのは偽善の自己満足ですか？」

霊夢「違う！そんなんじゃない」

藍（フフ、人間なんて簡単だわ！ちよいと暗示を掛けてやれば自分

の記憶で勝手に壊れてくれる)

霊夢「違う！違う私は」

藍「我が幻視の世界をさ迷え、式神『仙狐思念』」

.....

.....

雪が吹き荒れる冬の空に人々の怒号が響く、

「殺せ！殺せ！魔女を殺せ！魔女に裁きの鉄槌を」

人として異端の力を持つ咲夜は常に迫害の目に晒されてきた、

人里から離れ暮らしていた咲夜親子が魔女狩りの一派に見付けられてしまう、

咲夜の母は魔女と大した調べを受ける事無く火刑に掛けられた、

村人「魔女め神の裁き受けるがいい」

人混みを掻き分け咲夜が母に駆け寄る、

咲夜「止める！この人がお前達に何をした」

村人「こいつは魔女だ死んで当然だろうが！そこをどけ娘」

母の前に立ちほだかる咲夜だが人々に潰されてしまう、

咲夜の目の前で最愛の母に火が放たれた、

咲夜「あーーーーー！母さん！」

村人「何！こいつ魔女の忌み子か？」

村人達から暴行を受け虫の息になる、

火に包まれ動かなくなる何も出来ず母が死んでいくのを見る事しか出来なかった、

藍「貴女は母を守れなかった故にあの吸血鬼に従う事で自分の心を慰めてるんだろ？」

咲夜「御免なさい、御免なさい、赦してお母さん」

次に触れたのは魔理沙の記憶、

.....
.....

小さい頃の魔理沙は今の様に活発ではなく人見知りの強い大人しい子でいつも母の後ろをついて回る子だった、

母は魔術の世界でかなり名の知れた人物で魔理沙もそれが自慢だった、

家を訪ねて来る人は数多く居たが全て母への客であり決して魔理沙を訪ねてではない彼女も幼いながらに気付いていた皆自分を一人の霧雨 魔理沙としてでなく高名な魔法使いの娘と見ている事に、

父も好きなのは自分でなく母が好きで話す時遊ぶ時も自分の姿に垣間見える母の姿を見ていると、

母だけは自分を一人の魔理沙と見てくれたそれだけで充分だった何もいらぬ母さえいれば、

しかし彼女の世界を一転させる母が病に倒れ死んでしまう、

それまで訪ねて来た人々はびたりと来なくなつたやはり必要とされていたのは母であり自分ではない、

何よりも父が魔理沙を娘と見なくなる居なくなった母の姿ばかり追
い魔理沙を見ない、

最後の砦であった父にさえ必要とされなかった、

魔理沙「私って何なんだ？ずっと一人なの？」

藍「かわいそうな魔理沙？ずっと一人で誰にも認められない、だから貴女は戦うのね自分を見て欲しくて知って欲しくてでも貴女は一人」

魔理沙「私を一人にしないで誰か私に気付いて？」

二人と同じ様に霊夢にも襲い掛かる過去の記憶、

霊夢

（気をしっかり持て！相手の精神攻撃だ！幻だ！）

霊夢には両親の記憶がない物心付いた頃から自分の側に誰も居なかった、

霊夢が居るのだから両親は居たのだろうが周りにいたのは妖怪ばかり、
魔理沙の母が霊夢を良くしてくれた同年代の魔理沙は霊夢の救い、

藍「貴女は親の愛を求めていた優しく強いあの子の母親が妬ましく
羨ましかった魔理沙の母が死んだ時に貴女も悲しんだけど内心は喜んで笑ってたんだ」

霊夢「私は魔理沙のお母さんを」

藍「そんな自分と一緒に居てくれる彼女に負い目を感じて罪の意識から逃げるために貴女は戦っている、貴女はただの偽善者だ結局は自分のために動いてるだけなんだよ！」

自らの閉じ込めていた感情に押し潰されそうになる、

藍「命まで取らないわ心を無くした人形に成りなさい」

ある日の紅魔館、

パチュリー「どうしたのレミィ？さっきから空ばかり見て」

レミリア「いや？何でも無いんだけど胸騒ぎがするの？」

夜になってもレミリアの胸騒ぎが止まなかった、

レミリア「パチエちよっと散歩してくるわ」

気分転換にと月を後ろに空を飛ぶレミリア、

ある場所で火の手の明かりが見える人間同士の争いなど気にする事
は無かったのだが標的にされている女性を見て助けずにはいられない
衝動に駆られた、

まるでこの女を助ける事が運命で在るかの様に、

.....
.....

沈みゆく意識の中で疑問が記憶に生まれた、

咲夜「私はどうして助かったんだっけ？」

村人「お前も此処で死ね！忌み子め」

自らが取り巻き迎合する存在のみが正義従わぬ者は悪と徹底的に廃絶する神の名を借りた純悪な虐殺行為その憎怖の念は世界の枠すら越える、

村人達は異界の扉を開けたなど知る由も無く、

咲夜

(私って此処で死ぬんだ)

村人「化け物め死ね！」

凶刃が咲夜に迫る、

その時！咲夜を守る様に赤い光が降り注ぐ、

村人「なんだ？」

空から舞い降りたのは一人の少女、身の丈は子供程だが深紅の瞳に背に生えるコウモリを想わせる翼はまさに悪魔、

村人「あ！悪魔？くそ魔女め悪魔を喚びやがった」

人々は悪魔の姿に畏怖したが咲夜にはとても気高く神々しく美しく見えた、

悪魔「虫酸むしすが走るんだよ人間が！」

そこからの光景は凄惨な物だった悪魔に蹂躪される人々、

悪魔「助けを求めろよ？お前達お得意の神様にさ」

村人「そうだ魔女が悪魔を呼んでるんだ魔女を殺せば」

短剣を手に咲夜へ走る、それを庇うように悪魔が前に立ち刃は簡単に幼き体を貫いた、

村人「やつ！やつたぞ！」

貫かれたままの肉体で眉一つ変えず、

悪魔「喜んでるところ残念だけど、この程度で私は死なない残るはお前一人よどうする？」

村人「この化け物めー！」

悪魔「鏡を見てから物を言うのね化け物はお前だよ下種^{げす}が」

悪魔は心臓を貫いた、

全てを片付け咲夜に近付く、

咲夜「私も殺すの？なら早くしてお母さんが死んじやったのに何も出来なかった」

悪魔「貴女の母親はもう私の運命の力でもどうにも成らないでも助かった命よ簡単に死ぬなんて言わないでよ」

咲夜「どうしろと言うの？全てを奪われた私に」

悪魔「なら貴女に生きる意味を与えてあげる私に仕えなさい我は闇

の眷属にして夜の王レミリア スカーレット」

咲夜「仕えるなんて私に出来るだろうか？」

レミリア「大丈夫これは私との運命、そして貴女は今日から生まれ変わる・・・月が綺麗ね確か東の国で十六夜と言ったかしら？そうだ！貴女は今から十六夜の名を名乗りなさい」

咲夜「・・・」

レミリア「名前は？」

咲夜「咲夜」

レミリア「貴女は今日から十六夜 咲夜よ私がずっと側に居てあげる貴女がその目を閉じ死が世界を分かっその日まで」

.....
.....

咲夜「そうだ私はお嬢様に生きる意味を与えて貰ったのだから私は

歩いて来れたこの思いは偽物なんかじゃない」

魔理沙は記憶の中に思い出した、

いつも自分の隣に居てくれた女の子に、

一緒に泣いて笑って喧嘩して幼い時分を共に過ごして来た、

魔理沙

(誰だっけ？でもコイツと居ると心が和む)

そしてもう一人心に浮かぶ人が、

魔理沙「香霖」こうりん

森近 霖之介もりちか・りんのみすけ

魔理沙を古くから知る男

今まで出会った人達が心に浮かぶ、

魔理沙「私は一人じゃない出会いや戦いを通して手に入れた絆が今の私を支えている！だから私は歩けるんだ」

心の中から熱いものが込み上げる、

辛い時も悲しい時もいつも一緒に乗り越えて来た掛け替えのない自分の一番大事な大事な友達の顔が心の中ではつきりとした姿が見えてくる、

差し出された手を握りしめ立ち上がる、

魔理沙「そっだよな霊夢！」

.....
.....

霊夢「私が魔理沙を妬んでた？憎んでた？確かにあの人に言いたい事は幾つもあったけどお母さんと呼びたかったか？でも呼んでしま

えば全てが失くなってしまふ気がした」

深みに嵌^{はま}まって抜け出せなくなる、

今までの自分の行動は無意識に感じた罪の意識から逃げるための自己防衛からだとするれば私は最低だ魔理沙の側に居る資格は無い、

でも魔理沙は私にいつもみたいにかいてくれるだろう私は彼女に今まで通りに接する事が出来るだろうか？

霊夢「いつそのまま消えてしまった方が？」

????「情けない私はこんな奴に負けたの？」

語りかける謎の声に振り向くとそこに居たのは、

霊夢「レティ・ホワイトロック！何故貴女が？」

レティ「貴女は言ったわね命の意味をと生きる事は願いと貴女は私を否定したのだろう？なら見せてくれ生きる者の力を」

霊夢「でも私は？」

レティ「この世に完璧なんて存在しないさ？不完全で何が悪いの嫉妬だつて生きた証でしょう？ならそれを抱えて生きればいい、もし今自分の足で立てないなら誰かの手を借りればいい恥ずかしくは無いさ何か一つ欠けているから人は共に歩くのだから」

霊夢「有難うレティそうだよね皆が居るから私が居るんだ私は一人じゃない！」

レティ「突き進むのなら私が力を貸してあげる貴女の決意を私に見せて」

霊夢「私は博麗 霊夢こんな所で止まってる暇は無いだ！」

藍「馬鹿な！私の幻視の領域から人間が抜け出るなんて？」

咲夜「有難う御座います私の原初の思いを再び確かめました」

魔理沙「築き上げてきた絆はこの程度では断ち切れない」

霊夢「生きる事は負の感情も何もかも全て抱え行くことなんだ負の感情も私の一部だ」

藍「チツ！下手に深層心理に干渉し過ぎたか？」

霊夢「行くぞ！」

三人の気迫に後ずさる、

藍

(この私が気圧された?)

霊夢「貴女達妖怪に比べ人間の時間なんて一瞬にも満たないかも知れないだからその一瞬に全てを掛けれるんだ」
(力を貸してもらおうぞレティ！)

レティ

(我と共に叫べ)

霊夢「白符『アンデュレイションレイ』」
レティ(白符『アンデュレイションレイ』)

一陣の風が吹き抜け氷の華が地より咲き誇り、

藍へ氷華の刃が迫る、

魔理沙「あれはレティの技だ」

飛び上がり逃げる藍を氷が追い足を絡め取る、

動きを止められた、

藍「く！それがどうした！私の力は此処からだ、幻神『飯綱権現降臨』」

絡む氷が碎ける、

魔理沙「凄いな本気ってか？」

咲夜「体が震える」

霊夢「大丈夫！私達ならやれる」

当初とは比べ物に為らない程の覇気を感じる幻視の領域に打ち勝った霊夢達を認めたのだ、

藍「遠慮はしない全力で行かせてもらおう出でよ、式神『前鬼後鬼の

守護』」

藍は二体の式神を生み出す、

前鬼は魔理沙へ後鬼は霊夢を藍は咲夜に向かう、

藍「あの心の闇から抜け出すなんて興味深いその強さの理由確かさせてもらいます」

式神の鬼は重厚で鈍重に見えたが俊敏で予想だにしない動きを見せる、

一撃でも喰らえば即死物だ、

霊夢と魔理沙が背中合わせになる、

霊夢「速いけど」

魔理沙「舐めるなよ！」

同時に走る二人は式神の攻撃を紙一重に脇を抜け、

大降りした式神に強撃を叩き込む、

魔理沙「燃え尽きろ！星符『ドラゴンメテオ』」

霊夢「寒符『コールドスナップ』」
レティ（寒符『コールドスナップ』）

竜の火球の如し業炎の流星が前鬼を一瞬で焼き尽くす、

後鬼は氷に閉ざされる。スナップ 写真の様に砕け散る氷と共に後
鬼が姿を消す、

藍「私の式神をこころも容易く退けるとは」

レティ

(見くびられた物ね？ 見せてやりましょう！)

霊夢「散れ！ 氷華」

初め創り出した氷の華が砕け散り藍を包む、

藍「なんだ？」

舞い散る氷に身を隠し刀の切っ先が地を綴り剣先から氷華を咲かせ
藍へ走る、

霊夢「地綴り残月」

綴り上げた切っ先が氷の三日月を創る、

霊夢「まだよ！」

続けざまに創り出した氷の三日月ごと藍を切り抜いた、

砕けた氷の破片が地に触れるとその一つ一つが氷華を咲かせ巨大な氷塊に藍を沈めた、

藍は狐火で氷を一瞬で蒸発させる、

霊夢「この程度で倒せるとは思って無かったけどまるで効いてないわね」

大きく呼吸をする藍、

藍「危なかったですよ？ただ私と相性が悪かっただけです」

魔理沙「よく言っぜ！」

咲夜「まったくです」

大技を連発した霊夢が息を切らす、

藍「長引くのもなんですし此処らで終わらせましょう？我が最大戦技、式神『十二神将の宴』」

地に描かれた巨大な陣が十二の式神を生み出す、

藍「子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥、十二の司りし神将よ戦の宴を舞い踊れ」

十二支を模した式神の軍勢、

魔理沙「霊夢あの技は太陽でなければ駄目なのか？」

霊夢「ええ！藍が言った通りただの光では駄目なの」

藍「なんの相談ですか？しかし今更」

ニヤリと顔を向ける魔理沙、

魔理沙「屁理屈こねない神様だといいただけな、天儀『オーレリーズンソーラーシステム』」

山吹色の光り輝く光球を空に浮かべる、

藍「太陽？」

魔理沙「コイツは擬似太陽だ！パチもんだけどなこれは歴れっきとした太陽だぜ」

魔理沙の思惑は成功した八咫の鏡は擬似太陽に反応し光を集める、

藍「事を終わらせる前にケリを付ける」

咲夜「行かせない、奇術『エターナルミーク』」

無尽蔵とも言えるナイフの雨が何体かの式神を仕留めたが、

藍は目標を霊夢に絞ったのか式神を盾に特攻を掛ける、

咲夜「掛かりましたね！貴女のおかげで私は限界を超えた座標空間の限定時間停止を可能にさせた、幻世『ザ・ワールド』」

停止空間に挟まれ身動きを封じられた、

仕込んでいたもう一つを、

咲夜「ベル、私の力を持って貴女の技を、戦技『全包围結界改』」

ベルは半球状で扱ったが咲夜は空中に全球で創り上げたより高次元での全方砲撃が放たれる、

藍は砲撃に撃たれながらも動きを止めない、

藍「この程度で、式弾『アルティメットブディスト』」

霊夢「間に合ったわ！日輪『天衝』」

藍の式弾と霊夢の光弾がぶつかる、

やはり擬似太陽の光では出力が足りないのか橙の時よりも威力が低い、

霊夢「打ち勝て！」

この声に呼応するように光弾が式弾を破り藍を撃つ、

倒れ込む藍に皆終わったと思っていた、

藍「咄嗟に残りの全式神を防御に回さなければ危なかった」

立ち上がる藍に驚きを隠せない、

霊夢「これでも倒れないなんて？」

藍「いやはや私とて伊達に八雲の名を冠させて頂いている訳ではないのですよ」

霊夢「八雲？まさかそんな」

藍の口から発せられた八雲の名に思い浮かぶ人物、

「????」そのままかよ

次元の狭間、境界に咲く妖花（前書き）

八咫の鏡についての補則、

一般的に三種の神器と呼ばれる三種の遺物、

八咫鏡

やたのかがみ

八尺瓊勾玉

やさかじのまがたま

草薙剣又は天叢雲剣

草薙剣と天叢雲剣は別の剣とされる事も有るが同一の存在、

天照大神の孫にあたる神、

瓊々杵尊（にぎのまこと）が天孫降臨の際に授けられた物、

天孫降臨とは瓊々杵（あしはらのなかくに）に葦原中国を治めるよう天照に命じられ天界から人界へ降りる時の事、

葦原中国、

現在の日本本土にあたる土地の呼び名、

後に瓊々杵尊は木花開耶姫（このはなはくやひめ）との間に三柱の三神をもうける、

注、*儂月抄*に出て来る住吉三神の三柱ではない、

現在日本の天皇継承の際にもこの三種を受け継ぎ勾玉は皇居内に保管され、剣は熱田神宮の本殿に鏡は伊勢神宮の神殿にて奉納されており、剣と鏡の形代が皇居に保管される、

次元の狭間、境界に咲く妖花

空間の裂け目から現れた一人の妖怪、

霊夢「なんで紫が！管理と調停を司る八雲の名を持つあんたがこの一件に荷担してるなんて？」

紫「妖夢を退けたのも以外だったけどまさか藍まで倒すなんて驚いたわ本当に強くなったわね」

手に携えた扇子を綴じて突き付け、

紫「確かに私は調停者よ、だけどね今は違う貴女達の言葉を借りるなら私は私の意思でただ一人の妖怪 八雲 紫 として此処に居る」

胸の前で腕を組み仁王立ちする、

霊夢「此処まで本気の紫を見るのは始めてかもね？面白いじゃない」

強気の姿勢を見せるが、

魔理沙

（ここにきて紫とは、あれだけ大技を連発したんだ今の霊夢はガス欠だ私がやらなければ）

魔理沙は咲夜に目を向けるとどうやら咲夜も考えは同じようだ、

霊夢「久しぶりに弾幕対戦をしてみない？」

紫「よくやってたわね？でも弾幕は空間の次界線を歪ませ私の能力を限定化させる、いつもなら受けて上げるんだけどねわざわざ自分を不利にする戦いを選ぶ余裕はない、今回は勝ちに行かせてもらう！卑怯とは言っまいね？」

霊夢「一つ聞かせて紫が首謀者なの？」

横に首を振り否定する、

紫「私じゃないわこれは私の贖罪なの」

陰りの表情を見せる、

霊夢「贖罪？」

紫「まさか私が相手だから本気で戦えないなんて言わないわよね？
半端な思いは死を招くだけよ悪いけど私は殺す気で行かせてもらう
！」

幻想郷の地でその名を聞き知らぬ者は居ないだろう、

最古参の至高と名高い大妖怪・八雲 紫の名を、

咲夜

（悔しいが今の私には決定打が無い私達に勝てるだろうか？）

ほんの少し目を逸らし思考を巡らせていた咲夜の前から紫が居なくなり真後ろから声がする、

紫「よそ見してちゃ駄目よ？」

咲夜の後ろに立つ紫の右手が咲夜の胸を貫いていた、

よく見ると体の表明にスキマが在りそこから手が伸びている今直ぐにでも殺せると言う意思の表れである、

紫「相手から目を逸らすなんて甘いわよ？此処まで来た勇氣は褒めてあげるけど勇者ゴッコも終わり大人しく帰りなさい」

霊夢「それは出来ない相談ね？だって約束したんだから妖夢に必ず幽々子を止めるって」

紫「いいわ！気は変わらない様ね掛かってきなさい 太古の幻想郷に次元の魔女と恐れられた我が力を」

（あの妖夢が他人に托すなんて？この子達がそれだけの力を見せたのね）

世界が震えると錯覚させる程の力の奔流、

その目を見ただけで底から沸き上がる恐怖で逃げ出したくなる、

魔理沙

(臆したら負けだ気を強く持て)

紫「これ以上無駄な会話は要らない始めようか！」

構える三人にゆっくりと組んだ腕を外し、

紫「色即是空！そう我等に対し人の時など存在しないに等しい事と
教えてあげる」

霊夢「空即是色！例え刹那にも満たない時だとしても確かにそれは
存在するんだ」

紫「だけど力の差は歴然！感情に愚直に生きる者から早死にしてい
くのよ」

大きく開いた紫の能力による次元の断層、

紫「誰にも知られる事も無く深淵の世界をさ迷い朽ち果てなさい」

空を覆い尽くす無数の大口を開ける漆黒の空間、

咲夜が一番に動く紫の力は不明な点が多いまず能力の見極めに陽動
を掛ける、

咲夜

(どう動く?)

しかし陽動と見透かされていた紫は微動だにせずやり過ごす、

咲夜が次の行動に移ろうと距離を取ろうとした、

紫「初見の攻撃が失敗したら距離を取り次に備える確かにセオリ―通りね」

後方へと下がる咲夜に背後から攻撃を受け地に叩き付けられる、

咲夜「な！何が？」

背に走る鈍痛を堪え立ち上がり紫を見ると、

紫の右腕が肘から先が無い振り向くと開いたスキマから右腕が伸びている、

紫「教科書通りの戦い方じゃ私は討てないわ」

事象の境界を操り空間転移すら可能な紫において領域戦闘の概念は無い目に見える場所全ての有視界領域が紫の範囲である、

紫「まずは私を本気にしてみなさいな？」

魔理沙「紫に距離の意味は無いだったら畳み掛けるだけだぜ」

一人で突っ走る魔理沙が刀を手に紫に挑む、

紫「あら？面白い趣向ね乗ってあげる」

紫が取り出したのは傘、

魔理沙「傘？馬鹿にして」

傘で刀を受け止める紫、

紫「大真面目なんだけど？存在の境界を弄って在るからこれは立派な刀切れ味抜群よ」

魔理沙「そうかい！」

執拗に纏わり付くように戦う、

紫「近距離ならどうにか成ると？」

(何を狙っている?)

刀を受けると同時にスキマが開き魔理沙へ魔弾が放たれる、

吹き飛ぶ魔理沙を霊夢が受け止める、

霊夢「無茶しすぎよ！」

(魔理沙のことだ、きつと何か仕掛けたな?)

魔理沙「助かったよ」

紫「今度は私からよね」

スキマの中に飛び込み隠れる、

霊夢「どこから来る？」

空間に罅^{ひび}が、

霊夢がその場所に走り出始めを叩こうとしたが、

背に触れる手の感触がする、

紫「こんな簡単な物に引っ掛かっちゃ駄目でしょ」

背中への直付けで魔弾を撃たれ前のめりに飛ぶ、

受け身を取ること事には成功したが霊夢の動きに微妙に違和感が見える、

悟られぬよう努めていた霊夢だが咲夜の目には違って見えた、

咲夜「動きがぎこちないアバラを何本がやられたな？」

スキマから上半身だけ出した紫が笑う、

紫「まだまだね？あつさりと騙されてくれてこれで分かったでしょう
貴女は博麗の巫女と神輿に担がれていればいいのよ」

皆が笑う、

魔理沙「また随分と貧乏な神輿だな」

咲夜「そうですね」

霊夢「私って担がれてたの？にしては扱いがぞんざいじゃない御賽
銭を誰も入れてくれないにね？」

紫「それはさておきねもつと普通の生き方も出来るのよ？危ない橋
を渡ることもない普通な女の子として」

霊夢「そうね普通も悪くない見てよこれ？危ない事に顔を突っ込んで生傷の絶えない日々、跡が一生消えない傷も幾つか在るわ、でもねこれが私なの普通の女の子じゃ詰まらないじゃない！」

笑いが堪えられない様子で紫が吹き出す、

紫「あー面白い！流石は霊夢ね聞かせてもらったわこれは本気でやらなきゃ失礼よね」

霊夢

(私も見たことの無い紫の本気？)

前方へ手を交差させる、

紫「私は少々面倒でね目標沈黙までの間、拘束制御術式の承認認識による能力使用限定解除、『第一種永久機関』活動開始」

永久機関

十八世紀から十九世紀にかけて提唱された無限にエネルギーを作り

出す装置しかしどの方法でも作り出せず失敗に終わった物だが物理学の進歩に多大な影響を与えた、

紫「こんな役目に就いてると色々柵しがらみや制約も多くてねどうしたの震えてるわよ？」

霊夢「悪いわねこれは武者震いよー！」

紫「それは結構！やろうか霊夢？」

霊夢「上等よ！ならば行かせてもらおう」

刀を地に突き刺した地点から氷の柱が幾本も突き出し紫へ伸びる、

魔理沙「ハハ！何でも在りか？」

紫「綺麗ね？だけどたかが氷！」

迫る氷を紫は正面から打ち砕く氷が散り空に舞う、

藍へ繰り出した時と同じく刀で地を綴り、

死角からの奇襲を紫に仕掛ける、

しかし完全なタイミングに虚を突いたはずの一撃は防がれた、

紫「地綴り残月、藍に使っていたわね？本来は巻き上げた土砂で視界を奪うと同時に下から切り上げるものでしょう？一度見せた技で私を倒せるなんて安く見られた物ね！」

手に妖力を集め霊夢を打つ事も出来た筈だが敢えて刀だけを砕いた、

霊夢「そんな私の刀が？」

少し肩を落とす紫、

紫「その踏み込みの甘さが私に伝える、出し惜しみは良くないわも
っと良いおもちゃを持つてるでしょう？」

霊夢「何でもかんでも御見通しかい！」

折れた刀を投げ捨て両手の掌を合わせ、パンツ！と乾いた音が響き
八咫の鏡が現れ鏡の中から一降りの神刀、布都御霊ふつのみたまを抜き取る、

霊夢

（握っただけでこの痛み、だけど）

本来なら人には触れる事も出来ぬ神刀を扱っ対価、人には余る刀の
力に侵食され体を蝕む死の宣告が広がっていく、

紫「とんでもない隠し玉だわまったく毎度楽しませてくれる…！
？」

飛んできたナイフを避け打ち払う、

咲夜「何二人だけで盛り上がりすぎてるんですか私達も居るんだから」

魔理沙「そうだな勝手に外野扱いされても困るぜ？」

向かい来る二人に、

紫「そうだったわね御免なさい」

魔理沙「紫あんまし人間を舐めるなよ！」

咲夜「人の意地を」

目をカッと見開く、

始めて紫からの動きを見せる、

紫「闇の羽音を聴きなさい、魍魎『二重黒死蝶』」

扇子を靡かせると黒い粒が空に浮かび黒蝶へ変わる、

紫「舞え死の黒蝶よ」

掛け声と共に一斉に飛ぶ蝶、黒い輝線を描きまるで空間を削りながらに羽ばたき、

蝶の羽が魔理沙の腕を掠める、

魔理沙「なんだ？腕が重い」

紫「その蝶は生命力、命を喰らう油断すると死ぬわよ！」

後ろに下がった咲夜が構え直し蝶へナイフを投げる、

咲夜「全て叩き落とすだけよ！」

黒蝶を打ち落とす咲夜にスキマから紫が飛び出す、

紫「私も居るんだから」

紫の傘を咲夜が受け止まった所を狙い蝶が迫る、

霊夢「それはこっちにも言えるのよ!」

咲夜を狙う紫に刀を降ろすとけたたましい轟音と共に斬撃が走る、

避けられたが集まっていたのが幸いしてか余波に黒蝶を蹴散らした、

凄まじい力を誇る布都御霊だが霊夢は刀の力に振り回され、

霊夢「御仕切れない振られる?」

魔理沙は霊夢が布都御霊を手にする経緯を見ていたからこそその危険度を知っている、

魔理沙「霊夢、無茶するなよ！成り振り構ってられないな？」

腰のポーチから数個の球体の道具を出す、

魔理沙「香霖堂で香霖から無理矢理に買い取った S ランクの魔具だ」

ちよつと前ある日の香霖堂、

霖之介「駄目だ！これは売れない危険過ぎる！」

魔理沙「だからだよ！これ程の魔具が手に入る機会なんだぜ」

霖之介には道具の名称と能力を知る力が在る、

自動自律起動兵装に装備した者の魔力を増大、尚且つその増強した
内在魔力により肉体活性を起こし身体能力を飛躍的に上昇させる、

霖之介「いつ造られたかも分からない古い代物だ正常に動作する保
障もない何より発動制限が一回だけだなんて不安要素が大きすぎる」

一昼夜の押し問答の末に無理矢理に買い取った魔理沙、

霖之介「分かったよ譲ってあげるが条件がある！どうしようもない
状況で何をしてでも魔理沙が守りたいと思う時にだけ使って約束
してくれ」

.....
.....

魔理沙「何をしてでも守りたい物が在る時、今がそうなんだよ」

魔具の一つが首と二つが両手首に取り付き紅い紅玉へ変わる、

周りを自律起動兵装が展開する、

急激に上昇した魔理沙の魔力に紫が驚く、

魔理沙「無事に作動したな？行ける！」

魔理沙が突撃する、

紫は少し油断していた、

まさか一番離れた位置に居た魔理沙が自分の眼前に居るのだ、

紫は咄嗟に傘を盾に身を守った、

魔理沙の剣が傘を切り落とす、

紫「私の傘が?!」

初めて紫に膝を付かせた、

魔理沙「どうだい！脆弱な人間に膝を付かされた気分は？」

立ち上がる紫は綺麗に切れた傘を見て呟く、

紫「悪くないわねこの傘気に入ってたのに？」

ぽいと傘を捨て、

紫「やるじゃない？こつでなくちゃ！」

更に気が大きくなる、

空中に幾つも足場を創りそれを足掛かりに移動する咲夜、

咲夜「流石は八雲の大妖怪ですね」

空からナイフを投げる、

紫は魔弾を撃ち返しナイフを弾く、

咲夜「見もしないで自分に当たるナイフだけを落とした？」

紫「誉めても何も出ないわよ？」

魔理沙の遠隔兵装が紫を囲み砲を撃つ、

魔理沙「誰も誉めてないぜ」

常に正面に紫を捉えながら動く魔理沙は自動兵装を死角や逆方向に配置する、

紫「やらしい戦い方ね？」

魔理沙の刀を受ける紫、

魔理沙「誰かさんに似たのかね？」

スキマを使う紫のオールレンジ戦闘とやり口が少し似ている、

咲夜「貴女の方も万能ではない！動き続けていれば」

魔理沙の遠隔兵装と違い紫のスキマは空間に固定した物である、

紫「確かにそうね？自身の能力よ重々承知している」

移動地点を先読されたのか？スキマに囲まれていた、

紫「点で駄目なら面で囲めばいい逃げ道が無いなら？」

砲が撃たれる寸前で魔理沙が咲夜の手を引っ張り助け出した、

魔理沙「セーフ！間に合ったぜ」

紫「早い！」

同じ様に紫を取り囲む魔理沙の兵装、

魔理沙「お前が弾幕勝負を受けなくてもこっちが勝手にやらせてもらっぜ」

飛び交う砲弾にスキマから逃げるはずだった紫だが上手くスキマが開かない弾幕に次元が歪んだのだ、

紫「狙いはこれか？だがそう簡単に、奥義『弾幕結界』」

弾幕で弾幕を打ち消す紫の防御術、

魔理沙「隙が無いな？」

だからといって退く訳にも行かない、

積極的に攻勢に出る魔理沙、

咲夜は魔理沙のバックアップに回り援護する、

霊夢「くそ！どうすれば制御出来る？やはり人には余る物か」

紫「何処で手に入れたか知らないけど？刀に振り回されてるじゃない日頃の修業不足が祟ったのねそれじゃ宝の持ち腐れよ」

少し考える、

霊夢「人じゃ駄目なの？」

（人？そうかこれは神の剣なんだ人に扱える訳無いでしょうが！）

刀を握る手に神力を集めると布都御霊の出力が打って変わり安定する、

紫にとって注視するべきは魔理沙だけ咲夜は自分に対し有効な手が無く霊夢は刀の力に振り回されていると思っていた、

鋭い斬撃が走る！紫は防御を考えたが体を駆け巡るぞつとする様な悪寒に逃げた、

紫「今のは一体？」

神刀を手にし、

霊夢「やっと落ち着いたこのじゃじゃ馬が」

刀から発つする悍ましいまでの気に冷や汗が垂れる、

紫「フフ！これ程の緊張千年は無かったわ」

魔理沙「物にしたんだな？」

不適な笑みをこぼす紫、

紫「私は肉体派じゃないんだけど？そうも言ってもらえないわね」

足を踏み鳴らし大きく体を広く構える、

紫「体裁を気にせず暴れてみるのも悪くないかもね」

スキマを開き両手を差し込み引き抜くと朱塗りの紅い手甲を握る、

紫「千年ぶりよ！これを見に纏うのは？」

飛び掛かる霊夢、

霊夢「ご大層な物をありがとね！」

霊夢を剣を手甲で受け止める、

紫「これもちよつとした業物よ」

遠巻きに眺めていた藍が呟く、

藍「人間相手に紫様があれを使うとは？」

(ちよつと所の物ではないがな)

紫が手甲を付けてからスキマに逃げる事をしなくなった、

正面切って向かい弾幕の弾を全て叩き落とす、

紫「さっきまでの威勢はどうしたの？」

魔理沙「だったらこれも防いでみるよ！星符『ドラゴンメテオ』」

天から墜ちる業炎の火球、

紫「量より質で勝負と？避けれない私と思って」

長い付き合い同士の無言の目配せを理解し素早く後ろ回った霊夢の放つ斬撃が空へ走り火球を打ち砕く、

火球は飛び散って降り注ぐ、

魔理沙「質よか量で御挨拶だぜ」

一瞬の出来事に紫は止まってしまい直撃する、

魔理沙「どうだ！」

煙りが立ち上る場所から紫が転がる様に飛び出る、

流石の紫も無傷ではいられ無かったようだ、

藍「ほおー！紫様に手傷を負わせるとは？」

額から流れる血を拭う、

紫「やられたわ侮っていた？」

煙りから迫り光る一閃を防ぐ、

咲夜「私とてこのままでは終わりません」

咲夜に続く霊夢、

紫は手に妖力を集め球体にし地面に叩き付ける、

圧縮された妖力が一気に解放する、

紫は自らもダメージ覚悟で咲夜と霊夢を爆風に巻き込む、

吹き飛ばす二人受け身を取る霊夢の右の袖が破ける、

霊夢の腕は白く鉱物のように硬質化していた、

魔理沙「なんだよ霊夢それ？」

紫「貴女まさか？」

破けた袖を結び直す、

霊夢「紫は知ってるみたいね？そうこれは力の代償、この体を全て侵食した時私は死ぬ」

魔理沙「なんで言ってくれ無かったんだ！」

霊夢「魔理沙にだけは見られなくなかった少しずつ人で無くなっていくこんな姿を魔理沙にだけは」

先程より明らかに侵食が進んでいる不確かな物ではない目に見える死の指標、

表には出さなくても沸き上がる恐怖はどうしようもない、

黙っていたレティが霊夢へ語る、

レティ（貴女の恐怖が伝わってくる臆さないで存分にその力を使って進行は私が食い止める！）

心の中で会話する、

霊夢「何故ここまでしてくれるの？敵だったのにましてや私は貴女を殺したのよ」

レティ「私は自分の負の心に取り込まれ閉じ込めていた感情が溢れ出し止められなかった、しかし彼等を手に掛けたのも事実だ否定はしないあの行いを殺人衝動を享受した自分がいた」

霊夢「でもそれは？」

何か言葉を探す、

レティ「あれもレティ・ホワイトロックという私の中の一人なんだ！貴女が言った命の意味が今なら分かる気がする？この程度の事で私の罪が消えるとは思っていない今私に出来ることが在るなら惜しみはしない例えこの魂が朽ちても構わない」

二人にこれ以上の会話はいらなかった、

霊夢「預けるよ全部！」

レティ「任せなさい！」

紫の目を見据え、

霊夢の目に込められた決意、

紫「その意気や善し逢魔が時を見よ、魔眼『ラプラス』」

紫の右目が深紅に染まる、

霊夢「今の私は一人じゃない」

異形に光る紅い目で睨みつける、

紫「星の光り満ち満ち足りとて月の光り敵う事能わず、いかに寄り集まるうと強大な力の前には平伏すしかないのよ」

咲夜「その鼻っ柱を叩き折ってやる！」

真上から降って来る咲夜、

紫「ラプラスの悪魔」

しかし咲夜の攻撃は予め予見された如く躲される、

紫「見えてるわよ」

咲夜の脇に立つ紫がまさかの掌打を打つ、

藍「紫様が体術を扱われるなんて？」

紫「ラプラスの悪魔を発動させた今の私は簡易的な未来予測を可能にする」

ラプラスの悪魔、
未来の決定性を論じる時に仮想された超越的存在の概念、

立ち上がる咲夜が動きだそうとした時、行く方向へ紫が行く手を塞ぐ、

紫「左へ逃げる？言ったでしょ見えてるって」

霊夢「咲夜！」

間に割って入り咲夜を守る、

紫「何？」

(何故霊夢の動きが読めなかった)

霊夢「あら？私の行動は先読み出来ないみたいねそいつは僥倖じやうしやう！」

紫「いつも思いがけない事してくれるんだから」

レティに抑えてくれる今は霊夢は大量の神力を引き出している、

体力の増加にほぼ縮地による移動いくら他の二人の動きが先読み出来ても追い付かなくなる、

しかもそこに魔理沙のオートにした自動兵装が付いて回る、

魔理沙「私の動きは読めても意思を持たない魔具の動きまでは読めないだろう?」

紫はどちらかと言えば技巧派であり霊夢達は肉体派と言える単純に技で競えば勝ち目は無いだろうが一点特化だけで戦いには勝てない、

咲夜「まただ!また私は何も出来ないまままだこれで良いのか?嫌だ終わってたまるか!」

一も二も無く走った咲夜の回りを囲むよう剣が生まれる、

紫「なんだ？ごちゃごちゃしてハッキリしない思考が読めない」

目にも留まらぬ斬撃の猛攻に防戦一方になる紫、

自身を囲む十数本の剣を高速に持ち替えて打ち込む、

紫もなんとか防げるといった様子だった、

全ての剣を円錐状に束ね一点を突く、

紫はガードを弾かれ大きく体勢を崩す、

ナイフを抜き紫の心臓を狙う、

紫「まだ王手には速い、幻巢『飛行虫ネスト』」

倒れかける紫が手を振り上げると地面に小さく開いたスキマから空へ蛾のような発光する光弾を放つ、

咲夜の胸を打つ光弾に対しナイフの刃先は紫の衣服の胸部を掠めるに留まった、

とても相打ちと呼ぶには苦しいものだったが一つの成果はあった、

口に溜まる血を吐き捨て、

咲夜「なるほど？いくら先読みが出来ようと関係ない反応速度を上回ればいいだけだ！」

紫「痛いところ突いて来るわね？」

ラプラスの悪魔による未来予測はあくまでも簡易的なもので絶対でないおよそどう動くかを知る程度の力である、

紫がビクツと体を脈打たせ、

紫「ふうー！やっと調子が出てきたみたいね？動き出しが悪いから苦
勞するわ」

紅い目の中に歯車の様な物が見えそれが高速で回転し始める、

既に活動していたと思われていた紫の永久機関は今動き出したのだ、

体力が初期の時より上昇している、

紫「これからは派手になるわよ！」

魔理沙「知るか！」

またしても一人突っ走る魔理沙、

霊夢に嫌な予感が走り、

紫が扇子を開いて縦に降る、

魔理沙を守った霊夢の後方へ鎌鼬が通った如く大地が割れる、

もし霊夢が来てくれ無かったと思ったたらゾツとする、

紫「魔理沙？これが今の貴女よいつも一人で突っ走っては誰かに守られてばかり貴女は足手まといでしかなのよ」

霊夢「黙れ！」

紫「ん？」

霊夢「黙れよ！」

強く声を荒げ、

霊夢「知らない癖に魔理沙を語るな！」

思い切り刀を地面に突き刺す、

霊夢「何を知っている？魔理沙の何を！確かに愛想悪いし勝手だしぶっきらぼうでガサツだしオマケに物盗ったりするよ」

魔理沙「それ全然褒めてねえーよ？」

霊夢「でも私は知っている！いつも陰で努力して辛くても弱さを見せずに一人で必死に頑張ってる姿をそんな魔理沙を馬鹿にするようなら誰であろうと例え紫でも許さない！」

魔理沙「霊夢、ありがとよ」

二人して刀を紫に突き付ける、

霊夢「一人では勝て無くても皆でなら勝てる」

扇子で口元を隠す紫、

紫「だがそれは自らの非力を力無さを棚に上げた言い訳に過ぎない
ただの戯れ事よ！ 結界『動と静の均衡』」

微かに笑みを湛えながら扇子を持つ手を払う、

だが特にな変わった感じはしない、

魔理沙が一步脚を前に出そうとした時、

魔理沙へ魔弾が迫る、

避ける魔理沙と思わず動く霊夢と咲夜、

すると何処からともなく二人にも魔弾が襲う、

咲夜「一体何処から？」

紫「動いたわね！もう逃げられない」

何か紫が仕掛けている様子は無いしかし三人に絶え間無く襲い掛かる魔弾の雨、

紫「有機無機に係わらずこの世の存在は力学的な力を持つ動静の均衡点から外れた物をオートで迎撃する術式よ人間に均衡点を見付けるなど不可能！」

魔理沙「オートって事は紫は自由か？」

避ける事に手一杯の魔理沙に紫が迫る、

紫「あら！お気づき？」

紫の右手が魔理沙を捉える、

霊夢が紫を手を打ち払う、

魔理沙を守った事で魔弾が直撃する、

すかさず咲夜が霊夢を庇う、

魔理沙「済まない霊夢」

霊夢「大丈夫！謝ってる暇は無いわ次が来る！」

しかしオートである以上軌道やタイミングはどうしても機械的にな
ってしまっ、

三人その感覚を掴むまでそうは係らなかつた、

紫

（この対応力これはもう運や偶然で片付けられないな此処に来るわ必然か？この手は余り使いたく無いのだけど）

咲夜「所詮はオート軌道を掴めば！」

紫「それはどうかな？式式ラプラス分布」

咲夜「パターンは掴んだ」

（あとは前方からのをやり切れれば切り込める）

思惑通り前方から発生する魔弾、ギリギリだが避けられると踏んでいたのだが、

咲夜に魔弾が直撃する、

咲夜「ガッ！」

（何故、回避したはず？）

新に生まれた弾が追い撃ちを掛ける、

霊夢、魔理沙が魔弾を潰し庇う、

咲夜「避けられたはずだったのに読み切ったと思ったのですが？」

会話をするために一旦術式を止め、

紫「どう？びっくりした！これから起こる連続的確率運動は変化する」

ラプラス分布連続的な確率分布の変動、

紫「命中率回避率の確率を分布し感覚による概念に係わらず確率により行動が決定される」

霊夢「つまり100か0でない限り誰にも解らないと？」

紫「物分かりが良いと助かるわ」

パチンツと指を鳴らす、再び三人に魔弾が襲う、

動くに動けない確率を捻曲げられている今、回避防御不可の攻撃が来る、

魔理沙「確率ってんならずっと当たらないって事も在る訳だろ？」

紫「まー間違いじゃないわね」

霊夢「喰らう事前提で覚悟決めるだけね」

咲夜「簡単じゃないですか？自分から全部100に持って行けばいい」

敢えて魔弾へ飛び込み潰していく、これなら確率の変動は無い筈、

各々各自の考えを持ち行動を起こす、

紫「失念してない？貴女は今二つの行動を重ねているこの場では全てが確率によって左右されるのよ」

弾く防ぐといった行動に完全は無い、

咲夜の剣は魔弾を素通りする、

咲夜は顔面を殴打されのけ反り額から激しく出血し左の目を血が塞ぐ、

眼球自体は無事であるが流れる血に視界を半分奪われてしまった！
まともに目を開けていられない、

だが不思議と追撃が来ない、

紫「機は満ちた、『魔眼ラプラスの魔』」

(私がこの力を自ら使うとは)

魔理沙「無事か咲夜？」

咲夜に駆け寄る二人が傷の具合を確認する、

紫は手当が終わるまで待つつもりのようにだ、

紫「終わったかしら？」

霊夢「お次は何よ今までみたいに教えてくれないの？」

紫「簡易的には言え未来を読むラプラスの悪魔、確率を捻曲げる

ラプラス分布その式式を持って発動するラプラスの魔、私が自分の中で最も嫌う力」

ラプラスの魔

曖昧さを回避する

紫「私は曖昧な物が好き何にも属さない中間の存在だから私は曖昧さが大好き、ラプラスの魔 曖昧さを否定し必ずどちらか一方に振らせる力」

霊夢「つまりは100か0の二極しか認めないと」

紫「本当に理解が早くて助かるわ私は貴女達を過小評価はしない全力で潰す！卑怯者と言われようが構うか、結果『光と闇の網目』」

光と闇は科学において光量の違いによる差にすぎず明暗どちらも光を発しそこに境界は存在しない、

紫「人が持つ五感しかし人は八割以上を視界に頼る」

薄暗がりな空間に四散していく紫の体、

紫「光の透過率を上げれば透明人間なんて事も出来る」

視界から消える紫、

霊夢「まずい！このままでは狙い撃ちにされるわ」

三人は一カ所に固まる、

咲夜「見えないからって居ない訳じゃない炙り出してやる、幻符
殺入ドール」

咲夜は空へ上がり大地に向けて弾幕を撃ち放つ、

巻き上がる煙りに魔理沙が違和感を感じたが気のせいだと思った、

紫はスキマには逃げていないスキマを開けば場所がばれる、

霊夢「でも見えないんじゃないや当たったどうかも確かめようがないわね」

とりあえず煙りが消えるのを待った、

魔理沙

（もただ見間違いないな、もしかしたら？）

しかし不気味なのは姿を隠し絶好のチャンスにも係わらず何も仕掛けて来ない紫である、

魔理沙「私に考えが在る予想が当たれば紫を見付けられる」

魔理沙の提案に二人は二つ返事で了承した、

魔理沙「まずは大きめな石が欲しい出来るだけ硬質なやつが良い」

霊夢「何をするつもりかしら？待っただけよりはよっぽど増しね」

刀に霊力を集め地に突き立て大地をえぐり出す、

露出した石を咲夜が打ち上げる、

すると何かを察知したか紫が魔理沙を狙う、

咲夜と霊夢が魔弾から魔理沙を守る、

受け切るしか無いラプラスの魔が発動し避ける事が出来ない避ければ魔理沙に当たってしまう、

魔理沙「悪い耐えてくれ、行くぞ！」

自動兵装を操作し打ち上げられた石を細かく砕いていきそれを広範囲に散布する、

二人は魔理沙が何をしたいのかが解らない、

集中して辺りを見渡す魔理沙、

魔理沙「見付けたぜ！」

魔理沙が走った先で刀を振ると何も無い所から金属音が響く、

伸ばした手が何かを掴む、

魔理沙「見付けた」

紫の体が徐々に現れる、

紫「なんで私の正確な位置を掴めた？」

それは眺めていた二人も思った、

霊夢「どうして分かったの？」

魔理沙「咲夜が地面に向けて撃つてただろ？あの時にな煙りが妙な形で削れていたんだ」

咲夜「私は全く気付きませんでした」

会話に気を取られた隙に距離を取る紫、

魔理沙「あ！まあいいか光の透過率を上げ透明になる原理は簡単だ、でも辺り構わず透明にしたら意味が無い恐らくは自身に触れる物又は極近辺のみを透明にしている、だから塵をばらまいて不自然に削れてる所にいると踏んだのさ？」

ポカンと説明を聞いていた紫、

紫「こんな簡単に見破られると思っても見なかったわ私自身そんな弱点が在ったなんて気付かなかった」

魔理沙「ただ言えること同じ手は二度目は無いぜ」

紫「自身の力を知るいい機会になったけどラプラスの魔の支配下にある限り貴女達が不利な事に変わらないわ」

手甲をぶつけ火花が散り少しだけ明かりが灯る、

飛び散る火花が魔力の球となり空に浮かぶ、

見ただけで分かる密度が違う、

並の妖怪程度なら触れただけで蒸発するだろう、

撃たれる前にと咲夜が距離を縮める、

紫の口元が緩む、

霊夢「待って！」

遅かった空の球は膨れ上がり破裂し、

炸裂弾となった砲の中心に咲夜は居る、

これだけの砲の中に居ては死ぬ、

爆裂する砲弾による硝煙と爆音、

魔理沙「そんな！」

しかし魔理沙が見たものは倒れている咲夜だった、

咲夜「うう、私は？」

魔理沙「え？なんで咲夜が？」

霊夢は自らの肉体を盾に咲夜を突き飛ばし身代わりになっていた、

刀を杖になんとか立っている様子の霊夢、

咲夜「私の所為で」

霊夢「大丈夫よ！今の私は簡単には死なないわ」

傷が見る間に治っていく、

驚異的なまでの回復力、

人為らざる力を見る、

それでも咲夜の目に涙が浮かぶ戦意が消えかけていた凶らずも霊夢や魔理沙に友情に近い感情抱いていた自らの軽率な行動で危機に晒し怪我を何より単純に己に直面した死の恐怖が縛り上げる、

霊夢は咲夜へ擦り寄り胸倉を掴み叫ぶ、

霊夢「あんたは何のために此処に来た？ただ情けなく逃げ帰るためか？違う私達は勝ちに来たんだ！泣いて目を閉じる暇が在るなら剣を取れ」

咲夜が笑う、

咲夜「そうでしたね負けるために来たんじゃない、そう勝つために！」

（お嬢様方がこの二人を好きになられたのも分かる知らず知らず周りを巻き込んでいく不思議な力）

もやもやしていた咲夜の心が晴れる、

何か色々と回りくどく考えていた自分が馬鹿みたいに思えた、

咲夜「面倒臭いの抜きに気楽に行きますか？」

吹っ切れた咲夜は強かった、

足取りが軽い風の如く駆ける、

咲夜「もう迷わない難しいのは止めだ！」

純粹に闘いに興じる、

死に直面したこの状況に置いてあっても咲夜の顔に笑みが浮かぶ、

魔理沙「笑ってるぜ」

紫の回避行動が間に合っていない、

紫「先読みが追い付かない？ 疲れるから嫌だったけど」

後手に回っていた紫が咲夜の剣を弾き返す、

咲夜「？」

紫「肉体活性ゴどきが私に出来ないと思った？もうこれで遅れは取らない」

今度は紫から攻め立てる、

魔理沙「おいおい？紫ってあんなに体術が長けてるとはな」

霊夢「そうね」

だが意気込みを他所に紫にまともに当てられない、

三人の攻撃は全てが手甲に防がれる、

敵とはいえその流れる様な動きに見取れてしまう、

その間も飛び交う光弾を避けようとするも行動がキャンセルされたように元に戻される、

狙っている以上は0%は有り得ない因って回避は不可能、

あくまでも一方的に紫にのみ有利な力、

紫の顔から余裕が消え殺意と破壊純粹な妖怪の一面を見せる、

咲夜「まだまだ」

正面からの打ち合い負け攻め倦ねる、

増大した紫の妖力に反応し手甲が変容する守りを目的とした流線型の型をしていたが攻撃的なフォームへ変わっていく指先まで覆われるそれは命を刈る紅き爪となる、

魔理沙「それが本当の武器って訳か？」

紫「誇って良いわ人間相手にこれを使うのは二回目よ」

飛び込む咲夜、

より強い強敵との闘いに心が躍る、

変容したとて手甲は元の防具としての機能は失っていない、

魔理沙は後ろへ下がる時に地に砲を撃つ巻き上がる岩を紫へ飛ばす、

その爪の切れ味は岩を軽々を切り散らす、砕けた岩の影に隠れ魔理沙の刀が迫るが紫は読見切り刀を掴む、

爪が首を狙う半身ずらしたが躲しきれず頬を切る、

刀を掴む手を振り払う、

魔理沙「先読みされてるんじゃない？」

咲夜「それがどうした！」

これまでと気迫が違う、

妖怪や悪魔の住まう紅魔館で人間で在りながら戦闘指揮を任せられる程の存在、

その特筆すべき点は鉄火の扱いに優れている事でも能力の異質さでもない、

ずば抜けた洞察力と観察力は妖怪のそれをも遥かに上回る、

紫の動きに見える僅かな癖や特長の細部を見抜く、

咲夜の動きが加速しているように見え紫は自分が鈍くなった感じた、

紫「どうなっている？これが先程までと同じ人間の動きか？」

べつに咲夜が速くなった訳ではない初動の出始めを叩かれ続ければ
そうも感じるだろう、

ついに紫の反応速度を越える、

紫「くう、境符『色と空の境界』」

小さく鳴り響く微かな音、

何か新たな力を発動させたようだが相手が地に伏せる絶対の好機にと
地を蹴り上げて跳び上がったはずの咲夜が頭を強く地面に打ち付け
た、

何が起きたのか理解出来ない、

霊夢や魔理沙も同様に上手く体が動かせれない、手を動かしたいのに足が動いたりと思えばと肉体の感覚がズレる、

紫「危ない・危ない・どう不思議な感覚でしょう？」

あたふたする二人を他所に咲夜は感覚をズレを確認する、

咲夜「大体の感覚は掴んだ問題ない！」

ほぼ正常時と変わらぬ動きを見せる、

紫「馬鹿な！この短時間で理解したと言うのか？ならこれでどうだ、境符『波と粒の境界』」

量子力学の定義において光は波と粒どちらの特性も観測することができ光を構成するものがどちらに属するかと言う協議にてその境界は今だ説明されていない、

小さい光の球を握り潰し弾け飛ぶ光、

成り行きを見ていたが何も起きないがその目に光は届いていた、

魔理沙「咲夜の奴よくやるぜ頭がおかしくなりそうだが、でも何となくは掴んできたぜ」

霊夢「感心するわ、さらっとやってのけるんだから」

苦笑いを浮かべる紫、

紫「普通なら動くなんて考えられないのよ？」

咲夜「お褒め頂き感謝しますわ」

裏をかかれ背後を取られた紫、

咲夜「取った！」

しかし立体映像みたくすり抜けた、

幻といったような類いではない根本から違う、

紫「人や妖怪に限らず生きる物が見るといふ行為は光情報を目の神経を通し脳で見ている、さっきの光で貴女達の目に細工させてもらったわ？」

霊夢「何ですって？」

紫「私 八雲 紫 という光情報は目の中で変換され在りもしない虚構を私と認識してしまう人は八割以上を視界情報から判断するはたしてこの私は本物かしら？」

今見ている紫は恐らく偽物だろう、

魔理沙「何処に居る？」

紫「後ろに居るわよ！」

背後からの声に気を乱してしまう、

一度乱してしまったら立て直すのは苦労する、

本当は振り向きたかったが体の融通が利かない、

無防備なままに痛烈な一撃をもらに喰らう衝撃が突き抜け口の中に
鉄の味が広がり血を吐く、

急行するもそこに紫はもう居ないまた隠れてしまった、

魔理沙「ちくしょー容赦無いぜ」

霊夢「大丈夫なの？」

魔理沙「なんとなかな？でも咄嗟の判断が効かないどうしたもんか」

相手方の攻撃を善いように一方的に受け続けるしかないこの状況でしかも五感の内の二つ視界と感覚を奪われた今は打て手が無かった、

咲夜「そうね見ても意味ないのなら」

落ちている石を拾って投げ転がる石はカラカラと渴いた音を発てる、

咲夜「音の方向に誤差は無いか？耳は問題無いようね」

ゆっくりと目を閉じ、

紫

(心配で私の位置を察しようとしてもゆづのかしら?)

咲夜「聴覚も奪ったのだったわね!」

両手にナイフを持ち二本を力の限りに叩き合わせる、

キーンツ！と鋼特有の強い金属音が響き渡り、

魔理沙「なんて音だ！」

迷いなく咲夜が剣を走らせると何も無いはずの場所から布を切る音と微量ながら剣先に血痕が付着していた、

紫「馬鹿な！音の反響を聞き取るなんて？人間の領分を超えている
！」

咲夜の剣は紫の二の腕を僅かだが捕らえ滲み出る血を抑える、

元々大気の流れを読む事に長ける咲夜、その流れの中の反響を掴むのは不可能ではない、

大まかでは在るがある程度の位置を掴みはしたがやはりまだ決め手に欠ける、

見えぬ相手との打ち合いに勝ほど難しい事は無いだろう、

何かまた閃いた魔理沙、

魔理沙「大体の位置は分かるのか？」

咲夜「あくまでも大体ですが？」

魔理沙「大体で十分だぜ！」

空へ駆け上がり、

魔理沙「私を飛んで跳ねたりするだけの小娘と思うなよ！紫お前なら知ってるだろ？重力は光をも捻曲げるってな！」

空気の流れが魔理沙へ集まり、

地上に居る霊夢達が異変を感じる空気が重いのだ気質や気分的な物でなく実際に重くなっている、

魔理沙「咲夜！霊夢！出来るだけそこから離れる、星符『グラビティブーツ』」

指示に従いその場から全速力で遠退く、一瞬の無音の後に超重力が襲う、

敵も味方も関係ない全てを押し潰す破壊の力、

上手くヒットしたようだ一部分だけ大きく人型に沈み込む、

重力は光の軌道を歪ませるブラックホールの付近では光の観測値に相違が在ることも確認されている、

臃げながらも輪郭が浮き上がる、なんと魔理沙はその荷重力に自らを乗せ、

自由落下の速度に重力加速度も加わり驚異的スピードで落下する、

魔理沙「速度が二倍になるとな瞬間衝撃は四倍にまで跳ね上がる！
言ってる意味解るよな？」

両手に集めた魔力をそのまま紫へ叩き付ける、

重力の力に落下速度は増しつづけるしかしその衝撃は魔理沙にも及ぶ、

紫は超重力の中なんとか動く両手で防ぐが傷一つ付かなかった手甲に罅が入る、

紫「そんな！傷が？」

その間も重力は強くなり続け紫の防壁を突き崩す、

凄まじい衝撃、

重力の加圧が消え魔理沙自身も反動に相当なダメージを受けている、

紫が地面に転がっている衣服はボロボロになりもはや当初の威厳は無い、

紫の姿を確認出来る幾つかの術式を掻き消せたようだ、

紫「残念ね？私はまだ倒れない」

とうとう紫も技に頼らなくなった永久機関の生み出す莫大な妖力でもって暴れ回る、

その間にもラプラスの術式に絶え間無く降り注がれる砲の雨に撃たれ手が付けられない、

紫「諦めなさい」

霊夢「嫌だ！絶対に諦めない！」

何を思ったか霊夢は一直線に突撃する、

紫「霊夢！」

飛び込んで来る霊夢に紫は半ばやけ気味に紅き爪を打ち込む、

手甲越しに伝わる肉を裂く嫌な感触に深々と刺さる紫の右手は左胸を貫通した、

霊夢「あ……んたも……甘いわね？心臓を・狙えば殺せ・たのにね」

左肺が潰れ口からの大量吐血に上手く言葉が話せない、

紫「なんて事を死ぬのが怖くないの？」

自身を貫く右手を強く握り締める言葉が途切れる事もなくなった、

霊夢「捕まえた言ったでしょ？今の私は簡単には死なないって！もう逃がさない」

紫の胸に右手を押し当てる、霊夢の目を見た紫の顔が恐怖に歪む、

霊夢「へーっ紫でも怖がるんだ？天駆ける龍をも滅つする神の一撃を味わえ！神技『八方龍殺陣』」

零距离での排撃！地平線まで届くような勢いで紫は吹き飛んでいき森の中に突っ込んで木々を薙ぎ倒す、

ぽっかりと開いた左胸が再生していく、まざまざと見せ付けられる神の力、

いかに紫とて終わりのはず？その淡い期待を余所に口から血反吐を吐きながらも立ち上がる紫、

紫「私はあの子の今度こそ幽々子の願いを！倒れる訳にはいかない」

霊夢の捨て身の一撃に掛けていた全ての術式は打ち払われ、

紫「これだけは使いたく無かったけど、捌器『全てを二つに別ける物』」

異相な空間が口を開け飲み込んでいくその場にいる者を無差別に、

藍や橙、遠巻きから傍観していた妖夢までも、

紫「ようこそ、我が世界へ？」

目を閉じるまでは月に照らされる仄暗かった景色は目を開くと其所は無機質な真っ白な世界が広がっていた、

紫「此処は事象と事象の狭間の世界、如何なる物にも干渉されない」

何か行動を試みるがびくともしない、

紫「止めなさい！無理に動こうとすれば体の一部が泣き別れる事になるわよ？事象とは行動と結果が符合するもの又は一致しないにしても単一以上の共通の認識として確認されれば成立するの」

咲夜「この空間と何が関係あるんだ？」

紫「ま！説明もなしに解る訳無いか？」

扇子を開きパタパタと扇ぎながら説明を始める、

紫「この空間に事象は存在しない全ての事柄が拒否され認知されず無に帰すのよ、もし何かの事柄が発生しようと私が認めなければ事象とは成らえない何も殺そうなんて言わない全てが終わるまで黙って見ていなさい」

言いようのない喪失感が漂う、

咲夜「此処まで来て」

(どうすれば？負けるのか？力の差と諦めるしないの)

???? (貴女らしくもない簡単に諦めるのですか？)

咲夜の心の中に聞こえる声、

咲夜「え！ベル？」

ベル (咲夜様、私の力を理解されてきてるようですがまだまだですね最後のヒントですよ？)

魔理沙「待てよ！逃げるのか？止めを刺してかないのかよ今やらなきゃいつか私がお前の首を狩りに行くぞ！」

紫「今の貴女に何が出来るの？ただの負け惜しみにしか聞こえないわね」

挑発的に突っ掛かる、

魔理沙「そうやって何かと理由を付けて逃げるのか？それとも私が怖いのかよ？」

違った反応をする、

紫「魔理沙、言葉は選びなさい」

いつも飄々（ひょうひょう）として本心を隠し掴み所のない紫が怒気を表に出している、

魔理沙「何だ凶星か？」

（そつだ！こつちに来い）

紫はそつと顎に指を掛けると動けぬはずの魔理沙が紫の腕を掴む、

紫「馬鹿な！動いただとそんな……これは！？磁石？」

魔理沙「やらせてもらったよ効くかどうか賭けだったけどな？単純な物程意外と上手く行くものさ」

あの紫がオロオロと慌てふためく、

魔理沙「目的と結果の一致か複数の共通の認識で事象は成立するんだろ？私はずつと動けと念じ続けお前は私が動いたと思ったこれって共通の認識だよな！事象が存在した以上この空間の存在定義は消える」

一方、

ベル「私の力は幻に質量を与える、では聞きますが質量を持つ幻は偽物ですか？質量を持つのならそれは本物となんら代わりはない！全ては貴女のイメージ次第ですこの状況を打開する破壊の力を」

耳に光るピアスが輝きを増す、

咲夜「私が思い描く破壊の力なんて一つのみ！」

ベル「御気を付け下さい全ての力には代償が要ります、創り出した物に見合う対価を過ぎた力を望めば命を奪われるかも知れませんが、ゆめ努力忘れなくよう」

そしてベルの声は聞こえなくなった、

咲夜「有り難うベル、フランドールお嬢様この私に御力をお貸し下さい全てを飲み込む忌まわれし破壊の剣よ、しるせ禁忌『レーバテイン』」

紅い光が集まる、

咲夜「体が軋むこれがフランお嬢様が抱える痛み？しかし主の痛みも理解出来ずに従者が務まるか！」

魔理沙によって揺らぎを持った空間に拘束する力は失いかげ、

光は収束し実体を持ち剣と成りバリバリと音を立てて異相空間を砕いていく、

魔理沙「おいおい今度はフランのレーバティンかよ！咲夜お前も何でも有りか？」

元の空間へ戻りつつある、

霊夢「やるわね二人とも、おい天照あんた神様なんでしょ？妖怪一人の力に勝てないの？違うって言うならこんな所で縮こまってんじやないわよ！」

力の解放に周りを一掃し異相空間は完全に消え去る、

紫「何故なの？どうして」

霊夢「諦める訳にはいかないの諦めれば今までの全てが無に帰ってしまっ」

紫「越えさせはしない！！行かせない」深弾幕結界

夢幻泡影

□

防御術と違う明かに殺傷する為の弾幕、

だが破壊の剣の前に成す術なく打ち消されていく、

魔理沙「始めから本当に殺す気で来られてたら勝ち目は無かったんだろっが情を前に出したのが失敗だったな！」

感情の高ぶりに身につける紅玉が輝くしかしその秘められた危険性に気付くよしも無かったが、

今はそれでも良かったかも知れない、

紫「嗚呼、あの子と同じ目をしている昔の幽々子と同じ目を」

追い詰められた者の取る行動は一つ悪あがきにも似た、

誰か一人だけでも道連れにと選んだ標的は魔理沙、

渾身の力を込めた式弾が放たれる、

撃ち抜かれた魔理沙は咲夜の創った幻だったそれを見分けられないほど紫は動揺していた、

調停者としての自分と幽々子の友人としての自分、

本当は幽々子を止めたかったかもしれない？でも出来なかった、

咲夜「私達は貴女を越える」

紅き光の剣に体を焼かれ、

鏡に映したように魔理沙が二人居る、

魔理沙「安心しろよあんたの友達を必ず止めてやるから、恋心『ダブルスパーク』」

輝く光砲が交わり交差する中心に紫を捕らえ、

霊夢「紫お願い！死なないでね」

紫「貴女って子は、こんな時に優し過ぎるのよー！」

霊夢「神霊『夢想封印』」

音が消え去る！それが技の威力を物語る、

力無く地に落ち終にあの大妖怪 八雲 紫に勝ったのだ、

妖夢「本当に紫様に勝たれてしまった？」

藍「まさか！ご主人様が？」

もはや立ち上がる気力もない、

紫「私は負けたのね敗者に慰めは不要よ行きなさい」

霊夢「有り難ね紫」

紫「私も駄目ね！」

誰にも悟られぬよう涙を流した、

白玉楼

満開に成りつつある桜の下に佇む美しき亡霊の姫、

幽々子「西行妖、貴方は何故私にあんなものを見せたの？私には生
前の記憶がない、だけど何も知らない方が良かったかも知れないの
に」

普段は無数に魂が漂う白玉楼が幽々子一人を残し閑散としている、まるで始めから世界にたった一人だったような途方もない孤独感が襲う、

気丈に振る舞うもその心は不安に満ちていた、

突如一陣の風が吹きすさび大量の桜が舞い上がり空を桜色に染め、

突然の突風に目を塞ぐと聞き慣れない声がある、

見渡してもその声の出所は分からない、しかし確かに聞こえるそつと耳を澄ます、

「ほとけには桜の花を奉^{たてまつ}れ 我が後の世を人とぶらはば」

(ほとけにはどうしても桜の花をあげて欲しい)

「願わくば花の下に春死なん　その如月の望月の頃」

(もし願いが叶うなら二月の中頃に満月の桜の下で死ぬことを望む)

幽々子「歌?……・何故だろうとても懐かしい感じがする」

「ザッ　すぐ後ろで足音が聞こえ、

幽々子「誰だ!」

振り向いた先に居たのは身なりの善い優しい顔をした老人、

老人「いくら直接の面識がないとはいえ己が血族の長に誰だとは心外じゃな」

幽々子「血族ですって?」

老人「まだ分からんようだなこう言えば分かるかな?西行法師と」

余りの事に言葉を失う幽々子、

西行「この桜ががこのような力を持ってしまったのも儂の所為だと
言える」

幽々子「私よりも遙か過去の人である貴方がどうして？」

幹に手を掛け桜を見上げる、

西行「儂が生涯を賭けて見付けた最高の友だ！傍に居てやらないで
どうする？それとなコイツがお前さんに失われた記憶を見せてやり
たいと言っているんだが儂には何も言えん自身で決めるのだ！ただ
し絶望かも知れんぞ？」

目線をずらさず真っ直ぐに見据え覚悟は既に出来ている、

幽々子「私は自分の過去を知りたい！例え絶望だったとしても私が
歩んだ道なら受け止めるべきだから」

西行「良いだろう見るがいい己が過去を」

桜の花びらに包まれ気が遠くなっていく、

西行妖と会話をする西行法師、

西行「何！かの娘達にも見せるのか？また遊侠な事をそれもまた然りか？」

先導し白玉楼への道を案内する妖夢、

妖夢「まさか此処まで来るとは？」

藍は紫を介抱していた、

藍「悪役も辛いですね？」

紫「よけいな事言わないの！」

だが突如としてその場に居た全員を桜色の津波が飲み込む、

頭の中に記憶が流れ込んで来る、

霊夢「何これは？」

魔理沙「体が重い」

咲夜「意識が」

花びらを一枚掴み咳く、

紫「見せるのね西行妖、この子達にもなんて遊侠な事を？」

霊夢「ゆ・・かり・なの？」

紫「違うわ過去に何があったのかを知らなさい」

少しずつ意識が薄れていった、

巡り咲く花（前書き）

ここからは自分勝手に考えた妄想の話です、

東方本来のストーリーとは全く関係ありません、

巡り咲く花

西行寺 幽々子が亡霊として転生してから千年以上の時を持つ、

はたして亡霊に成ることを転生と言えるかどうかは定かではないがその大地に足を刻み幻想郷に歴史を残してきた、

今の幻想郷は博麗大結界により隔絶されているが結界が張られる以前のこれは幽々子がまだ人間だった頃のお話、

非常に特異な霊的な地質を持つ幻想郷は古くから数多くの妖怪や人外などの存在に狙われてきた、

常に犠牲と成るのは人間、

対抗する手段などある訳なく妖怪の糧に過ぎず、

だが妖怪にも人間に味方する者なども現れ、ただ一方的に蹂躪される訳では無かったがあくまでも一部の妖怪だけであり現状を覆す絶対的なものでなかった、

だが長い時の中で人間達もただ黙ってやられはしない力の差は圧倒的であったが数の上では人間が勝る、

どんな生物に限らず数の論理は強い優位性であり団結し戦いを選ぶ人間が現れ始め妖怪との交わりの中に魔道の力を有する者の出て来るようになり、

勢いを増した人間は勢力図を塗り替えていくと人々は人間同士でも争うようになりより事態は悪化していくのだった、

死臭が漂い無数の亡骸が横たわる戦場、

「ギャッ！」

また一人戦場に散る兵士、

門番「次は誰だ？我が戦斧の錆と成りたい者は！」

隊長「どうすれば？此処を越えねば我が軍に勝ちはない」

敵は谷を利用した門を置き侵入を防いでいる、地形柄多人数での突入が出来ず一人通れる程度でそこに屈強な門番がおり睨みを効かせる、

何人もの兵士が挑むが門番の戦斧の前に散っていくのだった、

「???」おい！隊長はお前か？」

隊長「そ、そうだが」

(男？流れの傭兵か・・・やけに声が高いな?)

傭兵「奴を殺れば五十つてのは本当か？」

隊長「本当だ即金で払おう」

傭兵「低い七十だ！」

金額に驚く隊長、

隊長「無理だ高すぎる！」

傭兵「六十五」

隊長「五十五」

傭兵「六十」

隊長「良いだろう奴を殺してくれるならな」

傭兵「任せろ」

腰に掛かる刀を手に門へ歩いていく、

門番「相当な人材不足のようだな、こんな小さいのが俺の相手？」

傭兵「でかいだけの奴よりは増したが」

だが実際に体格の差は大袈裟に言ったとしても二倍は在るように見える、

門番「よく吠えたな！一刀の下に切り散らしてくれるわ」

兵士達は己の目を疑った、

幾人もの兵が如何なる武器を携行しようとも全て一刀の下に両断してきたのだそれをたった一本の刀で受け流している、

刀と戦斧がぶつかると誰もが刀が折れると思っただが戦斧の刃に刀が食い込む、

門番「我が戦斧を割るとは」

傭兵「武器の手入れを怠ったのが悪かったな」

自身の最も信頼の置ける武器が打ち負けた事に動揺し動きが悪い、

危機を感じた門番は砂を蹴り上げ目潰しをする傭兵は視界を遮られた、

門番はこの好機に傭兵の頭部へ戦斧を振る、

傭兵は何を考えたか自ら頭を戦斧へ向けたのだ、

また駄目か？と諦めの空気が流れたが碎け散ったのは戦斧の方だった、傭兵は兜を身につけ刀に罅割れを入られた斧では兜は碎けたが傭兵の頭までは碎け無かった、

兜に包まれた傭兵の素顔が露あらわになり皆の視線が集まる、

淡い紫色の髪に端正な顔立ちそれはそれは美しい女性、

男だと思っていた者達は一様に揃えて「女！」と声を上げた、

唯一会話をした隊長も驚きは隠せなかった、

それが若き日の人間だった頃の幽々子、

武器を無くし術のない門番を見下ろす、

門番「ま・待て命は！」

幽々子「お前は何人殺してきた？戦場に出て来た以上覚悟はあるの
でしょう・・・さようなら」

門番の首をスパンと切り落とす血飛沫を上げ倒れる、

幽々子は刀の血を拭い鞘に納め隊長へ歩み寄る、

幽々子「約束通り奴を殺ったわ？今度はそちらの番よ」

隊長「約束は守る確かめてくれ金六十だ、しかし奴が手入れを怠らない者であれば碎けていたのはお前の頭だったはずだ！」

謝礼金を受け取り中味を確かめる、

幽々子「結果的に私は生き残ったそれだけよ」

隊長「戦場に死地を求めるか危ういな？これからどうするつもりだ行く当てが在るのか？」

幽々子「何も私は流れの傭兵よ心行くまま何処にでも」

そお言つて立ち去っていくのだった、

隊長「あのような少女までもが剣を取る時代か？」

世界各地で起こる戦に傭兵として名お上げようとする者もいれば家族・友・金・恋人を守る為に剣を取る者と思いはそれぞれに在れどこういった世の中に彼女は居た、

西行寺家

西行法師から始まる地元でも指折りの名家でありその長女として西行寺 幽々子は生まれる、

各地に戦が起きている中に措いてなお裕福な不自由のない生活を送るが、

幽々子はその生活にずっと違和感を感じていた、

満ち足りる事のない日々ばかりと心に穴の開いたような感覚、

生まれた時から未来を約束された生き方、

宝物の様に扱われ周りの人は仕事だからと幽々子の世話を焼く訳でなく心から好きで西行寺に仕えている人達で幽々子もそんな彼らが大好きだった、

ただ平穩に過ぎていくだけの生き方も悪くないと思っていたが僅か一日で何もかも終わりを迎える、

幽々子が誕生日を迎えた日、館中が祝福に包まれ人々は忘れていた世の中は戦時中だということに、

あろう事が主人は庭番に買い出しに行かせるという愚行を侵す、

運悪く庭番不在の時に西行寺家は夜盗に襲われる常駐する数人の護衛も瞬く間に切り伏せられてしまい、

一夜の内に村や町が消えるなど日常茶飯事だったが村の人々は自分には関係ないと知らぬ振りをしてきた確かにこの村は比較的安全であるが絶対ではないなのに人々は平穩に溺れ戦争を忘れようとしていた、

そんな者達に抵抗する手段などある訳無く村を含め館の者は一族郎党皆殺しに合う、

夜盗の魔の手は幽々子にも迫る、

火を放たれ炎に燃え盛る館の中で追い詰められ咄嗟に床の間に在った飾り刀を手取る、

鞘から抜き去ると幸運にも刃は潰されていない、

親族の返り血を浴びた夜盗と対峙した時、幽々子の中で何かが弾けた、

館の異変に庭番は道中の夜盗を切り捨てながら館へ走る、

だが遅かった館は焼け落ち見る影も無い生存者を探して歩き回ると瓦礫の中に一人夜盗の死体が転がる中その返り血を全身に浴び真っ赤に染まる少女の姿が、

館の中を我が物顔で蹂躪し一族を皆殺しにした夜盗達はその日十五歳の誕生日を迎えたばかりの少女に皆殺しにされたのだ、

生き残ったのは庭番と姫だけ財産は夜盗を討ったので取られてはいない何処かでひっそりと暮らす事も出来るだが幽々子は初めて生きている実感を感じた生と死の狭間にある緊張感、夜盗を刀で切り殺した感触が今も手に残る、

幽々子「見付けた！本当の私を」

そして西行寺 幽々子は自らを傭兵として戦場へ赴くようになったより強い生の実感を求めて、

それから庭番こと魂魄 妖忌と共に各地を回った、

私はその旅で特別な処女を失った、幼い頃から鍛え込まれた護身の為の技術が人殺しへの技術へと昇華していく、

殺しと言つ名の美酒を浴び鬪争と言つ名の快樂に溺れていった、

時折自分が怖くなる、いつか戦いという夢から覚めなくなってしまうのではないか？

もし大事な人が出来たとしても私は、その人すらも手に掛けてしまふのではないか？

そんな恐怖が自分の心を今一步の所で押し止めている、

生きていくに困らないだけの金は在る、だけど認めたくない逃げて
いるみたいだから、

しかし傭兵としてやっていくにもたった二人では限界がある、仲間
を集める事にした、

でも争いや殺しを心から好きな訳ではない、助けられる者が居るな
ら救える命が在るなら助けたい大事の物を失う辛さは知っているか
ら、

とは言ったものの当座の目的だけではどうしようもないので近場を回ってみる、

何処に行ってもきな臭い話ばかりである、

女だてらに傭兵なんてやっていると物珍しさか知名度どが上がっているみたいで面白半分に私個人を指名した依頼が飛び込んで来る、

行く当てもないし情報収集にもなるので依頼を請ける事に、

様々な依頼が舞い込む、警護から軍隊からの正式な要請などもあった、

興味深い話を耳にし、

実際にこの幻想郷を狙い行動を起こしているのは数人の妖怪だけだ、
というのだ、

皆大きい動きを見せないのは人間同士の争いが終わるまで静観しようというのだ気の長い話である、

だが妖怪にはその時間がある、

その中で一人だけ稀有な存在が居た、

名を 神玉^{しんぎよく} 明確な姿を見た者はおらず神職服の男であったとか角を持つ女だったなどどれも眉唾物で定まった話しを聞かない、

ただ一つ共通した見解は人知を凌駕した力を持っているという事だけ、

他の妖怪と違うのは人の為に剣を取る姿勢だ、戦が長引き地が人が疲弊するのを防ぐ為に人間同士の争いを終息させようと陣頭指揮を取る、

急速にその範囲を広げて行った、政治にも長けるようでもくの人や妖怪がその下に集まった、

言い方に語弊が在るかもしれないが、この幻想郷に戦争難民や孤児は掃いて捨てる程もつと言つなら腐る程に溢れていた、

神玉が勢力範囲を広める過程に着実に数を減らして行った事にはその手腕と言えるだろう、

とは言えやはり職や行き場を失いあぶれる者は後を絶たない、

彼らも望むべくしてなった訳ではないが生きる為に盗賊や夜盗に成らざるを選なかった、

荒んだ世界は人の心を忘れさせる、

突然にこんな世界に放り出されて真面まごもでいれと言つ方がどうかしている、

町や村が消える多くの理由は妖怪の仕業じゃなく同族の人間によるものだった、

彼もそうやって家族を仲間を無くした、

後に出会う最初の仲間、

神玉は精力的に人々に害をなす妖怪や盗賊の討伐に兵を出した、

確かにそれで助かった命も在るが打ち漏れる者も多く討伐には成功するものの後手に回る事の方が多かった、

取捨選択、政治的な観点で見れば正しい判断なんだろうが幽々子は納得がいかなかった、

確率や数字だけの物差しで判断し救えないとみたものに出兵はしない、救われた者はいいだろうが誰からも手を差し延べられる事無く死んでいく者達の無念はどうすればいい、全てを救うだなんて大層な事は言わない、でもやりもしないで諦めるのは嫌だから、

盗賊の討伐隊に積極的に志願する、正規軍が派遣を打ち切る箇所を敢えて選んだ、

所詮は自分への慰めだったかもしれない、一人が走り回った所で高

が知れる、

後手にばかり周り無力を恨む、

私に守るなんて出来ないのか？所詮戦うしか能の無い存在なのか？
だったら戦い続けてやる！

造るんだ、そういった物達に対した抑止力になるような強く大きな
組織を何にも縛られず自由に動ける一団を、

決意を決める幽々子に一報が届く、

盗賊の群に襲撃を受けるキャラバンが居ると緊急の駆け込み、

これまでの様に間に合わず手遅れかもしれないが幽々子は急行する、

幸いにもそう距離は遠くない、情報が示す付近に辿り着く、

酸化した鉄の臭いが漂い屍が累々と転がる、

すぐに吊ってやりたいが今は先を急ぐ、

血の臭いが新しくなる、

必死に逃げる数人の人影、皆傷を負っている長くは持たない、

もうこの一団に金銭的な価値は無い、だが彼等にはどうでもいい殺戮の快楽に動かされている、

銀色の髪をした少年は剣を取り守りながら戦う、

幽々子は盗賊を片っ端から切り倒す、

幽々子「間に合え！」

行き止まりに立ち止まる、

対峙する銀髪の少年は戦う仲間を守るため、

だがどうこう仕様もなく賊の手に掛かりまた一人、また一人と倒れていく、

剣を落とされ無防備になり、終わったと思われた少年を守ったのは供に同じ時を過ごした少女、

少年の目の前で鮮血を上げ倒れる、

嬉々とし残る少年に刃を振り上げる賊が幽々子を視認したのは銅と首が切り離れたその一瞬だった、

ポーンとするだけの少年、

少年「なんでもっと早く来てくれなかつたんだ！」

既に事切れている少女の亡骸を抱き抱える、

幽々子「被害者面をするな！その子が死んだのもお前が弱いからだ」

少年「そんな事言ったって俺はどうすりゃよかつたんだよ！」

自分が持つ刀を差し出す、

幽々子「強くなるの自分の目が手が届く範囲ぐらい守れるくらいに、
名前は何て言うの？」

少年「銀、俺の髪色から皆がそう呼んでくれた」

幽々子「ならば銀貴方の命は私が貰う、供に行こう」

刀を受け取る、

銀「強く成るさ必ずな」

銀と共に幽々子は一団を弔う、墓碑代わりの木を打ち立て石を積む、

幽々子は石に酒を掛ける、

幽々子「せめて酒ぐらいはね？」

銀「有り難う、これで皆も少しは報われるよ」

新たに仲間となった銀は妖忌の下で剣を学ぶ、

銀は剣劇戦に於いて無類の強さを誇った、

天性の才を持ち幽々子と共に戦場を走る様は戦鬼の如く勇ましく、

少し大袈裟かもしれないが幽々子、銀、妖忌の僅か三人の戦力が戦況を左右する、

だが幽々子は揺れていた、グラグラと心の籬たがが外れそうな毎日、供に過ぎす仲間が保たせ取り分け同世代の銀の存在が大きかった、

妖忌にはそれが一番の不安材料だった幽々子の掲げる目的より何よりも精神的な安定が第一、

人員の確保、心の支えと成り得る信頼出来る仲間が、

そしてもう一人、

人間同士の戦争も収束に向かいつつある頃、

大きな戦は少なくなつたが各地で起こる小競り合いは頻繁に在つた、

要は融いたちごっこだった、争いに負け領地を無くした者は失った分を取り戻す為にまた戦を仕掛ける、

中々一遍には終わらない、

そんな中に居る方面軍に属する少女が一人、

名を陽子、若いながらも大隊長に就任する実力の持ち主、

神玉の勢力に対し抵抗せず迎合する者も出て来はじめた、

勝利を諦め強い者の下に付く、これもまた高度な政治的な判断と言える、

だが諦めれない者も居る、

妖怪と契約を結び人の肉体を無くし闇に身を賣やしてでも、

情勢がおかしくなり異常な圧政を敷く、

軍の将であり内政に干渉出来る陽子は反対の立場に回る、

元より陽子は神玉に迎合するべきだと進言するも徹底交戦を唱える、

陽子は軍の中で独自の部隊を持つ、

この所全く顔を見せない首領に怪訝な噂が発つ、

輸送任務に付いた陽子は数日の後に戻ると異様で人が居ない、

微かに漂う腐敗臭が鼻を突く、

最悪のシナリオが頭を過ぎり首領の下へ急ぐ、

生臭い異様な臭気が満ちる、

陽子「何なんだよ？これは」

首領はもう人間で無かった、契約により手に入れた力は内から体を蝕んで行った、

人前に姿を見せないのではなく見せれなかったのだ、

愚かにも人のままで妖怪の力を操ろうなんて無理であった、

自我を無くし見る影もなく醜い化け物に成り下がり人間は餌にしか見えない、

陽子達が着いた時、軍の者は全員が化け物に成っていた、

かつての仲間を殺す、皆一様に人の原形は留めている、

それが何より辛かった、部下達に援軍を呼んだと励ましながら必死に目の前の敵を切った、

しかし援軍など呼べるはずなく気休めでしかなかった、

その頃、幽々子達は遊撃の帰路にと陽子が居る国に立ち寄る、

幽々子「変だな？誰も居ない、嫌な予感がする行こう」

銀「嗚呼！」

自我を無くした獣の様でも曲がりなりに妖怪の力を有した軍属の者達だ戦闘能力は高い、

数に違いが有りすぎる、次々と減っていく隊員達、

陽子も他人を気にする余裕がなくなただ目の前の敵を切り続けた、

幽々子達は大広間に飛び込む、

幽々子「無事な者は居るか？」

三人が見たのは一人で戦い続ける陽子の姿だった、

加勢する幽々子に敵勢の数が一気に減っていく、

来るはず無いと思っていた援軍に陽子は周りを見る余裕を取り戻す、

愕然とした立っていたのは自分だけだったのだ、寝食を共にした部隊は全滅していた、

最後に残ったのは首領の成れの果ての化け物、

支配欲に取り付かれた末の結末は国の消滅を招く、

陽子はその手で決着を付ける、でもこんな話は珍しくなくそこから中に転がっている、

陽子を仲間に誘う、

二つ返事で了承し首を縦に振る、

何か身を寄せる心の拠り所が欲しかった、

新しい仲間が加わり四人になり銀がある提案をする、

銀「なあ、俺達にも名前が要るんじゃないか？」

幽々子「名前？」

銀「四人も集まったんだ傭兵でやってくにも名前が有った方が良さだろっ俺達のさ！」

爛々と目を輝かせて、

銀「どうせなら団とかけようぜ、なんとか戦団みたいに」

幽々子「そうね悪くは無いけど、他に良いの在る?」

妖忌と陽子にも振る、

陽子「急に言われてもね、そうぼんぼん出て来るものでもないし」

妖忌「別に深くは考えず何か好きな物の名前等からでもいいのですか?」

少し考え込む、

陽子「花の名前なんてどうかしら?」

銀「花ね？」

時期は春、桜の花が散る季節、

幽々子「血筋なのかな？桜が好きなのは」

舞う花びらを一枚掴み大きく頷く、

幽々子「桜の花、桜花、おうかせんだん桜花戦団」

銀「いいな！カッコイイじゃん」

陽子「決まりですね！」

和やかに笑う幽々子を見ていた妖忌、

妖忌

（姫様がやっとな心から笑って下さる様になった、これもお二人のおかげですな）

それでも懸念する材料は消え去っていなかった、

戦いとなると表情の無い人形の様子に幽々子はまだ戦いの夢に魅入られている、

銀と陽子に安定するもいつ壊れてしまつか分からない状況だったのだ、

画して桜花戦団と名を改め活動する、

基からして知名度がそこそこ有ったものからか、高が四人だけの傭兵団に多くの依頼が来る、

非常に規模の大きい戦いに収集された、国同士の戦争だが神玉は静観を決めたか兵の動きはないようだ、

幽々子「凄い数ね！」

今まで小競り合い程度の物ばかりだったからか数に圧倒されていた、

呆けている幽々子に人混みを割って近づいて来るは將軍、

將軍「女の傭兵が居ると聞いたが主か？」

幽々子「女の傭兵がそこまで珍しいですか？」

將軍「そう邪険にするな？珍しいと思う事に変わりはないがな、それにしてもまた何故傭兵なんぞに主程の器量良しなら引く手数多だろっつ？」

幽々子「昔の私は生きていた、意味もなく生きてるだけなんて死んでいる事と何も変わらない、でも今は確かな生の実感が在る」

その返答に少しばかりの溜め息をつく、

將軍「脆い、鬭争に生を見出だすか？主は何も見えていないな失つてからでは遅いぞ！儂の様にな」

ついキョトンとしてしまう幽々子、

將軍「日々鬭争に明け暮れ続けた結果がこれだ何も遣りはしなかった、それどころか大事な物を全て失ったよ月並みだが普段どうでもいい物が最も大事な物だと気付かされる」

幽々子「私に失う物等在りません！当の昔に亡くしている」

携える大斧を地面に突き刺す、

將軍「本当に言っているのか？」

隠しているが言葉の端に怒気が見える、

迫力に後ずさる、

將軍「なら聞こう？貴公の後ろに並ぶ彼等は何だ！亡くした？何も無いだと？彼等はまだ貴公の繋がりでないのか」

何も言えず黙ってしまう、

將軍「その繋がりが貴公の糧と成るか枷と成るかは自身に在ると思
うのだな」

黙り込んでしまったのを見て人払いし幽々子達と会話する、

將軍「主よ儂の娘になれ」

幽々子「は？」

銀「何言ってんだ！」

陽子「……」

將軍「話しの腰を折るな、人払いしてある訳を考えろ」

大人しく話しを聞く事にした、

將軍「僕は將軍だ現地での最高権限を持つ、この場だけでも娘となれば逃がしてやる事など造作もない勿論その仲間達もだ」

幽々子「何故ですか？」

頬を指で掻き気まずいのか言葉を選ぶ、

將軍「主らはまだ若い、二人のその美しさなら何処にでも行くことも出来るだろう？」

幽々子と陽子の事を言っていると思えるが気恥ずかしいのか言葉を詰まらせる、

優しさを感じて少しだけ表情が和らぐ、

幽々子「心遣い有難う御座います、でもお断りします私達には夢がある！世を知らぬ子供の戯言と罵られようとも」

將軍「信念を譲らぬか、何がそこまでさせる？」

幽々子「私の手はもう血に塗れて、自己満足なんて分かっているでもこの目がこの手が届く範囲を護りたい」

フンツと鼻息を立てて笑う、

將軍「護るために闘う矛盾だな？正に戯言だ生娘の絵空事よ！良いだろう儂について来い娘、貴公が言う道を見せてみる」

開戦、

言葉の通りに傍に付き駆け抜ける、

戦況は幽々子の軍が優勢

部隊数の上で優位にあり質の差もあつた、

だが大事な事を忘れていた戦場で最も大事な事を、

これまで幽々子は負けが無い、

勝ち続ける事で感覚が麻痺していく常勝という毒牙、

自分よりも強い存在が居ない訳がない、

その敵は自分と同じ傭兵、

しかし慢心は油断を隙を生む、

一対一での剣撃戦で一方的に押し込まれてしまう、

相手に成らない、危機を感じ取り加勢する銀と陽子だが大人と子供の争いにしかならず、

傭兵「噂に聞いた物はこの程度か？」

幽々子「くっ」

ザッと見渡す、

傭兵「こちらの負けは确实だな今更何をしようが大勢は変わらんが、しかし貴様を取れば俺の株も上がる」

幽々子「それだけの力を持って金や名声の為に戦うの？」

強く息巻いて嘲笑う、

傭兵「綺麗事を吐かすな！貴様とて分かって入った世界だろうが！
争い事に思想を持ち込むなんざ馬鹿のすることよ」

唇を噛み締める、

幽々子「違う！」

傭兵「違うものかよ戦う事で守れる物など有りはしない」

この傭兵なら幽々子を軽く屠る事も出来るのに小さく傷付けるばかりで相手が血に染まるのを見て愉しんでいるようだ、

戦いの最中に遊ぶなど馬鹿げているがそれだけの力をこの男は持っている、

傭兵「自分に正直に成るんだな、殺戮を肯定しろ自身を偽るな一目見て分かったよお前は俺と同じ戦闘狂だ」

内心見透かされた様な気持ちになってしまっ、

傭兵「守る為？下手な言い訳は止める本当は理由が欲しいだけだろ？自身を正当化する理由が戦いに理由なぞいらんただ本能のままに愉しめ」

違っ！と反論したいのに何も言えないそれは昔の自分を見ている様だったから、

事実だった、

勝利を勝ち得た時その実力差が拮抗する者又は格上の存在に勝った時の満ち足りた充実感、

しかしその後に来る虚実感が凄まじい物でそれから逃れる為にまた戦いの繰り返し、

傭兵「貴様に守れる物なんて無いんだよ、貴様に出来るのは奪う事

「ただだ！」

「????」「ギヤーギヤー五月蠅い」

間を割るように大斧が振り下ろされ大地を砕く、

將軍「確かに戯れ事や甘ったれた理想に過ぎぬかもしれんがな？儂はそんな甘ったれた話しの方が好きだ」

高々と笑い声を上げる傭兵、

傭兵「参ったね今日は厄日だよこんなにも苛つく日は久しぶりだ」

將軍と対峙する傭兵、

だが傭兵の強さは尋常ではなかった將軍の戦斧を軽々といなす、

傭兵「所詮こんなものか？力なき者に時代は創れないだよ、死ぬ！」

立ち上がる事も出来ず彼女に振り下ろされた刃にバツと影が視界を遮り、

將軍「覚えておけ！新しい時代を創るのは我等みたく愚かな老人でも貴様の様な者でもない彼女達若者だ！」

その身を盾に彼女を庇った血まみれの將軍の下に駆け寄る、

將軍「よく聞け死に何かを求めるな、生に縋すがれ最後まで生きるんだこんな惨めな最後を択ぶな」

涙が溢れ、

幽々子「なんで私の為に？」

將軍「かつてはな儂にも娘がいた生きていれば主と同じ年頃になっていただろう、主を見ているとな死んだ娘が戻ってきたみたいに思えてな」

幽々子「それだけの為に？」

將軍「その価値が在った、どうした泣いていては綺麗な顔が台無しだぞ笑ってくれ」

涙で顔がぐしゃぐしゃになりながらも笑ってみせる、

將軍「それでいい・・・」

力尽き彼は死んだ、

人目を憚はばからず泣いた、自らの親族の死にも泣く事のなかったのに他人のその日知り合ったばかりの男の為に、

家族を娘を亡くした父と家族を父を亡くした娘、奇妙な繋がりになれ合っていたかもしれない、

傭兵「下らんお涙頂戴だ虫ケラの分際やかましで五月蠅く跳び回るからそう

なる、もついい貴様等共々あの世に送ってやる!」

止めと歩を進める、

幽々子「虫だと?虫と言ったのか?この人を虫ケラと言ったのか!」

傭兵「!?!」

幽々子「許さない!許さない!!許さない!!」

淡い紫色に掛かる髪が黒く染まる、

傭兵「寒気?この俺が!」

大きく見開かれたその目は奈落の底の様な暗く深い闇、

幽々子「征^ゆきます、征^ゆきます、征^ゆきます!征^ゆきます!一緒に征^ゆきます共に奴を

奴を」

傭兵「なんだ？貴様は？」

幽々子の中の何が目覚め覚醒する、

傭兵は気付いていない無意識の内に彼女から距離を取り逃げようとしていた、

この俺が怯えている、この俺が、

戦場を跋扈し剣弾の雨を避け我が物顔で闊歩してきたこの俺が、

眼前の一人の少女に怯えている、満身創痍の少女に怯えている、

こいつは一体何だ？

剣を合わせる？馬鹿な！逃げるんだ、

傭兵「こんな事が」

(やばい！やばい！何だか良く判らんが、こいつはやばい)

背を向けて逃げる彼に砲弾の如く噴煙を巻き上げて飛び込む、

幽々子「どうしたのさ？何を怯えているの？」

傭兵「この女おま！」

先程と立場が変わる、幽々子の前にただ平伏すのみ、

幽々子「消えろ！私の前から、私の心から消え去れ！！」

傭兵は頭から真っ二つに己が半身と永遠に亡き別れる事になった、

肉塊と化した傭兵だった物を後ろに静かに一筋の水滴が頬を伝う、

程なくし相手側が降伏し戦は終わった、

いつも傍らかたわに居るはずの妖忌が居なかつた何故かは分からない、

気にも止めて居なく誰も気付いておらず、いつの間にか戻っていた妖忌を不思議に思う事は無かつた、

戦いに勝利したものの幽々子はその体に担ぐ不釣り合いな大斧に隊員達は將軍の死を悟つた、

彼の死を見取つた者と斧を受け取って欲しいと言われ幽々子はそれを承諾する、

幽々子は見違えて強くなつた心の在りようが、

闘争に飲まれる事がなくなった、死を恐れ死を理解しているからこそ落ち着いていられる、

戦い打ち勝つた相手の武器を持ち帰る、

忘れない様に相手を想いを、

時を同じく神玉が重い腰を上げる、終に幻想郷平定に軍を動かす、

紫「いつまで茶番を続ける気なの？」

殺伐した雰囲気が漂う、

薄暗い中で椅子に腰掛けたまま笑いかける人物、しっかりと顔を確認する事は出来ない、

「???」そう言わないで、後少しだけ付き合ってくれ」

日が差し込み明るくなる、

紫「一体何を考えているんだ神玉？何故人間にこだわる貴女が出張れば直ぐに片が付くでしょうが、それが何で人間なんかの為に動く？」

意味深に含み笑いを浮かべる顔に明かりが差し込む、

神玉「そうでもないわ面白いわよ人って、貴女もいづれ興味を持つわ」

紫「私が？有り得ないわ、人間の様な脆弱な生き物に興味を持つなんて」

剣幕をまくし立てる紫と対照的に穏やかな神玉、

この頃の八雲 紫は今と比べると非常に好戦的で人間に対し全くと言っていい程興味が無く毛嫌いしている様にも見えた、

そんな紫に与えられる人間の護衛や支援といったものばかりでフラストレーションが貯まる一方の状態も限界に来ていた、

紫「人間なんざ知るか！好きな様にやらせてもらおう」

神玉から使った命は後方支援だが紫は独断で前線に出る、

しかし人間の戦闘で粗片の決着が着いていた、相手側はすでに敗走している、

その敗走する者を狙う、スキマを境界を操る紫にただの人間が逃げるなど不可能、

だがその場に殿しんがりを任されるは桜花戦団、

高が人間と一蹴するはずだった、自分の前に立ちはだかる人間を、

それが西行寺 幽々子と八雲 紫の出会いだった、

初め互いは敵同士だった、

少し面倒だ人間にも手て練れは居ると無視しようとするスキマを開き入り込む、

しかし紫の目算に誤りがあつた幽々子は少し普通ではない、

振り抜かれた刀の太刀洗は亜空間を切り裂き紫を引きずり出す、

してやったりと笑う幽々子だが狙つてやった訳でなく言つなればたまたまである、

紫「なっ！」

(こんな事が、こいつ本当に人間か?)

偶然必然に係わらず紫にはそんな意図が通じる訳なく必然と思わざるを得ない、

相手に自分と同系統の能力の持ち主であるならスキマの力は使えず、面倒であるが直接的に応戦するしかない、

肉体派ではないとはいえ紫は妖怪である身体能力は人間を軽く凌駕するも接近戦ではやはり分が悪い、

有効打を与える事も出来ず防戦するだけ、

一人突貫してきた紫、先の一撃に不用意にスキマを開く事も出来ない人間相手に撤退という選択それは非常に強い屈辱だった、

帰還した紫はワナワナと震えていた格下、脆弱と愚劣してきた人間に遅れを取ったのだ、

自身に大きな慢心や奢りがあつた事は認める、

しかしそれが負けた理由には成らない、

命令違反を犯した事について問いただそうと神玉が訪れるが紫の頬にある傷に目が止まる、

神玉「紫何その頬の傷？」

紫「え、傷？」

てつきりまた口煩くわづらく言われるものと思っていたから全く別の事だったので拍子抜けしてしまった、

そもそも怪我自体が神玉に言われるまで気付いていなかったから、

手を伸ばしてみると確かに頬が少し切れて血が流れている、

この傷を負った時を考える、恐らくは初手の一太刀だろう、

紫「私の血もちゃんと赤かったんだ」

生まれて初めて自らの血を見た紫、敵に付けられた傷だというのにその顔は笑っていた、

何も言わず立ち去った神玉、

神玉「相手は人間かな？フフ、良い傾向だな」

幽々子と紫、人間と妖怪、

種族こそ違えど二人の間には運命めいた物を感じた、

必ずと言っていい程に二人は戦場で会う、

紫「チツ、また貴女か？」

幽々子「それはこちらとて毎度しつこいわよ」

人間、妖怪に係わらず八雲　紫は次元の魔女の異名を持ち畏れられていた、

対峙すれば死は確実にまで言われる彼女を相手に生きて帰る者が居ると、それどころか対等に渡り合えると言う、

紫「何で？」

（何故死さない？何故殺せない？）

撃ち放たれた弾幕を切り散らす幽々子、

幽々子「きりがない」

(どつする？このままじゃじり貧だわ)

近距離に長ける幽々子と遠距離に長ける紫、

どちらも己の土俵に持ち込みたいが、どちらもそれを嫌う、

幽々子「^ぶ埒が明かないわね」

(一か八か)

必要最低限の部分のみを払い幽々子は弾幕の中に突貫を仕掛ける、

ダメージは避けられない一歩間違えばそのまま御陀仏である、

しかし捨て身の突貫も虚しく紫に逃げられてしまった、

妖忌「姫様！御無事ですか？」

心配を他所に幽々子はケロツとしていた、

幽々子「何？」

その反応に皆安堵の息を漏らす、

陽子「まったく心配させないですよ」

何はともあれ八雲 紫を退ける事に成功したのだった、

戦術的な観点において紫は敗北したそれも人間に、

大妖怪ともなれば刀で切られた程度で死ぬ事など有り得ない、また
刀傷ぐらいなら一日もあれば跡も残らず完治する、

紫「この私が気圧された？恐れた？たかが人間を」

(あの娘だけは必ず)

世の中には好き嫌いとは別にどうしても気になる存在がある、

二人はまさにそれだった、

幽々子「逃げられちゃったけど次こそは」

拳を握り締める、

銀「初めてじゃないか？幽々子が何か執着するなんて」

陽子「そうかもね」

互いに研鑽を重ねる、

次に出合った時紫はその両手に紅い手甲を身につけていた、

短期間に急激な成長を遂げる紫、その動きにはしっかりとした武が備わっている、

幽々子は撃つたり跳ねたり出来ないまだこの当時は人間だった、だから遠距離からの対抗手段をよっている、

幽々子が用いた手段は簡単な物、

大量の小刀を投げる事、

投げると言うより打ち出すといった感じ、

刀の峰でもって打つ飛ばす、

素人が投げたところで強く真つ直ぐ刃物を投げるのは非常に難しい、

刀身の長さから来る遠心力を利用した、

単純でシンプルな物程以外と効果を発揮する、

しかし妖怪が放つ弾幕と違い欠点は物量に限界がある事、撃ち尽くしてしまつたら無くなってしまう、

遠距離でも攻撃の手段を得た幽々子に対し朱塗りの手甲を備えるも接近時には幽々子に分が在る、

紫の欠点は近接時の有効打と成り得る手段がない、

そこで紫は思い付いた自分の境界を操る能力は物理的に物を捻曲げる力を持つと、

手甲の存在の境界をいじり新たに形作る、

朱塗りの鈎爪へと、

紫も接近に対する武器を手に入れた、

満を持して再び相對する二人、

幽々子は傭兵として紫は將として赴いているのだがそんな事はどうでもよかった、

契約違反？命令違反？関係ない討ちたい相手が居る！何よりも最優先事項に値する、

幽々子「待っててくれたのね」

紫「白々しいわね、始めからそのつもりでしょうが」

軽く笑い合う、

出発前、

丹念に武器の手入れをする幽々子、

私が奴を待っている様に奴も必ず私を待っている、

紫も同じく自身の装備を入念に確認していると物珍しい表情で神玉が見つめる、

神玉

(紫が自身から装備の確認をするなんてね、そこまでさせる人間か？)

たった一人を倒すためにかの大妖怪が動く、

彼女もその大妖怪を倒すために、

幽々子は自身の行動を契約違反と思っていたが所属した軍にとっては朗報だった、

僅か一人で紫を止めてくれているのだから、

二人の間を一枚の木葉が舞う、それが地に落ちた時を合図に始まった、

刀と鉤爪がぶつかり合い火花を散らす、

一瞬の間を突いて飛んで来る小刀を弾く、

直に喰らえば風穴が開くだろう、実際木の幹を丸田を貫通している、

小刀を避け体勢を崩した紫へ飛び込む幽々子、

そうはさせまいと振り抜かれる前に刀を掴む、

敢えて掴ませた感じもし、ニヤツと笑い左手に隠し持つ小刀を振るう、

刀を離し後ろに飛ぶもその長いしなやかな金色の髪をバサリと落とす、

幽々子「悪いわね、綺麗な髪なのに結んだら？待っててあげる」

一応は幽々子も女性、髪を切ってしまった事に若干の罪悪感を感じる、

紫「そうね、そうさせてもらっわ」

髪をたくし上げ帽子に納める、

幽々子「似合っじゃない」

殺し合をしているとゆづのにまるで親類との会話のようである、

幽々子に言われまんざらでもない紫、

幾度となく戦う二人には不思議の感情が芽生えていた、

やっている事は殺し合、始めは憎悪や憎みの念だったかもしれない、

しかし今では全く逆の喜びや楽しみへと変わっていった、

この時間を待ち遠しいと思っている自分が居る、出来るだけ長くこうしていたいと、

だが空へ打ち上がる戦闘終了の合図、

傭兵の幽々子は戦いが終わってしまえば、命を賭ける理由は無くなる、

少しおかしくもあるが名残惜しさを感じるのだった、

着実に勢力を広げ領域を拡大するも神玉は非常に重大な問題を抱え

ていた、

どんなに優れた名主であろうと一つや二つは持っているもの、

在れば在ったで民衆は解決しろと求めるも逆に全く無いと怪訝に情勢は不安がる、かくも人々は面白い性質を持つ、

かの歌聖が遺し実に美しきも忌まわれし妖怪桜、『西行妖』

その美しき枝葉に魅入れし者は人や妖怪、何であろうと逃れる術を持たない、

ただその死の香りに身を委ねるのみ抗う事能わず、

人々も桜を葬る術はいくらでも在った、しかし出来なかった、

いつの人かも解らぬ歌聖、だがその歌聖の遺した歌の数々に畏敬の念を払わざるを得ない、

故に桜を葬る事が出来ず、しかし桜は人を死に導く、

全ては遅すぎたもう桜は誰にも止められない、

何か足りぬ物を欲するかの如く死の領域を広げて行く、

神玉とて黙っていた訳でない、様々な策を考じ試みるも、

だが結果は桜に魂を捧げるだけに終わる、

やはり残された手立ては西行妖に死門の力を与えた西行法師、その
一族の者なら或いは、

その一族を探し出すにも早々に人の争いを止める必要が在った、

幽々子が始めてその能力の覚醒を見せた時を同じく西行妖は激しく
高ぶった、

探し求めた懐かしい友の残り香を感じたかのように、

しかしその美しさは命の危険を冒してでも見るに値する物であった、

遠くなら大丈夫だろうと一目見たが最後心を捕われ死に誘われる、
救いは悲しみや苦しむ最後でなく微笑み安らかな母に抱かれた子の
様に至福に満ちた最後を得ること、

神玉「まだ見付からないのか？」

調査員「申し訳ありません、未だ何の手掛かりも」

人々は西行妖に恐れ情勢は揺らいでいたが大きい混乱を起さないの
も地盤を固め内政を堅実に執り行っていた神玉の手腕の賜物だろう、

とは言え事は急を要した、西行の血筋の搜索と幻想郷の平定の二つ、

一族の搜索と対照的に平定への道のりは順調に進んでいく、

紫と幽々子の決着も着かぬままずると続いていた、

長い事対峙した二人だが互いの名を通り名程度でしか知らぬ物だった、

名前なんてそんなに重要でもない相手は必ず戦場に居るんだから顔を覚えていれば十分、

この頃の紫は自分が殺し合って居る者が西行法師の一族だなんて思ってもいなかっただろう、

神玉は既に七割方を平定し残りも時間の問題となるまで来ていた、

調査員「報告します！」

険しい顔をする調査員、

神玉「どうした？」

なかなか口を開かない事に僅かながらの焦りを覚えた、

調査員「さ、西行についてですが」

神玉「居場所を突き止めたのか？」

そろそろとしてはぐらかす調査員に少し苛立つ、

覚悟を決めて重い口を開いた、

調査員「所在地を特定する事は出来たのですが」

神玉「確認は取れたのか、どうなんだ」

調査員「数年前に夜盗の襲撃により途絶したとの事です」

神玉「馬鹿な！遅かったと言っのか」

もう一人の調査員が駆け込んで来る、

調査員B「失礼します、桜花戦団を名乗る少数の傭兵団に西行寺の名を持つ者が居ることが分かりました」

神玉「それは本当か？」

調査員B「確かです」

たまたまその場に居合わせ聞き耳を立てる紫、

紫「桜花戦団？まさかあの子が」

茶屋で一休みしている幽々子達、

幽々子「もうすぐ人間の戦争も終わるわね」

銀「そうだな戦いも終われば俺達も用済みか」

陽子「でもこれからどうなるか？」

否、此处からが始まりである、

各地に身を潜めていた妖怪達が動き出すだろう、

彼らはただ人間の争いに干渉するのが面倒だっただけ、

動き出した彼らに対抗するために神玉は大地を人を疲弊させぬよう
していた、

町を何と無くぶらぶらと歩くと見慣れたあの顔が、

紫「やっと見つけた！」

戦場以外の場所で会うのは始めてで街中だがつい身構える、

紫「硬くならないで別に殺り合おうって訳じゃないんだから？」

確かに紫からは敵意や悪意を感じないし何より満面の笑みを湛えるその顔に一切の企みは無いと断言出来る自信みたいなものがあつた、

524

八雲 紫、彼女は妖怪だが行き交う人込みに混じれば普通の人間と見た目には何も大差はなく、

人間と妖怪は今でこそ種族が違えど元はこの二つはとても近しい存在なのかもしれない、

紫「今日来たのは他でも無い貴女を迎えに来たの」

幽々子「迎え？」

刀を肩口に預けて大柄な態度を取る幽々子、

幽々子「確か貴女は神玉の懐刀よね？私は傭兵よ故意的では無いにしろ貴女達に敵対してきた自分を迎えに来たとはどうゆう風の吹き回しかしら？」

こんな態度を幽々子が取ったのも理由がある、

昨日まで敵だった相手が突然今度は仲間になれと言われ『ハイそうですか』と言うほうもどうかしている、

相手の意図を知るためにも探りや牽制を込めていた、

大体こんな反応が返って来るだろうと大方の予想していた紫、

暖簾に腕押しといった感じで動じない紫に諦めた幽々子、

何とも胡散臭い笑顔だが何故か信じれる気がするのが不思議だ、

幽々子「まっ！私達は傭兵よ雇い主が貴女達に変わるだけの事」

紫「卑屈ね、とりあえずは来てくれるって事でいいのかしら？」

やれやれと首を縦に振る、

幽々子「一つ質問してもいいかしら？」

紫「何でもどうぞ」

少し間を空ける、

幽々子「開口貴女は見つけたと言っていたわね？戦力を望むのなら私より強い者なんていくらでも居るのに明らかに私個人を指定している詰まりは私にしかない特別な理由があるんでしょう？」

扇子で口元を隠す紫、

紫「惚けた顔してとんだ食わせ者ね！流石は西行の姫」

この言葉を耳にした直後に妖忌は臨戦体勢に移る、

僅かでも敵意や怪しい行動をしようものなら即座に切り捨てる体位を、

紫「大丈夫よ！何もしないからその物騒なのを下げてください？貴女の力が必要なのそれに見たくない？古の大桜『西行妖』を」

これが決め手となり幽々子は神玉の下へ、

答えはほぼ決まっていたが今一步踏ん切りを決めかねていた幽々子は一族のルーツとなった桜をこの目で確かめに、

紫に案内されて都に着く、

少し驚いた事は今や幻想郷において最大の勢力を有する神玉の治める街にしてはとても質素な佇まいをしている、

よくある者達は権力の誇示などを示すために豪華な町並みをしてきた、

しかしこれが正しい姿なのだろう思いを巡らせながら街中を見て回る、

紫「神玉はこの先に居るわ」

ついに神玉の顔をこの目で拝む事が出来る、

だが誰も居ない部屋の中央付近に対極図をもした大きな球が在るだけ、

幽々子「誰も居ないじゃない？」

紫が少し笑うというより堪えられないといった様子で腹を抱える、

この部屋に入ってから感じる重圧感はとてつもない、

陰陽模様の大球が一人でに動き出す、

躰かたちが変わっていく小さく収縮し人の躰へとなる、

降り立つ姿は神職服の男、

???「初めまして、私が神玉です」

幽々子「は、初めまして」

(神玉とは男なのか？てか性別なんて在るのか？)

紫を見るとまだ笑っている、

重圧感は幾分か軽くなっているのに気付く、

不敵な笑みを浮かべる神玉の体が再び躰を変える

髪が伸び紅く染まる体は丸みを帯びその頭部から生まれるは四本の角、

神玉「敢えて言おうか？初めまして」

幽々子は固まってしまった、

違う驚愕して動けない訳じゃない、

体が細胞が心が魂が逃げると言っている、

しかし体は全くゆうことを聞いてくれない、

どうにか恐怖を押さえ込みその空気にも慣れ落ち着く幽々子だが尋常じゃない量の汗をかいていた、

紫「ほう？」

(やはり流石だな神玉を前に正気を保てるなんてね)

神玉「ようこそ私は貴女達を歓迎するわ紫と対峙出来る程の人ですから我が一分隊の指揮を任せたいのですが」

幽々子「いいえ辞めとくわ常備軍でわ出来ない事も多い動かすのも面倒でしょ？だから傭兵がいいのよ自由に出来る」

人間が自分に対し視線を逸らす事なく見据えているこんな人間は今まで居なかった、

幽々子「それに傭兵の扱いの方が貴女も楽でしょう？こちらが何人死のうがそちら側の損失にならないしね」

神玉「……いいでしょう！そう望むのなら」

幽々子「頼まれついでにもう一ついいかしら？団員の募集はしないで欲しいの戦う理由なんて人それぞれだからね自らの意思でこちらの門戸を叩く人だけでいい」

神玉「分かったわ今日はこれまでにしましょう、ゆるりとしていて下さい」

翌日に再び神玉の下へと行く始めて会った時に感じたあの心の底から沸き上がる様な根源の恐怖が今は微塵も無い、

神玉も少し試していた信用たる存在か否かよもや自分と向き合っただけで心を見失う様なら使い物に成らないと、

だがとりあえずは幽々子は神玉の眼鏡にかなったようである、

取り留めのない世話をする神玉に直球に質問をぶつけた、

幽々子「回りくどいのはいい私を西行の血族と知った上で西行妖を話にちらつかせてね試したい事があるんでしよう？桜と私で」

神玉「これは参ったな、では正直に言いましょう西行妖に会ってもらいたいの今や西行妖は死門の扉と成りかけている被害は拡がるばかりであらゆる手を試みたが桜を抑えられない残された手段は西行の一族の貴女に頼るしかない」

語り手を紫が代わる、

紫「貴女が台頭を現しはじめた頃から西行妖の活動が急激に活性化してきているのまるで貴女が存在を感じ取り待ち侘びるかのよう」

妖忌

（やはり桜は人を死に導くあれは作り話等ではなかったんだ）

妖忌「成りません！危険過ぎますこんなもの体の好い人身御供ひとみいけです！もつと言えば実験だ！」

主の危機と妖忌が割って入る、

あながち言っている事に間違いはない幽々子が西行の血族であるが西行妖を抑えられるかどうかは別問題だ、

ただ可能性が在るというだけ、

勿論失敗すれば待つのは『死』

妖忌にとってそんなものとても容認出来る話でない、

今にも切り掛からんと凄まじい剣幕で二人を睨みつける妖忌を宥^{なだ}める幽々子、

幽々子「有り難う妖忌でもいいの始めから分かっていたことだからそれがどれだけ危険だとしても私は行くよ」

決意は固く従者である妖忌にはそれ以上の口を挟む事は出来ない、

妖忌「姫様がそうおっしゃるならこちらにも考えがあります！桜への立ち会いにその二人も一緒に来てもらおう勿論我々も同行しようこちらは命を賭けるのだ同じ痛みを背負って貰う」

当然と言えば当然の言い分である、

神玉「従いましょう」

こうして皆で連れだって西行妖へ赴く、

神玉や紫でさえ怪しく心を揺さ振られる程に力を持つ桜を本当に抑えられるのかと内心穏やかには居られなかった、

たどり着いたその場所はただっ広い荒野、

幽々子「こんな物寒い場所に何年待っていたの？」

まず一行を迎えたのは舞い散る桜の花びら、

季節は夏とはいかないが疾とうに花は散りきっている時期だとい
うの
に、

犇と々（ひしひし）感じる重苦しい空気に息苦しさを覚え桜吹雪の向
こうに余りにも似つかわしくない物が累々と転がる、

桜に導かれた先にある成れの果て、

弔う事の出来ぬ亡骸達、

弔いたくても近付けば仲間入り、

銀や陽子も人の枠を大きく抜け出た存在となっている、

多くの人間は既に魂を捕われて命を落としているも二人はまだなん
ともないように見える、

ついにその姿を現した古しえよりの妖楼・西行妖、

ギリシャ神話に伝わる空を支える言われる巨神アトラスを彷彿とさせる偉大なまでの出で立ち、

しかしこれが桜だと皆が気付くまで少しかかった、

何故か？

花は桜色でなく淡い灰色に染まる物だったから、

幽玄に咲くそれは正に『墨染の桜』

死んでも見てみたいその意味が心から解る、

だが次の瞬間に襲われるは想像を絶する恐怖、

幽々子が神玉から受けた物とはまた違うあれは外から来る外的なもの

の、

人間が進化の過程で遺伝子に刻まれた死の記憶、それが呼び起こされる様な内からの恐怖、

あの紫でさえがたがたと震えている、

神玉もその鼓動を早め怪しい衝動に耐えている、

銀達は近くに神玉おり彼女の力が桜の力に干渉してかその身を保つ事が出来た、

それでも人間と妖怪では耐久性に大きな隔たりがある、

立っっていられずに膝を落とす、

銀「大丈夫か陽子？」

陽子「貴方こそ平気なの？私は平気だけどね」

まだ強がる余力があるようだ、

そんな中でただ一人悠然と歩を進める、

銀「なんで動けるんだ？」

やはり幽々子だけは特別なのか？思いたくなくなってしまふ、

距離が近づく度に花はより深く重く暗い深遠の闇を宿した如き漆黒
へ、

相手は桜、植物である表情など解るわけがないはずだが、

桜は歡喜に打ち震えているそう思えた、

真下に立つ幽々子はその幹に手を触れると全ての花が空に舞う花も
含め黒く染まりその場に力無くへたり込む、

彼女でも駄目なのかと絶望に包まれるも静かに立ち上がり幹に体を
預けた、

世界を黒に染める空が戻っていく鮮やかな薄紅の空へ、

先程の全て嘘だったと言わんばかりに静寂が包む、

幽々子「貴方はどれだけの時間を私を待っていたの？」

桜はただ淋しいだけ、安心して人々に寝てもらいたいだけだったの
に望まぬ結果を死へと導いてしまう、

実際には西行法師の魂が常に傍にいるのだが桜の我が儘だったのか
もしれない？

西行妖が依然として危険な存在である事に変わりはないが取り敢えず今は安定している、

早速にも神玉は無縁仏達の葬儀を執り行った、

丁重に彼らを死出の国へ送る為に、

とは言うがその数や膨大ですぐに片付かない、

でも神玉は一切の手を怠る事なく一人一人丁寧に葬った、

彼女なりの手向けなのだろう、

この真摯なまでの姿に神玉への信頼を増していく、

彼女になら従って行けると、

一方の幽々子は家を失ってから数年間の放浪する生活で初めて居を構えた、西行妖を景観に望む場所に危険だと反対の声も挙がるが断固として譲らなかつた、

当然の事ながら銀と陽子の二人もその近場に設けた、

西行の血族である幽々子なら未だしも二人の危険度はその遙か上を行く、

何を言われようが首を縦に振らない、これは二人にとっての幽々子への信頼の証だつた、

妖忌はというと元より家族の様な存在であり本人は庭番で在ることを強調しているが今や親代わり、幽々子と同じ居内に住む事にした、

西行寺の邸宅でも一つ屋根の下で暮らしていたのだから、

少しの間の平穩を堪能し人々は過ぎすのだった、

紫「今のところは何も目立った動きは聞かないわね」

神玉「だが油断は出来ないわ」

（それにしても随分と紫も円くなったわ、あの頃は何かと突っ掛か
つて来てたのに）

幽々子と出会ってから人間にも興味を持つようになり人との付き合い方も上手くなった、

つんけんとしていた頃に比べニコニコとし評判も良い、

紫も相当の器量よしだ、笑っていればそれだけで絵になる程の、

幽々子と紫が並んで歩けば誰もが振り返る、

こんな綺麗な女性が次元の魔女と恐れられていたのだから不思議だ、

こちらでの生活にも慣れはじめた頃からちらほらと戦団の扉を叩く
者達も増えてきた、

平定され安定した世の中であぶれた傭兵くずれはごまんと居てそんな者達には恰好の居場所だ、

だが戦場で物を言わせてきた者にしてみれば女が隊長なんてプライドが許さないだろう、

端から見て幽々子が剣を手に戦う姿を想像するのは難しい、

そんな荒くれ者共を黙らせるには力を見せるのが一番手っ取り早い、

544

剣術の基礎こそ妖忌から教わっているがのちの派生はほぼ我流、

この当時きちんと剣術を学んで来る傭兵なんて数えて何人いるか？

現代の言い方で傭兵は俗に言うロストナンバー（存在しない数字）

正規軍は一人一人しっかりした管理がされているのに対し傭兵は現地調達の即席兵、詰まりは使い捨て同然の扱い、

その中で生き残って来た叩き上げの彼等だ実力は折り紙付き、

だがそれらを擦じ伏せる幽々子、

我が身を疑ったはずだ、こんな年端も行かぬ少女に負けるなんて夢にも思ってもみなかったらう、

培ってきた物を否定されたようなものだ、

屈辱に震えるも後の幽々子の屈託のない笑顔を見て負けてよかったと思えてしまう、

皆が同一に思うはこの笑顔を守りたいと願いたくなる、

反骨心を剥き出しにしていた彼等が言い方がちょっと悪いが手の平を反したように友好的になった、

一度信頼感を得た彼等の絆は強い、

なにせ戦場で命を預ける相手だ信頼が無ければやっていけない、

当初の四人だけだった頃にしてみると随分と大所帯になったものの傭兵である以上は働か無ければ正規軍と違い金は発生しない、

食わせていく為にも依頼をこなす、

安定しているとはいえ戦闘が無くなる事はない、

今でも在るように世界の3分の1は紛争や内戦などの争いに溢れている先進国が経済的な安定を見せるこの時代でも傭兵や私設軍隊が需要を失わない訳がそこにある、

傭兵くずれの盗賊団や残党軍、はぐれ妖怪の処理が主な任務になるのだった、

もともと幽々子達は頼まれて来た、

西行妖も幽々子でなければ抑える事は出来なかったはず、

そのため扱いは傭兵とは言え神玉は最大限の優遇を与えるも何一つとして首を縦に振りはしなかった、

人から施しを受けるのは彼女の意地が許さなかったのだらう、

しかしやっている事は残党狩り汚れ仕事である、

市井しせいの人々からの風評は良くない物だった、

わかっていた事だから気にする事でもなかった、

だが本音を言えば神玉も幽々子には大人しくして欲しかったはずだ、彼女の魂に反応し落ち着きを見せる西行妖ではあるが、

紫と渡り合える実力の持ち主だ、万が一でも討ち死にするとは考えにくいがもしもその命が失われた時に再び暴走しないとは限らない、否しないという可能性の方が低いだろう、

神玉や紫はさて置き市井の者達は幽々子の事を飾りの人形程度の認識でしかなく、誰のお陰で桜が安定しているかということは頭から抜け落ちているようだった、

幽々子だって馬鹿じゃない自分の命の重みは重々承知している、その上で判断しての結果なのだ、

548

あの日、彼と將軍と交わした約束、

それは強く生きる、

自分の信じた道をただ真つ直ぐに、

別段喜ばしい事ではないが任務の依頼数は増えていく傾向にあった、

なかでも妖怪の仕業と思われる人的被害が日に日に増加していく、

まだ断言出来る訳でないが妖怪が動き出している、

人々は理不尽なものであるつい先程までは毛嫌いした存在に対し我が身に危機が迫ると知るや否や縋り付こうとする、余りにも身勝手な言い分だが仕方ないかもしれぬ、

彼らに抵抗する力が在る訳が無い、どちらかと言えば抵抗する努力をしないだけなのだろうが意志もなき者が出た所で屍を曝す結果に終わるだけ、

桜は季節を問わずその花を咲かせる、

舞い散る花びらは人々の死を映し薄紅を淡い墨に染める、

死の数だけ黒く染まる花弁を人々は忌み嫌うもその美しさは人を魅

了して止まない、

等しく空へ魂を誘う、

妖怪桜と謂われるだけあって一年を通し花を咲かせる西行妖の前には春には夜桜なんて風流も形無しである、

幽々子「酒の味が美味しいと思えたのは初めてかな？」

夜、桜を前に一人晩酌を酌む、

今まで酒の味が分からなかった、周りの大人達を真似て始めてみたものの一度たりとも美味いと感じた日はなかったが酔っている間は面倒臭いのを全部忘れられた、

銀「珍しいな？良いことでもあったか」

幽々子「桜を着にしていただけよ、どうしたのよ二人も揃って？」

隣に座って陽子が猪口を差し出す、

陽子「私にも貰える？」

同じく隣にドンツと座る銀、

銀「俺もいいかな？」

しばらくの間を三人で酌み交わす、

普段の何でも無いこんなやり取りが愛しく思える、

もう幽々子にとって二人は何物にも代え難い物になっていた、

でもこれから始まるであろう戦いは妖怪との戦い、

全ての面において人間を凌駕する相手だ、

これまでの様に生き残れる保障はない、再び一人になる恐怖に怯える、

ため息をついて銀が幽々子の肩を寄せる、

突然の事にあたふたとしてしまう、

幽々子「な！何を？」

銀「心配すんな俺達は死なない！」

幽々子「え？」

陽子「私達があんたの考えを分からないとでも思ったの？」

今更ながら馬鹿さ加減を知ったこんなにも素晴らしい友に恵まれている事に気付いたのだから、

銀「俺達はそんなに頼りなく見えるか？」

軽くフツと笑う、

幽々子「殺したって死にそうに無いわね？」

月夜に笑い声が響き渡るのだった、

巡り咲く花・覚醒（前書き）

墨染の桜についての補足、

全国に同名の桜は多く点在し、その中でも有名な二つを紹介します、

実際に淡墨桜うすすみざくらと呼ばれる桜が岐阜県本巣市に現存し、

平安時代、上野岑雄かむつげのみねおが友人の死を悼み、「深草の野辺の桜し心あらば今年ばかりは墨染めに咲け」と歌ったところ彼の悲しみに感じ入った桜が喪に服すように灰色がかった色に咲いたという伝説からその名が着いた、

日本三大桜の一つにも称されており、この桜の逸話を題材にした能のうなども在る、

もう一つは千葉県東金市貴船神社に咲く墨染桜の名で現存する、

こちらは西行法師がこの神社に訪れた記念にと埋めた桜、

西行法師の関わりからすると東方妖々夢での題材にされた桜はこちらであると思われ、

晩年足を悪くした西行がその桜の枝から杖を造り持ち歩いた、

その杖とした枝から花が咲いたと言う伝説が伝わる、

ちなみに墨染桜は現在で三代目、

すぐ傍に西行法師が桜を埋める際に残したとされる唄が刻まれた石碑が在ります、

巡り咲く花・覚醒

戦国時代の武将ではないが群れるのを嫌うのか孤高を気取る妖怪がほとんどであった、

討伐に掛かる被害は大きい物だが決して勝てない相手でない、

幽々子達のような対妖怪戦に勝ってきた手練れも居るためか苦しい戦いになる事はなかった、

しかし彼等も学習する、自らの能力や力に任せたごり押し of 戦い方では例え人間相手でも戦術の前には敵わないという事を、

徒党を組むにしても一石一朝でしっかりした組織化出来るはずなく烏合の衆止まりである、

高位の妖怪程に力もさることながら思慮深く慎重に事を運ぶのだが下位な程単純な者が多い、

急進の夕力派が寄り集まり一度行動を起こした事があったが先に説明した通りであった為に簡単に制圧された、

ここでさらに妖怪達は個の力では軍勢に対して限界があると学ぶ、

戦術、兵法の前に無策では対抗出来ない統率の取れていないものなど「個」の集まりで集団とは呼べない、

きちんとした土台と整備が必要なのだを知る、

神玉は幻想郷の七割程度を治める、つまりは残りの三割は手付かず、

彼等はそれを狙う、

徒党を組み上げ軍律を敷く、

こんなにも人間じみた行動を妖怪が取るなんて誰も考えなかった、でも妖怪にだって上下関係や主従関係があるのだからさほど難しい事ではない、

また神玉は政治的にも長けるが特筆すべきは自身の戦闘能力もさることながら指揮能力も非常に優れている点、

妖怪にしてみればその戦術、戦い方はまるまる手本となる、

見様見真似でも戦術を駆使する妖怪の軍勢、

それだけでもかなりの脅威となる、

彼女の敵は外だけでない国を治める以上は身内に巣くう敵とも戦わなくてはならない、

そのためか最近の戦闘指揮はもっぱら幽々子が取っていた、

戦場での指揮官に必要なものは戦士としての力量もあるが重要なのは人を引き付けるカリスマである、

良き戦士が良き指揮官に成れる訳ではない、

強いカリスマの下に意思を束ね連なる意思は刃と成る、

その条件に幽々子はど真ん中だと言えよう、

戦場においての圧倒的なまでのカリスマは右に並ぶべき者無きもの、

刀を手に戦場を駆る姿は神々しいとさえ想わせる、

情勢は劣勢にならなくとも優勢というには難しい状況にあった、

長引く程に敵は研鑽を積み強固になっていく、

戦団に特別な任務が来る、

幽々子「囹役で良いのかしら？」

神玉「そうなるな」

軍が進軍するに大部隊で動けばどうしても目立ってしまう、

そこで囹部隊に戦闘を行わせ目を引かせ本隊の援護を兼ねて戦闘をしつつ帰還、

こんな任務は普通だったら誰も受けはしない「死んでこい」と言っているようなものだ、

攪乱し敵を引っかき回すにも少数での人数がいいだろう、

最も突貫力のある人選をするに幽々子がそれに相応しかった、

人選は三人で決定し銀と幽々子と後一人は最近に入団した瑠る

幽々子「神玉つたら貴女なら出来るだなんて簡単に言ってくれるわね」

銀「ぐたぐた言っても仕方ないさ」

出撃し先々で目立つ様に派手に立ち回り先行させた銀が戻るまで留まっていた、

作戦的には面白いぐらいに簡単に釣れた、

銀「大体こんな所か？遠慮しろつての！」

幽々子「後は敵陣を突破するだけよ」

瑠「言ってくれますね、見込みがあるのですか？」

すでに周りは無数の敵に取り囲まれている、

幽々子「有る訳無いでしょ！ただ帰ったら一杯やりましょう？」

この状況で帰ると言うんだから気でも狂ったとも思える言動だがどうにも信じれてしまっ、

不思議と帰れる希望が沸いて来る、

瑠「まったくなんて良い女なんだ」

ふと漏らした一言に銀がつっこむ、

銀「お前もかよ？敵だらけだな」

瑠「その言い方ですと貴方も狙っているのですか？」

その反応に少しだけ驚いた、

銀「いろいろと仕掛けてはいるんだがな、如何せん鈍くて」

璫「まあーうちに居る男達の半分は团长目当てでしょう」

銀「そうだな」

二人の会話に割り込む、

幽々子「何話してるか知らないけど行くわよ！背中頼んだわ」

敵方に見れば西行寺 幽々子という人間は何としても討ち取りたかったのか相当数を割り当てていたようで神玉が率いる本隊に気付いたのはぎりぎりまで接近を許してからだった、

周りには目もくれずただ一直線に突っ走る、

その数に囲まれても幽々子達は無事に帰還を果たすと同時期に本隊の戦闘が開始された、

匪部隊に割きすぎた彼等是对した抵抗も出来ず呆気なく制圧され残りなどさしたる問題には成らない、

この一件で幽々子と戦団の名声を上げ門を叩く者の数は更に増しいく、

一介の傭兵でしかなかった幽々子は軍内の立場をより堅固な物にし同内隊からの定評は高まっていく、

領土が広がるにつれ神玉一人で管轄するには限界があり所轄の人間を置くのだが、

軍隊にとって人つまりは兵隊は駒と同じ物である、

それを示すように軍において人の死は損失率という、『損失』軍人は人では無いと言いたげな言葉だ、

上層部の者は新人だろうが何だろうが隊員を注ぎ込む事しかない

死ねば切り捨てる使い駒だ、

権力を握り象と成った者に地を這う蟻は見えないのだろう、

それに幽々子は真つ向からぶつかると危険度が高い任務には自らも率先して戦団の人間を送り損失率を減らしていく、

元より神玉の直轄とも言える幽々子は軍内の地位は高い、

将校「何を悠長に構えている！勝てない相手はないのだもっと兵を
注ぎ込め」

幽々子「お言葉ですが、我が方の被害も決して軽くは有りません」

いつの時にも腐った人間は居る、

自身は安全な地で兵に指令を出すだけで己が権力に固執し利権を貪る者、

将校「何を言う！痛みを伴わずに勝利等在るものか我等の痛みが勝利に繋がるのだ」

我慢ならなかったのだろう、

その胸元に掴み掛かる腕を刀で突き刺す、

将校「ぐあ、貴様！何を？」

幽々子「我等の痛み？何も知らず命令だけ下す貴様に痛みだと
さけるな」

将校「こんな事をしてただですむと思つな！」

団員と供に将校を引きずり出す、

そこは戦火の真っ只中、

幽々子「貴様が私に豪語した痛みとやらを教えてもらおうか？」

将校「何の権利があつてこの私を」

必死に繕う彼に冷たく言い放つ、

幽々子「計画ミスによる防衛体制の崩壊、自滅的な戦力の浪費、使途不明の公費の行方などとまあよくもこれだけの事を隠蔽工作の方は策ONOKIだつたけどね」

言い訳ばかり並べる将校の言葉の中に人々の為にと台詞があつた、

幽々子「勘違いしていない？私は傭兵よ私達が戦う理由は他の誰でもない私達の為だけにそれが我等の誇り」

そう言つと一式の武器を投げる、

幽々子「その地位まで上り詰めたのだからこの程度問題無いでしょ」
「っ？」

顔を青ざめさせながら意図を悟る、

将校「金なら望むだけやる！だから」

幽々子「彼等の痛み、身を以って知りなさい」

戦場に取り残された彼の最後は誰も知らない、

書類を片付ける神玉に詰め寄る人影が一つ、

幽々子「何故あんな事を私にさせた？お前が裁けば速かっただろう」

ダンツと机を叩く、

神玉「知ってほしかった人の心に巣くう闇をどんなに理想や綺麗事を並べようと利権や欲に駆られた者が居ることを」

目線を落とし僅かな沈黙が流れる、

幽々子「分かっているよそんな事は嫌という程に見てきたから」

神玉「貴方達人間の中には時として我等をも凌ぐ深い闇を身に宿している」

フツと笑う、

幽々子「気を付けなさい？貴女の目の前に居るのはその人間だから」

その頃から随分と妖怪達も様変わりしたようで餌と扱つより道具とするほうが利口であると、

何も食は人間でなくても良いのだから別の物で代用すればいい、

何処までも人間臭い、

妖怪の盗賊団なんて誰が考えただろうか、

「一つ解せない事がある。諜報部からの情報から神玉が討伐に兵を送るも空回りばかり、

一度や二度でなく全て、

こちらの内情を知り得ない限り不可能であるはずだつまりは内通する者が居る事になる、

神玉「何度となく逃げられている賊の所在がわれた今までみたく軍を出してもまた空回りに終わる事になるだろう」

幽々子「まあー言いたい事は察しがついてるけど何？」

神玉「この件は私の独断の決定だ、よって軍は動けない先の様に少数が望ましい貴女の言った通りに成ったわね？傭兵である貴方達の存在が助けになるわ」

幽々子「傭兵には傭兵の利が在る、いざという時に打って付けのね」

快諾し引き受ける意思を示す、

神玉「本来なら私が出張れば一番早いのだがを政治的に不安な今此処を動く訳にはいかない人選は貴女に任せるわ」

幽々子「任されたわ」

神玉の元をあとにした幽々子に瑠が駆け寄る

瑠「その任務に俺を入れて欲しい」

言い寄られ少し後ずさる、

瑠「やっとこの時が廻ってきたんだ頼む」

幽々子「貴方が望むなら止めないわ」

人選は銀、陽子、璫の三人で決まる、

装備を整え出発する、

如何にもといった洞窟^{いか}が出て来た、

生活の感じが見て取れ逃げた形跡もない、

幽々子「敵陣に乗り込むのたがらなるべく慎重にね」

陽子「あんたがそれ言う？」

ツッコミを軽く流して潜入する、

どうにも自然に出来た洞窟ではない人の手が掛かっている、

銀「璫、一人で突っ走るな！あいつどうしたたんだよ？」

璫「邪魔だー！退けー！」

潜入作戦だというのに派手に動くものだから感ずかれわらわらと敵が沸いて来る、

だが殲滅が目的でもあるため好都合とも言える、

陽子「あんたらと居ると退屈しないで済むわよ」

銀「結局はこつなんのか」

幽々子「褒めても何も出ないわよ」

二人同時にツッコム、

銀、陽子「褒めてねーよ！」

三人のおとぼけを他所に一人奥へと進む瑠、

瑠「何処だ？」

追いかけるもどんどん奥へ走って行く、

銀「瑠の奴は何を探してるんだ？」

洞窟の最深部に牢があり瑠は錠を壊し繋がれていた人に駆け寄る、

瑠「止水しすい」

止水と呼ばれた人は女性だった、

璫「よかった無事で」

その二人の姿を見て少し暖かい気分になる、

銀「そりゃ急ぐのも無理ないな」

敵に一人取り残しがいた、

岩壁を貫いて敵方の団長と思しき者が飛び出して来た、

陽子「空気ぐらい読みなさいよ!」

妖怪「我等もここまでか？状況が読めぬ程愚かではないが置き土産の一つは貰っていくぞ!」

流石に長となるだけの実力は持ち合わせている、

幽々子「残念だけどね貴方と心中する気は無いの逝くなら一人で逝きなさい！」

交差に斬撃を叩き込む、

この時の幽々子に油断がいや慢心があった、

相手の死を確認せずに刀を納める、

死んだと思い込んでいた、

明らかな失態、

戦場で何か選択を一つ間違えれば何か大事な物を失う事になる、

まだ残る微かな息を押し殺す、

注意が消え失せるのを見て一気に動く、

妖怪「油断したな！先刻の約束通り置き土産を貰っていくぞ」

言われた通り幽々子は完全に油断していた臨戦体勢を解いていた、それに反応するのは一瞬だがその一瞬が明暗を分ける、

標的となり回避の間に合いそうにない璫を庇う様に止水が飛び出す、しかしその行動も虚しく妖怪の右手は止水の背中を貫き璫をも貫いた、

最後の力を振り絞った一撃を後に妖怪は絶命した、

止水「ごめんね、これじゃ助けに来てもらった意味が無くなっちゃった」

璫「最後まで俺って駄目だな」

体は大穴が開き大量の血が流れ出て一目見て助からないとわかる、

幽々子「逝くな！駄目だなんて言っな」

瑠は首を横に振る、

瑠「銀、話がある」

一人銀だけを呼ぶ、

銀「なんだ？」

瑠「お前は俺みたいな最後になって欲しくない！団長が好きなんだから？彼女を離すなよ」

銀「嗚呼」

銀がその手を握ろうと手を伸ばすほんの少し笑い力無く璫の手は地に落ち銀の手を摺り抜けた、

陽子「ねえ、璫は最後に何を言ったの？」

銀「わりい秘密にさせてくれ」

その時、幽々子は失意のどん底にあった、

璫が止水が死んだのは自分の所為だ相手と直接対峙したのは私だ、

己の中に慢心が在ったそれが璫を殺したと、

見兼ねた陽子が胸倉を掴み上げる、

陽子「何時までそこでうだうだする気？認める璫は死んだ！死は覚悟の上で来たはずよ、あんたは止まってはいけない誰が死のうともあんただけは！そうしたら璫の死は無駄になる」

幽々子「有難う陽子もう大丈夫だから二人を吊って挙げよう」

璫と止水の遺体を共に並べ火葬する、

すると銀があることに気付く、

火が風に引っ張られ傾いている、

銀「風の流れが？」

此処は洞窟だというのに風が奥へ流れている、

銀は風を追って岩壁を調べた、

巧妙に隠してあるが人工的に造られた扉だった、

銀「おい！これ見ろよ」

二人を呼ぶ、

幽々子「これは？」

陽子「隠し扉なんて、この方向は？」

銀「街の方だ」

この通路が何であれ通る以外の選択肢はない、出発の際に幽々子は
璫の刀を腰に挿す、

陽子「幽々子それは」

幽々子「これは私の罪、陽子？私達が生きる限り璫は死なない我等
と供に在る」

(私の甘さが璫を殺した)

隠し通路を進む、

街と洞窟との位置から見て中央付近だろう、

陽子「こんな道がここまで続いてるなんて」

出口を抜けると日は落ち夜に差し掛かっていた、

目の前に大きな屋敷がある隠し通路の出口を見るに無関係ではなさそうだが、

乗り込もうとする幽々子を銀が制した、

銀「待てこいつは？情報が筒漏れかそりゃそうだろうよ警邏隊を組織した犬飼の屋敷だ」

陽子「なんでなのよ」

説明を始める、

銀「いいか警邏隊は軍との係わり合いは深い有事の際には軍役に借り出されるしな神玉や軍の内部情報なんざ筒抜けさ」

幽々子「こんな奴の為に璫が」

銀「だから待て相手は官僚だ下手に動く俺達の立場がやばくなるぞ」

説得を続けはするが、

幽々子「知ったことか！私に行く」

陽子と顔を見合わせる銀は溜息を吐く、

銀「お前一人で行かせられるか分かったよ俺達も行くよ」

陽子「乗り込むにしてもどうしたものかしらね？これ」

此れ見よがしに重々とした門が聳^{そび}える、

幽々子「そんなの簡単よ」

深く腰を沈め刀に手を掛ける、

銀「チョッ！おいまさか？」

瞬間右肩が下がり右足を踏み込む、

鞘から抜け切った刀の刀身を目にした時は既に門は消え去っていた、

幽々子「正面から堂々と入る」

忍び込むつもりだったが今更いっても遅いので屋敷の中へ、

正面玄関の門をぶちやぶった訳だ騒ぎを聞き付けた護衛を倒して進む、

幽々子「流石に広いわね何処に居るのかしら？」

常人では注意深く探さなければ分からぬだろう床を踏む僅かな感触の違いに気付く、

しやがみ込み床を調べる、

陽子「どうしたのよ？」

幽々子「何か引きずった跡が在るわ？それなりの大きさよ」

その跡を調べる銀、

銀「ここら辺かな？」

壁に刀を突き刺し思い切り引つ張ると床の跡ピッタリに壁が動く、

幽々子「また隠し扉？随分と手が込んでるわね」

扉の先は階段になっており地下へと続いている、

カビっぽく湿った臭いがし手入れされているとはお世辞にも言えない、

蜘蛛の巣を払い広場に踏み入るとそこに広がる光景に目を疑った、

多くの戦場、死地を越えてきた彼等だが、

それは初めて見る世界、

何もかもが違う認めてはいけないこの光景を認めたら世界の終わり、

幾つもの手術台のような物が乱雑に並ぶ、

それに横たわる人だった物、

だったと言ったのは誰一人として人の形を保ってはいなかった、

腹部を割かれ内臓を暴^{あは}かれた者や手足を切断され様々な器具に身体を切り刻まれる者など最早人としての尊厳は完全に無い、

皆見れば年端もいかない少女ばかりで冷たい抜け殻となっていた、

何より驚愕したのが治療の形跡が見られたことだ、

一思いには殺さず彼女達が息絶えるまで苦しみを与え続けたのだ、

余りにも残虐過ぎる人の所業ではない、

奥の方からカンカンとか細かい金属音が耳に届く、

それはまだ僅かな生に縊り付く少女が発する微かな音、

両の手足を潰され舌を抜かれ喋る事も出来ぬ彼女が出した助けの声
だった、

素人目に見たとしても長くは持たない、

そんな彼女はまだ動く限られた部位を使い様々な方向を示す、

自分と同じ様に死に切れない仲間を必死に教えていた、

少女達は皆小さく首を縦に振る殺してくれと人として死にたいと彼女達の切な願い、

心が張り切れそうだった、

短剣を手に目の前に立つ幽々子を見て声を出せぬその口で有難うと語り微笑んだ、

何故？私に有難うと言う何も出来ない私に、

しかし殺してやる事が彼女達への最良の法だった、

一人一人その短い生を絶つていく足取りが重い涙で視界が霞む、

最後の一人を手に掛けた時に幽々子の心は限界を迎えていた何も出来ぬ己を憎み怨んだ、

その負の感情は彼女の魂に宿る力を目覚めさせる、

今し方死した少女達の霊が見える幽々子だけでなく銀や陽子の目にも映る、

死霊を纏い操る力を、

ただの桜に死門の力を与えた西行法師の血族である幽々子だその力に目覚めたのも至極当然ともいえたかもしれない、

地下に火を放ち地上へと戻る三人、

銀「幽々子、悪いが手を出させて貰うぞもう抑えられん」

陽子「私もドタマに来たよ！」

馬鹿に広い屋敷の中にまた門が姿を見せる、

まるで誰かが攻め込んで来ることを予見していたかの如くに、

初め見た門とは比べ物にならないほどに堅牢な造りをしている、

しかしそんな物が幽々子達を前にしてはベニヤ板と何ら差し支えない、

三人の襲撃に響めき立つ警備隊達は門の内側に警備を固める、

石壁を鉄骨で補強した門戸が大根か何かの様に斜めにずり落ちていく、

門の近くにいた一人は何が起きたかも知らず壁と共にずり落ちた、

煙る向こうに兵が見たものは少女達の返り血を全身に浴びた朱き人鬼、

屋敷内にあれだけの秘密を抱えている訳だ全員が息の掛かった者達だろう容赦は要らない、

犬飼「流石は神玉か？何の情報も回って来ない所をみると例の傭兵それも少数精鋭といった所か？だが所詮物量が物を言うのが戦いよ」

たったの三人に対し警備に当たっている人数は優に百を超える、

ここまでの規模となると屋敷と呼ぶより城と言った方が幾分しっくりくる、

戦いは物量一般論なら正しいだろうが単身人の身で紫と対等に渡り合う幽々子だ彼女を殺すには紫以上かそれと同等の存在をぶつけるしかない、

ただの人に幽々子を止める事は出来ない、

この件が明るみになれば荷担していた者達もただでは済まない、

捕まっても死ぬだけなら特攻をするだけだ、

少女達を一方的に虐殺してきた彼等は今度は自分達が一方的に虐殺される時が来た、

夏が過ぎて秋が顔を覗かせる少し暑い夜、

紅葉を拝むにはまだ随分と早い季節に一足早く屋敷の中だけは一面が真っ赤な紅葉に染まった、

犬飼が居る居間へ辿り着く、

犬飼「ほおー？よくここまで来たものだ」

幽々子「もう終わりよー！」

意に介さない様子で酒を啜る、

犬飼「甘いな？神玉は確かに優れた武人だよ、政治的手腕も素晴らしいが綺麗過ぎるそれだけでは世界は回らんのだよ」

幽々子「その負の部分を貴方が持つというのか？」

犬飼「ハハ！虫も殺さぬ様な顔して中々に激情家じゃないか敢えて
そうだと云っておこう」

幽々子「あの子達の犠牲も必要と言つもの？」

少し間を置いてゆつくりと口を開く、

犬飼「あれを見たのか？尚更帰してはやれなくなつた貴様はここで
死に神玉は終わりだ！懐刀のお前達が私を襲つた事實は私を暗殺す
るためと誰もが思うだろう奴の信用も地に落ちる、やれ衛兵！」

594

掛け声と共に人影がぐるりと部屋を囲む、

犬飼「まあーお前の対応次第では助けてやらんでもないぞ？私の物
になれ正直お前の美しさは嫌いではない」

幽々子「断る！そんな条件を飲むぐらいならここで死ぬわ」

犬飼「馬鹿めが！早計で頭の足りん小娘が！」

怒気を含みながらも笑う、

犬飼「考えてもみる私が警邏隊を組織してから治安がどれだけ良くなった？全部私のお陰だこの私の役に立てたのだぞ？感謝こそされぞ怨まれる筋合いはない、大人しく従っていれば命は助けやったものを」

幽々子「飽きて用済みになれば捨てるの？ゴミのように」

犬飼「言うじゃないか神玉の飼い犬ごときがおい衛兵！さっさとこの女を始末しろ」

命令するも取り囲む人影に動きは見られない、

犬飼「どうした？早くやれ！」

クスクスと幽々子が笑い出す、

幽々子「貴方はさっきから誰に対して喋ってるの？」

犬飼「痴れた事を誰にだど？貴様の回りに居るではないか」

しかし言われてみるとどうも様子がおかしい？影も妙に小さく見え輪郭がぼやけているような、

初めて影が動きを見せた時やっとそれが何かに気付く、

犬飼「ヒッ！」

恐怖の余りに固まってしまっ、

それはあの地下に居た少女達の姿だった当然ながら生きていない虚ろな存在、

犬飼「何なんだこれは？」

幽々子「あら酷いのね随分と好き勝手にしてきたくせに殺した相手の顔ぐらい覚えてあげなさいよ」

そろそろと部屋の中へと踏み入る死霊、

犬飼「私が悪かったお願いだ！そうだこの件についても不問にするお前達の待遇にも考慮しようだから」

無言のまま奥へと進み床の間に飾ってある刀を手にし、

振り向き様に犬飼の大腿に刀を突き刺す、

我が身に起きた突然の出来事と文字通り身を引き裂く激痛に声すらも出ない、

突き抜けた刃は床にも達し抜かなければ動く事は出来ない、

深々と刺さる刀は易々とは抜けはしないだろう、

幽々子「同じ様にお前に命乞いをしたであろう彼女達に何をしていた？」

地下に放たれた火は燃え広がり直ぐそこまで来ている、

犬飼「頼む後生だ」

痛みによじらせながら掻き集め絞り出したやっとの一言、

必死に懇願する彼に氷の如く冷えた目で彼女は言い放った、

幽々子「死ね」

最後を見ることなくその場を後にする、

やがて輪郭がはっきりとし実体を持ちはじめた少女達の霊に囲まれると、

燃え盛る炎の中にぐちゃぐちゃと肉の潰れる水音とか細くなるうめき声が屋敷が崩れ落ちる最後の時まで響いていた、

夜明けと共に幽々子達は帰還した、

街は犬飼邸の件で騒然としている、

警察機構のトップの屋敷が燃えて無くなったのだから、

彼の罪を裁こうにも証拠も本人すら全てが燃え闇の中へと消えて行った、

奴の所業を明るみに出すためとは言え彼女達の亡骸を曝すよりは良いと思ったから、

討伐完了の報告も早々に神玉の下へ急ぐ、

扉を蹴破る程の勢いでぶち開ける、

驚いた彼女がこんなにも荒々しく振る舞うなんて、

険しい表情をしたまま神玉の眼前まで迫りその右頬を打ち据えた、

生まれて初めて怒りに任せ人を殴った、

殴った左手が痺れ、

神玉の唇の端から血が滴る、

幽々子「私の甘さが璫を仲間を殺しました私の責任です誰も責められませんが、一つ聞きたいのです貴女は奴を犬飼の素姓を知っていたのですか？」

神玉「私は何も気付かなかつた心のどこかで甘えが在つたかもしれない」

わざわざ痛めた左手でもう一度右頬を殴つた、

幽々子「ふざけないで！貴女には義務を負う責任が在る！甘えだど？その理想を掲げた時点から甘えは許されないのよ！」

側近が堪り兼ね口を挟む、

衛兵「貴様！たかが傭兵の分際で！」

周りには見向きもせず言いたい事を吐き出しその場を去つた、

神玉「良いんだ」

衛兵「しかし？」

神玉「甘んじて受けようこの痛みをそれにどんなに激昂してしようとお前達は私を殴れるか？」

衛兵「そ、それは？」

にこやかに笑う、

神玉「出来ないだろ？でもあの子は臆面なく対等に私を見てくれている、それが嬉しくてな」

死霊を纏い操る力、

言葉にすれば簡単だが能力の奇天烈さと異能さは度合いが違う、

死した魂に対して外的な存在から干渉が出来る、

死ねば輪廻の輪に帰り時を廻て再誕するものだがその意思一つで留めるも思つがままだ、

この世を構成する上で最も重要な物、命の循環で成り立つ世界で生命に干渉する力、

境界を操る八雲 紫ですら叶わぬ力を人が手にしたのだ、

聞く分に悪い印象が強いがそうでもない、

場に囚われ行き場のない霊を還す事も出来る、

しかし何で在ろうと幽々子は生きている限り振り返る事は許されない、

要請、依頼があれば刀を手に取り戦う他ない、

だが必ずしも彼女が出る必要はなく、

内容に因りけりでは在るが団員だけというのもある、

生存率を上げる為に一人以上の引率を置きそれを中心に行動する、

引率するという事は自分だけでなく周りを見れる実力が要るが戦団の団員は全員に資格が有るとも言えるが、

中でもその役目に適した人材が居た魂魄 妖忌その人、

その剣技たるや戦団内で一二を争う程で？いや現時点で妖忌と並ぶ者は居ない、

庭番であり剣術指南役であったためか先生という感じが板に付いている、

団員同士の訓練で妖忌から一本取れる者はおらず幽々子でも稀に取れる程度、

しかし最近は何か思い詰めている様子があった、

そんな時戦団に出動要請が来る、

幽々子達は帰ってきたばかりで今動けるのは妖忌だけ、

敵は少数の残党、軍との戦闘での取りこぼしを狙う簡単な任務のはずだった、

危惧する相手でもなく普段通りに対処すれば事済むのだが、

僅か数人を取り逃がす、

妖忌「逃がしたか？」

（くそ！またただ何をしている私は、あの時もそうだ何故姫様の傍に居れなかった何を迷っている？）

直ぐに追撃を掛ける、

近くの居住地に逃げ込んだと見られ、

敵は覚悟を決め正面から特攻を仕掛ける、

それを手早く討ち取り最後の一人を止めを刺すために妖忌は悠然と歩を進め高く掲げた刀を振り下ろせば片が付いた、

それはまだあどけなさを残す姿、相手は妖怪だ見た目など当てにはならないが頬に流れる涙と泣き顔が古い記憶と重なってしまった、

あの日の焼け落ちた館の残骸の中一人佇む幽々子の姿と、

時間にして一二秒だが動きを止める、

涙に崩れる顔がどす黒い悪意に満ちる、

腹部に鋭くも重く鈍い痛み妖忌はそつと目を下ろすと深々と突き刺さる妖怪の腕と溢れ出る鮮血に染まった下半身が見えた、

勝利に勝ち誇った顔が緩む、

だが一撃で彼の命を狩る事は出来なかったようだ、

妖怪の首を切り飛ばす、その時の顔は驚きを湛えたままの表情で固まっていた、

支えを無くしズルリと腹部に刺さる手と共にずり落ちる、

詮となっていた手が抜け妖忌の身体からより勢い増して血が吹き出す、

激しい出血に遠退く意識の中で何を思い悩んでいたのかを知った、

妖忌

（私はずっと悔いていたのか？あの日あの時に私が旦那様を姫様を

守れていれば姫様がこんな世界に足を踏み入れる事に成ったのではないかと？旦那様を殺したのは私ではないかと？)

血が身体から抜けていくに連れ体温が下がっていくのを自身で感じ、

早急に衛生兵の詰め所に駆け込む、

治療を施すが延命にもなりそうにない、

妖忌の凶報は直ぐに幽々子の耳に届く、

着の身着のまま駆け込んで来た、

その目は恐怖に怯えていた大事な人が居無くなってしまふ恐怖に、

幽々子「妖忌！！」

彼女の声にぎりぎりに残る意識を集め幽々子の顔に手を伸ばす、

妖忌「申し訳ありません姫様、最後までお供する事が出来ません私は此処までのようです」

ぶんぶんと首を横に振る、

幽々子「駄目よ一緒に居てもう嫌なの誰かが大切な人が消えていくのは嫌なの！」

妖忌「主を泣かせるとは従者失格だな？悔いてきました旦那様を御守り出来なかったのと姫様をこんな世界に踏み入れさせたのは私ではないかという思いがあの日から心の中に在りました？」

幽々子「そんな事ないわ旅を通して世界の本当の姿を知る事が出来たの、願い一緒に居てよ昔の私を知っているの貴方だけなの」

握る手から伝わる体温がどんどん冷たくなっていくの感じる、

妖忌「姫様にはとてもよき御仲間が居らっしやるではないですか？」

幽々子「違う欠けていい人なんて一人も居ない皆が居て初めて私は前へ進めるの」

握る手を離し伸ばすが何も無い空を掴む、

幽々子「まさか貴方もう目が？」

妖忌「ばれて仕舞いましたか？もう殆ど見えません」

どうする事も出来ないのか？

幽々子「死ぬなんて許さない！死なせるもんか！！」

淡い紫色の髪がまた黒く染まる、

幽々子

（誰かが死ぬなんて見たくないもう誰一人だつて私に死霊を魂を操る力が在るといふなら生きている魂に干渉出来ぬ道理はない！）

凄まじいまでの力が放たれる、

一同が見守る中、彼女の無垢な願いに奇跡は起きた、

死の淵に在った妖忌はまだ生きていた、

しかし虚ろで何処までも不確かな存在の曖昧な半分だけ生きて半分だけ死んでいる『半人半霊』、

生きているのに死んでいる世の理を逸した矛盾の最たる者、

何が起きたかを理解出来ない様子の妖忌は、

妖忌「姫様、私は死んだ筈では？」

何も言わずその胸に飛び込む幽々子はわんわんと泣いた悲しみではなく喜びの涙を、

妖忌「どうやら姫様に救われたようですね？しかもまた泣かせてしまいました私は駄目な従者ですね」

この件は神玉の耳にも届いた、

神玉「死の淵に在った者を生還させるなど人が持つには度が過ぎる？西行の血筋一つで片付けるには余りに出来過ぎるか」

一握の不安を抱えつつも今は見守る事にするのだった、

その頃に街では奇妙な噂が広まっていた、

鬼が出回り人里を襲うというのだ、

鬼は人と極めて親しくも遠い存在、

山に居を構え山の妖怪達の頂点に立つ者、

河童や天狗などは人間に対し親密とまでは行かないが友好的な関係を保っていた、

鬼も人と時にぶつかるともあつたが互いに少し距離感を持たせた良い関係を築いてきたのだが、

精神的に直上な面が強い鬼は人の計略（嘘）に謀られ易く虚実を嫌う彼等との関係は悪化し冷めきって行き、人との交じりから先に手を引いたのは鬼達だった、

人と係わるのを嫌い今の幻想郷では地底の旧都でひっそりと暮らしている、

しかしそれは当分先の話であり鬼達が進んで人を襲うなど考えは出来ない、

在る男は兵隊だった、

自らの技巧に自負しており強さに溺れ、

人間同士の戦いも終息に向かう頃にある体験をした、

ただっ広い野に一人ぽつん立っている子供を見付ける、

良心から保護する男は子供の名を聞き驚愕した、

戦場で嬉々として討ち取った兵士の子供だった己の行動で生み出した孤児、

男は今までの自身を恥じた戦いを喜んでいた自分を消したくなる、

その日から男は武器を捨てた自責の念か良心の呵責か孤児や難民を集め集落を拓いた、

この時勢には珍しく教養があり学び屋を開く、

男の集落には人々が少しずつ集まり大きくなっていった、

他の集落と交流を重ね発展していく男の事を兵士だと知る者も居たが今の姿に何も言うことは無く、

ある日その村にひょっこりと珍しい客が訪れる、

畑仕事をしていた男の前にふらりと現れたのは見た目子供の女の子、

力を振り絞りやっとのことだどり着くも力尽き男の前で倒れる、

慌て介抱するも女の子の頭にある突起物に気付く、

その子は鬼の子供であった、何かに襲われたか酷く傷だらけで危険な状態であった、

男の耳にも鬼の噂は聞いていた為か心の中で僅かに戸惑うが村に連れ帰り治療を施す、

鬼の子を匿う事に初めはかなりの反対があったが男の説得に応じその声も収まっていく、

懸命の治療も相まって傷も癒え全快に至る、

やはり人とは比べ物に成らない程の回復力は見張るものがあり、

どれだけ近い存在であろうと人と妖怪というこの二つの種族に在る壁、

その根幹に根差す絶対の差は永劫埋まることはないのだろう、

小難しい話しを並べ立てる大人を他所に子供達は何の気も無く一緒に走り回っている、

なんにでも懐疑的な物の見方で見てしまう大人は子供の順応性に見習う所が多分にあるのかもしれない、

子供に種族なんて何の意味も無いようだ、

男は自分に娘が出来たような思いになり何と無く過ぎていく時間に幸せを噛み締めていた、

核心が鬼が人を襲う訳がないと、鬼の子を見ていて断言出来た、

でも何故か不安が拭い切れずどこか心の隅っこで引っ掛かっている、

男の村は幾分は発展していても完全な自給自足には難しく足りない物資は他の所から調達しなければならない、

二三日村を空けた男は思考を巡らせる、鬼の子に本当に自分の娘に
ならないかと聞くはずだった、

帰り路に向かう男の目に空に立ち上る煙りを見付ける、

自分の村の方向だ、その時頭に過ぎよった言葉、

鬼が人里を襲っている、

考えたくない最悪の展開が、

走った、ただ一向ひたすらに走った、

焼ける肉、酸化した血の臭い、

男が築き上げた物は砂の器となった、

まだ生きている人が居ないか探し回るも子供に至るまで残らず皆殺しに逢っていた、

奪う事しかなかった自分に初めて出来た守りたいと思う物が生きる目的となる物が脆くも崩れ去った、

失意の男の心の中に浮かんだ存在、

もしかして、あの子なら？

一筋の希望も虚しく冷たくなっていた鬼の子の姿がそこに在った、

鬼の身体能力から鑑みれば逃げおおせた筈なのに何故？

違う！この子は守ろうと戦ったのだ、

僅か数ヶ月足らずを過ごした村や人の為に、

最後まで一人でこの小さな体で、

それだけでこの子には命を賭けるに値したのだ、

男は悔いた口では信頼していたが心の何処かほんの少しでも疑っていた自分を、

この子は逃げる事も出来た筈なのに立ち向かい命を賭したのだ、

この手に抱きたかった娘として家族として種族の違い等乗り越え共に生きて行けると考えた、

男は神を呪った、

「この子達が何をした？これ程の報いを受ける程の事をしたのか？生きる事が罪か！」

妖怪は人を襲うしかしそれは悪行だろうか、

人が家畜を食すように妖怪はその対象が人間であるだけ、

生命の本分、生きる本能に従った営みなのだ、

だが人間は快樂や自己満足の為だけに意味の無い殺戮が出来る、

人の方が余程化け物ではないか、

男「これが人なら俺は人で無くていい！人間を辞める」

人とは何だ？妖怪とは、

鬼は人里を襲ってなどいないこれまで一度たりとても絶対に、

どうして言い切れる何故なら？

鬼「鬼は『俺だ!』」

男は復讐に燃える鬼となった、

それから男は当ても無く何日も森の中をさま迷った、

飲まず食わずでも不思議と空腹や渇きから来る飢餓を感じなくなっていた、

少し小高い丘に開けた場所に出ると、

古戦場の跡地が目線の先に広がっていた、

白骨した遺体が累々と転がり何処か歩く度にバキバキと乾いた音を発てる、

丘の中央に人の身の丈を越えるような巨大な刀剣が大地に突き刺さっていた、

斬馬（車）刀（ざんば）（しゃ）（とう）

鎌倉室町時代に多く見られた超重武器、

単純大胆な考えで馬に乗った武将を馬ごと叩き切る事を目的にした剣である、

確かにその大きさからくる重量に任せた火力は凄まじいが如何せん重過ぎるが故に扱え者がおらず次第に見世物や武芸の試しになっていった物で武具としての重要度は低い、

ただ鉄を流し込んだだけの張りぼての様な物ばかりが出回り鍛造加工を施された物など皆無に等しかったのだが、

緻密に丹精に精錬に練り込められた鋼は未だその刃の輝きは陰りを見せない、

一体この剣はどれだけの間を此処で待ち続けたのか？過ぎ行く時の中に身を置き何を見てきたのか？

男は核心した、この剣は自分を求めていると、

それは剣と呼ぶには余りに仰々しく大雑把で鉄塊と呼ぶに相応しい、

だがその細部にまでいたる造りに打った者の意思を感じる、

優れた物には魂が宿る、

勘違いかも知れない、だけど確かに聞こえた剣の音が、

柄を握り締め引き抜く、

人の身の丈を越える様な大剣が棒きれを持ったのかと間違える程に
軽く感じ、

失っていた己の半身を取り戻し様な満ち足りた充実感に奮えた、

やっと森を抜けると小さな集落が見えた、

もう数ヶ月は何も食べて無いのに男は生きている、

人間の体ではなくなり始めていた、

心にも変化が在った、もう自分が何のためにさ迷っているのかも解らなくなっている、

引き寄せられるみたく集落へ足を運ぶ、

人々は自分を見るなり脅え逃げ去っていく、それを見ると何処か引っ掛かっている気がする、

村の男達が行き成りに武器を手に襲ってきた、

その時に思い出した何のために自分が居るのかを、

人を人間を根絶やしにする為だ！

我先に逃げ惑う人々を片っ端から切り殺していく、それこそ老若男女、子供も残らずに、

自らが剣に死した子供の死体を見て少し心が痛んだが男にはその痛みを理解する事は出来なかった、

それ所か男の歓喜すら覚えていた倒すべき敵を討つ喜びに、

人が消えた村を意気揚々と歩く男は水溜まりに映る自身の今の姿を見た、

干からびた大地の様なゴツゴツした皮膚は赤銅色に染まり目は窪み真っ黒に角こそ無いが誰が男を見てもこう言うだろう『鬼』と、

膨れ上がった憎悪は肉体をも変化させた、

男は、いや鬼は人を殺す事が全てに血を求めた、

軽々と斬馬刀を振り回す怪力と卓越された剣技の前に敵はなく、まさか『一鬼当千』

彼に潰された村や町は一つや二つでなくそれは神玉達にも見過ごせる範疇はんちゆうを軽く越えていた、

彼女の目算は少し甘かったこれまでの戦いで兵達も強くなって来てはいる妖怪に立ち回り方も身につけてはいたが、

時に圧倒的な一は千や万をも覆す、

一個大隊、およそ千人の部隊が負けた、

完全に神玉の采配ミス對抗しうる者は自身か紫ぐらいだけだ、

あと一人は居るには居るが当てるには危険度が高い、

あれこれと思考する神玉に慌てて兵士が駆け込む、

兵士「神玉様！幽々子様が御一人で出撃を」

神玉「何？あのとんでも娘が！」

完全な独断でも何故か行かなければ為らない気がした、

鬼「死ぬ人間、貴様らに生きる価値はない」

兵士「ヒュー」

尻餅を付いている兵士に振り下ろさんとする大刀に飛び込み勢いに任せ弾く、

衝撃に少しのけ反らせる事に成功する、

幽々子「立って！逃げるの」

風で肌で感じる相手は格上少しでも判断を誤れば即死に繋がる、

些細なとても些細な事だが鬼の様子に変化があった、

幽々子の外見は人の見方によっては少女と言っても遜色はなく、

男の鬼の記憶に触れる物が、

だがそれも直ぐに消えた、

今までに大斧、大剣を扱う相手とは何度もやり合ってきた、

旅立ちの日から共にしてきた一振りの刀で、

でも今日はこの刀が酷く頼りなく見えてしまう、

正面から打ち合えば間違いなく刀は砕け散るだろう、

ギリギリのラインで流さなければならぬ、

曾て無い緊張感に冷や汗が止まらず握る手が湿って来る、

必死に凌ぐ幽々子を尻目に鬼は愉しんでいた、

初めてまともな戦いになっていたから、

すると後方から矢が飛んで来る、

一旦逃げた兵達が態勢を立て直し戻ってきたのだ援護する積もりが

逆効果に成ってしまった、

突き刺さる矢を抜き捨てるのと愉悦に浸っていた顔が怒りに満ちていく、

幽々子に対しての怒りではない一対一正々堂々と戦う中に無粋に横槍を入れる、

やはり人間は卑怯で醜くたやすく他の領分を犯す、

幽々子「逃げて！」

遅かった、叫ぶ声も虚しく一瞬で兵達は肉塊に果てた、

極限にまで膨れ上がった憎悪に比例して饒舌になっていく、

鬼「滅ぶがいい人間め」

剣は単に力が強い剣技が優れると単純な物で優劣が付くなら幽々子は生きていないだろう、

一撃に一振りに賭ける思いの強さは誰にも負けない積もりでいた、

怖い、逃げたいと心が折れそうになる、

空元気で何でも良い自身を奮い立たせ何とか持ちこたえている状態だった、

どんなにごまかそうとしても恐怖心が先に立ってしまう、

そんな心で勝てる相手では無い、

幾多の連戦を渡ってきた刀が砕かれた、

死を覚悟したその時、

光弾が撃ち込まれる、

紫「幽々子！」

隙を突きスキマが開き紫が幽々子を引きずり込む、

させまいと鬼が剣を振り下ろすより先にスキマが閉じ間一髪で助かった、

紫に付き添われ神玉の所に行く、

無断で出撃したうえ殺されかけたのだ当然敵罰を貰うと思っていた、

神玉「なんで紫や私を頼ってくれなかった！貴女は一人じゃないの、助かって良かった」

神玉は自分を責めはしなかった、それが余計に自分がみすばらしく情けなかった、

負けた完全な敗北を記した、あまつさえ紫の助けが無ければ死んでいた事実、

何より仲間を信じなかった自分が赦せない、

刀さえ無くし無力な娘と現実をたたき付けられた気がした、

これで諦められたらどんなに楽だろうか、

負けたくない！もっと強くなりたい！

そのためにも新たな刀が欲しい、

あの鬼が持つ斬馬刀に対抗しうる刀を、

だがそれが一番の難題だった、

幽々子程の剣士に見合う刀となるとそれこそ神刀や霊刀に分類されるような超一級品が必要、

世間一般の名刀程度では話しにならない、

最も刀鍛冶の頭を悩ませていたのは材料だった、

折れず曲がらずしなり強くより重くより軽く、それら刀に於ける条件を極限まで突き詰めた材料など魔法の素材に等しい、

どの金属にも一長一短がある、

ましてや高純度の金属の入手すら困難な状況に更に無理難題を押し付けられているようなものだ、

時間ばかりが過ぎていく、

そんな時、唯一方法があると言う、

遠方より訪れた一人の刀鍛冶、

鍛冶士「方法というより賭けに近いですが一つだけ手が有ります」

ありとあらゆる金属、剛性軟性を問わず数多の金属を混ぜ精製される特殊な金属、

大敵とされる不純物を敢えて取り込む事が可能性を広げる、

鍛冶士「一度切り失敗すれば後戻りは出来ない、それでもやりますか？」

他に選択肢はなかつた、

ある程度の純度を持つ多種の金属が相当数を必要とする、

軍や市井の生活物資にギリギリで遣り繰りする現状に他に回す余裕

はない、

だが幽々子はその条件をクリアしていた、

四人で活動していた頃、

彼女は自身で討ち取った相手の武器を持ち帰るようしていた、

生き残った自分に戦った者を忘れぬため、

殺された相手は殺した相手を決して忘れる事は無いだろう、

勝ち生きる者は死した者に恥じぬ生き様を示さなければならない、

それが生き残った者の役目であり義務だから、

幽々子はその中でも自身の特別な物を差し出す、

銀「おい！そいつはお前の」

将軍が形見の大斧、

銀「失敗したらどうするつもりだ？後は無いんだぞ」

幽々子「だからこそよ！これに賭けるしか無いの」

ぷいとそっぽ向いてしまう銀が何かを投げる、

銀「勝手にしろ！わかったよ俺もその賭けに乗ってやるそいつも持つて行け」

旅の行商時に手に入れた物でいわば形見である、

何かは知らないが極めて純度の高い金属のかけらで銀はお守りがわ

りにずっと持っていた、

銀「そいつをやるからには失敗は許さないからな」

陽子「そういう事なら私も乗ってあげるわ最高密度の稀鉄よ大事にしてよね」

一部始終を見ていた陽子も自身の宝を差し出した、

幽々子「馬鹿ね私を誰だと思ってるのよ失敗なんて有り得ないわ」

銀「お前が造る訳じゃないだろが？」

こうして刀を打つための準備は整った、

次々と武器を炉の中に入れていく一度鍛造精製された金属を融解させるには常時よりも遥かに高い温度を保たなければならず大掛かりな作業になる、

ただ一振の刀を打つにしては異常とも言える量の金属を溶かす、

鍛冶士「本当に優れた刀は何処までも利己的でねこの量でも心配な
ぐらいだよ」

幽々子の手元に残る最後の一本の大斧を炉にくべる、

鍛冶士「さて此処からは私達の仕事だ」

賽は投げた、

祈るなんて柄からではないが願うしかないのも事実、

今は自分に出来ることをするだけ、

気になっていた事があった、

何故あそこまで人間を憎んでいるのか、

単に妖怪とするには引つ掛かる気がした、

鬼が人を襲う事例は聞いた事がない、突発 突然なんて彼等に限つてはないはず、

あの鬼が出始めた頃からの事を調べてみた、

鬼の報告が出た三ヶ月程前に一つ賊に潰された村がある、

人々の噂になっていた鬼とはその名を騙った傭兵くずれが集まった賊の一団だった、

その村には自分達も立ち寄った事がある、

死体を弔う為に調べる中に一人見つからぬ者がいた、

後手に回ってしまったが鬼を騙る賊は討伐することが出来た、

鬼の子の死体の報告があった事に幽々子は思う所が、

自分の仮説が正しければあの鬼は、

紫の所へと赴く、

幽々子「紫、ちょっといいかしら」

紫「何？改まって」

いつもと違い妙に歯切れの悪さに戸惑う、

幽々子「お願いが在るの、次の出撃にもう一度私を出してくれない？」

やっぱりといった感じで紫が反論する

紫「貴女それで何があったか忘れたの？」

幽々子「分かってる、もう勝手な真似はしないから私一人では勝てないだから貴女の協力が要るの、あの人に勝つ為に」

紫「人って？貴女あれは鬼よ」

ぶんぶんと首を振る、

幽々子「いいえ、彼は人間よ」

実際の所、紫にも思い当たる節はあった、

妖怪の山に住まう四天王と称される酒天を冠する伊吹の鬼とは旧知の仲である紫、

目にしたのは一瞬であったが鬼が放つ独特のあの感じ爽快とも言える清々しさを覚えるのだが、

しかしあれはどす黒く渦巻いていた毒々しさを感じた、

刀の打ち始めてから一週間で過ぎた、

鍛冶士が鍛造作業の終わりを告げに来る、

鍛冶士「我々は出来る限りの事はしました！あの刀の力は未知数です貴女に見定めて頂きたい」

広間の中央に置かれた刀、

全員が固唾を飲む、

鞘から抜き出された刀身は幾多の鉄の色が混ざり合い淡い薄紅色に、

斑まだらに靡なびく刃紋はまるで舞い散る桜の花のようだ、

衝撃的なまでの衝動、あの鬼が感じた様な己を半身を取り戻しかの
一体感、

喜びの表情が表に出てしまつのを隠すことが出来ない程に高揚して
いる、

鍛冶士「優れた剣士は手にしただけで刀の良し悪しが判ると言いま
すが気に入って頂けようですね、ところでその刀にはまだ名が無い
のです出来れば貴女にこそ付けて欲しいのですよ」

あでもないこでもないと少し逡巡し決める、

幽々子「うん、決めた！斬楼刀ざんろうとう」

鍛冶士「実に貴女らしい名ですね、これ程の刀を打つ事が出来たのは至極幸せです」

歓声の中広場に紛れ込んだ蝶が幽々子が携える刀に止まろうと羽を畳み触れた瞬間蝶は真つ二つに切れて落ちた、

何より脅かされたのは毛ほども重さの無い羽の切り口が床に突き刺さっている、

途方もない切れ味だ、

ふと誰かが聞く、残りから刀を造れないかと、

無理だと鍛冶士は即答した、

優れた刀は何処までも利己的になる残りなどもはや形骸にも等しく鉄屑にも劣る、

幾多の剣を引き換えにたった一本の刀を打つ、

古くから物には魂が宿るとされる、

つくもがみ
付喪神

永く時を得た物は意思を持ち神霊に至ると謂われ、

物に込められた想いが強く大きい程その力は増す、

鬼の持つ斬馬刀は死者の念立ち込める古戦場で長きにわたる時を過
ごし積み重なった憎念は推し量れない、

その念をも打ち破らねば勝機は無いだらう、

新たなる刀を手に準備は整った、

幽々子との戦闘をきっかけに言動はかなり人らしさを取り戻してい
った、

その行動はただ真つ直ぐに人里を狙う、

家屋を壊すわけでも家畜を襲う訳でもない、

目的に以外に目もくれず追求する姿勢、

この行動こそが人を人間を憎み滅ぼそうとする彼の本分が人間で在ることを物語っていた、

過去の記憶が鮮明になっていく楽しかった至福だった日々が甦る、

それを塗り潰すようにあの日の悪夢が彼を責め立てる、

紫「待っていたわ」

呼び掛ける声に足を止める、

幽々子「次は負けない」

鬼「また貴様か？娘」

人の判別を付けれる程に精神の回復を見せる、

それが彼をより苦しめた、

人を憎むも心の何処かで憎み切れない自分が居る、

今の男にとって最も遇いたくない相手であった、

本当は気付いていた、この行動に意味が無い事など、

引く事は出来ない一度振り上げた刃を仕舞う術を持たない、

幽々子「何故なの？」

ただ一言そう言った、

鬼「何故？その言いぶり俺の過去を調べでもしたか、なら分かるだろっ」

幽々子「分かりたくない！貴方は優しい人だ」

理性的だった対応から突如として襲い掛かる、

鬼「知った風な口を聞くな！」

振り下ろされる大刀を正面から受け止めるつもりでいる、

幽々子

（お願い耐えて、斬楼刀！）

巨岩すら一撃で粉碎しよう鬼の一刀を止める、

鬼「これを止めるか今度は随分と良い剣を手に入れたようだな、不思議な刀だ伝わって来るぞ何人殺してきた？いや質問を変えよう君は何の為に戦う？」

その問いに答える、

幽々子「私は戦い殺した相手を忘れはしない、私は生き様を示す義務が在る彼等の命を引き換えに私は今を生きている」

鬼「良い答えだ惚れ惚れするよ、ならばもう一つ聞かしてくれないか？彼等があの子等が死なねば為らぬ理由が何処に在る？答える！」

何も言えない、

幽々子「貴方の村を襲った賊は私達が討った、だからもう」

鬼「だから終わったと言うのか？もう仇は居ないから何もかも忘れ

ると？それこそ無意味だ！」

その時に感じた物は憎ではない憤の感情だった、

幽々子「そんなつもりじゃ？」

鬼「黙れ！後戻りする気など始めから在りはしない奴らは罪を犯しただから討たれた、ではあの子等があんな仕打ち受けねば為らぬ罪を犯したか？生きる事が罪か！」

幽々子「それが貴方の答えなの？私はまだ人を信じている絶望するのは速いわ」

剣を納め、

鬼「罪を赦す素晴らしい事だな、しかし遺された者の積念はどうする？亡き者の無念を晴らしもせずただ安寧を生きる事の方がよほど悪だ！」

彼の心からの叫びに共感すら覚えてしまっ、

幽々子「それでも私は認めない！」

踏み鳴らし剣を構える、

鬼「良いだろう所詮は相容れないのだ、分かって貰おうなんて気は更々無い」

幽々子「これしか道は無いのね、行くわよ紫」

紫「ええ、わかったわ」

技はほぼ互角、

携帯する武器も同格、

鬼には圧倒的な怪力を誇るなら幽々子には神速の剣技がある、

後は心の持ちよう、

折れぬ心が決め手に勝ちを呼び込む、

彼女の驚く程に静かに落ち着いていた、

安らぎさえ覚える位に、

内に溜め込んだ本当の声を聞けたから、

優し過ぎる故に彼は鬼と成ったのだ、

彼を絶望に叩き墮としたのも人だそして彼もまた人、

諦めるのはまだ速い、分かり合えると信じたい、

その為にも彼を倒す、

紫との初めての共闘、

とても初めてとは思えない程にしっかりと二人の息が噛み合った、

前衛を幽々子が後衛を紫が互に長と短を補い合う、

その二人を以ってして互角に渡り合う男の力量は凄まじい、

初めて男と剣を合わせた時に伝わって来た感情は絶望や憎みであったが今の彼からは孤独や悲しみばかりが伝わって来る、

葛藤が彼の心の中で轟めいている、

善悪の物差しで測るなら自身の行いは限りなく悪である、

誤った選択だと分かっている復讐が無意味だなんて事は、

やり遂げたとして失った者が帰ってくる訳で無くそれが死した人の願いとでは限らずただの自己満足に過ぎない、

幽々子と紫、人と妖怪が補い合い並び立つ姿にあの日の自分とあの子 鬼 とが重なる、

夢に見た理想だった光景、

人から恐れられるだけの存在だった妖怪もあの子と出会う事で人と違う所は何も無いと知った、

手を繋ぎ一緒に道を歩いて共に世界を見たかった、

空っぽだった彼の心を満たし生きる証となった物、

しかしそれは過去に幻想になってしまったもう二度と触れる事は出

来ない、

幽々子「お願い、剣を引いて」

鬼「今更引いた所でどうなる？俺が犯した罪が消えるのか？言っただけだそれこそ無意味だ！」

必死に説得を試みる、

幽々子「貴方ともっと早く出会って居たかった、違う道を探せたはずです」

鬼「端から間違いなんて分かっているさ、なら俺はどうすれば良かったんだ？討つべき相手も居ない、なのに俺の中で彼等があの子等が泣いているんだ笑ってはくれないんだ報復せよと仇をと泣きながら俺を見るんだ！」

大剣が大地を叩き割る衝撃に大小の石が飛ぶ、

すかさずに紫が撃ち落とす、

紫「油断しないで」

そつと相談した、

幽々子「防御をお願い」

紫「防御？」

(手を出すなつて事)

ちまちました攻撃では彼には届かない、

思いの丈を込めた思い切りの攻撃、

幽々子「貴方は悲しみから苦しみから復讐と言つ易い道に逃げたんだ」

鬼「黙れ！」

逆上し斬馬刀を振り回す、

振りが大きく単調であるため避けやすいが正面からもろに喰らえば斬楼刀を持ってしても砕け散るのは確実だろう、

当たらないと踏んだか直接に幽々子を狙わずその少し前の地面を切り上げた、

地を大きくえぐる、

足場をなくす如何に速く動けようが地を蹴らねば空を飛べるでもない限り動きようがない、

その上巻き上げた土砂に体を打たれた、

口から血を吐く、

幽々子「左手の感覚が鎖骨と肋骨を数本やられたか？」

（表情一つ噫あぐひにもだすな）

そんな彼女に相手は悠然と止めを刺さんと剣を振り上げる、

紫はその手に纏う両の手甲で幽々子を庇う、

両手が肩からもげ落ちるような痛みに顔が歪む、

暫くは使いものに成りそうもない、

なんとか距離を取る、

幽々子

（私に彼を殺せるの？）

彼を救いたい、負の連鎖を断ち切りたい、

感情を前面に出した彼女らしい考えだが何とも甘い、

甘さは隙を生み相手に付け込まれる、

それがこの結果を生んだ、

幽々子「どうした物かしら」

(前にも言われたわね子供の戯れ事だと、愚かだろうが何だろうが自分の意地を貫き通す)

左手は指一本動かすだけでも激痛を起こす、

幽々子「失くなった訳じゃ無いんだ痛みが何だ!」

律儀にも彼女が体勢を調えるまで待っていたようだ、

鬼「覚悟は出来たか？」

幽々子「今からでも遅くはない！」

突進し喉元に向け刃が舞う、

それを紙一重で避ける、

鬼「世迷言を！」

必死に食らい付く、

幽々子「私は貴方を殺さない、その怨念を殺す！」

決意の光が消える事の無い彼女の目を見てると心が揺らぐ、

鬼「俺の怨念だと？」

言う通り別の道もあったのではないかと、

鬼「なら俺はあの時、彼等の死を目の前にしながらも石の様にじっとしこの無念を飲み込んでいれば良かったのか？」

幽々子「違う！そんなんじゃない」

どうすれば彼に自分の気持ち伝えられる？

弱気になるな、何のために何のために此処に来た？

痛む左手が悲鳴を上げる、もしこれで左手が再起不能に成っても構わない有りっ丈の自身の全てを賭ける、

ゆっくりと目を閉じ呼吸を整え正面に刀を構えた、

剣に於ける基本の型を自分の心の全部を刀に預ける、

目を閉じたから余計に見えてくる深い怒り悲しみが迷いが全身に針が突き刺さる程に、

左胸部へのダメージが全身への負荷に成り始めている、恐らく次の一撃が最後だろう、

全身全霊をもって挑む、

彼が動いた、やはりただ真っ直ぐにこちらに向かって来る、

来た！避ける？

否、正面から断ち切る！

目を開け彼を見据える、

一瞬の刹那、世界が止まって見える程に高められた極限の集中力、

幽々子

(貴方はただ不器用過ぎたの！)

幽々子の刀と鬼の大剣とがぶつかり合う、

大剣は幽々子の思いにその形を留める事を剣である事を諦めたかの様に砕ける、

永く積もった死者の念に幽々子の猛き思いが凌駕したのだ、

しかしそれでもなお彼は戦う意思を無くそうとはしない、

鬼「何故だ？何故なんだ？俺は、俺は！」

もつどちらにもまともに戦う力は残ってはいない、

彼も剣士だ剣が砕かれたということは自身の思いが打ち負けた事を悟った、

動揺し錯乱する今の彼を殺す事はたやすい、

でもそれでは駄目なんだ伝えなければ、

どうすれば伝わる？

様々な選択の後に彼女が取った行動は、

彼は剣を失いながらも向かって来た、

大剣を軽々と振る怪力だそれだでも十分な武器となる、

彼女はその手に持つ刀を投げ捨てた、

言葉で伝わらないのなら直接伝えるまで、

幽々子「貴方が求めたのはこの温もりだった筈です」

そつと彼を抱きしめたのだった、

鬼「なんで君達が？なっ！こんな私をまだ先生と呼んでくれるのか？」

言葉にする必要の無い最も単純な愛情表現、

幽々子の能力が好転に働く、

未だ彼等は輪廻に帰る事なく留まっている、

触れ合うことで彼にもその力の一端が通じたのだらう、

誰も恨みなど抱いてはいなかったのだ、

今の自身の姿に泣いてたのだった、

見渡せばみんな笑っている、あの鬼の子もみんな、

当の昔に涸れ果てたと想っていた涙が目から流れ出てきた、

男「俺の中にもまだ残っていたんだ？先生は泣き虫か？そうだね私は泣き虫だな、もう大丈夫だから安心していい」

赤銅に染まる皮膚は生気を取り戻し肌色に彼の本当の姿へ返っていき、

それを見届けると彼等は空へと還っていった、

全て終わった、

筈だった、

何処からかシャランと鈴の音が聞こえる、

辺りを突如として彼岸花が咲き誇る、

まるで死者の血を吸ったように深紅に色付く死人花、

空間に波紋が広がりそこから出は^{いず}大仰な禍禍しい大鎌を背負う一人の女性、

「????」居た居た、居ましたよ四季様！」

四季様と呼ぶからにはこの女性の上位者に当たると思われる、

空気が張り詰め、

草も木も凡そ意思と呼べる物を持たぬであろう物ですら規律を正したかのごとくに静まり返る、

四季「ご苦労様、小町」

小町「いや大した事はしてないですよ」

四季「久しいですね八雲 紫、直接合うのはいついらいましたか？」

余程苦手なのか紫が少しばつを悪く後退りする、

四季「おっと失礼しました御目にかかるのは始めてですね、貴女が西行の姫ですか私は四季 映姫しき・えいき地獄の最高裁判長、まあ平たく言えば閻魔ですかね？」

小町「私が小野塚 小町おのつか・こまち三途の水先案内人じゃない死神さ」

四季 映姫・ヤマザナドゥウ

地獄にて罪の判決を下す裁判長、堅物、

小野塚 小町

映姫の部下で三途の川の船頭を任されている気分屋でマイペース、
さぼり癖がある、

四季「立ち話もここまでにして、何故私が出来たかは理解出来ませぬ
？」

その言葉に男は静かに頷いた、

幽々子「待って下さい！この人にやり直す機会を」

肩に手を置いた紫が諭す、

紫「彼はもう死んでいるのよ」

考えてもみれば数ヶ月もの間を飲まず食わずで過ごし通常では有り
得ない程の怪力を操るのだ肉体を削って行くのは明白、

遙か以前に彼の体は死滅していたのだ、

四季「貴女の言うことも理解出来ます、彼の境遇は同情に値し慮る所も有りますがそれらを考慮し差し引いたとしても彼の罪は余りにも重い」

幽々子「ですが！」

何とか食い下がろうとする、

四季「酷な事を言うようですが罪には罰なんです！」

分かってくれと言うように軽く首を横に振る、

男「すいません少しだけ時間を良いですか？」

四季「構いませんよ」

感謝の意を現し頭を下げ、

男「貴女と出会えて良かった最後に人として逝くことが心を取り戻す事が出来た、貴女の名前を覚えてくれないか？」

幽々子「西行寺 幽々子」

男「いい名だ有り難う、美しき人よ」

小町と映姫に連れられ男の姿は消え去った、

二人が居なくなると視界を赤に染める彼岸花は雪の様に白くなり散っていった、

幽々子「結局また私は誰も救えなかった」

そのうなだれる頭を紫が抱き寄せる、

紫「少なくとも彼の心は救われた筈よ」

幽々子「有り難う」

帰還した二人は事の次第を神玉に報告する、

神玉「映姫が自ら出てくるとはな？」

(あの堅物が珍しい)

鬼の一件から数日後、庭の縁側に座してポケットと空を眺めている幽々子、

非番というのもあるが出勤要請が珍しくも全く無い日でダラダラと過ごしていた、

陽子「だらし無い顔して」

銀「馬鹿に見えるぞ」

幽々子「暇過ぎて何していいのかわからないのよ」

いつもの三人で会話をする、

銀「確かに暇だな」

幽々子「でしょ！」

この三人の中では一番真面目な陽子が資料室に行こうと提案した、

当然の様に二人は嫌な顔をする、

陽子「あら、昔を知るのには善いことよ」

ダラダラするだけよりかは増しと資料室へ足を運ぶ、

在ること知っていたが一度行ってみたいとも思っていたので良い機会にと、

幽々子「凄い絶景ね！」

ずらりと並べられた本の数々に思わず感嘆の声を漏らした、

人が人の世に書き残す文献は思想やその者の主観に左右され誇張した記し方をしている物が多く余り信憑性は高くない、

676

その点古くからの妖怪が遺した文献は有りの儘を記した主観を含まぬ無機質な文字の羅列、

言つに及ばず高い信憑性を誇る、

人の遺す本が全てがそうだとは言えないが眉唾話が多いのも事実、

初め乗り気で無かった幽々子もいつの間にか本の虫になっていた、

初め乗り気で無かった幽々子もいつの間にか本の虫になっていた、

何か面白い物はないかとフラフラと歩き回る銀、

まるで落ち着きの無い子供だ、

そんな銀だから見付けたのかもしれない、

一般の人も閲覧出来る蔵書の隅に珍妙な重扉が、

鍵が掛けられている訳でも無いが何と云うかやんわりと立ち入りを拒否しているそんな感じが見受けられた、

銀の無頓着さにはそんなもの関係ないようで普通に扉を開ける、

鍵は掛かってないのだから立ち入りに問題は無く中に入ってみた、

書齋？一般的な書庫とは違う造りをしている、

とりあえず一人で見て回ってから二人を呼ぶ、

幽々子「埃まみれね、誰も手入れをしてないのかしら？」

陽子「そうみたいね、長いこと人が入っていないみたい」

何気に取った本の埃を払い目を通す銀が幽々子を呼ぶ、

銀「幽々子、こいつを見てみるよ！」

手渡された本を読む、

西行が遺せし歌集を綴った本、

銀「今この世で一番そいつを読む権利がお前には有ると思つぜ？」

一節一節を大事に大事に読む、

歌に籠められた彼の思いがありありと伝わり、

遙か過去に刻まれた時代を謡いし歌に思いを馳せる、

あっという間に最後まで読んでしまった、

だがこの本には変わった所があった、本にし綴じた物である筈なのに終りの数ページが白紙のページになっている、

誤刷？印刷漏れ？ページ取りの誤り？

昔とはいえども考えれば幾らでもあるが態々（わざわざ）こんな誤
刷本を残すか？

陽子「何か意味が在るのかしら？」

銀「わからんな」

うーんと皆で悩む、

陽子「態とじゃないかしら自分に続いてくれる人にと新に歌を書き
記せる分を残したのかも」

銀「でも誰も残せなかった自分を越える者は現れなかったって事だ
な」

陽子「取り敢えずはそれでいいんじゃない！」

あれこれと詮索しても過去の人の思惑を理解する事は出来ないので
それらしい答えで落としたのだった、

幽々子は本の埃を丁寧に払うと本棚に戻さずそっと机の上に置く、

気が付くと随分と時間が経っていたようで外は日が沈みかけていた、

陽子「余り暗くならない内に帰るよ？」

銀「俺達は子供か！」

幽々子「大きな子供だこと、そうねそろそろ帰りますか」

重扉を閉め資料室を後にした、閉めきつた部屋のなか風は無い、

机の上に置かれた本が一人でに開かれていく見えない誰かが机に向かい読んでいる様な、

帰る頃には真っ暗になっていて、

ばれぬ様にこつそりと静かに帰ろうとしたがそこには恐い形相をした妖忌が待っていた、

妖忌「姫様それに御二人こんな時間まで何処をほつき歩いていたのですか？」

幽々子「いや、これわね妖忌」

妖忌「言い訳ならゆっくりと後で聞きます！」

夜は三人仲良く妖忌の説教を受けたのだった、

妖楼・西行妖

人の死に花弁を仄かに染める桜を恐れながらもその美しさはやはり人を魅了する、

度々に桜を見に来る人も増えた、

内心は恐いのだろうが桜を前にすると全てがどうでもよくなってしまっ、

人々と桜と接する事自体は幽々子に取っても喜ばしい事ではある、

危険な存在で在ることに変わりはない、

側に彼女が居ると安定する桜も距離が離れると途端に揺らぎだす、

まるで子供の様に、

いつ暴れるやも知れぬ桜を前にしながらも動じる事の少なくなってきた市井の人々、

幽々子の目には生きている人や妖怪以外の物が見える、

力の開花に初めは戸惑う事もあったが慣れれば何とも無く彼女にはそれが普通になっていた、

だがある日不思議な出来事が、

何処を見ても視界の中に映っていた死霊の魂が今日に限って一つとして見当たらない、

また驚く程に西行妖が落ち着いている、

不安になって堪らなかった、

長いこと連れ添った銀や陽子そして半人半霊の妖忌も同じく怪訝に
かんじた、

町民「見掛けない顔だな何処の人だいあなた？」

男「旅の者です」

町民「旅ね、あんたそっちは分かってるのかい！」

男「ええ！有名ですからね色々と此処は」

町民「ならいいんだが気を付けな？」

男「どうも親切に」

今日に限って言い方が変だがおかしな位に空気が澄んでいる、

そんな中、幽々子を何かが襲う、

体の中身をこっそりと持って行かれるような虚脱感に苛まれ立って居られずしゃがみ込んだ、

妖忌「姫様」

幽々子「大丈夫ちょっと目眩がしただけ？」

銀が肩を貸して立ち上げるが足元が覚束ない様子にとてもじやないが大丈夫とは見えない、

銀「何なんだ？」

幽々子「教えてくれたら喜んじゃうわ」

冗談を言えるだけまだ増しなように見えたが、

目眩はどんどん酷くなり意識が遠退き倒れてしまった、

幽々子の意識が途切れた途端に先程まで大人しかった西行妖が揺らぎ出した、

一向に意識の戻らぬ幽々子を抱え桜から距離を取る、

銀「まずいぞ」

何か手を考じなければ手遅れになるかもしれない、

しかし初めて対峙した時を思い出すと足が竦む、

あの突き上げられるような根源に根差す恐怖が記憶に蘇る、

立ち竦む二人の横を一人の男が通っていく、

銀「おい、待て今は危ない！」

その忠告に軽く会釈を返し行ってしまふ、

西行妖の力の前に紫や神玉でも敵わず幽々子に命運を託した程だ、

桜の揺らぎは何の力も無い人間にさえ感じ取る事が出来る、

それを前に平然と近いていく男、

だが何故だろう？幽々子が桜と対面した時は歡喜に震えるかに見え
たが男が近づく度に桜は「来るな」と拒絶している様に見えた、

男の前ではそれも些細な抵抗でしかなかった、

根本まで近いてそつと幹に手を掛ける、

男「これが西行法師が遺せし忘れ形見か？」

次の瞬間ピタリと桜が鎮まる完全に僅かな揺らぎも無く、

幽々子でも叶わなかった事をいとも容易くやってのけたのだ、

銀「マジかよ？」

陽子「嘘でしょ！」

依然として意識が戻らない幽々子が目を覚ました時そこは戦団の隊舎内だった、

目眩は感じない意識もはつきりしている肉体の感覚も変ではない、

普段と何も変わらないのに霊の気配を五月蠅い位に聞こえた声も不気味にしんとしている、

力を失ったのだろうか？

このまま無くした方が幸せだったかもしれない、

そんな優しく回る世界なら良かったのに、

魂に属した根幹な部分に起因している能力は彼女の存在の有無と同義だ、

にも係わらず能力を失う、それは重大な事、

得たいの知れない何か干渉し能力を押さえ込んでいる、

彼女の能力に拮抗しうる力を持つ者がそう易々と転がっているとは
考えにくい、

少しぼーっとする頭を振るい霞む目を擦り人を探す、

今居るのは自分だけの様だ、

静かだ随分と静かだ、

取り敢えず外に出てみる、

何があつたかを神玉に聞こうと彼女の所へと足を進めた、

ただの廊下だったはずだそれが重厚な扉が見える、

いつの間に出来たのか？と手を触れようとしたら擦り抜けた、それは彼女の目に映った幻覚であつた、

次々と見えて来る谷や崖そびえ立つ山が歩みを阻む、行つては駄目だと彼女が彼女自身の為に見せる幻覚、

自らの能力の喪失から鑑みるに誰かが居る、

私の中の何かがそれを嫌っているだから私にこんな幻を見せているのだ、

神玉の部屋の直前まで来た時に幻が映した物は、

幽々子「ここまでの物なの？私に近付くなつて事」

彼女に西行寺 幽々子にとって最早何物にも代え難い存在となつた

戦団員の無惨なまでの累々と並ぶ死体の山、

息が荒くなるこの場を一刻も早く立ち去りたいこんな物を見たくないでも行くしかない、

勇気を出して死体の山に分け入るも気がおかしくなりそうだった、

幻を抜けた時、死体だった幻は姿を変え一瞬だけ笑って塵と消え、

幽々子「何だったのかしら？」

中に居るのは間違いない、手を掛け重い扉を開けた、

銀「お！目が覚めたか？」

陽子「心配したのよ、大変だったんだから」

幽々子「大変？」

桜のくだりは気を失っていたので当然知りはないキョトンとするのは普通だろう、

二人から話を聞く、

それは彼女にしても耳を疑う様な話だった、

自身を以って安定したはずの桜の暴走と自身以外に依る桜の沈静、

西行の血族でもない者に桜への干渉が可能であるのなら自身の内なる否定になる、

神玉が敵わぬとした物を人間が抑えられるのか？

信じ難いが能力の喪失に関してもそれが原因だろう、

神玉「幽々子、体の方は大丈夫ですか？」

奥から神玉と供に出て来た男、

神玉「紹介しようこれから行動を供になってくれる人よ」

紹介を受けた男が応える、

男「初めまして春ハルといいますが他の名は在りません」

（以後ハルで固定）

銀「名が無い？捨てたって事か、てことはあんた坊さんかい」

ハル「以前はそうでしたけどね」

以前？皆がその言葉を疑問に思っ中ズイと幽々子が近づき目を見詰める、

幽々子「貴方のその目、人を殺した事が在るわね？」

ハル「何故そうだと思うのですか？」

一呼吸を置いて質問に答える、

幽々子「人は死を目に映す死を映した目は闇に染まる何より私の目は死を見る」

驚いたと言った感じだったが隠せないと言口を開いた、

ハル「私は僧の禁忌を犯した破戒僧です友をこの手に掛けた」

銀「戒律を破る程の事を何でまた？」

陽子「よしなさいよ、言いたくない事も有るでしょう」

注意され素直に謝る銀、

ハル「構いません僧と言つても私達は武僧でした」

銀「私達？」

ハル「奴も同じく武僧でした時代が時代だ戦火に身を置くのも仕方ない事かもしれない、でも奴は人成らざる力に取り付かれ求めてしまった」

人をボロ雑巾の様に引き裂く圧倒的な身体能力、一撃で地を砕き空を駆ける異能、永遠にも思える長い時を生きる肉体、

永劫に手の届かぬ存在、

人にも幽々子の様な対等以上に渡り合う者も居るが本当に稀な稀有まれの事例である、
稀有けう

だがもしその力が手に入るとしたら？

何を捨ててでもその力を欲するだろう例え人の道を踏み外してでも、

ハル「あいつは自身を妖怪化させる取引に俺達を売ったんだ、まるで地獄さそれでも必死に戦った生きる為に、でも気が付いた時立っていたのは俺と奴だけだった」

妖怪と化した肉体に悦び勇む友人の姿に男は心まで失くしたのだと悟る、

ハル「そして俺は禁忌を破って憎しみで恨みであいつを殺した」

奴はもう人には戻れないならば友人として最後は自分でけじめを着ける、

それがしてやれる友の最後だとして、

空気が暗くなってきたので銀が割り込み話題を変える、

銀「それにしてもあんた不思議な力を持つてるんだな？西行妖を鎮めちまうなんて驚いたぜ！」

陽子「もしかして西行との係わりがあったりして？」

神玉

(いや過去の記録を見ても分家が派生した記録は無い)

和やかな雰囲気慌てた様子で兵が駆け込む、

神玉「どうした？騒がしい」

兵「大変です、街に敵の侵入を許しました！」

神玉「見張り何をしていた！」

場所を聞くと一目散に飛び出した幽々子、

陽子「ほんと、退屈しないで済むは此処」

その後を追って二人も駆ける、

神玉「直ぐに私も行く頼んだ」

見るとハルが居ないどうやら一番に飛び出していたのは彼のようだった、

着いた時あの慌てようから酷い状況を予想していたがほとんど片付いていた、

銀「こりゃ出番無しか？」

陽子「皆やるもんね？」

兵達の迅速で的確な動きに声を上げる、

指揮、管理が行き渡り無駄が無い、

それが神玉の統制能力の高さを示す、

神玉「彼等とて遊んでた訳じゃない、意地が有るんだよ荷物の儘で
いれんのさ」

低級の妖怪なら十分に渡り合う実力は有る、

終わり掛けに敵の二陣が突入してきた、

銀「時間差？やりやがった」

幽々子達二人が剣を手に取ろうとすると、

ハル「ちょうど良い機会です私の力を見てもらいますか？」

銀「大丈夫か？」

ハルから発っせられる気に神玉が笑みを零す、

神玉「成る程、謎が解けたよ」

一人頷く彼女に何の事かを聞く、

神玉「体の調子はどうだ？左腕の痺れ失くなっただろ」

言われそういえばと左手を握り締める、

あの人と鬼との戦いで負った傷の後遺を感じない、

鎖骨と肋骨、今の医療技術でもギブスも宛てれず治癒しにくい骨折が数月も無く治った？

治った処か前より調子が良いとさえ思える、

神玉「彼も命に属する力持っている、西行が死の力なら彼は生の力、西行妖を上から塗り潰す程の圧倒的な生の力」

強制的に他人の肉体をも活性させてしまう生命力は置き換えれば高い身体能力となる、

神玉「強いぞ彼は、見れば判るさ？」

圧巻だった、

一人の人間に蹴散らされる妖怪の群、

銀「あれじゃどっちが化け物か分かねーな？」

物の数分で片付いてしまっ、

陽子「貴方本当に僧なの？」

ハル「ハハ、よく言われるよ」

これ以上の敵勢が来ない事を確認すると彼は妖怪の死体を吊い始めた、

陽子「何してるの？」

ハル「人も妖怪も何であるうが死ねばただの肉ですそこに差は有りません」

銀「そこら辺はやっぱり坊さんなんだな？」

少しむっとした様子で銀を見る、

ハル「破戒僧と言ってもその信条までも失くした訳じゃない」

銀「悪気は無いんだ済まない」

平謝りするのを流し神玉が提案する、

神玉「彼の処遇だが幽々子の所で預かってくれないか？堅苦しいのは嫌いらしい」

実力は申し分ないし断る理由も無いので二つ返事で了承した、

それからは何だか妙なものだった開花に伴い長いこと付き合った忌まわれた能力も彼の前では息を潜める、

別段自身の能力を望み欲した訳でもないがいざ失くなると物寂しさを感じてしまう、

そんな情景も空しくハルを迎え慌ただしくなる生活、

本人の希望もあってか桜の近くに居を構える、内心口には出さずとも多くの人はそれを望んでいた、

当人達には関係のない話した、話しは変わるがハルは男であるが家事、炊事が人並み以上に出来る人であった、

僧にとって生活事も修行の一環である為に上達するのも当然と言えば当然である、

ハル「汚い！よくこれで生活しているな？」

派手に散らかり散乱する部屋に姑の様に口を出す、

幽々子「別にいいじゃない私の自由でしょ」

銀「な！」

ハル「な！じゃない彼女を見る綺麗だろ」

陽子は大体の事はそつなくこなす人で悪い言い方だと特長がない、

お嬢様育ちか身の回りはまるで無頓着な性格の幽々子にハルがキレる、

目配せし妖忌に助けを出すがいい機会と彼は何もしないことにした、

二人の部屋を説教込みで大掃除をし戦いより遥かに疲れたと思うのだった、

銀「これからは掃除しとかないとまずいなこれじゃ身が持たん」

幽々子「同感ね」

遠巻きに素知らぬ顔で陽子が疑問に思った事を尋ねた、

陽子「名を捨てたって言ったけど何故名を春にしたの？」

名を捨てる、西行法師の實在した平安時代では出家つまり僧に成ることは結婚、葬式などより人生においての一大イベントよりも重大視される事であった、

俗世間にまみれ汚れた名を捨て仏道に全てを捧げる意を込め神仏の加護を受けた新しい名で生きる事、

今ではそこまで厳しくないが死後の世界釈迦の下で生きる第二の名前、戒名がその名残と言われる、

ハル「実は自分でもよく判らないんだ気付いたら寺に居ていつの間にか春と呼ばれていた、でも結構気に入っているんだこの名前」

陽子「へえー貴方も大変だったのね？」

ハル「それも良い思い出ですよ！所で」

一人心地で調理道具をドンツと並べる、

ハル「さて？掃除は済んだ次はこれだ炊事ぐらい出来ないかね？」

こっそり逃げようとする二人を捕まえる、

幽々子「今日はもう遅いし別の日に」

銀「お、俺は個人的な用事が」

ハル「さ、始めようか？」

幽々子、銀「いやー！」

こうして夜は更けていった、

戦団の生活も始めはともかくその飾らない性格に直ぐに馴染んで行く、

幽々子も彼の前では自然体でいた、自然体という点では銀や陽子の方がいいのかもしれないがそれは少しだけ特別な感情だったのかもしれない、

しかしまあ綺麗事を並べても彼女らは傭兵だ戦い殺してなんぼだ、

殺す事が大前提見逃す事は許されない、

結局血生臭い生き方でしか表現出来ない不器用な集団である、

それでも彼はちよつとだけ違った、

敵はなにも妖怪や人外ばかりという訳ではない、

人の生活を脅かし仇なす者を討つのが仕事だ当然人間もその対象になる、

盗賊の討伐依頼に初めてハルと一緒に行動する幽々子、

今に限った事でないが腐ってる輩は星の数程居る、

乗り込み殲滅しに来た自分達を前にしながら物怖じしない態度には随分と肝の据わった奴らではある、

どこまで行っても所詮は人間討つのは容易だ、いつも通り断たツ切るだけだが不意に彼が質問を投げ掛けた、

ハル「お前達は青空を見たことがあるか？」

イマイチ掴み所の分からない問いに少しキョトンとするも直ぐに下卑た笑いを浮かべ頭と思われる男が質問に答えた、

盗賊「青空？毎日見てるよ！貴様らはたった二人だけだ、残念だな追い詰められたのはお前達だ！だがその隣の娘を置いて行けばお前

は助けてやらんでもないぞ?」

腐っていると幽々子が刀に手を掛けた時、

ハル「そうか?残念だ」

空気が変わった?と感じた次の瞬間、幽々子に触ろうと手を伸ばす男の手の肘から先が落ちる、

絶叫を上げ転げ回る男に盗賊達が動揺する、

盗賊「き、貴様!生きて還れると思つなよ?。」

震えた声で脅しても何の効果もない、

ハル「最期の終りに覚えて逝け」

当然ながらハル相手にただ一介の盗賊が敵うはずなく彼等は物言わ

ぬ肉塊と果てた、

ハル「痛みを悲しみを知らず傷付かぬ者に青空は見えはしない！」

彼女はその考えに自分と似ていると感じた、

彼も仕方なかったとは言え友人を手に掛けたのだ傷付き苦悩しない訳がない、

一目見た時から不思議な奴だと感じていたがこの日からぐっと惹かれて云った、

よくよく見てみると自分と彼は面白いくらい真逆の位置に居る、

男と女と挙げるのは馬鹿馬鹿しいか？

その心根に在る芯の部分は強く共感でき考え方もよく似ている、

でも決定的に違う物がそこにはあった、

ただ一方的に死をばらまくだけの己に強制的なまでに生の力を付与する彼、

似ている様でその在り方は違う、

彼の力を持って自身の異能が影を潜めた時、何と言うか何処にでもいる普通の女の子に戻れた気がした、

それがとても嬉しく何故だろう？彼との時間が楽しくて仕方ないのだ、

一緒にいて楽しいと言うなら銀や妖忌と居るのも楽しいし好きだ、

でも違う？この気持ちは何なのか理解が出来ない、

人の心の機微を知るには余りにも若くして闘争の死の世界へと足を踏み入れた彼女は幼過ぎた、

一方話は変わる、

街は安定し内政の不安要素はほぼ排除でき神玉も前線に赴く機会が度々ながら増えてきた、

改めて彼女を見てみると、はたして彼女と言う表現が正しいのかさえ不明でありその真の正体を知るものは誰一人として居ない、

人間なのか妖怪か神か悪魔か生まれの起源すら知れない謎の存在、

この世界に住まう者達は何かしら特別な能力を持ち強大な力を誇る者も居る、

例えば八雲の大妖怪は境界、次元を操りし能力は強力無比、

そういった点で見れば彼女は神玉は最も弱いのかもしれない彼女にはこれといった特筆すべき能力は無い、

だがそれは特定の物差しを基準にした話であり視野を広げもう一度彼女を見てみる、

能力の有無など枠の小さい話だ彼女には能力など有るだけ無駄だ、どちらかと言えば必要がない、

総てを覆し塗り潰す単純な何処までも単純な力の塊が彼女だと言えよう、

言うなれば異端だ、

どの種にも属する事の無い一人一種族の長たるもの、

気になる事が浮かんで来る、以前にも紫が聞いた事があった、

恐らくは人という存在が誕生する遙か前から居たであろう彼女だ自身が動けば一日も有れば世界を落とせる力を持ちながらも人による平定をしようなど途方も無い時間がかかる方法を選び、

人が生まれて来ることを予め知っているような振る舞いである、

何故彼女自身が動くとうとしないのか？自分は影だと言いたいのか？

まるで何かからの支配から解放したいと見受けられる行動に見えなくもないが、

だが答えは誰にも知ることは出来ない、

彼女が台頭し始めた時から情勢が大きく変わる、

前にも挙げたが上位の妖怪程に思慮深い、

所詮彼等にしてみれば戦争などただの暇潰しに過ぎないが、

この地（幻想郷）が全く惜しくも欲しくないと言えば嘘に成るが彼

私の戦力差から鑑み自身の損害を被ってまで戦う理由はない、

中には諦めの悪い者も少なくない、諦めと言うよりむしろ待ち望んだ結果と成った者も、

簡単に言えば戦闘狂、

闘・食・性、

人、人成らず者に限らず生命に於ける三大点、

取り分け闘に偏る者達、

しかし『闘』力の割合が高い者程に高位の存在が多い、

向日葵畑ヒマワリのフラワーマスターが良い例だ、

彼女は聡明で良識を持ちその上で己の力を理解し自身の意思を持って力を公使する、

一つ救いが有るのはその性格と云うか彼女が興味を持つのは強い者にのみにだけで弱い者や人間に対し敵意を示さない事だ、

彼等は強い、小細工など駆使せず正面から来るだろう、

でもそれだけに厄介だ正面から打ち合いにこそ真価を誇る、

対し人はどうだろう？

生物の観点にしてみれば人間は余りにも不完全で弱い牙や爪、肉体に備わる武器すら無く生身一つでは無力に等しい、

だが人間には人間だけの武器が有る、

護る という心、

自身の身を排してでも他者の為に戦う事、

人は誰かを何かを護ろうとする時に己が限界以上の力を出せる、

弱き者は切り捨てる世の中で人が持ち得る稀有な感情、

では幽々子が護るべき物は何だろうか？

半ば成り行きで戦いの中に身を投じてきた、

ハルの様に人々の為にだなんて崇高な心は持ち合わせていない、

誰か、人の為になら軍に入ればいいやつてる事は一緒だが信条は大きく違つて来る、

護る物なんて人それぞれだ十人十色にある、

正義、悪の概念はよく聞く話し、

己が信じた道が正義なら違える物が悪でそこに何も高貴な志しなん

て必要ない、

信じる物が何であれ貫き通す強い意思が強さを生む、

道徳や倫理感なんて持ち出してくる輩も居るが戦いという手段を選んだ時点で綺麗な儘ではいられない、

碌^{ろく}な死に方はしない堕ちていく惨めな最後に成るだろう、

かれこれ色々であったが幽々子の生活は随分と向上し、

神玉の下に付くまでは野宿などが日々の過ごし方だった、

別段困る程に金がない訳ではない、

むしろ金は余る位に有るのだが身の回りの事に彼女らは無頓着過ぎた、

それでも幽々子の凄い所はこんなずばら生活態度でも気品さが無くならない事、

でもその所為か余計に身嗜みを疎かにしていく、

従者として妖忌も気にかけてはいたが直る様子はなく諦めていた節がある、

そんな彼女が人の目を気にする様に取り分け異性の目を意識するよ
うに、

前までは自分が女で在ることを疎んでいたが今は逆に喜んでい
るよ
うな、

とてつもなく大きい心境の変化である、

これからは何処にでも居る普通の女の子になれる、

という淡い期待を潰すように彼等が動き出す、

闘争という名の重力に魂を引かれた力でしか自分を表現出来ない者達、

もう一つ彼女には気掛かりな懸念がそれは己自身、

ハルの生の力に消え失せていた死の力が強くなって来ている、

微塵も感じなくなっていた霊の気配などが少しずつではあるが再び感じれるようになってきていた、

日に日に強くなる能力の波動に恐怖を覚えない日はない、

時に幽々子は既に一傭兵では無くなり、

紫や神玉が妖怪の象徴なら彼女は人間の象徴となっており、

彼女の存在が士気の昂揚を促し全軍の勢いを増す、

他力本願かもしれないが彼女となら勝てる！と些細な想いも寄り集まれば大きな力と成る、

妖怪は頭が良いのか悪いのか判らなくなる時が在る神玉が出て来た以上勝つことは不可能だ、

だが彼等には勝ち負けは二の次であり負けるとしても死ぬならば戦いの中だと、

彼等は強い、

大抵の戦闘を勝利で収めてしまふ、

でも、どう足掻こうが勝てない相手が目の前に居るのだ渴望して止まぬ訳がない、

絶対の強者も満たされぬ心は弱者であった、

何度か衝突を繰り返し、

分かった事がちらほらと出て来た、

余程の物好きか？

遣いを寄越して戦に際しての日時の指定をしてくるとまるで中世の騎士のような振る舞い、

義を重んじ義に尽くした姿は絶対の自信を表す、

名指して指名されては逃げる訳にもいかない、

他にも誰かが戦いを仕掛けている間は決して手を出さず静観し続ける態度は律儀を通り越して伊達や酔狂と言えよう、

まあ当然ながら彼等の狙いは彼女、神玉との一騎打ちである、

まんざら神玉も悪い気はしないらしく堂々と正面から迎え撃つ、

でも本当に彼女は何者なのだろうか？並み居る敵を蹴散らすもまるで底が見えない、

強過ぎた強く有り過ぎた、

感覚が麻痺し危機を忘れ強さに溺れる、

安心しきっていた、暗黙の了解に多対一はなしとされ、

前に横槍を刺そうとした者が居たが義に反すると他の勢力の粛清に潰され潰滅した事があった、

信じて疑わなかった幽々子も誰も神玉も皆、

邪魔する者が居るならいなくなるまで待てば良い、

強かに息を押し殺しその時が来るまでじっと、

多くの者が手を引いたといえ相当数残っていたはずだが先に挙げた通り神玉は強すぎた、

総てを片すのにさしたる時間を要さず瞬く間に数は減っていく、

油断していた勝ちを前にし浮足立っていた警戒心が欠けていた、

勇み出陣した彼女を見送る、

今回は留守番だ、

続き本隊も出ると随分と静かになる、

いつものように勝って帰ってくるの待つだけのはずが落ち着かない嫌な気が晴れない、

幽々子「悪寒が消えない何なの？」

銀「大丈夫さ！負けやしない」

大きく首を振る、

幽々子「違うそんなんじゃないの」

予感というのか予見なのか、

直感に突き動かされ裏門へ走る、

予感の中した遠くに見えたのは今まさにこちらへと進軍する敵の群、

本隊は出払い神玉も居ない呼び戻すにも間に合わないこのままだと挟撃にされる、

守備に残った兵も僅かだ、かといって守備隊を割く事は出来ず、

残された手立ては一つしかない、

事の事態を察知した紫を呼び止める、

幽々子「貴女に頼みたい事があるの？」

真剣な面持ちで尋ねる、

紫「まさか？貴女正気なの死に行く気？」

……………「本気なのね、なら私も行くわ」

幽々子「いえ！行くのは私達だけよ」

目を真ん丸にして驚き声が出ない、

紫「何冗談を言ってるの！」

幽々子「冗談なんかじゃない！本気なの」

真っ直ぐに見詰める目に決意を見る、

幽々子「これに勝てばもう戦いは終わるのやっとかかに怯えず人が自由に暮らせる世界を明日にできるだから貴女は神玉の所に行つて必ず持ち堪えて見せるから！」

紫「桜は？西行妖はどうするのよ？もしもの事があつたら」

幽々子「大丈夫きつと生きて帰るから」

その時の紫は何故かそれ以上止める事はしなかった、

紫「直ぐ終わらせてそっちに行くから無茶はしないで」

幽々子「任せて私を誰だと思っているの？」

出発前、

隊舎の中に団員を集め事の次第を伝えた、

幽々子「私達は敵の計略にまんまとやられた本隊はなく手勢も僅か
今なら楽に落とせるわ守る物が無ければ神玉も戦う意味を失くす」

判りきった事を話し出しざわつく中話しを続ける、

幽々子「本隊は間に合わないでも時間を稼ぐ事は出来る私達だけで
奴らに仕掛けようと思っ」

ざわつきが大きくなる無謀過ぎる判断だからだ、

幽々子「無謀と判っている！でも私は行く無理強いはしない逃げた
人は逃げてもいい誰も臆病だなんて言わない付いて来てくれる人
だけでいい」

しんと静まる人込みから手が挙がる、

手の主は銀だった、

幽々子

(銀、やっぱり死ぬの怖いよね)

少なからず落胆の色を隠せないでいた、

銀「俺は幽々子、お前に従う」

場が慎とし続ける、

銀「俺はあの日にお前に会わなければ死んでいた身だ！それに俺達は一蓮托生さ、お前が望んだなら俺は付いていく」

陽子「今さら蚊帳の外なんてひどいじゃない！私も付いていくわ」

すると沈み暗かった空気が明るく変わり笑い声上がる、

団員「そうですぞ団長！何つれない事言ってるんすか？俺達は今まで一度だって世のため人のためなんて思った事はないですよ誰のためでもない団長のために居るんですぜ」

団員B「団長知ってます？コイツが入団した理由、団長に毎日会えるからだってよ」

言われた団員が笑って話す、

団員C「街で団長を見掛けた次の日には武具一式揃えて門を叩いたな」

団員「それが今や二番隊の隊長かよ笑えるぜ」

カラカラと笑い声が広がる、

幽々子「皆にも家族や友人が居るでしょう？」

口を揃えて皆が言う、

「家族？居るじゃないですか此処に居る全員が」

銀「覚悟は出来ている行こう」

幽々子「うん」

俯き涙目になったのを見て、

銀「涙は後だ全部を終わらせてからだ」

目尻に溜まる涙を拭う彼女に大きな声で、

銀「目を閉じる！」

大声にびっくりするも言われた通にした、

近付いて来る気配に目を開けると触れ合う寸前まで銀の顔が在るではないか！

咄嗟に背を反らし頭を引く、

僅かに自分の唇に何か触れた気がしたが、

チツ！と舌打ちする銀に顔を真っ赤にして、

幽々子「何すんのよ！」

回りから他の団員が声を、

団員達「狡い！隊長ばかり団長俺達にも」

幽々子「バカーーーー！」

鬼の形相をした陽子が銀の胸倉を掴み、

陽子「私の目の前で何してんのよアンタ？」

ピタッと場が静まる、

陽子「全く気付きなさいよ馬鹿」

銀「なんか言ったか？」

陽子「五月蠅い！行くわよ」

外に待つ紫に話し掛ける、

紫「話しは着いた？」

幽々子「ええ！勿論」

紫

（なんて力強い目、迷いはないようね）

通り過ぎさま銀は紫に合図したかのように見え小さな紫色の玉を受け取った、

幽々子「何それ？大事な物？」

なんでもないとほぐらかす銀にそれ以上聞かない事にした、

去っていく背中を見ながら呟く、

紫「我ながら酷い女ね私も」

最後の確認を済ませ挑む準備は出来た、

銀「全員持ったか？」

自分以外の全員が銀と同じあの玉を持っている、

幽々子「皆持つているみたいだけど何なのそれは？」

銀「大した物じゃないお守りだよ！」

幽々子「私だけ無いなんてのけ者みたいじゃない！」

陽子「あなたは団長でしょ団員の私達の証みたいなものよ」

余りの自然過ぎる態度に騙されていた彼女はその玉がどれ程危険であるか知らなかった、

幽々子「行こうー!」

全員「おうー!」

スキマを開き次元を繋げる紫が待つ、

その向こうにうつすらと景色が見える、

スキマが広がり皆を包み込む、

次に目を開けた時に目の前は草原に変わっていた、

凝らさなくても分かる向こうに迫る軍勢、

その数ざつと千数百はあるだろうか？

対しこちら百人弱にも満たない、

だがもう後戻りは効かない数にすれば一人頭十人強、

相手が人間ならさしたる物でもないだろうがそんなちやちでない、

恐らくは生きて帰れる確率は皆無、

でも悲観する者は一人も居ない明日に繋がると信じているから、

誰かの記憶に遺らなくても荒野で一人朽ちたとしても構わない、

意地を通す！

ただそれだけだ、

巡り咲く花・別離

風が痛い、

そよ風程度の筈の風が痛い、

鼓膜を劈つかんと鼓動が耳を打つ、

まるで本当に自身の心臓が音を外に響かせているのではないかと感じる程に、

そつと銀が肩に手を掛けた、

銀「お前が緊張を見せてどおする！微塵も面には出すなドンと構えている」

こんな簡単な言葉だがどれだけ救われたか？

遠くから足音が伝わり始める、

人間も馴れて魔力や妖力を感じ取れるようになるものでまだ強い妖力は感じるない先見隊といったところか、

幽々子「私達は傭兵さ、金を貰って殺しをし好きに生きて好きに死ぬんだ」

覚悟を決めた人間の底力が今試される時が、

波と押し寄せる群に蟻に囲まれる虫の気持ちか少しだけ理解出来る気がした、

百人ぼつち無視して行けばいいものを目の前にちらつかされた餌（闘争）に御丁寧（に）飛び付いてくれる、

火蓋は切って落とされた順次その雪崩の中に飛び込む、

低級とは言え妖怪を蹴散らす姿はかつて一方的に狩られるだけの人間はそこには無かった、

それでもこの状況他人の事を気に出来るのは自分を含め極僅かだ必死に目の前の敵を切り倒すも次から次に沸いて来る敵に動けない、

端から10分の1以下の戦力で挑んでいるんだ圧倒的不利な状況に圧されるのは必然、

四方からの刃に貫かれた団員がああ紫色の玉を手にとると口に含む、

団員「すみません先に逝きます」

と一言だけ言い残し玉を噛み砕いくと、

瞬間、団員は爆風と共に姿を消した、

銀達が持っていた玉は生易しい物では無かった、

紫に造らせていた玉は言わば爆弾、

境界の力で圧縮した空間の中に妖力を注ぎ込む、

決壊した時圧縮した空間と共に閉じ込められた妖力が一気に放出され無差別に何もかも吹き飛ばす、

.....

以前から銀が紫に頼み造らせていた代物、

紫「出来なくは無いかど本気なの？言ってる事分かってる？」

銀「勿論本気だ俺の独断じゃない俺達の総意だ」

紫「総意って幽々子も知ってるの？」

銀「いや、あいつは知らない聞いたら絶対に反対するだろうからな
何か犠牲にする選択を一番嫌う」

フツと笑みを浮かべた、

紫「あの子も幸せなのかもね」

銀「その逆さ不幸せだよ！こんな方法でしかあいつを想えない俺達
に囲まれてるんだから」

紫を以ってしても日に一つ出来れば良い方だ、

ギリギリで最後に銀の分が間に合い、

今に至り今日を迎えた、

幽々子「あれは一体何なの？」

銀「見ての通さ分かるだろ！勝つにはこれしか無いんだ」

腕をちぎられ体を貪れながら敵を巻き込み命を散らす者達、

死体すら残らない爆風に蒸発していく、

幽々子「やめて！これ以上もう」

今にも泣きそうな彼女の胸倉を掴み上げる、

銀「泣くな！目を閉じるな！俺達みたいなクズに価値は無くても、お前は世の中に皆に必要とされている俺達はお前を生かす為に在るんだ生きなきゃ駄目なんだ！」

その間にも次々と爆発が起きている、

半身ずたずたにした団員が語りかけ、

団員「銀隊長、そろそろ眠ってもいいですかね？」

銀「ああ、ゆっくりと眠れ」

そう言われて団員は死にかけ体で敵の群に入り閃光に消えた、

何だこれは？命がゴミみたいに消えていく、

苦楽を共にした仲間が友が消えていく、

こんなにも簡単に？嫌だ！嫌だ！嫌だ！

死は覚悟していたつもりだった、

御塚すら遺せないのか？

誰がこんな終わりを想像出来よう、

全部私の所為だ、

心が崩れ耐え切れず膝が落ちる、

好機と取ったか彼女に迫る刃、

放心しまるで気付けていない、

咄嗟に銀が背中を庇う、

頬に飛んだ血に我を取り戻す、

銀「やっと目が覚めたか？この馬鹿！」

間違いなく辛いのは銀達の筈だ、

なのにどうしてそんなに明るく笑えるの？

この時にその笑顔はズルイ、ズル過ぎる、

なんであんたがそんなに格好いいのよ？いつもオトボケだった癖に！

なによ！私が情けないみたいじゃない、

違う！私は西行寺 幽々子！誇り高き西行法師が末裔だ、

度々に起こる彼女の力の解放に連なり漆黒に染まる髪だがこの日は
桜色に似た瞳も黒へ変わる、

そよ風だった風が突然に吹きすさぶ強風に、

舞い散る枯木や落ち葉が彼女に近づくとその直前で弾けていく、

幽々子「銀！有り難う」

銀「礼は後だ！片付けるぞ」

二人に飛び掛かる敵を陽子とハルが薙ぎ払う、

陽子「私達も！」

ハル「忘れないでくださいよ！」

四人で固まり対峙する、

幽々子「私はもう後ろを見ない！」

銀「ああそつだ、お前は前だけ見てる他は俺達が見てやる」

虚勢では無いが勝てる自信が有った、

現実問題に今だ数百以上の数が残っている、

紫から受け渡された爆弾も必ずしも起爆出来る訳ではない為に絶対の方法とは言い難い、

でも細かい事はいい彼等を信じる、

頭を潰せば四散し簡単に瓦解するのが組織だ、

当然自信等にも言えた話したが悲しいかなこちらは組織としてはほぼ崩壊している、

となればやる事は一つ、

突貫あるのみ！

団員達の特攻に半数以上を駆逐でき統率を失い四散し始め、

各個撃破していけばまだ十分な見込がある、

丁度と言つかお逃え向きと言つか良いタイミングで敵の中核が現れた、

討ればこの馬鹿げた戦もやっと終わる、

ただ無心だった、

一心不乱に刀を振るうも阿漕あしやうなまでに牙を剥く、

長引く程不利になるのは理解しているつもりだが押し込めない消耗と焦りばかりが募る、

この大地は一体私達の血をどれだけ飲み干せば満足するのか？後何リットル注げはいい、

何人切ったか数える余裕など微塵もない、

進行の遅さに様子を見に来た一人の男、

男「私は夢でも見ているのか？我が魔軍を人間が留めているだと！」

驚きに目を丸くしていたがやがて何かを悟ったようだ、

減る気配のない敵に軽い諦めが過ぎり始めた頃、

突如走る業炎が群がり火葬する、

呆気を取られればかんとする幽々子に赤衣を纏う男が歩み寄る、

男「これまでの非礼を許して欲しい」

幽々子「貴方は？」

男「私は間違っていたんだな？貴殿等を見て初めて知れたよ守る物

が在るからこそ戦えるのか？気付けぬその時点で私は負けていたのだな」

深々と頭を下げる姿は紳士さながらと言った風合いを漂わせる、

男「この地の覇など元より興味はない大陸から出向いたのも強者と相見える為よ、我が名はゾット！貴殿等を討ち高みへ登りそして改めて神玉に戦いを挑む」

段々と言葉に熱が籠り、

ゾット「我が正しいか貴公等が正しいか？そんな事はどうでもいい今この時を！どちらが正しいかは後の世の歴史が決めてくれる」

幽々子「貴方達みたいな人に聴いてみたい事が在ったの、貴方にとつて力とは戦いとは何？」

急の哲学的な質問にトーンダウンして考え込む、

ゾット「難しい質問だな、力と戦いか？・・・一つは我が存在意義！二つ目はこの世に自身が居た証明を遺す手段かな？では私も同じ質問を聴いて良いだろうか？」

答えて貰った以上は返さなければ義に反する、

幽々子「力なんて本当は要らない物」

ゾット「ほう？しかしそれでは自身の命すら守れぬぞ」

幽々子「そう綺麗事を言っても何も守れなくては無価値と変わらない」

共感するよつに頷いている、

ゾット「ではもう一つ貴公にとって戦いとは？」

幽々子「己が意思を相手に強要する為の手段」

言い終わると同時に足を踏み鳴らし猛り上がる、

ゾット「そこまで分かっているのなら言葉は無粋よ推し通れ!!」

彼は腰からとても剣とは呼び難い長い剣をだんびらと呼んだ方がいい長物を抜く、

西洋風の両刃剣、

ゾット「切れ味なんぞ在って無いような物だな」

幽々子「剣で勝負？貴方もとことん物好きね！」

ゾット「敬意をもって相手せねば相手の土俵でこそ価値在る勝利と呼べる！」

振り下ろされる剣を受け止め、

随分と驚いている、

ゾット「そんな細身の剣のどこにそんな強度が」

今度は幽々子から切り掛かる、

幽々子「大陸から来た貴方は知らないかもしれないけど刀って言うのよ！」

その小さい大軀から考えられぬ衝撃に甘く見ていたか数歩後ろへ、

長剣こ刃が欠けているのに刀は刃毀れ一つ無い、

ゾット「なんという素晴らしい剣よ！いや刀と呼ぶのか？その剣に名は有るか？我に相應しい貰い受ける！」

目を輝かせはしゃぐ姿は新しい玩具おもちゃを手に入れた子供の様だ、

幽々子「銘は斬楼刀よ冗談！私と仲間の思いが込められた刀よ渡しはしない」

顔が更に綻ぶ、

ゾット「念の込められた刀か？気に入った益々欲しくなった」

「おい！」

切り掛かる出鼻を挫かれ一瞬苛ついた表情が見えどんなに紳士の呈を取ろうと本質は破壊と殺戮で在ることが知れる、

銀「二人だけで話し進めんな」

幽々子を囲む銀達に冷静さを取り戻す、

ゾット「済まない事をした私の失態だどうも興奮すると周りが見えなくなる質でね」

静かにだんびらを持ち上げる、

ゾット「一撃で死ねぬと痛いぞ」

銀「どうも御親切に」

ハル「元から死ぬ気なんてないんでね」

まずはハルと銀二人が走る、

闇雲に振り回しているようにしか見えないが的確に隙を突いてくる、

一撃で死ねぬと言うが掠りでもすれば致命傷だ、

彼は喜んでいたらこれ程まで理想的な武器が存在している事に西洋に代表される剣にサーベルやレイピアは刺突をつまりは突きを主としインドや中東等に於けるシヨテル（曲刀）は切断に特化した切る事に重点を置いた剣だが、

欠点も在るサーベルは強度に難が有り曲刀は形状から刺突には向かず重く大きい為携行に難が有る、

日本刀は切断系統の武器としては完成形と言える、

折れず曲がらずと謳われる程の強度を持ち鉄すら切断する切れ味、
どこぞのテレビで銃弾を刀で切る実験をしていたが結果は見事に弾を真っ二つにしてみせ刃毀れ一つ無かった、

刀身である程度の防御を可能とし刺突、切断を選ばない近距離武器の理想を正に体言している、

ゾット「素晴らしい！出向いた甲斐があったやはり世界は広い」

地ならしの如く地形が変わっていく、

あの二人でも攻めあぐね一息付くのもやっとだ、

ゾット「見てるだけでは詰まらんだろう？四人纏めて来い！」

疲れを知らぬ子供のような叫声を挙げる彼の目に滴る大粒の涙が流れていた、

歓喜に奮える程に心は満たされている、

彼もまた強すぎた、

その心は孤独だった常に一人、

大陸の覇を目指し戦いに明け暮れても何も見えては来なかった、

過ぎた力は時に周りから卑怯と擲揄やゆされる、

彼の力に釣り合う存在が居なかっただけかもしれないが一人突出し過ぎたあぶれ者、

当然の様に大陸を征したが何も変わらなかった彼の前には無だけが

広がり餓えに心は渴いていく、

意味の価値の無い勝利に彩られた道化の道、

こんな不意打ちを仕掛けたのも護る物を奪われ逆上した神玉と打ち
合い負けたかったから、

同族からも嫌われ避けられた彼に挑もう者は居ない、

今日の前に居るのは人間遥かに弱い存在の彼等が臆面もなく正面か
らぶつかっている手を抜いてなどいない、

初めて心の底から勝ちたいと願う相手に出会えたのだこれ以上の喜
びが在ろうか？

ゾット「^か斯くも人は強くなれるのか！貴公等こそが真の戦士だ！！」

薙ぎ払いを流した勢いを利用し打ち込む、

陽子「さっき言葉は無粋って貴方が一番喋ってんじゃない！」

手甲を仕込んでいたか響く金属音に刀を捌く、

豪胆な性格の割に堅実な装備を固めている、

陽子「身持ちが固いのね？」

ゾット「そう言ってくれるな！嬉しくて堪らないんだ」

彼の強さを理由付ける物は信条にも有る、

過去の強者は自身の強さに過信し弱者の攻撃は避けるまでもないと
防御しようともしない、

例え小さい傷も積み重なれば致命傷に達しもする身体パフォーマンス
も確実に低下していく事は目に見えて分かるものだが、

それに気付けぬ事が結果的に彼等を負け（死）に導く、

幽々子「この男！強者特有の奢りがない」

ゾット「そら！よそ見している暇はないぞ」

四対一で在りながら絶大な集中力に隙を見せればだんびらが飛んで来る、

相変わらずぞつとする破壊力に背筋が冷え込む、

ゾット「この至福の時を望むなら永劫に愉しみたいがそつもいかな！終わらして貰おう」

気が膨れ上がり今までが遊びだと言うように、

ゾット「さあ見せてくれ人の人間の力の真髄を」

ハル「本当に良く喋る口だな！」

ニヤリとすると、

ゾット「そつだな？なら口の使い方を教えてやる」

大口を開けて何をするかと思えば刀に噛み付いた、刃が頬を突き抜けているのも意にも返さず、

ゾット「これが口の使い方だ」

腕を振り上げ拳を握りハルの横腹辺り目掛け振り抜く、

バキバキと人から鳴ってはいけない音が、

血と吐瀉物を吐き出し転げ回る普通なら即死、

真に全力を出すと値したか、

人間を遥かに凌駕する妖怪や人外の力、

ハルは既にリタイアに近く圧倒的に不利に追い込まれた、

こうなるとやはり鍵を握るのは肉体に備わる地力が物を言う、

哀しいかなその差は歴然、

じり貧に鬨り殺されるか潔く負けを認めるか、

義に厚いこの男なら見逃してくれるか又は敗北を認めるよう諭して
くるかもしれない、

ゾット「十分だろう？貴公等はよくやった」

やはり来た、

幽々子「嫌だ！」

ゾット「私は知りたい何が貴公等をそこまで駆り立てる？」

幽々子「人は刻んできた思い出に背を押されて歩けるの！その思い出が私達を支え今が在る、だから譲れない私の誇りを架けて」

彼の目がより一層輝きが増す、

ゾット「思い出に背を押されてか？私には己を支えてくれる思い出は皆無だな空っぽの抜け殻だった、思い出と誇りか？」

幽々子の前に跪き頭を下げる、

ゾット「度重なる無礼を貴女の誇りを汚すところであった、願いをすめるのはこちらだ改めて戦いを挑む！私は誇りを手に入りたい」

清々しい清廉な顔つき、

長く彼の心に在った闇を掃い照らした、

人の目から見て妖怪に抱く感情は恐怖や憎念がほとんどだろう、

が！ここで本能の思考に根差す一つの疑問、

彼等は『何故生まれたのか？』

人の悪意が形を成した者、

人の悪意に生まれた者、

果てはこの世の摂理に座した者、

形、由来がどうであろうと人に係わるのが彼等だ、

ではそれに因り生まれた新たな疑問、

始まりは誰からだ？

人からか？

妖怪からか？

解ける事のないクイズに彼等の時間は永過ぎる！

百年ぼつちで死ぬ人間には幸せかもしれない、

人が居るから妖怪が居ると簡単に割り切れ思考を持てたら、

隠しているが誰もが怯えている自身の謎に強い心を持てなければ永遠の問い掛けに自我が耐えられない、

崩壊した心は死を望む、

ゾットの心も限界を迎えていた故に死を望んでいた、

しかし今！生きる意味を知った、

時は過去には戻らず幾ら先読みしようとも未来は見えない！

在るのは今だけ！過去の積み重ねが今に成り今の進行する先に未来が在る、

《今を謳歌せずして命は無い！》

何だかとても気分が良かった、

自身の存在がなんであろうと今此処に生きている事実は如何なる物より確か、

その事実があれば十分、

剣を合わせ対峙すれば相手の心を感じ取れる、

皆内に秘めた闇が一番に伝って知らずか相手はその心の闇に恐怖を
能えた、

晴れ渡った青空を仰ぎ見た爽快感に顔に笑みが浮かぶ、

それは当人達だけに収まらず周りをも巻き込む、

死に損ないの体を持ち上げハルが走る、

ハル「仲間外れにするなよ！」

銀「無理すんなよ死に損ないが！」

陽子「そうよ無理しなさんな」

ハル「馬鹿は休み休み言えよ寝てられっか！」

骨が砕けた激痛を忘れてしまう程の感情の高揚、

どれ位時間が経ったか刀を握る手の感覚無くなってきている、

同じ過ぎ行く時に彼の中を巡る気持ち、

五百、いや後百年早く出会えていれば神玉や彼等と肩を並べ立てたのかもしれない、

しかし今はその百年後、敵として出会ってしまった、

肉体の損傷を比較した際同程度の傷であっても人と妖怪では人のダメージの方が大きい、

ましてや相手は超一戦級、

がたが出始めた肉体は思った通りに動いてくれない、

銀「まいったね、これは」

腰に手を当てるとコロツとした感触が、

銀

(コイツは!)

紫より手渡された紫色の玉、

四人の中保持しているのは銀と陽子の二人、

急遽入った為にハルの分は無い、

陽子に目を走らせると考えてる事は一緒だったようだ、

大妖 八雲 紫の能力で作り上げたこの玉なら奴の命に届くかもしれない、

とは言ったものどうする？虎の子の二発無駄打ちは出来ない望むな

ら二つ同時に叩き込みたいが抱えたまま突っ込むか？それは出来ない、

なら投げ付ける？憶測を越えないが如何に紫の妖力でも表面からでは致命傷には成り得ないだろう、

失敗し感ずかれるのもそうだが誤爆などあつてはならない、

外殻を破壊しなければ為らない為に物理的衝撃を必要とし危険を伴う、

四人が傷を負うようにゾットもそれ応のダメージを受け息を切らし疲れを見せている、

それぞれの思考も終局に傾き初めだした、

だんびらは刀との打ち合いに刃は欠けボロボロで剣として呈していない、

初めから剣と扱っていなかった気もするがそれでも余り在る破壊力は健在、

体軀がたいもいい彼が持つことでただでさえ長いだんびらと合わさりかなりのリーチになる、

容易に近付くのも難しい、

幽々子「仕方ない！先ずはそのだんびら砕かせて貰う」

鞘に刀を納め深く腰を落とす、

ゾット「何をするかは知らんが乗ってやる！」

言葉通りに真っ直ぐ幽々子へだんびらを下ろす、

沈み込んだ体位から右足を踏み出し流れに速度と加重を右肩に乗せ鞘から刀を引き抜く、

刹那！長いだんびらの刀身がブンブンと音を発てて空に舞う、

豆鉄砲を喰った鳩の様に口をあんぐりと目をパチクリさせ折れた剣を眺め、

ゾット「刀が如何に優れているとしてもこの鉄塊を切るだと！」

物理での火力性能を十二分削いだはず、

ゾット「これで私の戦力を削いだつもりかな？残念だ！」

好勢になれると踏んでいたかコンマ一秒の油断、

銀「避ける！」

叫ぶ声と私の視界を塞ぐ背中がスローモーションの様に飛ぶ嫌な鈍い音をさせて、

ゾット「済まんな、私は無手の方が強い！」

自分を庇ったが為に銀の左手の肘から先が明後日の方向を向いている、

それから景色が変わった、

色を付けて見てたとしても同等と見れなくも無かったが、

歯車が何処で狂ったのか？

ゾット「此処までのようだな？幕引きにしようか」

止めと近づいてくる逃げなければ殺られる！

でも体が動いてくれない、

自身の方が余程重傷なのに庇おうと前に入る銀やハル、

ゾット「これが人間の限界だ！」

諦めたく無かった認めれば此処に来るために散った命全てが無駄になる、

死ぬのか？ただ死ぬもんか爪痕を相打ちに手傷位は、

彼女は他人の怪我や死を極端に嫌う、

その反面自身の命を軽んじる気がある、

幽々子

(ハルが居れば桜は抑えられる私の命で皆を救えるなら)

一人殺せば犯罪者、百人殺せば大英雄、

過去の人は死して英雄と呼ばれた自分もそんな風に呼んで貰うのなら此処で死ぬのも悪くない、

背水の陣か覚悟した彼女に流れる記憶の一片にあの人の言葉が蘇る、

.....

「死に何かを求めるな生に縋れ最後まで生きるんだ」

.....

そうだ死は何も産まない！

何を考えていたんだ生きるんだ最後まで恥じぬ生き様を、

779

ゾット「何故引かぬ？戦士は引き際を知るのも大事！上恥じを塗るつもりか？さあ終幕だ」

一切視線を逸らさず一点を見詰め、

幽々子「やってみろ！」

この地で散っていった幾百幾千の魂が一人の人間の下へ、

死霊を纏い操る力、

操る？

隷属にも等しい力、

大地が呼応しうねりを揚げる、

ゾット「禁忌の御技 人の業しごそれが貴公の闇か？」

幽々子「御託はいい！私は生きる生きて帰るんだ！」

ゾット「生きて帰るか、そうだな 来い！」

一人の女は明日を賭け、

一人の男は己の今を賭け、

死霊の霊力を取り込みじりょうりく脅力へと変える、

命を対価に天魔必斬が力を得る蛮行、

肉体を解放したゾットに真に対等へと持ち込んだ、

意識を失っていた銀が目を覚ました時映った物、

銀「あれは幽々子なのか？ 凄い！ あのゾットと互角じゃないか」

陽子「これなら行けるかも」

水を差すようハルが口を挟む、

ハル「あれを互角と見るか？ でも互角じゃ駄目なんだ」

肉体を命を削る幽々子に肉体の力を行使しているに過ぎぬゾット、

先にどちらがボロを出すかは明白、

銀「俺達にも出来る事はまだ在るはずだ」

陽子「そうね？それ寄越しなさい！」

懐から紫色の玉を抜き取る、

銀「おい？」

陽子「大丈夫、身投げなんて真似はしないから？」

銀「まあー良いさ？負けは死だ！俺達は一蓮托生、準備はいいか野郎共！」

陽子「あたしや女だよ！」

ハルの見解通り状況は幽々子が押され始めている、

自分達が如何程の戦力になるかは知れている無駄でも何もしないよ
りかは、

幽々子「無茶よ！そんな体で」

陽子「無茶は承知の内よ」

ハル「どの道負ければ終わりなんだ」

銀「気にするな骸が動いたと思えばいい」

彼等の心は同調し一つに、

三人は初めて幽々子の抱える闇を知った！苦しみ妬み恨み痛む怨嗟
の聲が流れ込んで来る、

途方のない何千もの死人の助けを求める声が、

こんな悲痛の死人の姿を見続けてきたと思うと、

欠片でも僅か一片でいいから肩代わりしてあげたい、

死霊の衣に触れ初めて見る幽々子の視点で見た世界、

一人の少女が背負っていい業じゃない、

彼女の為に何ができる？何をしてやれる？

ゾット「貴公等は死ぬのが怖くないのか？」

幽々子「死ぬことよりも魂が折れてしまう方が怖い」

彼女が何を望み何をしたいかが手に取るように分かる一糸乱れぬ呼
吸、

銀「落ちろー！ー！ー！」

(あの日拾われた命を幽々子お前に還す)

四つの歯車が合わさり巨大な壁を穿たんとするも欠けたギアは流れを止める、

幽々子は何も屈強な肉体を持つ訳でも恵まれた体格を有する事もない普通の女の子で本来なら此処まで戦えた事が自体奇跡、

でも限界は訪れた、

ガクンと糸が切れた人形みたく手足が動かない、

当然止まれば狙われる打ち下ろされた拳を我が身を盾に銀は折れた左腕を完全に捨て幽々子を守った、

ゾット「守る心が人間の強みなら逆に最大の弱点にもなる時に戦とは非情な物よ」

崩れ落ちる銀を抜き再度彼女への迫撃、

駆ける二人だが、

ゾット「これで詰みだ！何をしようが我の方が速い」

ぐしゃっ！と肉を潰し挽きる音と赤い飛沫が、

滴る鮮血に広がる鉄の臭い、

右腕は腹部を突き抜け幽々子の眼前で止まった、

陽子「なんでかな？体が勝手に動いちゃったよ、非情さも必要か？
そうかもね」

ゾット「何故短い生を自身で短くする？」

陽子「短い命だからその一瞬に全てを賭けられるんだ、私が威張る事

じゃないけれど大妖が八雲の力を味わえ！」

奴の肉体も戦いに大小なりの傷は在る！如何に大妖怪といえど体内で喰らえば、

腹を貫かれ命尽きる最後の一撃、

右脇腹の切り傷へ右腕を打ち込み肉を割く、

痛みにゾットの顔が歪む、

生物は傷を負った瞬間本能的に筋肉を収縮し出血などを抑える防衛反応が起きる、

それは意図しない無意識の行動で非常に力強い、

陽子「私みたいな美人が地獄に一緒に行ってあげるのよ感謝しなさい」

玉は決壊し内包された妖力が体内から破壊する、

静止画のコマ送りみたいに奴の右半身が崩壊していくさまが、

衝撃に舞う陽子が叫ぶ、

陽子「ハルー！今だ奴を」

ハルの刃が深々と真芯を心臓を穿つ、

ハル「やった！」

ゾット「まだだ！私はまだ死なん！」

ハルを残った左腕で打ち払い前へ出る、

ゾット「弾薬庫の最後の一発が命運を分けたな、これで私の勝ちだ
！」

紅に灯る火球を幽々子へ放つ、

爆風と噴煙が立ち昇り視界を遮り熱風が辺り

煙りが薄くなり開けた時彼の目に幽々子を覆う銀が

瀕死の肉体を盾とした、

幽々子「銀！」

ゾット「まだ動けたのか？そんな事はどうでもいい何故だ！何故生きている？人間が堪えられるはずが」

銀「てめえまだ自分が万全だと思ってんのかよ！お前だって消耗してんだよ」

ゾット「まさか？そんなまさか？」

そっと静かに語りかけるみたいに耳打ちした、

銀「なあ幽々子、お前さ強い女じゃん！やっちまえよ」

彼女を纏う死霊が収束し蝶の羽へと形を成す、

幽々子「桜符『完全なる墨染の桜 開花』」

銀「こんなふざけた戦いにケリを付ける」

蝶の羽は桜の華を描く背中を彩る扇へ、

幽々子「『反魂蝶 十ツ咲き』」

放たれた蝶は風を割きゾットの胸を撃ち抜く、

ゾット「礼を言うつ人の子よ、貴殿の名を聞かせ願いたい我を破りし者の名を？」

幽々子「姓は西行寺、名を幽々子」

ゾット「良き名だ？争いの中でこそ命は光り輝くのだ、惨めな生に絶るより此処で死ぬ事こそが我が誉れなり」

最後まで堂々とした見事な死に様だった、

神玉達が駆け付けた時辺りは焼け野原になっていた、

累々と死体が散列し血液が地を赤くしている、

散り散りに統率を無くした兵隊を掃討しながら生存者を探す、

紫「これを全部あの子達がやったの？」

一抹の不安を抱え先を急ぐ、

陽子「なんて顔してんのよ情けないわね」

幽々子「喋っちゃ駄目」

首を横に振る、

陽子「私はもう駄目よ見れば解るでしょ？」

幽々子「諦めないで！」

手を伸ばし頬に触れ優しく笑うと、

陽子「泣かないの？じゃあ私は先に逝くよ」

（あーあ！最後まで勝てなかったよ、あいつ私に振り向いてはくれなかったけど…ま！いっか）

頬に触れる枝垂れ落ち握る手に生気を感じない、

泣かないでなんて無理だよ！

抜け殻となった陽子の横で泣き声を挙げる彼女に声をかけられないでいる紫は唇を噛み締めていた、

後に到着した部隊に保護され宿舎へ、

銀「そうか陽子が逝ったか？」

何も答えず泣いている、

傍らで泣く彼女に構わず続けた、

銀「言っただろ、お前さ強い女だ俺が居なくても大丈夫だよ？」

居なくても？

幽々子「嫌だ！銀にまで死なれたら……！？」

唇を重ね口を塞いだ、

銀「はは、やっと奪ってやったぞポケツとしているからだ馬鹿！・・
ハルよ頼んだぜ？コイツ危なっかしいからさ」

（畜生ほんの良い女だよこいつは！こんな良い女のために死ぬるん
なら幸せな方だな）

済まねえな約束守れ無くてさ、でも良いよな璫？

.....

幻想郷を巡る戦争は事実上の終決を迎えた一人の少女の心の傷を引
き換えに、

今次の戦闘での生存者は二人だけ他の団員については発見されなか
った、

妖忌はずつと己を悔いた幽々子の傍に居てやれ無かった事に、

神玉から助勢を頼まれたと言え無理をしてでも幽々子の下に居れたら？

一人いた所で何も代わるとは思えないが従者として悔やみきれない自分が居る、

戦団は瓦解しいつも賑やかだった隊舎は閑散と静まり物悲しさが漂う、

数日が経ち落ち着きを取り戻しつつある日常、

妖怪達は目立った動きを見せない、

もとより余興 暇潰しに託つけて起こした戦でありこだわらる必要もなく身を隠しひっそりと暮らしている、

夕暮れに沈む幽寂にたそがれた空を一人眺める、

騒がしい日々が懐かしく一日前の出来事が酷く遠くに思え、

時計に目をやると随分と時間がどれ位一人でこうしていたんだろう、

いつもだったらこの時間帯に食事にしてから懲りもせず陽子や自分の風呂を覗こうとして妖忌のカミナリを喰らい庭で正座させられる銀の姿と当たり前の何でもない風景がもう無いんだ、

でもこの静かで音の無い夜を迎えたのも彼等のお陰だと心に言い聞かせる、

妖忌だって辛いはずだ銀や陽子は最も始めの仲間だ銀は妖忌の直接の弟子だったのに死に目にも逢えなかつたんだ悔しくない訳が無い、

沢山の仲間に関われて長いこと忘れていた一人がこんなにも寂しい事に、

知らぬ内に袖が涙で濡れていた拭っても拭っても止まらない自責の念ばかりが込み上げる自分にもっと力が在ったら、

弱い自身を恨み辛んだ、

西行法師が遣せし妖楼・西行妖、

終る命の数だけその花卉を墨に染める、

薄紅と薄墨が交じる桜は普段のそれとは一線を画し今見ている物が
現^{うつ}が夢か幻か？その境が付けられない程に怪しくも美しい、

今回は長きにわたり戦いを重ね深く死に触れ合ってきた極上の魂を
取り込んだ、

それはそれは儂くも立派に命を表す様に、

幾百、幾千の人々を魅力しようと彼女には忌まわしく醜く見えた、

窶^{やう}れていく姿に声をどう掛けてやれば分ならず見ているしか出来ない紫は齒痒さに苦悩していた、

傭兵とはロストナンバーそれは分かっていた事、

軍ならいざ知らず市井の人々は彼等の死を悼みもせずただ平穩を享受する、

幽々子「死は何も生まない……………その通りじゃないか」

いつも夢に見るのは楽しかった頃の夢ばかり、

ふらっと何でもない顔をして出て来てくれるような気がして、

理解して分かっている筈なのに受け入れられない、

戦争の終決に伴い軍部は最低限を残し多くが解体された、

職を失くした者が生きずまらないように根回しも完璧に行う政治手腕は圧巻、

しかし人とは何故に愚かしいのだろうか？

ようやく手に入れた平穩を自ら手放そうとする、

いつの時にも腐った人間は居るものだ、

弱者を糧に利を貪る愚者、

縮小された軍部では即時の現場対応に限界があり人外の脅威を退けたのもつかの間と同族の脅威に怯える日々を過ごす、

無意識に近く生きる屍の目をしたまま死の臭いに導かれふらふらと出歩き彼女にだけ伝わる命が失われる予感が導く、

その導きにたどり着いた先で目にした物は今まさに人々を襲わんとする賊の群、

耳を突く嫌な笑いと身を盾に我が子の為に息絶える母を映した虚ろな瞳に深い怨嗟の念が灯る、

無数に転がる屍と噉り泣く声と嗚咽に耐え切れず嘔吐する音のなかに、

嫌悪感を抱かせる水音が延々と聞こえ、既に事切れている賊に何度も何度も刀を突き刺し全身に返り血を浴びる少女に恐怖しがたがたと震える、

突然居なくなつた幽々子の搜索中舞い込んだ目撃情報に駆け付けたハルにすら気付きもせず血に濡れた両手を振り下ろし続けた、

幽々子「何で？何でなんだ？お前達は皆が命を賭けて守つた今を何でだ？こんな事の為に皆は死んだ訳じゃない！」

再度大きく手を振り上げた彼女をハルは後ろから強く抱き留めて思ひの丈をぶつけた、

ハル「俺が居るから！ずっと傍に居るから俺だけは消えないから」

彼女の体から力が抜け、

幽々子「ハル、私泣かないって決めたのに約束したのに」

肩を抱き正面に立ち、

ハル「何がいけない！お前はただの女の子だ泣いても良いんだ」

必死に我慢していた想いに震え堰を切るように涙零れ始め、

幽々子「わ・・・たしがよ・・・わいか・・・ら皆が」

ハル「もういいー！」

もう一度ギュッと抱きしめ、

ハル「もう戦わなくていい！俺が居る俺が守る！無理だとしても俺が皆の代わりになる絶対を守るから」

空を仰ぎ大声で張り上げ大粒の涙を流し慟哭する姿は気丈に造り立てた彼女でなく年相応の弱い一人の女の子がそこに居た、

その日からハルは極力幽々子の傍に居続けた、

逆に妖忌は接するのを控えるように今の己では彼女の心に何の助力に成れないもどかしさとハルに頼るしかない無力さと現状、

今や幽々子だけが全てである妖忌、

守るべき主を亡くし姫の笑顔が今の存在する意義であり少しずつでも回復を見せる彼女にその心は救われハルに託した、

直ぐにとは行かないが強張った表情も柔らかく、

でもどんなに顔は笑っても心が無いからっぽの偽物、

不安定で臍げで壊れやすく後一つ何か力強く支える物が欲しい、

ある夜、夢の中で、

なにもない空間にぽつんと一人立ち続ける、

風も音も光も何もない闇の中に誰かが近付いて来るのが分かる目を懲らしその一点を見詰めると、

それは死んでしまった団員達だった皆無言で自分の横を通り過ぎていきいくら声を掛けても無反応で去っていく、

追い掛けたいのになが動かない最後に二人銀と陽子が目の前で立ち止る、

幽々子「皆して何処に行くのよ私も連れて行って！」

銀「お前までこっちに来てどうするんだバーカ？それにお前を待ってる奴が居るだろうが？あいつ一人置いてけぼりにして逝くつもりか？」

陽子「だからね、こっちに留まるのも止める私達はもう逝くよこれでホントにさよならだね」

肩をポンッと叩かれ自分の横を抜けていく、

去り際に一言残して、

銀「幽々子が来るのを皆で気長に待ってるよ、じゃあな！」

手を振りながら暗闇に溶けて行った二人は見えなくなった、

夢の終わりと共に私は慌てて目を覚ました、何かを追い掛けるよう伸ばした手は空虚ばかり掴み必死に名を叫んだ届くかもしれないと

今ならまだ彼等に届くと願って、

そんな悲痛の声に気付いたハルが私をギュッと抱きしめた糸が切れる位に強く、

ハル「大丈夫だ消えないから此処に居るから俺が！俺が居る！お前は一人じゃない！」

彼に抱きしめられると安心する突き上げられるような恐怖も全部掻き消してくれる、

ずっともやもやしてた秘めた感情にやっと気付いた、

(嗚呼そうか私は彼の事が好きなんだ)

巡り咲く花・絶

恋を知った日から彼女は随分と明るくなった、

己の本心に向き合う事で弱さに立ち向かう勇気を得た、

彼の隣で生きていたい、

自身だけが生きる後ろめたさは在る無いと言えは嘘に為るが、

皆ならきつと分かってくれろと信じて、

帰る場所が心の拠り所が在る意味を、

人々を仲間を誰かを守る為に着込んでいった戦士の衣、

本心を偽り騙し頑なに作り上げた傭兵団の団長というもう一人の自

分が溶けて流れて行く、

何処にでもいる普通の女の子に今度こそ成れると思いを込め、

心の在り方は自然と物腰も軟かくなり笑顔も増える、

感情や精神の傷を癒すのに効果的な方法は何か？

それを忘れられる程のより大きな物で包み込んでやればいい、

二人並ぶ姿からは和やかな優しい空気が、

遠巻きに見詰める紫も笑顔に、

紫「もういいのね」

(幽々子もやっと笑ってくれた、じゃなきゃあの子達だっておちおち寝れないものね)

ゆっくりと平穏な時間は流れて行く、

古の大楼の下で佇む、

ハル「俺はこの桜が好きだ人々に忌み嫌われる物でもこんなに綺麗に咲き誇るんだからな」

幽々子「そうなの？」

ハル「人は、いや人だけじゃない妖怪も全て死んだら何処に行くんだろう？人生を如何に飾ったって死んだら終わり！でもこんなにも綺麗に自分の死を飾ってくれるなら幸せな最後だと俺は思う」

気のせいかもしれないが一瞬桜が喜んだようにも、

ハル「俺も死んだらこの桜の下で眠りたいな？」

幽々子「じゃあ私も！なんてね？」

いつ以来だろうこんなに明るく笑えたのは、

ありふれた世間並みの幸せが続けばよかったのに、

人の感情に深く大きい傷は一朝一夕で払えるものでもない、

些細なきっかけで呼び起こしてしまう事も、

錯乱し取り乱す自分をいつもギュッと抱きしめて落ち着かせてくれる、

幽々子「どうしてハルは私の為にここまでしてくれるの？」

銀の最後の頼みだから？

それとも私が哀れだから？

ハル「どうしてって？俺は別に誰でもいい訳じゃない！幽々子お前だから守りたいんだ」

幽々子「え？………それって」

予想外の反応に固まってしまっ、

ハル「言い方を変えよう、俺には君が幽々子が必要だ傍に居てくれ」

その日より二人は男と女となった、

男は誓った！この女を守り続けると、

女は願った！この男と共に居たいと、

それから幾つかの月日が流れた、

人の営みは遅しくすっかり元の生活を取り戻しつつあり、

今や西行妖は花見の名所と成り多くの人を楽しませている、

争いの鎖から解放され一人の女性として八ルの隣に居る幽々子は一部の人々から違った意味での名所と成った、

紫や神玉の存在もあってか妖に対する見識も見直され天狗や河童等が人の往来を昼間から歩く姿も珍しい物ではなくなり理想的な光景が広がっていた、

桜もそう以前は無差別に命を奪う恐ろしい存在だったが終る最後を着飾ってくれる本当は優しい桜、

不変的で平穏な日常は辛かった過去を忘れさせてくれる己に備わりし忌まわれた業こゝろの力をも、

死とは命に必ず訪れる物、

生を受けた者に定められた約束、

人生の終着駅、

言わば命の答え、

死を知らぬ生き物等は有りはしない、

彼がハルがどれ程の優れた力を持つとと敵う筈の無い絶対の差、

今はまだ勝っていてもいずれその均衡は崩れていく、

本人の気付かぬ内に着実に少しずつ、

巷ではお化けや幽霊を見たという噂に溢れていた、

先日、葬式を挙げて死んだはずの人を見掛けたとか様々に一件二件ならただの噂で片付けられるが報告数は日に日に数を増す、

度を越し異常なレベルに原因を調べるにもまるで手掛かりがない、

誰もが一番に西行妖を疑ったが桜は石のようにじっとしている怖いくらいに静かで、

でも彼女の胸の中で不安が募っていく予感が何か大きな事が起きそうな、

情勢の悪化と混乱は避けられない辛うじて押さえではいるがいつまで先日平静を保ってられるか、

表面張力で張り詰めたコップのように限界はすぐそこまで来ていた、

事態は深刻な問題に謎の死亡事例が多数報告されるように、

説明すると突然死、

別に怪我をしている訳でも病に臥している訳でもない健康だった人が何の要因な無く死亡するというのだ、

外傷一つない綺麗なまま魂だけを引き抜かれた抜け殻の遺体、

記憶にも新しい西行妖のそれと酷似するが、

しかし当の桜には反応は見られない不気味な沈黙を続ける、

静かな沈黙の裏で進む秒針は時を刻む、

此処で質問だが、正と負やプラスとマイナスといった区別に在るものとはマイナスにプラスを足してゼロにした時それは無害だと言えるのか？

例えば磁石のN極にS極を近づけ磁力線は互いを引き付け合い干渉しようとするN極はN極のままS極に成り得る事はなく、

ゼロとはプラスではなく基に戻っただけ根幹は変わらない、

生と死と二極の相対する軋轢に擦り切れいった糸は終に千切れ傾いた振り子は動き出した、

空が落ちて来る！そんな言い知れぬ重圧、

初めて西行妖と対面した時を彷彿とさせ急ぎ桜へと走った、

かつてと同じ花弁を墨に染める忌まわしい桜が雄々しくも可憐に花を咲かせ佇んでいた、

しかし事態の原因を掴めても根本の原因を突き止めなければ無価値と一緒、

安定していたはずなのに何故？

必死になって桜を抑える方法を模索するが柳に風、暖簾に腕押しにと効果が見えない、

神玉は考えた一度は幽々子により沈静したのだから彼女には確実に

桜を抑える力が有る、

何らかの外力が邪魔をしていると踏んでいた、

幽々子の能力は不明な点が多いがずば抜けて強力な物という事ははつきりしている、

そんな彼女の力に拮抗しうる何かが見つくと近くに、

時が経つに連れ悪化する状況に地獄の管理人が顔を出した、

神玉「護衛も付けずに来るなんて何事？」

映姫「何が起きている神玉？これ以上現世に冥界の流出を招けば世界の楔が失くなるぞ！」

聞かされた事実時間に時間が余り残されていない事を知る、

とりあえず神玉は映姫に現状を説明した、

映姫「妖怪桜は西行の姫により安定していたのではなかったのか？」

神玉「理由が分かれば苦労していないさ」

このまま話しあっても進展は望めない、

映姫「流出は私の方で何とかしてみよう、済みませんが暫く八雲を借りますよ？」

神玉「頼む」

部屋を後にし帰り支に声を発した、

映姫「どうせ聞いていたのでしょうか？出て来なさい」

スキマから上半身だけ乗り出し紫が顔を出す、

紫「何か策が在るの？」

渋い顔をして、

映姫「実際の所、私に出来る事は無いのです！その場を納めても遅延にしか為りません、なので貴女に頼みたい事が在ります」

紫「なにをすればいいの？」

映姫「貴女には西行の姫を監視して欲しいのです！」

一気に沸点を飛び越えたのか辺りがざわつく、

紫「あの子を疑っているのか夜天魔！あの子を幽々子を侮辱する事は例え閻魔で在っても許さない」

迫力に後込みするも、

映姫「私とて本意では無い、あの娘がどんな人間かは理解していません」

その言葉に安心したか頭に昇った血が下がって、

映姫「西行の姫の周りで何か要因と成り得そうな物は有りませんか？些細な事でも良いの貴女にしか頼めない事ですから」

地獄へ帰る映姫を送る紫は思い当たる節が有った、映姫の前でも口に出さなかつた最も考えたくない最悪の答えを、

対策が無い以上状況は好転はしない、

治安が悪化が著しく、

力に寄せられた低級の妖怪程度なら一般兵でも対処出来るが実体を

持たぬ霊体となるとまた厄介で、

元僧で高い霊力を持つハルが大いに役立ち、

半人半霊で霊体に干渉出来る妖忌もそれに充てられた、

死霊を操れる幽々子は最も有効手段なのだが間違っても彼女に再び
刀を持たせる事はあつてはならない、

その努力を蔑ろに死霊は数を増していった、

神玉も特別編製の隊を組織するも付け焼き刃では成果を挙げるには
到らず、

当然の事ながら減少数より発生数が上回れば溢れ返るのは時間の問
題、

溢れた死霊の負の気に桜の状態進行を早めそれにより発生数が増加
していく最悪の悪循環が出来ていた、

そろそろ神玉の手腕をしても人々の不安や混乱を抑えるのも限界に
いつ暴動が起きてもいい程に、

ほんの数月前までは往来賑わう町から人の姿が物音が消えた、

家に閉じ籠り死に震える日々を、

これでは妖怪の脅威に脅えていた方がよほど健康的な生活をしてい
たように見えてくる、

霊体に対処出来る人間は数が限られ、

三途の川を渡す死神まで借り出される始末、

しかし死神には果たすべき職務が有り一度に連れて帰れる数にも限
りがある、

補足すると一言に死霊と言っても様々で当物語の西行寺 幽々子の

亡霊やプリズムリバーの騒霊と分類は多義にわたり、

辺りを漂う浮遊霊、地に縛られた地縛霊と細くなるが取り分け危険なのが亡霊、

非常に強い物欲や生に未練を持ち重度の霊症を引き起こし存在自体そのものが害悪、

れいしょう
霊症

霊的障害を指し人や物または土地や環境に対して影響を与え、

心霊スポット等で一定のカ所のみ異様に気温が低い場所などの事が軽度だが霊症の例である、

明かす所、幽々子は亡霊では在るが何か特別な未練を持たぬために彼女の存在が害を成す事は無い、

霊とは人の層念の結晶、肉体の壁を無くした感情の塊、

環境の外的要因に左右されやすく個々では綺麗な色の絵の具も混ぜて続けていくと黒になるように無害な霊も気に当てられ悪霊に変化

していく、

物理的な死は何を意味するのか？肉体から魂が抜ける事が死であるなら再び生きた肉体に入る事で生を獲られるのではないか？

その考え方を当て嵌めるなら生きながらに死の領域に足を踏み入れる彼女は願ってもみない器となるだろう、

冥界の流出に伴う死霊の対処にとうとう四季 映姫自らが乗り出した、

仕事に忙殺される閻魔も霊が冥界に還らないのでは無用の長物、

映姫「消えなさい！」

小町「此処はあんたらの居場所じゃないよ」

豪快に大鎌で霊を切り散らす、

しかしどうにも怪訝な顔をする小町、

小町「不気味だね？」

(何だい？さつきからこいつらは)

……「欲しい」

……「欲しい」

死神として霊の思念が伝わる、

映姫「小町どうしたのですか？」

小町「さつきからこいつらの声が、欲しい欲しいってそればかりが聞こえるんです」

映姫「欲しい？」

悪霊は皆何かしら強い執着を持つがばらばらが普通、

それが共通した望みを口にするのは不自然、

……「見付けた・かひだ体躯！」

小町「からだ？」

蒼白な顔をする彼女はその一言で理解した、

映姫「小町！その者達はいい捨て置いて構いません、私と一緒に来なさい」

小町「ええ！捨て置けなんて一体？」

随分と焦った様子で、

映姫「確かに躯体と言ったのですか？」

小町「はい、確かです」

少し驚いていた、いつも凜とし礼と秩序で塗り固めたような彼女が舌打ちし道端の石を蹴り飛ばし荒れる姿なんて見たこと無かった、

映姫「この者達の狙いは西行の姫だ！いや違うな？正確には彼女の肉体だ」

彼女は少し前の事を考えていた、

自身が初めて剣をこの手に握った日の事を、

まだ幼い自分の人生観を変えたあの日を今でもはつきり思い出せる、人の身を刃物で切り裂いた刀を通して伝わる感触、

あの頃の自分は刀を握るのが愉しかった生き残る度に得る充実感が

心地良かった、でも直ぐにそれがまやかしだと気が付いた、

私を導いてくれた皆が居たから頑張れた、

だけど、その皆はもう居ない、

今の自分に価値は有るんだろうか？もう一度私に剣を取ることが？

感傷に浸るなか感じる幾つもの念、

風穴が開くんじゃないか？と思えるぐらい強力な、そしてそれが人や妖怪の物ではない己が一番よく知る人外の念、

どんどんと強くなる念が自身に向けられている事を悟る、

縋りしがみつきたい純粹な生への執着が怖い、

身を乗っ取り成り代わらんと欲望を通り越した憎しみの感情が突き

刺さる、

急いで逃げなければ危ないのに体が動かない必死に刀を掴むも手がガタガタと震え、

この声を聞くのがこんなにも苦しくて切なくて恐ろしい物だったなんてまったく違って聞こえる、

覚悟が奥底から支え続けてきた戦いへの覚悟が微塵も湧いて来ない、

一方、西行寺邸に走る二人、

映姫「私はいいから先に行ってください、貴女有能力なら間に合う筈です」

小町「分かりました、お気お付けて？」

死神、小野塚 小町有能力、距離を操る能力、

距離を縮め圧縮された空間が元に戻る加速を利用した亜光速空間移動、

Z E R O T I M E D R I V E S H I F T

通称、「 0 S H I F T 」
ゼロシフト

コナミ様ゴメンナサイ

閃光のように加速する小町を送り西行寺へ群集わんと集まる死霊共を前に立たちはだかり、

映姫「これで周りを気にしないですむ、小町を巻き込んでしまい兼ねませんし丁度鬱憤も溜まっていた所です、閻魔を前に我が物顔で死霊がうるつくとはね覚悟はいいか？」

話は戻り、

震えをなんとか静め身を守るためにその場から逃げだす、

もつれる足を引きずり外へと飛び出した、

その判断は誤りだったか大量の霊がうじゃうじゃとし、

ここまで来ると無理矢理でも覚悟を決めるしかないと刀を構えたが
同時に大きな影が飛び込んで来て呆気に取られ、

小町「無事だったかい、良かった」

幽々子「貴女はあの時の？」

ニヤリとする彼女は背後に迫る霊を大鎌で一蹴し、

小町「積もる話でもあるけど今は逃げるよ」

（カチ「徒歩」で行くしかないか？）

人の身の幽々子に自身の瞬間跳躍は負担が大きすぎる、

小町「判決も無しに悪いけどあなたは地獄行き決定だよ！これ以上あたいの仕事を増やさないくれるかい？」

霊の瑣事さじな変化に気づき妖忌とハルも駆け付け、

妖忌「姫様ご無事で？そちらの方は？」

小町「あたいと会うのは初めてだね、あたい死神の小町さ閻魔様の命で馳せ参じのさ」

ハル「死神に閻魔って？味方でいいのか？」

妙に怪しく笑い、

小町「やっぱりイメージ悪いねえ？取って食いやしないから安心しなよ、まああんたらが死んでこっちに來たら私がたっぷりと面倒見てあげる」

踏ん反り返り威張るように胸を突き出す小町に顔を赤らめてぷいと目を背ける二人、

胸元の大きく開いた彼女の服装に男性で在る以上はそこに目が行ってしまふのはしょうがないが、

妖忌はともかくハルがその態度を取るのが許せなくて幽々子がむっつとした顔を見せた、

小町「若いねえ」

冷やかされ顔を真っ赤にしパツと離れて、

小町「いや、人間は老い先短いんだ正直に生きるのが一番だよ」

幽々子の表情が明るくなったのを見計らい、

妖忌「話しが逸れましたが姫様の安全が第一です、この場を速く離れましょう」

小町「そうだね」

一つ引つ掛かるものが既に辺り一帯が平時と比較して高い霊症が二人と合流した際に濃度が上昇したからだ、

まあ気には留める必要もないと心の隅に置いといたが、

緊張の糸が解けたのかへたり込んだ幽々子にハルが差し出しその手を掴んだ時をきっかけに凍り付き身の毛もよだつ程の霊症が地の奥底に重力で引きずり込まれるような感覚が、彼に妖忌には覚えがあり小町にはそれが容易に理解出来た、

先程までにこやかにしていた小町が真剣な顔をし鎌を掲げ歩いて来る、おふざけや冗談でない確実な殺意を持って、

物言わぬ迫力にあの妖忌が声一つ上げられないでいる、

沈む二人を見下ろす格好で立つ彼女は躊躇う事なく鎌を振り抜いた、

小町「やはり貴女が付いていましたか？」

スキマの向こうに匿われ事なきを得たがそんな芸当が出来るのは一人しか居ない、

紫「有無も言わず首を落とそうだなんて随分じゃなくて？」

小町「四季様から何を託けられたかは知りませんが私に命じられたのは二つ護衛と直接の面識による調査」

紫「何故行き着いた結果があのか行動なのか教えて欲しい」

まずは自身、死神に備わる能力を説明した、

最大の特徴は死神の目にある、

小町「死神は特別な目を持つのか四季様みたいに重ねた罪を見抜くなんて出来ないけど死者の魂の気質を見抜けるんだよ、中でも私の目は特別製なんだ条件さえ揃えば生きた人間にすら及ぶ」

紫「その目で貴女は何を見たの？」

（映姫がこの死神を直轄で付けるのはこのためか）

この世はバランスで成り立っている人だけじゃないが偏りは有るに
しろプラスとマイナスの両方の気を持つのが自然、

しかし幽々子は負をハルは生のみをと世の理を逸脱した両者が近づ
けば反発は必然、

軋轢に追いやられ行き場を無くした空間は逃げ道を探し西行妖へと、
死門の扉と物理的に冥界に繋がりをもち状態の不安定な今なら境界
を通過するのも難しくなく、

水の満ちた容器に新たに水を足せば逆流するように冥界は現世に流
出していた、

このまま現世と冥界が裏返りを続ければ境界を失い二つの世界の楔
は消え生と死を隔てる壁が崩壊し総てが無に還る、

おもむろに妖忌に問い掛けた、

小町「その半霊の剣士さんなら分かるでしょう？よく身に覚えが有るはずだよ中味だけを抜かれるようなあの感覚を臨死を見たあんたなら」

それは彼が死の領域へ足を踏み入れ半人半霊となった日の事、

妖忌「何が言いたい？」

小さく首を振り、

小町「それだけなら良かったんだよ？」

え？！と空気が、

小町「姫さんとあなたの魂は深いところで強く結び付いちゃった、

それがどういう事が分かるだろ？」

魂の反発は対流を生み淀みは歪みに変わり小さな綻びはゆっくりゆ
っくりと蝕んでいった、

苦しく陰りのある目で、

小町「あたいも女だからね、これを言うのは心苦しいけどあんたら
二人は出会うべきではなかったんだ！」

突き付けられた宣告、

小町「仕事だからね、怨みはないけどあんたを殺して連れていく」

ハルを隠すよう紫と妖忌が前に立つ、

小町「四季様に逆らう気かい？」

紫「私は映姫の傀儡に為った覚えはない！私が従うのは自身の心だけに」

一人は親愛の友の為に一人は能えられし使命の為に互いにぶつかるが実力は明白、

八雲が大妖に死神一人では荷が重い善戦も空しく駄目押しにと放った光弾は見えぬ力に掻き消された、

映姫「そこまでです！」

紫「成る程？貴女その死神を利用したな？閻魔しか持ち得ぬ鏡を持ち出してまでね」

浄瑠璃じやうるりの鏡

総ての罪や嘘と捌き真実を映す神具、

小野塚 小町の能力による予測は精度が高く信憑性を持つが憶測の域を出ずそれで物事を決定するには少々早計が過ぎる、

彼女は己が見た情報を推理分析しそれを口にする、もしくはこの場に居る者から口にするように求められる筈、

本人に意思は無いにしても真実に対し間違った事を言えば嘘に罪に変わり鏡へは是非を裁く、

紫「結果は？」

映姫「小町の推測に落ち度は無いようです、残念ですが世界を守るために貴方を殺す！」

妖忌「姫様！お逃げ下さい」

幽々子「妖忌はどうするのよ？」

妖忌「相手は閻魔、私如きで敵わぬ事は承知しております時間くらは稼いでみせます」

紫「分かったら早く行きなさい！」

凍り付くような冷たい目で、

映姫「よもや私に勝つ気ですか？・・・いいでしょう！」

閻魔、地獄の最高裁判官の二つ名を疑ってた訳じゃない仮にも世界の一つを治める覇者の一人、

逃げると言われたのに石みたいに足は動こうとしなかった逃げても無駄だと思ったからかどうかは知らない、

かつて放浪の傭兵時に何度となく彼女の名を風に聴いた、

数知れない死地を潜くってきた屈強な男でさえその名を次元の魔女の名を聴けば裸足で逃げ出した大妖 八雲 紫が手も足も出さず地面にはいつくばる姿を見るなんて、

闘いが始まってから時間にして5分も有っただろうか？

映姫「決着ですね？」

傷付いた手を伸ばし足を掴む、

紫「待ちなさい！」

映姫「貴女がたった一人の為にそこまでする理由は何です？」

呆れたと言いたげに、

紫「貴女には分からぬよ、初めて出来た友を愛すべき友を守りたい
と思つて何が悪い！」

その時に一瞬だけ映姫の目が悔しみに濁つて見えた、

映姫「この場は貴女に免じて引きます、いつ……いや三ヶ月の猶

予を与えましようとするかは自由です残された時間をどうか意味の
有る物に、しかし刻限の日に次は無いと」

くるりと背を向ける映姫に、

妖忌「助かったのか？」

映姫「今だけはその命を預けましよう」

静かに淡々と言の葉を並べ場を後にした、

地獄への回廊を渡る途中、

小町「四季様？」

映姫「貴女には分からぬか？紫め言ってくれ！私は時折閻魔である
自分が役職から逃れられぬ自分が煩わしい」

帰還し沈黙だけが悪戯に流れる、

ハル「俺の命は後三ヶ月か？実感無いな」

何か策はと頭を巡らせてもろくに出て来ない、

幽々子「そうだ！紫なら境界の力で何とか出来るでしょ？」

申し訳といった面持ちで、

紫「駄目なの、何が起ころかも見当が付かない命への干渉はこの世界の最大の禁忌よ新しい命を創るに等しい行為をおいそれとは出来ないわ」

幽々子「そんな？どうすればいいのよ！」

悲観的になっている彼女とは対照的に彼は随分と落ち着いていた、

ハル「もういいんだ」

絶望し諦めから出た言葉とは違い強い芯の籠った口調、

幽々子「なんでよ？銀だつて陽子も貴方も自分が死ぬかも知れない
というのに他人の為に笑っていられるのよ！」

ハル「なんでつて自分の生き方に悔いからさ？誰かに与えら
れた最後じゃない自分で選んだ結果だから胸を張って逝けるんだ」

また軽い沈黙の後、

幽々子を両手で抱き寄せると静かに口を開いた、

ハル「残った三ヶ月間を君と一緒に居たい、俺の願いを聞いてくれ
ないか？」

願う事ならば本当は同じ時を自らの歴史を閉じる一瞬まで傍に居た

い、

それが叶わぬなら一分一秒でも許される限り一緒に居たいと思うのは当然だろう、

それが彼女の彼に対する愛慕を鮮烈に募らせていった、

三ヶ月、僅か90日という短い時間を精一杯ただ彼女の為に生きようと、

その思いが逆に彼女を蝕み苦しめた、

どうせなら二人で一緒に死にたい、

しかしそれは周りが許さぬだろう？桜を封じる人柱として監視の下で人形のような生き方を強要されるに違いない、

男に差し出された究極の二択、

世界を守るには自身か彼女が死ぬしかない、

女を守るとあの日誓いを立てた男にもう一つの選択は許されなかった、

閻魔、四季 映姫が提示した三ヶ月という時間は恐らく阻止限界点のギリギリだろう、

逆に考えれば最大限譲歩してくれたと感謝するべきか？

季節は如月（二月）を迎え暦では春を指すも雪がちらつき白に染まる空、

その夜は閻魔に与えられたタイムリミット前日、妖怪桜の下に彼女を連れ出し、

ハル「大事な話しが有る、俺の最後の願いを一つだけ聞いてくれな
いか？」

とても真剣な眼差しで、

幽々子「何をすれば？」

ハル「その前に絶対に守るって約束してくれ？」

幽々子「約束する」

彼は信じられない願いを口にした、

ハル「俺を殺してくれ？」

自分の耳を疑った、

何かの間違いだと、

ハル「明日になればどちらかが死ななければならぬ、君と世界を守るにはこれしかない自分の最後は自分で決める」

幽々子「無理よ！私には出来ない」

ハル「約束してくれたじゃないか？」

幽々子「そんなの卑怯よ！」

ハル「それでもいい！閻魔に殺されるくらいなら君の手で死にたい」

幽々子「嫌だ！貴方を殺すくらいなら私が死ぬ、もう一人になるのは嫌なの」

肩を抱き寄せそつと胸のうちを明かした、

ハル「あの日、禁忌を犯し殺したのは俺の兄だったんだ唯一を肉親をこの手に掛けた、大事な物も造らなければ失う恐怖もないと逃げてきた、ひとだけど何を捨てても守りたい女性に出会えた！それが君だ」

嫌だ！嫌だ！と涙に頬を濡らす彼女に、

ハル「ずっと考えてたんだ俺が居て君が居ない世界と君が居て俺が居ない世界なら俺は君が居ない世界の方が耐えられない！」

映姫に幽々子の監視を命じられ事が起きたあの日から三ヶ月、

監視を続けるよう言われはしたが彼女はそれをしたくなかった、

紫とて大妖怪の名を冠するも神が眷属に挑むには無謀な選択だと理解していたが譲れない物が映姫の前で言った言葉に嘘偽りはなく彼女の本心、

しかし思いだけでは何も守れない、

自分が許せなかった友を守れなかった自分が、

だから何もしないで引き籠っていた、

でもハルが幽々子を連れ出した夜に虫の知らせか胸騒ぎが治まらず、

悪い予感的中し幽々子の所に行けば二人が居ない、

自身のスキマの能力も忘れ足で彼女を探した、

焦りが心を埋め正常な思考が回らない、動揺に足がもつれ躓き地面に派手に転ぶ、

泥まみれに汚れ視界が滲む、

彼女の前では何よりも強き者でなくてはならないのに今の自分はど
うだ？笑える程に惨めで情けなく弱い、

初めて出会えた己と同じ領域に立つ長い時間の中でやっと巡り合え
た友なのに、

彼女の為に今出来る事は何か？

神玉「貴女も辛いのは重々理解しています、ですが貴女は今や無くてはならぬ人です耐えて欲しい」

紫「神玉に釘を刺されはしたが構うものか！」

彼の魂に干渉し二人の魂の繋がりを断ち切る、

禁忌として世に残る物には二つ法治下での罪の禁と過去の積み重ねからの禁とが有る、

後者は経験からなる知識、

それを行った者が無事で済まなかったから暗黙の了解に禁とされてきた、

結果を知らぬ訳ではない、

何もしない位より増しだ、

再び体に力が湧いて来る踏み締める足が大地を掴む、

間に合え！心にそう念じ、

ハル「何をしている！！！」

幽々子「嫌よ！なんで私なの？なんで貴方でなければならぬの？」

ハル「さあー早く！」

刀を投げ捨て塞ぎ混み首を振る彼女に、

ハル「まだ君に言えなかった事があるんだ、面と向かっては恥ずか

しくて」

溜め込んだ思いを決意に、

ハル「こんな時じゃないと言えない自分が情けないな？いや、だから言おう俺は君を西行寺 幽々子を心から愛している」

態々（わざわざ）口にしなくても分かっている自分も同じ気持ちなのだから、

投げ捨てた刀を拾い上げ鞘から引き抜く、

ハル「それでいい、君が想ってくれる限り俺は君の中で生き続ける」

同時刻、紫も必死に二人を探した心当たりを風潰しに、

しかし何故だろうか？普段なら一番に桜を探したはずだがこの時は選択肢に入らなかった、

その事が頭に浮かんだのは思い付く場所総てを探し終えた後、

よく考えれば彼等が選びそうな場所など西行妖以外に無かったのに、

自分かハルが死なねば皆が死んでしまう理屈はわかるがそれを頭が否定する投げ出すのは簡単だ、そしたら今まで死んでいった者達や銀や陽子の死まで無駄にしてしまう、

ハル「君に出会えた事に後悔は無い、この結果だとしても思いは変わらないだからもう一度言おう君を愛している、はは！何度も言う
と安っぽくなるな？」

夜に抜け出してから何時間こうしていたのか東雲しのぶに薄らいだ空、

どンドンと夜が逃げていく太陽が昇れば閻魔が四季 映姫が来る抗えぬ絶対者が、

もうこれしか無いのなら、

ハル「俺の君への最後の願いを生きて生き抜いてくれ・・・君は、生きる」

刀を袈裟口に掛けて振り抜いた、

紫がやっとの思いで辿り着き見たものは幽々子が自らの手で愛する男性を斬り裂いた瞬間、

彼岸花が花弁を散らせるかの如く紅い飛沫、

小さく一言「ありがとう」「さようなら」と言って倒れ、

納得して誰の意志でなく自分で決めた事なのに飛び散る血に伝わる体温が冷たく為っていく彼を胸に抱き大粒の涙を流し天を仰ぎ、

紫は言葉一つあげる事出来ず自責と後悔に膝を落とした、

それは居合わせねば知れぬ歴史の暗部、

西行の歌集を見つけた重扉の向こう書斎の机の上、

独りでページが開かれあの白紙に歌が刻まれる、

今まさにこの情景を目にしたような歌が、

願わくば花の下に春死なん　その如月の望月の頃

時を待たずして夜は明け太陽が顔を除かせ光が射した、

彼の思いに桜が応えたのか雲の無い真っさらな青空が、

異変の終わりに市井の人々は歓喜の声を挙げ、

桜の下、泣き続ける幽々子と冷たくなった男の亡骸に映姫は総てを
知りえた、

男の覚悟とそれに応えし彼女の男への愛、

映姫からの知らせに血相を変えた神玉が駆け付け惨状に崩れ落ち
いた一言、

神玉「済まない」

その小さい声に気づいたのが自身の前で座り込んでい王に、

幽々子「何故です？貴女なら、王である貴女なら？」

神玉「赦せゆるとは言わない」

幽々子「謝罪なんか要らない、この人が死ぬ必要がどこにある？」

いつもと違う覇気のない弱々しい声で怖おず怖おずと口を開く、

神玉「本意ではなかった、彼と貴女の魂の気質の違いには気づいて

いたが数少ない桜を制する事の出来る人間が二人居ればより確実に抑えれないかと私は」

気でも狂ったように高笑いを上げると、

幽々子「結局はそうか！貴女にしてみれば私も彼も使い駒だった訳だ？」

神玉「言い訳はしない」

幽々子「そんな台詞は大事な物を失った事の無い奴の戯れ事よ！」

ただただ恣意に頭を下げる彼女に、

幽々子「本当は分かっているんだ貴女は何も悪くないこんなのを誰が予想出来た？間違ってるのは私だって知っている、でも自分を抑える事が出来ないんだ！」

神玉「貴女の怒りを悲しみを受け止める義務が私には有る」

愛した男の返り血に濡れ死に触れし女を中心に草が枯れ地が干から
びて行く、

核心的能力の最終変化への蓋をこじ開けた、

死すら隷属させる死を操りし者へ、

幽々子「し~~~~ん~~~~ぎよ~~~~く~~~~」

仲間と供に命懸けで打ち倒したゾットですら恐らくは片手間に屠れ
るであろう者だ、

願わくばこの場で殺される事に期待を寄せ、

次に目が覚めたのは医務室の中だった、

お腹の辺りに重さを感じる下に目を向けると紫がもたれ掛かっている、

目に大きな隈が出来ている自分が目覚めるまでずっと傍に居たのか？

映姫との戦いで負った傷も癒えない体で無茶をする、

意識の回復に気付いたのか心配そうに顔を覗き込んでいる、

聞けば丸っと一日以上こうしていたようだ、

最終にあの人の名前を叫んだ後の記憶がはっきりしない、

何を口走ったかも定かではないが事の顛末だけは覚えていた、

激情に任せた自身の刃を言葉通りに受けきって、

彼女の構えや疎か動いたのかさえも見えなかった、一撃！胸を打ち

抜かれ目の前が真っ暗に成っていくのを覚えていた、

差というのも此処まではつきりすると逆に清々しいくらいだ、

自身の容態はさておき事後について尋ねた、

紫「貴女が倒れた後に直ぐに医療班が彼と一緒に回収していったわ」

幽々子「それであの人は？」

紫「貴女との魂の結び付きが断ち切れたのを確認して映姫が連れていったわ」

その言葉を聞くと同時に小さく身を震わせ涙を流した、

死んでしまったんだと届かないんだと理解するほど慕情が募る、

紫「ごめんなさい私が臆病なばかりに、本当にごめんなさい」

同じように涙を流して身を震わせる、

幽々子「どうして貴女が謝るのよ？」

ほどなくしてハルの葬儀が執り行われた、

世界の為に命を差し出した英雄の葬だ壮大にしてやりたいが彼はきつと望まぬだろう、

儼かながら質素に、

生前彼が言っていた言葉を汲み遺体は桜の下へと埋葬することに、

これにより西行法師から起因した異変は幕を閉じたかに思われた、

一件の当事者で遣されたもつ一人、西行寺 幽々子に現れた変化、

傭兵時からの発現に始まり出会いや戦いの中で変化していった能力、

時折り力の片鱗に周囲の霊を視覚情報に映すなども度々あったがハルは良い意味でも悪い意味でも彼女の力を抑えていた、

今の彼女は望む望まぬに係わらず強制的に周囲の霊を他人の目に映してしまつそれこそまさに死を従えるように、

霊は平常時でも数にすれば相当数漂っているが特別何もなければ危惧する必要はない、

大概のものは経時と共に輪廻に回歸していく、

以前の怪異は冥界に帰還した魂すらも現世に流出していたのがあの現状を招いていた、

人々は彼女を近づく事を嫌い死姫しにひめと呼び怖れ忌み嫌った、

ただ自分が人々からどう思われようが良かった心は満たされていた彼の言葉があったから、

「君が想ってくれる限り俺は君の中で生き続ける」

私が彼を思う限り共に在れる、それだけで十分だった、

しかし先の異変と幽々子の霊を纏う姿はどうも重なってしまふ事の原因は彼女の所為ではないかと疑う者も少なくない、

それを見かね不憫と想って神玉は市井に対しハルが命を以て世界を救ったのだと各地に広めた、

神玉はこれで市井の彼女への見方も変わるだろうと幽々子はきつと自分と同じように彼の死を悼み悲しんでくれるに違いないと思っていた、

事実を知った人々の反応は予想とは掛け離れたものに、

皆口々にハルを非難し始めたのだ、もし正常な思考の本でならこんなことは無かつたんだらう？

大事な人を失ったのは幽々子だけではない町の人々も家族を友人を仲間を恋人をこの一件で亡くしている、

憤りや不満をぶつけようにも妖怪桜と相手が相手だけに怒りの矛先を何処に向けていいのかも分からず燻っていたフラストレーションは物事を曲解させ「何故もつと早く解決しなかったのか！」という方向にたどり着いた、

やがてその矛先は幽々子にも向けられ初める、

人の悪意は伝播する、

付和雷同ふわらうどうこの諺ことわざが示す通り人の心は容易に周囲に同意し流される、

余り例えしてはよろしくないが、道端に野良犬がいたとしよう傷つ

き汚れ腫れ物のように見ている時、大概の人は「かわいそう」と言った言葉を発するだろう、しかもその対象に感情の有無は関係なく知らぬ内に同じような蔑んだ目で見ている、

初めは些細なほんの些細な嫌悪も少しずつ肥大して憎悪の念に変わっていく、

心ない刺々しい罵詈雑言が投げつけられる、

この凄まじいまでの広がりようは彼女の能力にもよるところが、

それというのも存在が弱い物、道端に生える草木や花が近づくだけで萎れ枯れていく光景を目にしてしまった者は先天的な恐怖を覚えるだろう？

事態を鎮静化しようと神玉も方々に手を回しても焼け石に水で広まる一方だった、

「さっさと奴が死ねば良かったんだ！」

「あの女が役立たずの所為でこうなったんだ」

聞こえて来るのはこんな罵声ばかり、

実際、幽々子は桜を抑える為にやってきたのだその理由を知る者は当然のように彼女を責め立てた、

腫れ物を見るような目から化け物を見るような冷たい目に、

やがては幽々子が係わった物総てを悪しき物するようになっていった、

外を歩けば石を投げられる始末、一つが頭に当たり軽く皮膚を切る、でもあまり痛みを感じなかった、

私は気が付くと西行妖の下に立っていた、頭部の傷口から血が頬を伝いばたばたと地面を濡らす、

幽々子「私は何なんだ？彼等は何の為に死んだんだ？命を懸けて人を守って命を懸けて世界を守ってその結果がこれか？」

問い掛けられても沈黙を通す桜、

幽々子「ねえ教えて？西行妖、私達は何と戦って何を守ったの？これが世界の返答なの？こんな事の為に彼等は死んだんじゃない！これが世界ならこんな世界は私には要らない！！」

深い深い悲しみはやがて憎しみへ、憎しみは絶望へ変わり絶望は人を殺意へと駆り立てる！

総てを無に還そう、

そうすれば私の悲しみも失くなって消えてくれる、

だからみんな殺してやる！

ついに守るべき者達に刃を向けた、

謀反か反旗とも取れる彼女の逆襲は町を騒然とさせ、時を同じく今の世に不満を抱え燻っていた者達、

死の商人や傭兵等こと戦を生業にしてきた者達だ、神玉の政治は完璧すぎ非の打ち所がない故に戦争を戦い食いぶちにしてきた輩にはこの上なく邪魔な存在である、

実際に戦争というのは比べ物に為らない程の利益を生む、

現在は国連の統治下で賠償金制度は禁止されたが生産・物流・人的資材（衣食）と総てを賄^{まかな}ってしまい国を丸ごと潤させる程で過去では中世のヨーロッパ諸国に始まりかつての日本並びに二十世紀後半のアメリカと国を挙げて財を成そうとしたくらいだ、

それを手放す事が出来ようものだろうか？しかし今のままでは永遠に訪れる事はないだろう、

どうにかして彼女を引きずり落とす機会を伺っていた彼等に訪れた好機、

また戦乱の世に戻る事が何を意味するかを理解していない！

いつまでも神玉が人間の味方をするとは限らない、それこそ見限りを付けられてしまったら終わりだというのに？

人の欲望には際限がない、

欲に支配された人間はもう自分以外を見れない周り等お構いなしだ、

町は落ち着いているかに見えるが内心浮足だつて揺れているきつかけさえ有れば簡単に先導出来てしまう、

格好の獲物だった、桜異変の対応の遅さに神玉に反感を持っている者も少なくないそんな矢先に人々に剣を向けた幽々子が神玉の命令で動いているなんて噂を流せばあつという間に暴動に発展する、

だが暴動が起きようが幽々子には関係ない総て殺すただそれだけ、今や彼女の念端に触れただけでたやすく死に誘う、

体現された血の力、死の絶対領域、

動いた流れは止められない平穩をやっと手に入れたのに綺麗に別れた神玉派と反神玉派とで人間同士の醜い争いに、

人は分かりあえると信じていた自分がこうもあっさりと人に絶望するとは、

やっぱりというか予測道理とというか行く手を阻む人影、

妖忌「姫様！お止めください」

幽々子「もう無理なのよ？そこをどいて！」

妖忌「いいえどきません！これでは姫様達は何の為に戦ってきたのですか？彼等の死を無意味な物にする気ですか？」

憎しみに満ち唇から血が滲み出んばかりに齒を噛み締め、

幽々子「先に無にしたのは奴らだ！彼の皆の命の意味も分かつとしないなんて、だったら彼等の命も無意味にしてやるまでよ」

刀を投げ捨てると、

妖忌「では私を先に連れて行って下さい？そんな姫様を見るのは辛いです」

幽々子「そうよね？全部の私の所為、貴方だつて曖昧な人為らざる者にしてしまった、本当は私が死ねば良かったのよ！旅立ちのあの日に私は死ぬべきだったのそしたらこんな思いも味わずに済んだのにね？」

妖忌「それは違います！私はこの体に成ったことを悔やんではおりません、西行寺に姫様にお使いできた出来た事が私の誇りです」

優しい笑った顔で、

幽々子「西行寺は今や私一人きり、家を継ぐ気も無い貴方がいつまでも西行寺に縛られる必要はないの、だから当主が最後の命令よ庭番が魂魄　妖忌！貴方は自由に生きなさい」

妖忌「姫様」

そつと肩を抱き寄せ耳元で囁く、

幽々子「馬鹿ねえ？もう姫じゃないって言ってるのに、ごめんなさい私はもう戻れないの」

刀の柄で鳩尾を突かれ意識が遠退いていく、

妖忌「ひ・めさ・・・ま」

意識のない妖忌を地面に寝かせ、

幽々子「今までありがとう、さようなら」

人間対妖怪、その始りの構図が今に尾を引きずり、

絶対の戦力差を越える為の戦術や戦略が同族を討つために扱われる悪夢、

単一での戦力に差を持たぬ人間同士の争いだ余波は至る所に飛び火し戦禍は拡がって収まる気配すらない、

神玉は全く手を出せずに居た自分が動けば一両日中にも事態を収束出来るだろうが余りにも危険が過ぎる、手加減しても命の保証が出来ない強すぎる力が災いし動けない自分が情けない、

人間は嫌な所で機転が利く、自分達に神玉が手を出せないでいることに気づき始め神玉が出ないならと息巻いたか攻勢を強めていった、

何も出来ない彼女の下に四季 映姫が現れ、

映姫「何をしている神玉？これ以上の混乱を招けば彼女がライブラ（天秤）が動く！いやもう動いているかも知れない？」

世界を大きな括りで一つの天秤とした時、分銅と成るのはそこに住まう者達だとしよう、

均衡を保とうとする世界を無視し裁量一つで独善的に一方に傾けてしまふ、故に天秤！世界の統べを握りし者、

映姫「西行の姫の所に行つてあげて！あの子なりの決着を着けてあげなさい」

神玉「貴女は？」

フンツと笑つて、

映姫「野暮用よ、私個人の閻魔じゃない四季 映姫のね？」

足速に去つた神玉を見送り上を見上げ一人待つ映姫に、

東の空から雲を断ち割るプレッシャーが万物を押し潰さんと地を覆

い尽くしていく、

人という生物が進化の末に地に生まれて以来どれだけの時間が経ったのだろうか？

千年ないしは万年、億と成ると飛躍し過ぎかもしれないが少なくとも数千年を生きた妖怪が誕生する以前から人間の種は確立していた、

進化論を提唱したダーウィンが言ったように変化出来る者が生き残る、

ヒフオーキリストアフターキリスト
B・C・A・Cと併せれば約六千年の歴史を持つ人間だが単一の種で生きて来た訳ではない黒人、白人、黄色人種と簡単に分けただけでも三つにも別れ土地や環境に適応した結果の一つ、

ホモサピエンス（人間の学名）が誕生してから16万年もの時間で
文明文化を持ったのは最初の文明である古代中国の殷紀元前17世紀頃と約4〜5000前後といわれている、

それに匹敵もしくは上回る時間のはずなのにその歴史は薄っぺら過ぎるのだ、

生活や技術レベルはどうみても時間にそぐわない、

異常なまでに歴史が無い、

これが何を意味するのか？

そんな小さな疑問に悩む事を愚かに思えてしまう威光と覇気を纏い、

????「今回も駄目だったのか……おや誰かと思えば、職務はどうしました？」

映姫「職務か？またこれは随分な言い草ですね？」

????「いや、職務という点では強^{あなが}ち間違っ^あてはないか？人間と

は何故こうも欲望に弱いのでしょうか。私はただ平穏な世界を望んでいるのに。」

映姫「平穏？よくもまあいけしゃあしゃあと、幾度となく世界を破壊してきた張本人が！」

「???」「どうしましたやけに饒舌じゃないか？しかし仕方ない事なのですこのまま人間を放置すればどうなるかは貴女も見えてきたでしょう！」

映姫「たった一度の失敗しただけで自分の理想と少しでもずれたら統べを破壊して！貴女になんの権利が有る神にでも成ったつもりか！」

表面に苛立ちが見え隠れし、

「???」「さっきから何が言いたい？」

映姫「私は貴女の力に恐れ仕方がない運命だと自分に言い聞かせ自分を騙してきた、だけでもう逃げない！そんなものは紛い物のただの傲慢だ！例え貴女が正しくても私が裁く貴様は世界の害悪だ娵娥^{じょうが}」

嫦娥「言いたい事はそれだけか？私は少々貴女を過大評価していたよ。うだ愚かにも一時の感情に流され大局を見失うとは情にでもほだされたか！」

映姫「その考えが傲慢だと言うのだ！私達は手を引く可きなんだ。完璧なんてない、何故それを分かつとしない貴女が自分を正義と云うなら構わない。悪で結構だ、私は私の正義でもって貴女を断罪する！」

（有り難う紫、西行の姫よ、私は初めて自分を超えられた、友（神玉）の為に私も総てを賭けよう。結果がどうで在ろうと自分に嘘をつくのはもうたくさんなんだ！）

嫦娥「飼い犬に手を噛まれた気分よ、この私を断罪？出来る物ならやってみるがいい！」

互いの信念に嫦娥と映姫が激突する、

映姫

（急いで神玉、あの子の下に速く）

嫦娥 じょうが

東方儂月抄に名前のみ登場したキャラクターで不死の薬を飲み月の都に幽閉されている、

勝手な解釈ですが元ネタに成っているで在ろう物を紹介します、

嫦娥（蛾）、月に奔る

嫦娥（じょうが、こつが）は、中国神話に登場する人物。后？の妻。
？娥とも表記されます、

『淮南子』覽冥訓によれば、もとは仙女だったが地上に下りた際に不死でなくなつたため、夫の後？が西王母からもらい受けた不死の薬を盗んで飲み、月に逃げ、蝦蟇になつたと伝えられ、

別の話では、后？が離れ離れになつた嫦娥をより近くで見るために月に向かって供え物をしたのが、月見の由来だとも伝えている、

道教では、嫦娥を月神とみなし、「太陰星君」さらに「月宮黃華素曜元精聖後太陰元君」「月宮太陰皇君孝道明王」と呼び、中秋節に祀っている、

「嫦」は「？」の異体字で同じ意味であり前漢の文帝の名が「恒」であるため、字形のよく似た「？」を避諱して「嫦」を用いるようになった。日本では百姓読みにより隣の「常」から「じょう」と読まれるようになったが、本来の読み通りに「こう」と読む場合もある、

ただっ広い平地に佇む一人、

神玉「やっぱり此処で待っていたのね？」

幽々子「此処で私の全てが始まった、だけでもう一度この場所に来るとは私自身思ってもみなかったわ？」

西行寺邸跡地、かつてはこの地が幼き日の彼女の全てで忌まわれし場所であり西行の血に纏わる原点、

神玉「私は無力だ、貴女に何もしてあげることが出来なかった今この時にさえも」

幽々子「貴女は悪くないわ、お互い少し運が悪かっただけ」

数年に渡る放浪の旅に西行妖と西行寺の家が者が知らなかっただけで実は目と鼻の先に在ったことに驚いた、

どれだけ西行寺の人間が外に目を向けず内の世界に籠り完結させていたかが窺うかがい知れる、よくよく名家に有りがち傾向だ、

神玉「ハハ！優しいな？これが最後に私に出来ること全力で貴女を倒す！理が守護の門と呼ばれた私の全身全霊を以って相手をしよう！」

恐らく幽々子の命はそう長くは持たない、

今では常識だが人間は肉体の能力の四割程度で活動している運動生理学からすると人は個人差も在るが自重の三倍程度なら余裕で持ち上げる力が備わっている、

しかしいざやってみるととてもじゃない！60Kgの男性なら180Kgの物を持ってということになる、では何故高い身体能力にリミットを掛けるのか？自身の力に肉体が耐えないからだ、

世間一般的に知られる火事場のくそ力は緊急時に脳が肉体のリミットを解除した力だ平時では信じれない怪力を常時使おうものなら簡単に察しがつくだろう、

少し脱線したが話は戻り幽々子は人間で女性だ体格に恵まれてもいない、周囲の死者の霊力を自身の力へと換える能力はあのゾットに身体能力で拮抗に持ち込んだ程だ体へのダメージは想像を絶する、

加えて死を操る能力は己にも作用し、自身の能力は自己に影響を与えない？そんな非合理的な事はない！耐性は在るだろうが確実に内から身を蝕んでいった、

その命が尽きる前にせめて彼女が望むままに、

少し時間は戻り、

幽々子の前に妖忌が現れたように神玉の前にもまた彼女が、

紫「待つて！幽々子の所へ行くの？」

神玉「ええ、その通りよ」

あらかじめ分かっていた返答だが、

紫「貴女を行かせる訳にはいかない！」

神玉「どきなさい！！」

紫「いやだ、あの子は幽々子は私に初めて出来た友達なの」

神玉「解ってほしい、貴女の力はこれからの幻想郷に必要なもの、危険を冒して貴女を失う訳にはいかない」

表情に落胆の色が浮かび、

紫「神玉！貴女もその口か？見えもしない未来ばかり気にして今を見ない！私達は今を生きているんだ一分一秒に意味が在るその大切さをあの子が教えてくれた、私は幽々子の為なら死んでもいい相手が例え誰であつても」

思いの丈をぶちまけて神玉へ走つた、

とても避けられる状況でもないしまして説得に大人しく耳を貸す気も有りそうにない、

紫の実力の程はよく知っている一瞬でも気を許せば殺られる！

神玉「手を引いて、私は貴女を討ちたくない！」

紫「貴女に勝てると思える程私は自惚れてはいないさ、ただ手傷の一つ噛み痕を残してやる！前に四季 映姫に言ったが友の為に命を

懸けて何が悪い！」

神玉「痛いぐらい気持ちもわかるどんなに辛いかも無力な自分を怨む気持ちだつて理解出来るさ、だけどこんな時分に子供ガキの理屈を持ち出すな！」

上から打ち下ろされた一撃に大地に潰され意識を失いながら譫言のように幽々子の名前を口に出す、

神玉「済まない、今はまだ貴女はあの人と逢うべきではない」

.....

幾つもの激戦を生き抜き無理を乗り越えてきた小さい肉体は強大過ぎる力に我が身を喰われ続け限界を迎え急速に崩壊していった、

筋肉はズタズタに千切れ恐らく無事な内臓は一つもない、

大量の吐血に全身至る所からの出血と生きているだけでも奇跡に近

いが、

そもそも安売りの奇跡なんてない、何かを期待しても望む物は獲られない限界とは突き詰めた先でこれ以上の上は存在せず、

何度も言うが彼女は幽々子は人間だ精神や気合いの類いではどうにもならない壁が立ちほだから、

晴れていた空に厚い雲が覆い始めぐつと気温が下がりぐずりだした空は雨を通り越して雪を降らせた、

一瞬にして視界を純白に染めた大雪は妖怪でも凍えてしまいそうな寒さが襲う、

感覚が麻痺する程の寒気は幸か不幸か彼女の痛覚を麻痺させ、

不思議だった、寒さも痛みも感じないのに刀を握る感触だけが消えない、

でも体の痛みが消えたかわりに心の痛みがより強くなった、

自分とて馬鹿ではない死期くらいは悟っている、でも悲観した気持ちはない、

とうとう自分は人間でなくなってしまった痛みは生命の自己防衛の警報機、

痛みを知らぬ者は生物とは呼べないただの化け物、

剣を振るう理由さえ定かではないが死に行く一瞬まで私そのまま居たい、

失いかけた力が沸いて来る死ぬ一歩手前の人の何処にそんな力が宿っているのか？紫ですら一撃で擦じ伏せた神玉を相手に互角に闘った、

それでも終幕は必ず訪れる、

痛覚を失った筈の彼女に再び襲い掛かる全身の激痛に耐え切れず膝

を落とした、

石になつたみたいに指一本動かせない、

彼女を見上げる形で座り込む私に両目に涙を湛えた悔しみに満ちた顔で立つ、

神玉「怨んでくれても構わない、赦してくれ」

撃ち放たれた衝撃に意識が飛ぶ、

短時間に深く積もつた雪に埋もれた時、肌を感じる冷たさが妙に心地好かつた、

その頃、

映姫と嫦娥の闘いは熾烈を極めた、

割って入る隙間なんて微塵も無い、

どちらも世界を背負う者同士、

しかし内実は圧倒的に映姫が劣勢を強いられていた、

傷だらけの映姫にほぼ無傷に近い嫦娥、

神玉が映姫の下へ駆け付けた時、

映姫「審判『ラストジャッジメント』」

嫦娥「審判を受けるのは貴様だ四季 映姫！」

自らの生命を信念を懸けた最後の技は無情にも凶弾に貫かれ身を焼かれた、

駆け付けた神玉に気付いたのか嫦娥は事もなげに淡々と口を開く、

嫦娥「おや、神玉遅かったですね？まったくんだ時間を食わされましたよ」

彼女の言葉を見殺して映姫へ駆け寄り傷だらけの体を抱き抱える、

息も絶え絶えに映姫は神玉に微笑んだ、

映姫「ごめんなさい、私では彼女を止められなかった、でも私が選んだ行動の結果だから後悔はしていませんよとやると貴女の本当の友達に閻魔としてじゃないただ一人の四季 映姫に成れたの、だから悲しまないでいいから、先に逝くよ一人にしてごめんね？」

力尽きた映姫の亡骸を抱き私は慟哭を空へ上げた、

嫦娥「いつまでそうしているのです？映姫の代えなど幾らでも居るでしょっ？」

神玉「映姫の変え！貴様は何も感じないのか？これを見ても思う事はないのか？」

焼け焦げた大地、巻き込まれ肉塊となった人間や妖怪の成れの果て、

嫦娥「何が言いたいのですか？」

神玉「そうか、貴女は貴様は何も感じる事はないのか？」

（私はなんと浅はかだったのだ、大事な人を失うのがこれ程辛いなんて、何も理解していなかった私は上辺しか見えていなかった）

嫦娥「何を言うかと思えばまったく？理想と正義の前に犠牲は付き物です」

神玉「これが正義だと？理想だと？貴様の何処に正義が在る！」

嫦娥「神玉、貴女もそちら側か？一時の感情の流されるとは結局私一人居れば事足りるのだ、良いだろう相手になってやる」

まるで児童だ？

私が一番理解していなかった上辺だけで知っているつもりになって失ってからでないと分からないなんて子供は私じゃないか！

これでは惨めな道化だよ、井の中の蛙と一緒に上に広がる景色を見ようともせず凝り固まった狭い視野と物差しで世界を測ろうとしたなんて道化と言わず何と言っ？

今なら本当に彼女達の心の痛みが分かる、

私は幽々子にどれだけの苦しみ背負わせていたのだ！

自身の余りの愚かさには笑えてさえくる、だが愚かなら愚かなりに最後まで踊ってやろうではないか、

地位も何もなく一個人のちっぽけな存在として闘いに身を投じよう、

それが天に唾を吐く行為だとしても、

幾度となく人の終わりを見てきた、造られ与えられた短い命を懸命に生きる姿を見続けてきた、

生物である以上は私にも終わりは来るのだろうか？千年先か？それとも万年先か？終わりが来るかどうかも知れぬこの体に怨みを抱いた事もある、

彼等にしてみれば百年は長いかもしれないが私達からすれば一瞬の出来事だ、でもだからこそより良い明日を求めて人は足掻くのだから？

ただ意味もなく生きながらえる人生など生きることを放棄しているのと同義だ！今までの私はまさにそれだった、

世話しなく生き急ぐ姿は他人には醜く映るかもしれない？でも私には美しく輝いて見えた、今更だと言われてもいい私も彼等のように生きたい！

嫦娥の行いに薄々だが疑問を感じていた、でもそれを認めようとはしなかった怖かった彼女に敵対する事が、

だから自分の本心を閉じ込めて仮面を被りもう一人を表に出して嘘をついて生きてきた、映姫が閻魔という役職で己を縛ったように人界の平定という大義名分を盾に隠れてきた、

決心が着いた！もう逃げない、

嫦娥、一体何者なのか？彼女もまだ神玉と同様に種族も生まれも分らないもう一つの異端、

理から外れ常軌を逸した力を誇る冥界と人界の守人である映姫と神玉が抗う事を恐れ世界を自身の思うがままに傾けるライブラ（天秤）の名に恥じぬ者、

彼女に齒向かえばどうなるかは己が一番知っている、でも鎖に繋がれて終える一生なんてまっぴら御免だ、

内心が誤算があつた従順な犬が逆らうはずがないと高を括っていた二人がこうして自身に牙を向いた事実、

焦りはある映姫を退ける事は出来たがこの者を神玉を相手に軽口は叩けない舐めて掛かるう物なら殺られる！まして死を覚悟して挑んで来る、しかし自分の考えを曲げる気はない、

嫦娥「来るなら来い！」

神玉「貴様を殺す！」

どれくらいの時間が経つたのか？

雪に埋もれた体を引き起こした、

鉛のように重たい手足と鈍い痛み、

雪に触れても冷たいと感じない、痛みを感じれる所から私は化け物には成らずに済みそうだが死へのカウントダウンは止まりそうになり、

体のあちこちが壊れはじめている、放っておいても後数刻という所だろうか？

私に残された選択は二つ、

この心臓が鼓動を止めるその時まで静かに待つか？

自身で以って己が命にケリを着けるか？

黙って待っていた所で死は避けられない、受動的な死か自意の死の違いだけ、

要はどちらを最終に選ぶかだ、

示されたとしても私が択ぶ選択なんて始めから決まっている、

人として生を受け人為らざる者になるも決して妖怪には為りきれない半端者、

そもそも仲間なんて居なかったのだ全部が幻想の仮初め、始めから帰る場所なんてない私に唯一許された還べき場所に呪われた血の一族が始まりの桜へ、

同時刻、神玉と嫦娥は先の戦いを遙かに上回った、

重爆撃機同士の撃ち合いに塵すら残らない、

その激しさと範囲に次々と巻き添えに会う人々、

人の足では逃げる逃げないの行動に意味が無く運よく生き延びられるかだけ、死ぬにしても一瞬で塵に成るのだから苦しみは無い、

今でこそ人間は五大陸の隅々に至るがこの頃は嫦娥の監視や管理を

しやすいように比較的狭い環境に留まらせた結果被害はより甚大になった、

極東方面から大陸の東方面側と人から見れば広大だが嫦娥や神玉からすれば虫かごに等しく、例えば瓶詰した虫に爆竹を放り込むの似ている逃げ場のない虫の末路は悲惨な物だ、

しかし不思議な程に西行妖のある地やかつて三人で訪れた資料室には被害が及ばない、見えない力に護られている様に、

辺り一面を降り積もった雪に紅い筋が続く、

耳を鼓膜をつんざく爆音が響く中でも私の心はとても静かだった、聴覚が死んだお陰か余計な音を聞かずに済んだ、

右も左も真っ白で方向感覚を失いそうだが自然と足は動いた、

しかしあれだけ燻っていた憎悪の念が消えてしまったのが少し自分でも不思議だ、

音を拾う事を止め聴こえるはずの無い私の耳に届く、聴こえなく為ったからこそ聴こえる懐かしい声、

始めから一人の人間などいやしない当然だが私にも親が居た、様々に取り巻く人達が居て彼等の支えがあつて生きてきたんだそれを忘れるなんて、例え居なくなつたとしても私が覚えている限り彼等がこの世に居た事実は消えない、

失つたら終わりじゃない結んだ絆は消えない、しっかりと今も私の胸に息衝いている、

こんな当たり前で大切な事を今になって気付くだなんて何処まで馬鹿なんだ私は？

総てに気付くのに遅すぎた、過ちを悔やみやり直す事はもう出来ないんだ、

自身の惨めさをより大きく露呈しただけ、

あれこれと悩んだってもう遅い直に死ぬ身だ気楽に行こう、

歩いているとまた雪がちらついできた、温寒の感覚を失くし視力も少しぼやけてきた私は始めそれが花吹雪だと違いに気付くまで随分と掛かった、

走馬灯のように流れる皆との記憶、

気楽にと気丈を装うも楽しかった日々を塗り潰す出来事、

戦団の瓦解、仲間との死別、桜の暴走、

そして・・・ハルの死、

死神の小町にも言われた言葉が胸に刺さる、

小町「あたいも女だからね、これを言うのは心苦しいけどあんたら二人は出会うべきではなかったんだ！」

まったくその通りだよ、

幽々子「赦して、私は貴方に出会ってはいけなかったんだ」

自責と後悔を胸に大量の死霊を纏い吹き荒れる桜の中を、

近づくに連れて視界が白に染まっていく、

向こう側の景色が見えない程の花塵の渦、

それでも歩き続けると桜の壁は少しずつ薄れていった、

意図的に焦らして勿体もったい付けるようにして、

たどり着いた先に私が見た物は、

あの日以来から何度思ったことか？この桜さへ無ければ西行の血筋
でさへ無ければと何度怨んだか？

道行く人達が口々に美しいと称賛を称えた桜は私の目には浅ましく
醜い最も醜悪な物に映った、けど今一度私の前に立つ大樓は今まで
に我が目に映した如何なる物よりも可憐で壮大で美しかった、

彼女が桜と対峙した時、再びあの西行の歌集が独りでに開かれ空白
のページに先の歌を綴り添えるように認められる、

「ほとけには桜の花を奉^{たてまつ}れ 我が後の世を人とぶらはば」

「願わくば花の下に春死なん その如^{かく}月の望月の頃」

「身^みのつさを思^{おも}ひしらでややみなまし そむくならひのなき世^よなり
せば」

歌の考察と補則、

ほとけには桜の花をたてまつれ

我が後の世を人とぶらはば

直訳

亡骸にはどうか桜の花を供えてほしい（たてまつれ）、
人がわたしの死（後の世）を弔おうとしているならば、

見立て

「ほとけ・後の世」と、死に関する言葉が複数出され、結界の先が冥界だということを示唆している、

そして、死語も桜の花に執着しているものの存在を示している、

願はくは花の下にて春死なん

その如月ごとひつきの望月もちつきの頃

直訳

どうか桜の花の下で春に死にたいものだ、

釈迦が亡くなったという（旧暦）二月中頃に、

雑学

おそらくは西行法師の詠んだ句の中で最も有名なもの一つ、桜を
愛でた風流人として知られている、

旧暦は新月が1日で、望月（15日）は丁度満月の頃を指す、実際に亡くなったのは旧暦の1190年2月16日、新暦では3月30日ごろに相当するらしい、見事に桜の咲く時期であり、まさに念願叶ったりだろうか？

”キャラ設定・text” 334行目によると、幻想郷は弘川寺のある河内地方近くがモデルとなっているのだろうか、

見立て

西行法師と同様、この面のボスである幽々子も桜の花の元で亡くなっている、
桜の花びらを追って冥界にきた後、最後に行き着く先が桜の下であることを示唆している、

歌についての考察と補則、
並び妖々夢の世界設定についての独断の解釈、

身のつさを思ひしらでややみなまし そむくならひのなき世なりせば

直訳

自分の（身の）辛い境遇（憂さ）について思い知ることもなく、日々を過ごして（止む）いたのだろうか、

出家（背く）という習わし（習ひ）のない世の中だったとしたならば、

雑学

出家（現世を捨てお坊さんになる）は、当時としては「生まれる（現世に来る）」、「死ぬ（冥土に向かう）」に並ぶ大イベントであり、結婚ですらその下位に位置づけられていた、

特に西行法師の場合、元々平清盛という当時最大の権力者と親しかった貴族であり、出家による境遇の変化はとても大きかったことだろう、

見立て

出家に並ぶほどの大きな変化と言えば、普通は生者が死ぬ瞬間しかない、

しかし、スペルカード「反魂蝶」という言葉から考えられるのはその逆の事象、

死者を生者という状態へと変化させる、まさにその境界の状態を見立てているのだろう、

しかし復活の儀式というのが、西行妖にとってなのか？はたまた幽々子にとってなのか？

これによって解釈が180°異なる気がしないでもない、

この三つの歌（短歌）は実際に実在した西行法師が遺した歌であり見立てにも妖々夢の世界感にぴったりと思いますがゲーム本編の6面はあまりにも象徴的に描かれていて、裏に秘められているものが何なのかがかなりプレイヤーの解釈に依存が大きいと思われる、

臃げでもまやかしてもなく私はまだ生きているんだと知った、

無音と呼ぶに相応しい清浄の空間に自身の心臓が鼓動を響かせる、

雄大でに誠実な心音は心地好いリズムを刻む、

しかし何故こうも私の目に桜が美しく映るのだろうか？

.....

ハル「人生を如何に飾ったって死んだら終わり！でもこんなにも綺麗に自分の死を飾ってくれるなら幸せな最後だと俺は思う」

.....

あんなにも怨んでいた私の最後を着飾ろうというのか？

幽々子「まったくお人好しだな？でも素直に礼を言うよ有難う」

表情が綻び幾分か気持ちが軽くなり、

桜へと歩を進める、

幽々子「せめて貴方の思いを」

望むなら骸でも伴に居れるのなら、

今になって振り返ってみても碌ろくな思い出がない小さい頃の記憶なんて覚えていないし戦団の生活の方が人間らしい生き方をしてきた、

それは全部仲間の彼のお陰だろう、

幽々子「思い出をありがとう、私を愛してくれた人」

やっぱり、易々と本心は裏切れないな、

今だって滅っしてやりたいぐらい憎い！これ程まで美しく咲き誇る花を怨む事など出来はしないのだから、

私の体も想えば此処までよく持った方が？

両足から力が抜けて膝が落ちる、

西行妖、貴方は私が連れていく決して一人にはしない最後の西行寺の役目として、

幽々子「生きるか？御免なさい、貴方との約束守れそうにないみたい」

薄紅の花が舞う空に淡い朱色の刀身を引き抜く、

この万感の想いが総て過去に成るのか？まあーそれも良いか？

残された西行が歌集の最後のページにあの歌が刻まれる、

富士見の娘、

西行妖満開の時 幽明境を分かつ、

その魂 白玉楼中で安らむ様、

封印しこれを持って結界とする、

願うなら 二度と苦しみを味わうことのない様、

永久に転生すること忘れ、

歌についての考察と解釈ですがこの歌の出自が不明な為に多少強引なこじつけが有るかも知れませんがご了承ください、

富士見の娘、

西行妖満開の時 幽明境を分かつ、

その魂 白玉楼中で安らむ様、

封印しこれを持って結界とする、

願うなら 二度と苦しみを味わうことのない様、

永久に転生すること忘れ、

訳

富士見の娘、西行妖が満開の時その生死の境を分かつ、

安らぎのなかで自身の魂を結界とし桜を封印する、

もし自身の願いが叶うならこのような苦しみを味わう事のないよう
転生せずに死んだままでいたい、

見立て

富士見とは不死身の当て字ではなく当時の西行法師に敬意を込め富士見と呼んでいた、なので西行の娘（子孫）となり幽々子の事を指す、

「永久に転生すること忘れ」

輪廻の輪をくぐり転生しても再び同じ苦しみを背負うかもしれない？ならいつそ自身が死んだままで居れば済むだろう、少なくとも悲しみの連鎖は止められる、

「封印しこれを持って結界とする」

同種にして同等の力を持つ桜と自身の力、これ以上の要らぬ悲しみを増やさぬために己の命を結界にし桜を封印する、しかし見方を変えるとまた違って魂を以って結界とし桜を封印するのか？桜を以って結界とし自身を封印するのかではまるで違うが歌の中に何を以って結界としているかは言及されていない、捉え方は様々に在るがこちらもまた個々の人々の解釈に依存する所があると言えるだろう、

愛刀・斬楼刀、

幽々子「思えば貴方とも長い付き合いだな？こんな私によく尽くしてくれた安心して一人にはしないから」

嗚呼、そういえば貴方との約束も守る事が出来ませんでした、

.....

將軍「よく聞け死に何かを求めるな、生に縊すがれ最後まで生きるんだ
こんな惨めな最後を択ぶな」

.....

今してみると私は貴方の名前も知らないのに、

幽々子「約束を破ります、私は最も愚かで惨めな最後を選びます」

幾百の刃を束ねた不思議な刀、

ゆっくりと切っ先を桜へ掲げ刃先を自身の胸に向ける、

決心した筈なのに手がカタカタと震えてきて、

幽々子「やっぱり死ぬのって怖いな？」

震えよ止まれと瞳を閉じると走馬灯のように記憶が巡る、

死への葛藤に迷う一方、その僅か少し前に紫は目を覚ました、

ある意味では最良のある種には最悪のタイミングで、

軋む体を無理矢理に引き起こす節々から嫌な音が聞こえるが構わな
い一刻も速く彼女の下へ、

余計な考えは要らない彼女が還る場所は一つしかないだろう、

その行いを止めて何になる？彼女の命が後どれ程持っただけの自己
満足じゃないのか？

この事であの子に怨まれたとしても幽々子の傍に居たい！

空間座標を繋げスキマを開き飛び込む、

浅はかなのは分かってる、

でも、それでも！

思い出に挨拶を済ませて目を開けると震えが止まっ

916

自分で言うのも小っ恥ずかしいが私の思い出の後ろ半分は全部にハルが居た、

もうすぐ私も逝くから？・・・嗚呼駄目だ、私はきつと地獄に墮ちるもう逢うことはないでしょう、

結局、私は貴方にこの言葉を言えず仕舞いでしたね？

一度だけですよ？聞こえているか分かりませんが、

幽々子「心から貴方を愛してました！」

我が身を貫いた鉄の冷たさと自身の血液の温かさだけが我が身が確かな実感を感じた最後だった、

幽々子「これが死ぬ痛みか？」

間に合わなかった、紫がその場に着いた時には彼女は既に自らで命を絶っていた、

呼び掛けにも反応しないまだ微かに残る体温も冷たくなっていく、

自身の血で深紅に染まる彼女の亡骸を抱き寄せて大声で泣いた、

もう二度と自分に向かって微笑んではくれないんだ、

声帯が喉がこの首が焼き切れてしまっくらいに張り上げた声で泣いた、

過去の禍根の全て清算し、身に常に花を咲かせた桜は総ての花を散らして完全に沈黙しその活動を停止した花を咲かせぬ枯れ木へと、

.....

.....

.....

.....

もう一組対峙する二極、

地平線がひたすらと続く向こうにある二つの影、

流石の嫦娥もかなりの消耗が見える、

お互い思考状態は終局へ、

何も無いのっぺらぼうな大地がまるで何十年も争いの続いたかのような、

映姫との戦闘でも相当な広範囲を荒野へ変えたがそれでも目につく物はかなりあったが本当に何も無い地平線が続く、

それもそうだろう？一日あれば片手間に世界総てを破壊出来る正真正銘の化け物同士の戦い、

実際の経過時間など僅かな物で一時間にも満たないだろう、

どんな物にも終わりが訪れるようにこの戦いにも終わりが来る、

友を民を理想を夢を何もかも何もかも失い自身の総てを賭け挑むも彼女の嫦娥の命には届かなかった、

崩れる膝に連れられ前のめりに倒れた彼女の顔は笑っていた、

皆の気持ちが今なら本当に分かる、

この死という結果にも後悔はない自分の心に正直に生きたのだから、

立ちほだかる障害を討ち果たし歓喜に満ちていた正しかったのは自分なんだと、

文字通り最強と言う言葉に彩られ幼過ぎた心は自身の存在が何を意味するかを知らなかったのだ、

強い者が正しいと正義は自身にこそ在ると信じて、

ずっと一人で完成するはずのない積み木を組みつづけた何度も何度も延々とひたすらに、

またやり直し、始めは簡単に考えを巡らせていたが己の視界に映る光景に目を疑った、

焼け付き罅割れた大地、干上がった山河、色を無くした無機質な空

間が何処までも、

『世界をより良い方向に持って行きたい』その理念は美しく尊い、

しかし永い時の中で理念は理想は独善的に独裁的に歪み変化していった、

私が求めたのはこれだったのか？

心に突き刺さる痛み、

実を言うと私は映姫の言葉に焦りにも似た怒りを覚えていた、内心を見透かされた気がしたからだ自惚れでなく自身を神と同格ないしは神そのものと置き換えていた、

生命が持つ七の大罪、

「十一章にて掲載（諸説有り）」

私はそのどれにも属さぬ Pride「プライド（自惚れ・傲慢）」まさにその通り神を気取った間抜けな道化、

なんだよ、一番に愚かなのは私じゃないか『私達は手を引く可き』
か全くだよ私は何時いつから道を間違えたんだらう？

いや何時からじゃないないな始めからずっと間違ってたんだ、

歴史に干渉するのを止めよう表に出る事なく陰で生きよう、

冥府の管理者を失ったままで去るわけにはいかない、失った肉体の
代替に奇跡的にも倒壊を免れた現在の博麗神社に位置する廃神社に
安置された道祖神どうそじん「一般的に地蔵と呼称される仏神像」に映姫の魂
を下ろし、

嫦娥は方々を周り生き残った人間を集め燦々（さんさん）と輝きを
放つ月へと渡って行った、

彼女が意識を取り戻したのは廃屋の中、

映姫「此処は？私は死んだはず」

自身の肉体に意識を向けると、この身体が何で造られているかすぐ理解した、

映姫「これだけ好き放題やって私に丸投げか？卑怯者め！」

（月にも行ったか？貴女らしい逃げ場所だよ、そこで自分の罪に悔いている！）

失った物は余りにも多く得られた物など何一つとして無いが総ては終わった、

二人と同じように彼もまた目を覚ました雪に埋もれた体を引き起こして、

しかし従者が目にしたのは最愛の主の亡骸を両手に抱き泣き声を挙げる紫の姿、

予測していた結果の一つに過ぎないのに自然と涙が流れ出した、覚悟していた筈なのに、

暫くしたのちかつての西行法師をそうしたように彼女の遺体も桜の下へ埋葬した、花を咲かせなくなった桜に、

一応の段落は着いたが数十、数百万単位での死者数を出した一件は地上はともかく地獄の管理システムに大改変を余儀なくした、

映姫はこれまで以上に職務に忙殺される日々になりとてもではないが地上には手が回らない、

取り急ぎ危険視される可き妖怪は神玉が片してくれており魔界の創世神や向日葵畑のフラワーマスターでも出て来ない限り現時点で紫は地上で最強と見て間違いない、

管理と調停の役目を紫に与えて映姫は地上から去って行った、

時は経ち……

人間と違い生活を選ばない妖怪は多く生き残り、その助力もあって

か自然もその姿を取り戻し始めていた、

紫の隣には極東に名を知らしめ高名な陰陽師に地を追われた九尾の狐が立ち、

妖忌の隣には失意の彼を支え同じ時間を生きる事の出来ぬ彼の伴侶になる覚悟を決めてくれた女性が立っていた、

二人正確には四人だが妖忌と紫が居合わせたのは何も偶然では無い、

彼女の死から多くの年月が経ち、大戦の記憶も過去に成り代わりとうとする中でも彼等の時間はあの日から止まったまま、

毎年桜が花を咲かせる時期になると彼女の残り香を求めてこの場所に来てしまう、

未練を断ち切れずにその面影を追い掛けてずるずると悪戯な時間ばかりが流れても、

前に進めずに過ぎ行く時の流れに取り残され、移り変わるのを自ら

拒否し留まる事を望み彼女を忘れるのを恐れた、

だから忘れてしまわぬように毎年此処に来てしまふ幽々子が命を絶つた桜の前に、

有り得ぬはずなのにいつもの無垢な笑顔をしながらひよこっとなって来てくれるのではないかと願ってしまう、

暦は春になれどまだ随分と肌寒さを残す、

だけど一瞬だけ春風を纏う暖かい風と共に誘う桜の香りが辺りを包む、

それは二人の感情にダイレクトに刺激し懐かしさを伴い鮮烈に記憶を甦らせた、

過去に振り返る時間を掻き消す強風が吹き抜けて反射的に目を閉じ霞む目を開いた先に見えた物は、

淡い紫色の髪に端整な顔立ちそれはそれは美しい女性、

神の悪戯か？はたまた彼女の願いを聞き入れたのか？

当たり前だが彼女は人間だ、死んだ人間が甦りなどしない、

姿や形は一緒なのに何処かが違う、

何度も言うが死んだ人間は甦らない、

彼女は生きること否定し拒否し世界に留まる事を望み亡霊に成っていた、

それでもいい彼女に再び会えたのだから、

溢れる気持ちを抑え切れず声を漏らす、

紫「幽々子！」

駆け寄り強く抱きしめ何度も名を呼ぶ、

幽々子「貴女は誰ですか？私は一体？」

紫「貴女もしかして記憶が！」

亡霊となる際に総ての記憶を消したのは彼女の防衛本能なのかもしれない？

幽々子「貴方も私の事を？」

（この人達が名すら覚えのない私を幽々子と呼ぶ、きっと私の名前なのだろう？）

問い掛けられた妖忌は泣いていた、例え総てを記憶をも無くしたとしても幽々子に主に会えたのだから、

妖忌「私は魂魄　妖忌、貴女の庭番にございます姫様！」

紫「私は八雲　紫、貴女の友達よ」

この件は直ぐに映姫の耳にも届いた、

生前の彼女の能力は亡霊として再誕する事でよりその力を増し念じるだけで他者を死に誘う、

今の彼女を地上に残すのは新たな混乱の火種に成り兼ねない、

本来なら亡霊である彼女を放置するのはルールに反するとこなのだが、

自身が霊体に属した事で能力の領域を拡げたか霊に干渉するだけでなく統率する能力を捨てるには非常に惜しい、

冥府の管理体制も完全でいままです映姫の手腕をしても飽和しており幽々子の能力は喉から手が出る程に欲した、

冥界に居を構え死者の一時管理場所としての役目を負う、

幽々子が冥界・白玉楼の当主に就き再び時間が流れる、

妖怪と人間が共生する世界も紫が画策した第一次月面戦争、

結果的には紫が月から撤退し月側の勝利という形で終幕したが地上月の双方に甚大な被害を齎し、これにより地上の妖怪の多くが姿を消した、

もとより両者の個体数には大きな格差を有したがより圧倒的な差に、

文化や技術の発展に生活は豊かになったが反面に目に見える現物だけを追い幻想を否定し心を失っていった、

時代が進むにつれその傾向は顕著に、

人の思考は複雑そうであった以上に単純だ、自身に優位性を持ちたがり他者を廃絶し嫌い目先の利益を求め些細な事で争いを起こす、

本当の意味での優しさ知る尼僧は悪魔と迫害され暗き闇に追いやられ、信じたが故に裏切られ嘘を嫌い実直なはずの鬼は虚言者と罵れ地下深くに逃げていく、

鎖から解き放たれ欲望を剥き出しにした人の台頭に嫦娥が危惧し恐れたのはこれだったのかもしれない、

鏡合わせの裏方に住む住人はもう彼等にはお伽話の中に魔法や妖術は空想の産物と成り果て、

生きる場を無くした妖怪達は一計を講じた人と共生が出来ぬのなら住む世界を捌けようと、

紫が計画し巫女の生命を鍵とする現在の時間経過より約130年の明治17年に博麗大結界により幻想郷はこの世界より袂を分ける、

そこから更に時は進み代を重ね妖夢が生まれ、来る者を全て受け入れ全てを赦し全てを容認する優しいようでも残酷な世界は秒針を静かに傾けていく、

しかし世界はそれでも変わらなかった、

誕生より変わる事のない

絶叫と怨嗟の念、

骨の歪みとその軋み、

脈々たる地獄斧正、

友は引きずる影ばかり、

朱い鸚哥インコの碧の眼、

ぐるり廻って独歩の眼、

そう統べては降り出しに戻る、

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4705x/>

妖々夢・西行記伝

2011年11月21日22時50分発行